

無者キリスト

小池辰雄著作集

第一卷

①無者

無者キリスト

小池辰雄

河出書房新社

この「無者キリスト」を
私のたましいの旅路で
時機に應じ道しるべとなり
今は北十字星の如く
天界に輝いている

内村鑑三先生
藤井 武先生
塚本虎二先生
手島郁郎兄
小池政美

の五つの霊星に捧げる

一九七五年晩夏——小池辰雄

総序

この『無者^{むしや}キリスト』は、神学的論説か、文学的叙述か。または聖書註解か、説話集か。それらの要素は然^{しか}るべくふくまれてはいる。しかし本書は、その本質的な性格からいうと、聖書という神的ドラマの中に躍^{おど}り込んだら、キリストの福音が私をとらえたので、その力に迫^{せま}られながら、如上^{じやうじやう}の要素を通して書かしめられた告白であるといったらよいと思っている。

キリストはどういう範疇^{はんしゅう}にも属し得ない人である。また一切のイデオロギーを立ち超えた人である。だから彼のふところの中に入^いって、そこから告白せしめられるのが、私にとっては最も本質的なことである。そんな現実、そんな念願で、私はこの一書を書いた。

キリストは実に無私な人、それゆえにこそ無限にして無量な人であった。一切の限定を彼の実存は笑うであろう。そういうキリストであるから、彼を無的実存者、要約して「無者キリスト」と呼ばしていただくのである。

新約聖書のマルコ、マタイ、ルカ、ヨハネの四福音書は、いずれも素朴にして靈妙なるものであ

るが、マルコ福音書は、キリストの行為面を劇的に彫刻し、マタイは言説面を詩的に表現し、ルカは心情面を絵画的に描写し、ヨハネは靈性面を音楽的に表出していると言えよう。であるから、イエスの行、言、心の三面をマルコ、マタイ、ルカの共観福音書が奇しくも有機的にとらえ、そしてヨハネはこの三者を総括するかのごとく、特に靈性面を深くとらえている。もちろん前三者の三相を一貫しているものは聖靈の事態であるが、ヨハネにおいてそれが最も深くあらわれている。

四福音書の伝えるところは、過去のイエスの啓示の事実であり、それはまた現在の我々に主体的に関わる現実であり、未来をひきよせる預言的終末的現実である。福音書はそれゆえ、絶対次元が相対次元に、永遠が時間に、無限が有限にきりこんできた驚くべき現実で、この現実を体感しつつ身読する者には、つねに新しい神劇（オラトリオ）である。神学的に言うならば、イエスという神の人、即ち文字通り神靈の止まっている靈止（ひと）の出現により、その啓示的実存により、靈的言動により、そこに新しい審判と救済の徴（しるし）があらわれたのである。

それは、人間の自主自律の事態には蹟（つまず）きのあらしであり、人間の極限状況には驚きの恵みであった。しかもこの福音は歴史の終末に至るまで、いかなる時代にも、そしてこの危機的な二〇世紀の今日にこそ、最も深く関わるおとずれである。

キリストの本願は、^{ほんがん}我々の意志にコペルニクスの転回をもたらし、理知の中心に靈知を与え、情感の奥に靈感を湧きたたせ、身魂に大生命を与えないではやまないものである。

このような福音書を中心として自由に取材し、キリストとその福音の根本性格と構造を次の三部

曲をもつて浮き彫りにしたいと思う。

第一部 キリストの実存十転

キリストの啓示の事態を、十転の転機を枢要としてとらえた。すなわち、キリスト・イエスの受肉（降誕）、受洗、靈戦、伝道、変貌、十字架、復活、昇天、靈降、再臨。

第二部 人間の福音的実存七相

福音の光に照破されるときの人間の劇的な七相はこうであろう。すなわち、破れ、砕け、突破・突入、内住・常燃、担い・抱き、棄身・棄石、本願・栄光。

第三部 無の実存

無の実存とは何を意味するか。キリストをなぜ無者というかをあきらかにする。そして、まことの宗教が文化、文明とどのように関わるかを、また宗教と教育の問題を考えてみる。

本書は万人むきに書いたつもりである。「よし、そういうことなら、ひとつ聖書に喰いつこう」との意欲を起こしてくださるなら、著者の欣喜これに過ぐるものはない。

仏教の人たちも、福音がいかに仏教と親しい質のものであるかを新たに認識されるであろう。

本書はいわゆる神学書ではないが、神学的思索をなすキリスト教界の人々は、ここに霊的生命的神学が火花していることを感得されるであろう。

日本のキリスト教界よ！ キリスト直結の使徒的信仰の次元に、原始の福音に立ち帰り、第二の

宗教改革をエクレシアの各自が体现されんことを！

最後に念願することは、日本の教育界の人々が、保育園から大学に至るまで、言の最も広いまた深い意味において、人間は本来宗教人であるとの自覚的認識に立たれ、教育界に一大革新の起こらんことである。

一九七五年（昭和五〇年）初秋

武蔵野吉祥寺

小池辰雄

目次

総序

第一部 キリストの実存十転 15

まえがき 17

第一転 受肉(じゆにく)（ベツレヘム）——しるし徴の宗教(い)（言い逆さからいの徴） 19

唯一人者の出現 おそれなき次元 平安 徴 蕨 シメオンの預言 言い逆らいの徴 棄石
顕き 福音の烈しさ 聖霊の火 徴の宗教 霊なる岩 徴の実存

第二転 受洗(じゆせん)（ヨルダン）——聖霊のバプテスマ 39

ガリラヤ湖 ヨルダン川 少年イエス 洗礼のヨハネ 第三のカイロス 荒野の声 聖霊の
バプテスマ イエスの受洗

第三転 靈戦(れいせん)（ユダヤの曠野(こうや)）——キリスト対サタン（マタイ四・一二） 52

曠野の断食 経済問題 宗教問題 政治問題

第四転 伝道 60

はじめに 60

神の国は近づけり(マルコ一・一五、マタイ四・一七) 61

恵福なるかなたましいの貧しき者(マタイ五・三) 64

たましいが貧しいとは何か 自我というもの イエスの無私 十字架と無私 天国とみ
たまの現実 モーセとイエス

舟板を枕に——湖上のイエス・その一(マタイ八・一八—二七、マルコ四・三五—四二) 76

棄身のたましい 父のふところ 奇蹟とは何か

濤波を踏破して——湖上のイエス・その二

(マタイ一四・二三—三三、マルコ六・四五—五二、ヨハネ六・一五—二二)

ヤイロの娘——イエスの霊生・その一(マルコ五・二一—四三、ルカ八・四〇—五六) 88

ナインの若者——イエスの霊生・その二(ルカ七・一一—一七) 93

ラザロの復活——イエスの霊生・その三(ヨハネ一一・一—四六) 95

マルタとマリヤ 愛の本質 私は復活である、生命である 罪と死、十字架と復活 大慈大
愛 イエスの涙 ラザロよ！ 起き出でよ

第五転 変貌(ヘルモン)(ルカ九・二八—三六、マタイ一七・一—八、マルコ九・二—八) 107

サタンよ退け！ エクソードス(出現世)

第六転 十字架（ゴルゴタ） 112

第七転 復活 120

第三の旅人（ルカ二四章） 120

霊震 エマオ途上

「マリヤ！」「ラボニ！」（ヨハネ二〇・二六）

129

マグダラのマリヤ 「マリヤ！」「ラボニ！」

第八転 昇天（橄欖山） 136

第九転 霊降（エルサレム） 140

ペテロの場合（行伝一・一三―二・四） 140

パウロの場合（行伝九、二二―二六章） 145

第十転 再臨（マタイ二四、マルコ一三、ルカ二二章） 148

第二部 人間の福音的実存七相 153

まえがき 155

第一相 破れ 160

姦淫かんいんの女（ヨハネ七・五三―八・一二） 160

いけにえかあわれみか 捕われた女 地にも書くイエス 去りゆく偽善者たち 私もおまえを罪しない

放蕩ほうとう息子（ルカ一五・一一―一二） 169

次男坊の破れ 次男坊の碎け 破れの文化文明 長男のバリサイ根性 この譬話の構造

盲人の叫び（マルコ一〇・四六―五二、マタイ二〇・二九―三四、ルカ一八・三三―四三） 181

「ダビデの子よ！」 上衣を脱ぎ捨て 「見えるようになりたい」

第二相 碎くだけ 187

取税しゆぜい人の祈り（ルカ一八・九―一四） 187

バリサイ人の祈り 取税人の碎けた心 キリストの碎け

悪人の悲願（ルカ二三・三九―四三） 195

碎けざる悪人 碎けたる悪人

第三相 突破・突入とつぱ 199

深みへ漕こぎ出でよ！（ルカ五・一―一二） 199

桑の木によじのぼる（ルカ一九・一一―一〇） 203

本文 エリコのザアカイ イエスとザアカイの出会い 桑の木によじのぼる 人生の決定的

瞬間 「今日、きつと泊まるからね」 呟き キリストからの近づきとキリストへの近づき
「今日、救いはこの家に来た」

第四相 内住・常燃 214

まことの葡萄の樹（ヨハネ・五・一―九） 214

本体と影像 神は農夫 内住 結実 聖潔 万能の愛

第五相 担い・抱き 224

サマリヤ人（ルカ一〇・二三―三七） 224

本文 永遠の生命の問題 身証こそが問題 信即行 愛の生命、無実実存 サマリヤ人の譬
話の構造 隣人愛 人間愛の回復 サマリヤ人の心 わがサマリヤ人、イエスよ 隣人の中
にキリストが 愛のない人は人間でない

福音的饗宴（ルカ一四・一五―二四） 239

無法の法 盛大な晚餐 担い、抱き

第六相 棄身・棄石 248

寡婦のレプタ（マルコ一二・四一―四四、ルカ一二・一―四） 248

ナルドの香油（マルコ一四・一―九、マタイ二六・六―二三、ルカ七・三六―五〇、ヨハネ一二・一―八）

受難へのキリスト マルコの本文とその他の福音書との比較 ナルドの香油 つばをうちこ
わして イエスの寂しさをなぐさめた「ある女」 聖霊の香油

一粒の麦 ひとつぶ (ヨハネ二・二〇―二八) 259

人の子が栄光を受くべき期 一粒の麦、地に落ちて死なずば

第七相 本願・栄光 はんがん 265

十人の処女 おとめ (マタイ二五・一―一三) 265

羊と山羊 やぎ (マタイ二五・三二―四六) 270

第三部 無の実存 279

まえがき 281

第一章 無者Ⅱ無の実存者 (マルコ一〇・一七―二三、マタイ一九・六―三、ルカ一八・一―三) 284

第二章 天鐘 てんしやう (キリストの福音の靈想) れいしやう 311

諸行無常 和合同心 鐘身一如 天鐘一体 信行一貫 東西融合 主の栄光の証者

第三章 三一神の所在 325

神は何処に いずこ 325

キリストは何処に 334

聖霊は何処に 339

第四章 聖意靈法 345

第五章 宗教と文化 355

宗教（円）は東洋、文化（三角）は西洋 宗教の三様相 キリスト道 受肉のキリストとキリストの受肉 信、生、愛一如 人間の実存体構造 禁断の樹の果 宗教と文化は樹木の如し 円と内接三角形 在りて在らしむる者 砕けた心魂 日本の国旗が象徴するもの 結語
―円現

第六章 宗教と教育 379

あとがき 398

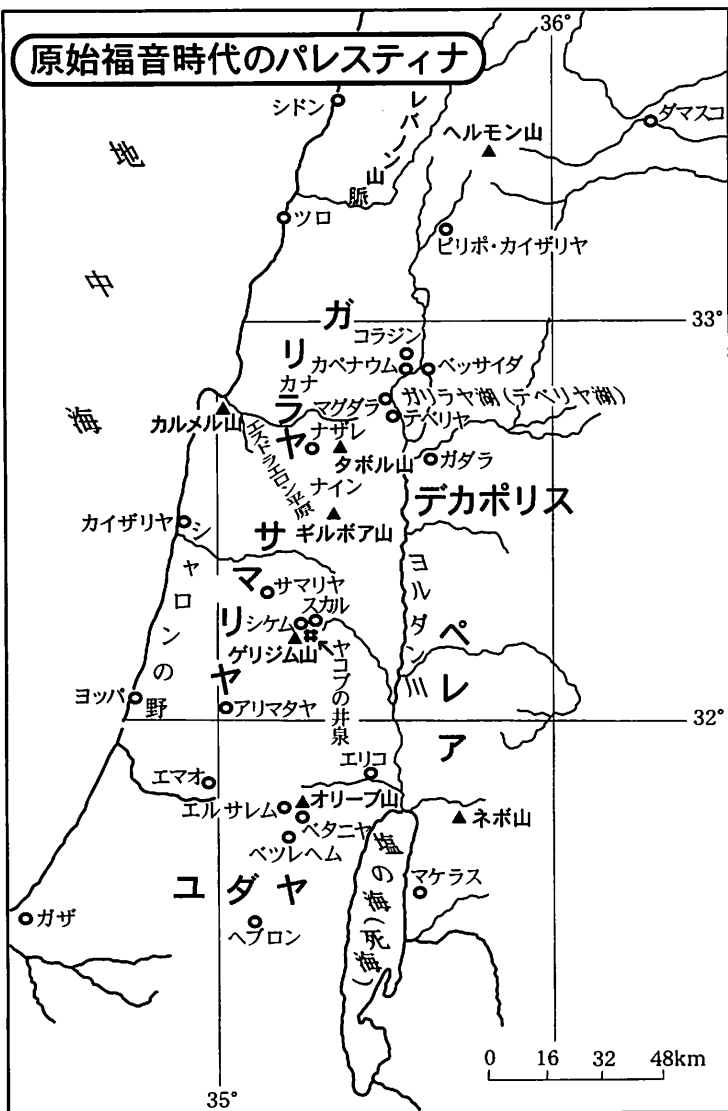
復刊あとがき 奥田昌道 401

無者キリスト

第一部

キリストの実存十転

原始福音時代のパレスティナ



まえがき

この書において「キリストの実存」^{じつぞん}「福音的実存」「無的実存」という主題が示しているように、「実存」という概念が重要な役割をなしている。実存（*existence*）とは、潜在的なものが顕在的に現われることを意味することは周知のごとくで、観念的に思われている事態ではなく、存在そのものが他者との深い関わりをもっているのだから、実存は行為的存在といっても可い。信仰というものも存在的行為といつて可い。実存とはそのような活ける現実存在である。

キリストの生涯がそのような実存のドラマ的展開で、その転機が十ほどあると思われる。

第一転はすなわち天界（絶対界）から時満ちて自らを投じ出でた「受肉」（降誕）。

第二はいよいよ伝道の公生涯に立ち出でんとするに際してまず受けるべき聖霊のバプテスマたる「受洗」。これはイエスにとつて最も決定的な自己克服、自己超越、サタン征服への転機であつた。

第三転はすなわち、曠野におけるサタンとの「霊戦」。

かくてサタンに打ち勝ったイエスは「伝道」に乗り出す、これが第四転である。伝道には言の面

と行為の面とがある。言の面ではいわゆる山上の垂訓すいくん、すなわち山上の大告白の第一言をとらえた。行為の面では自然界の物理法則を乗り越えた湖上のイエスと、人間界の物理法則を制して死者を復活させた二面をとらえた。

そして伝道の末期にあたつて、イエスが「変貌いんまう」した著しい出来ごとは、これを現世と来世の接点としてとらえた。復活し、羽化うかして登仙とうせん（昇天）せんとするイエスの前兆である。これが第五転である。

しかしイエスには贖罪しよくざいの大業たいぎやうたる「十字架」が待つていた、これが第六転。

十字架の大業を終えたイエスは墓を蹴破けやぶつて「復活」せざるを得ない。これが第七転である。

復活して弟子たちや女どもに現われたイエスは彼らを立ちあがらせて「昇天」した、これが第八転。

キリストの伝道は世の終りまで地の果てまで、聖霊をもつて行われてゆく。その転機こそ聖霊降臨せいれいこうりんすなわち「霊降」である。これが第九転である。

かくて世界の歴史に終末を来たらせるのが再臨さいりんで、再臨はいつであるかを何人も予測することはできないが、つねに再臨を原始キリスト教時代と同質の信仰的実存をもつて待望するのである。「再臨」はすなわち第十転で、これをもつて全キリストの転機は完結する。

第一転 受肉（ベツレヘム）

——徴の宗教（言い逆らいの徴）

唯一人者の出現

アントニウスとクレオパトラの両者が自害したあと、三三歳にしてオクタヴィアヌスは天下無敵の地歩を占めた。やがてローマの元老院から、彼はアウグストス（「尊厳なる者」）なる尊称を贈られ、大ローマ帝国最初のカイザルの座についた。これがカイザル・アウグスト（ルカ二・一）である。彼の生涯は紀元前六三年から紀元一四年にわたり、彼の在位時代はいわゆるパックス・ロマーナ（ローマの泰平）が謳歌された時代で、政治、経済、産業、文化が著しく進展した。大賢者キケロのあとを受けてヴェルギリウス、ホラティウス、オヴィディウスの如き詩人、文人が宮殿に招かれた。

大ローマ帝国の第一人者たるアウグストの治世のもとに、不思議なコントラストをなして世界の唯一人者が出現した。それは東方辺陬の地、ユダヤの寒村ベツレヘムに、しかも家畜小屋としてしつらえてあつたと思われる石灰岩洞窟小屋の片隅の、馬槽の中に呱呱の声をあげて。

その母はマリヤと称い、家系由々しきダビデの後裔ヨセフと共に、戸籍登録のため、ガリラヤの山村ナザレからはるばる南へ旅をして来たのであった。が、彼女は身重であったので難儀な旅路であった。すでに旅舎は満員で、宿にも宿屋がなかった。臨月となっていたので、やむなく馬小屋に宿を求めた。生れた乳児の揺籃は馬槽というわけである。これは人間の誕生として正にどん底の生れ方であった。どん底の人、それが何を意味するかは彼の生涯の実存が語っている。

聖徳太子、厩戸皇子の誕生にあたつても、次元はちがうにせよ、不思議な霊夢現象がその母の懐妊のとき起きた。日蓮誕生のときは、その母が日輪の胎に宿るを夢みたという。マリヤはこれともまた次元を異にし、聖霊を宿し、至高者の霊能が彼女を被うてイエスを孕んだのであつて（ルカ一・二六―三八）、イエスは系譜の上では「アブラハムの子、ダビデの子」（マタイ一・一八―二五）。一も、この系譜のヨセフを具体的な直接の肉の父としているわけではない（マタイ一・一八―二五）。一二歳になった少年イエスが「父」と呼んだのはヨセフのことではなく、「父なる神」のことであつた（ルカ二・四一―五一）。

全く異次元的现象が起きるとき、人はこわがるものである。天使ガブリエルがナザレの乙女マリヤに現われて、

めでたし、恵まれたる者よ、

主があなたと共に在ます。

と告知し、受胎のことが語られたとき、マリヤは懼れた。ヨセフもマリヤに受胎の徴が現われたの

で、「ひそかに離縁しよう」と思った。けれども、主の天使が夢に現われて、

「ダビデの子ヨセフよ、許嫁の妻マリヤを納れることを恐れるな。その胎に宿っている者は聖霊によるのだ。彼女は子を生む。おまえはその名をイエスと名づけよ。おのが民をその罪から救いたもうからである」（マタイ一・二三・二三）

と告知した。

おそれなき次元

このように、マリヤにとつても、ヨセフにとつても、前代未聞のただならぬ事態が起ころうとしたので、驚きおそれたのは当然であった。天使が「おそれるな！」というとき、それは「おそれるな！ おそれなき次元の世界に入れてやるのだ」という意である。

雲や霧や風の吹き巻く大気圏を突破するときは、飛行機は揺れたりする。しかしこの動揺を突きぬけると、成層圏の静かな澄明な空界に突入する。眼下の雲界に風が吹こうが、雷雨が発生しようが関わりない。これが「おそれなき」空界である。そのように、神霊の次元の事態が現象するとき、は、こわい。しかしそれは、おそれなき歓喜と力と生命と愛の世界に包み入れるための現象であり、徴候であるにすぎない。突破してみると、突破させられてみると、これは何たる平安と歓喜の世界だろう、ということになる。信仰の世界は、聖霊の次元に入ると、そういうやすらかな、よろこびの世界なのである。信仰、信仰といって何か力んでいるあいだは本ものではない。別な言い方をす

れば、聖霊の次元では、そこにあらしが吹こうが、雷雨が降ろうが、こわくない自在な境地なのである。

地にあつて天的次元に入らなければ、信仰など云々してもつまらないはなしである。聖書はそういう次元の世界を開示しているドラマであるから、そのつもりで全存在的に突入してゆくに限る。単なる意志や理性や悟性や感情の限界を踏み越えて、そのような霊性の世界に躍り込む勇断をするなら、あるいはまた、どうにもならず、破れ果て、ぶったおれるなら、そこに豁然として宗教的実存の世界が開示されてくる。知的な現代人にはむしろ聖書の現実から「疑うな」と語りかけてくるであろう。「おそれ」と「うたがい」を突きぬけない限り、自由豁達な絶対次元の世界に入れない。永遠の生命、霊生を呼吸するわけにはゆかない。

イスラエル民族は、アブラハムの昔から遊牧の民であつた。「神はわが牧者なり、我れ乏しき」とあらじ……」に始まる有名な詩篇第二三篇が、神とイスラエルの関係を、牧者とその羊の群とに譬えて詠っているが、これが最も端的に彼らの生活と歴史を象徴している。

イエスが出現するときも、ユダヤの地に野宿して、夜更けにも羊の群を守っている牧人たちがあつた。すると突然天使が天降りしてきた。と同時に主の栄光が牧びとたちのまわりを照りめぐらした。不意をくらつたので、彼らは甚だしく懼れた。原文では「彼らは大いなる恐れを恐れた」(エフオバー・サン・フォボン・メガン)とある。するとその天使がやはりここでも「あなたがた、こわがりなさるな!」(メー・フォベイス)と言っている。それは「こわいことはないですよ」という語氣

で、信賴を呼び起こすひびきであつたろう。福音のひびきというものである。天使の告知は次のようなものであつたから、なおさらのことである。

懼れるな、見よ、私はあなたがたに

大歎喜を福音する（ユーアンケリゾマイ）。

これは万民のためとなろう。

実は今日、あなたがたのために

救主が生れた。

それはダビデの町の主キリストである。

あなたがたは、布に包まれ、

馬槽に臥している嬰兒を發見するだろう。

これがあなたがたにとって徴なのである。（ルカ二・一〇一―一二、私訳）

「今日救主が生れた」という消息は詩篇第二篇七節に預言的に詠われてある。「私は主の詔を述べよう。主は私に言い給うた『おまえは私の子だ。今日、私はおまえを生んだ』と」。これはメシヤ（キリスト）預言の一つである。この詩篇の第二節に、「地のもろもろの王は立ち構え、もろもろのつかさはともに謀り、主とその油そそがれた者（受膏者、メシヤ）とに逆らつて言う……」とあるのに注目を要する。すなわちメシヤ、キリストは「言い逆らい」を受けることが奇しくも預言されているからである。

平安

さて牧者たちが、天使の告知に驚嘆していると、さらにふしぎな声が天界からひびいて来た。それは天使に和して天の万軍が讃美する声であつた。

いと高き処には栄光、神に（あらわれたり）、

地には平安、主の悦び給う人に（臨めり）。（ルカ二・一四、私訳）

「地には平安」の平安が普通は「平和」と訳されているが、神的な事態が神の側から臨むとき、これを信受する者に与えられるものは、たましいの平安であつて、平和というべきではない。平和とはこの平安から生ずる人と人の間の安らかさである。また上記の天来の讃美の声は、普通、願望のように訳し出されているが、むしろ、現在あらわれた、という完了形に訳すべきであると思う。それが同時にこれからも然かあれかしとの願望をふくむものではあるが。

徴

さて、ここで「徴」について少しく検討しておこう。パウロがコリント後書第二章一二節で、こう言っている、「私は徴と不思議と力ある業とを行い、大なる忍耐を用いて君たちのうちに使徒の徴を行った」。パウロといえは、普通、キリスト教神学の元祖だという。パウロはもちろん神学生まのすがたでもってはいたが、神学者ではない。およそロゴス的（理論的）に整えたものは、

活けるロゴス（道理）そのものに対しては抽象化されたものたるにすぎない。活きたロゴスそのものはキリストであつたが、パウロは矛盾をもちながらもその角度の存在であつた。活きた神学はいわゆる神学をあざける。それは、いわゆる神学には超論理の力の要素が欠けているからである。パウロの宣教（ケリクマ）には大事なすじが、ねが入っていた。すなわち、「使徒の徴」なるものであつた。宣教そのものも観念的な言ではなく、「私の談話も、智慧の美しい言によらずして、御霊と靈能との証しによつた」と言っているように、靈的実力の裏づけをもつたそれ自身力ある宣教であつた。「神の国は言にあるのではない、力にあるのだ」（コリント前書四・二〇）という通りである。パウロを動かしていたのが聖霊の力であつたからである。「わが言は靈なり、生命なり」（ヨハネ六・六三）といったキリストの福音は、力と生命にみちたもので、パウロはこのキリストの靈を体受し、身証したのである。それゆえパウロの言葉も靈であり、生命であつた。ペテロもヨハネもヤコブも使徒たちは皆そのように福音を証したのである。このような聖書の言を、単なる釈義の詮索にしてしまつたのでは、——一般にそういう傾向が多いようだが——聖書はもぬけのからとなつてしまふ。

さきほどの「私は徴と不思議と力ある業とを行ふ」において、徴（セーメイオン）という語は、この三者のうちで一番深い意味をもっている。神、キリスト、その本体界、本質等との関わりにおいて現われる現象である。その最たるものは、「私を見た者は父を見たものである」というイエスこそ、神のセーメイオンそのものである。しかし単なる現象それ自体を、それ自身目的に考えて徴と見るなら、それは御利益宗教的になる。この「徴」は、どこまでも本体に即して見、その徴にお

いて本体を見ていかなければならない。それゆえ徴はシンボルである、象徴である。しかしこの象徴という語を何か比喩的な觀念的な意味にとつてはならない。それはどこまでも具体的具象的である。イエスが「邪曲とこじまにして不義なる代は徴を求む」(マタイ一六・四)といわれた「徴」は、人間のおちいり易い御利益的な徴である。終末の預言にあたってイエスが「人の子の徴、天に現われん」(マタイ二四・三〇)といわれたのは、聖意の顕現けんげんとしての再臨の徴である。「徴」はヘブライ語では「オース」で、セーマイノーという動詞は、もともと、(天から)示す、「啓示する」意であるから、「徴」は「啓示」と訳して然るべき語なのである。であるから「徴の宗教」という場合、その真義は「啓示の宗教」にあたるわけである。

その次の「不思議」(テラス)という語は、現象そのものの相があたまではわからない、不思議だ、というので、観察者の方から驚いて、「ああ不思議な現象だなあ」という現象面に対する主観的判断の語である。

その次の「力ある業」(デユナメイス)というのは、奇蹟的な力の現象で、行為者のわざに即した表現といったらよろしかろう。すなわちパウロという行為者に即して見た言葉がこの「能力ちからあるわざ」である。だが奇蹟というものは実はないのであって、天的靈的法則のあらわれなので、その靈性が見えないから、不思議だとか奇蹟だとかいうまでである。

それゆえ、「不思議」とか「力ある業」とかいう語は、現象面そのものに関わる表現であるに對し、「徴」は現象において本体に関わる表現である。徴が本当に掴めなければ、能力あるわざも不

思議も掴みそこないをする。みどり児のキリスト・イエスという徴は一見何でもない普通の現象であるので、この徴を見るには深い靈的洞察を要した。

義

さてエルサレムにメシヤの来臨を祈り待っていた人があった。その名はシメオンという。この人は「義」にして敬虔で、イスラエルが神のなぐさめにあずからんことを待ち望んでいた。「義」とは「正義」ということではなく、神を全的に信じ信頼するすがたをいう。その好例は信仰の父アブラハムの場合に歴然とあらわれている。創世記第一五章六節に、「アブラハム、ヤハウェ（実存神）を信ず、ヤハウェこれを彼の義となし給えり」。この「信ず」は、「ヘーミーン」という語で、「アーメン」と同語根の語であり、「アブラハムは実存神に対してアーメンといった」、すなわち「実存神を誠とした」という意である。すると「ヤハウェはこれを彼に対して義（セデカー）と見なし給うた」（私訳）。高齢のアブラハムとサラに子が与えられるという希望が失せている現実を突破させようとする神の本願に対する信。それは洗礼のヨハネの両親ザカリヤとエリザベツの場合と軌を同じうする。あまりにも常識を逸脱した神の意志、しかし神の意志なるがゆえに無条件に信じて全的に神を肯定する。神を「然り」となし、おのれを「否！」とする。信仰とはこのように、全存在をもつてする内的行為、自己否定、自己突破、自分を突きぬけて神の中へと突入すること、信入することである。

マリヤが「主のみ言ことばの如く我に成なれかし」とみ使つかいに應えたのも正にこれであつた。自分の立場も主義も主張もひっくりかえして、神意を立て、その前に平伏ひれふすあり方。「汝の聖旨みじめを成ならせたまえ」と挺身ていしんして生涯を貫いたのが正にイエスであつた。神の中に突入し、神のふところの中の人となり、聖意を体现した。

シメオンの預言

さてこのシメオンは「イスラエルの慰められんことを望んで」いた。それは第二イザヤの預言の成就のことである（イザヤ書第四〇章）。この預言者の救贖きうどくの預言。ああ北イスラエル、南ユダの両国の不信不義が刈りとつた滅亡のあと、それでもなお、神のイスラエル民族を棄すて給たまはぬ大慈大悲を受けとつていた預言者たちの涙の祈り。いつかその慰めの日は来るとの待望をもつて彼らは地を去つた。それから数百年の歳月は空しくすぎたが、ついに時期（カイロス）は満ちた。第二イザヤの預言の如き「曠野こうやの声」たる洗礼のヨハネを先駆としてイエスが降臨した。しかもヨハネ出現の前に一人の霊たましき老人が奇くしき預言を言い放つた。

シメオンは聖霊の人であつた。主キリストを見ぬうちは死なずと霊示されていた。イエスの両親が宮詣みやもとでのため神殿に來たことを示されて彼も神殿に入つて來た。

シメオンはマリヤの腕からイエスを取り抱き、神を讃美してこう叫んだ。

主様しめさまだ！ 今こそ御言みことばの如く

僕を平安に逝かせて下さい。

私の目はもう主の救を見ました。

これは諸々の民の前に備え給うた者、

諸国民を照らす光、

み民イスラエルの栄光です。（ルカ二・二九―三一、私訳）

シメオンは、イエスをかき抱いて、もう自分は念願を果たしたから、いつ仆れても悔いなし、ハレルヤである、という。我々も天賦を充分に發揮して神の栄光をそこにおのずからあらわし得たら、いつ仆れてもよし、という念願をもつて生きたいものである。

シメオンは嬰兒イエスにおいて、万民の救済者、慘澹たるイスラエルの中の栄光を見た。そして母マリヤに向つてこう言つた。

視よ、この幼児は置かれた。

イスラエルの多くの人が或は倒れ、或は起たんために、

また言い逆らいを受ける徴のために。（ルカ二・三四）

言い逆らいの徴

果然、イエスはシメオンが申した通りの「徴」なのである。最も何でもない幼児が実は徴なのである。しかもそれは「言い逆らいを受ける徴」であるとは何か。シメオンの言つたのは、正に「言

い逆らいを受ける啓示体」という意である。

キリストとその十字架の贖罪の福音は、ギリシア的に、第三者的角度をもつて知的に考えられ、批判される場合、それはパウロの言つた通り「愚」である。また律法を直接肯定し、「徴」をそれ自体目的として、民間宗教的御利益的に求めるユダヤ的角度にとつては「蹟き」である。これもパウロが言つた通りである。キリストの福音は、実存的に「然り」か「否」かを迫るもので、この「然り」は、自らが降参して、おのれを開けわたす、そういう「然り」であるが、「否」にはその他のいろいろな態度をもつてなされる可能性がある。さらには第三者的無関心というのがあつて、これが意外に多いと思われる。

シメオンは、「イスラエルの多くの人が或は倒れ、或は起たんために」といつたが、全世界の人にとつても同様である。キリストが言い逆らいの徴であることは、何より彼の十字架そのものが示しているのであつて、キリストの十字架こそ言い逆らいの徴そのものである。

「汝らは万軍のエホバ（昔のよみ方、今は「主」と訳読されているが、イスラエルの神の固有名詞として）のよみ方は「ヤハウェー」である）をこそ聖として、これを汝らの畏れとし、これを汝らの畏こみとせよ。然らばエホバは聖き避け所となり給わん、されどイスラエルの両家には蹟きの石となり、妨げの磐とならん」（イザヤ八・二三、一四、私訳）

と預言者イザヤは語つて、北イスラエル王国、南ユダ王国の両王朝も、エホバへの信義を失つては、神は蹟きの石、妨げの磐となるといつている。本当は救の石、助けの磐であるのに、こちら側の態

度で、全く正反對のものになるぞと警告を發したわけであつた。

おのれの側を立てる限り、それが個人でも社会でも国家でも、その主義も、その主張も思想も立場も、然り、信仰すらも、実は「躓き」であるので、神、キリスト、その福音が「躓き」となる。そうなると「躓き」とは神の側にあるのではなく、人間の側にあるのであつた。キリストは無条件的、絶対的自由を与えようとしているのに、人間が自己を立てるので、この自由が「躓き」となる、という全く逆説的なものである。その自我、主我、自主、というものが棄てられないというその罪をとりのぞいたのが十字架である。だからキリストの十字架を信受すれば、「自我」という躓きの石がとりのぞかれるのである。然るにこれを信受しないので、あたかも十字架が「躓き」であるかの如くなつた。実は「躓き」はこの「自我」というものであつたのである。「言い逆らいの徴」とは何たる逆説的なものであるか。キリストとその福音は、本当は大歡喜を与えるのに、何のかのところに「言い逆らう」性来の主我的人間というものこそ実は「言い逆らいの徴」そのものだという逆徴である。

棄^{すて}石^{いし}

十字架でこの自我が根底においてすつとばされているのにハタと気がついてみると、福音とは、何たる易行道^{いぎやうだう}か、自由であるかということを知る。「言い逆らいの徴」どころではない、「大感謝の徴」「大讚美の徴」である。シメオンの言は何と逆説的なものをふくんでいたかを悟るわけである。

それゆえにイザヤ書の第二八章一六節の「主エホバかく言い給う、視よ、われシオンに一つの石をすえてその基となせり、これは試練を経たる石、貴き隅石、堅く据えたる石なり。これに信頼する者はあわつることなし」。パレスティナには岩石が多い。それでこういう表現がなされるのであるが、この石こそキリストという千歳の磐石、永遠の活石である。ペテロがいみじくもそのことを語っている。

「主（キリスト）は人に棄てられ給えども、神に選ばれたる貴き活ける石なり。汝ら彼に來り、活ける石の如く建てられ、霊の家となれ。……信ずる汝らには、尊きなれど、信ぜぬ者には『造家者らの棄てたる石は、隅の首石となれる』にて、『つまりずく石、妨ぐる岩』となるなり。彼らは従わぬに由りて聖言に躓く。」（ペテロ前書二・四―八参照）

躓き

祭司も、律法学者も、パリサイ派も、サドカイ派も民衆も、ローマの官憲も、兵士たちも、そしてキリストの弟子たちすらも、皆それぞれの角度からキリストに躓いた。祭司たちは、神殿で祭儀をすることが神につかえることの第一と思っていた。律法学者どもは律法誠律に詳しく、これをもつてすべてを律して自らを權威づけ、これに外れた考えの者を「罪びと」といつて見くだしていた。パリサイ派は自らを「分かれた者」と自覚し、律法に忠実なる生き方——実は律法に外的に囚われた生き方であるのを知らず——をもつて自ら任じ、他人の在り方を審いていた。サドカイ派は、

文化的政治的で自ら進歩派をもって任じ、信仰の事態を世俗化して善しとしていた。ローマの官憲は、キリストをこの世の王者たるの野心家、民衆のデマゴグ（煽動者）とあやしんで警戒した。弟子たちは一応師に忠実であったが、十字架の道の真義がわからず、復活の預言もうわのそらで聞き、ついにペテロすらもイエスを三度否むほどに躓いた。これらがすべてイエスとその福音に躓いて、非難し、誤解し、中傷し、嫉妬したことは福音書に歴然としている。イエスはまことに「枕するところなき」人であった。シメオンの預言の如く、いかにイエスが、これらすべての敵となり、活ける「言い逆らいの徴」そのものであったかがうなずける。ただ少数の女たちが、イエスを信じ抜いた。女の中でも道徳的に立派な、また智的に優れた者はかえって躓いたろう。イエスは特に病める者、罪に傷つける者、なやめる者の友であったから。罪や悪鬼にさいなまれたが、純情であったマグダラのマリヤは、あつい涙を流して回心し、イエスを愛し抜いた。

シメオンはさらに一言母マリヤに向つて告げた。

「剣があなたの心魂（フシユヘー）をも刺し貫くでしょう」（ルカ二・三五）
 言うまでもなく、イエスの苦難と十字架の死を預言しての言である。

福音の烈しさ

キリストの言は総じて烈しい。たとえば、

「私が地に平和を投ずるために来たと思うな。平和ではない、反つて剣を投ずるために来

たのである。まことに私が来たのは、人をその父から、娘をその母から、嫁をその姑から分かつたためである。人の仇はその家の者であるぞ。私よりも父母、息子娘を愛する者は私に適しない。自分の十字架をとって、私に従わない者は私に適しない」(マタイ一〇・三

四(三九)。

このような烈しい言に満ちている。キリストの言はそれ自身「言い逆らいを受ける徴」である。家庭を破壊するような危険な言である。しかしこれは大乗的な言葉なのである。「平和の君」といわれるイエスは神に従順、人に柔和なること羊の如くで一面はあつた。それゆえ「神の羔」といわれる。しかし彼は他面、いかなる英雄も及ばぬ勇者であつた。それは神のみ霊の權威をもつていたからである。いつわりの平和はキリストの耐えざるところ、いつわりの平和をぶち破るためには彼は真理の剣を佩びている。キリストの者となるということは世の一切の横の關係より、次元のちがつた深い縦の關係に身を投ずるということである。そのため、一時は、横のすべての關係者から誤解され、迫害される危険に曝される。しかしそれは、この縦の絶対的信愛關係に入ると、すなわちその信愛がわが全身を貫流すると、これが横の關係者に対して環流するようになって来て、いい加減ないつわりの横の關係が本ものの愛の流れるあたたい關係に変質してゆく。実は本当の平和がそこに生ずる。それは歓喜の世界である。それゆえにキリストの烈しい言は、実は熱い愛の言であつたのである。「言い逆らいを受ける徴」の言が、実は大賛同、大調和をもたらす逆徴の言である。

聖霊の火

彼はまたこうも言い放った。

「私は火を地に投ぜんために来た。この火がすでに燃えた以上、私はまた何をか望もう。けれども私には受くべきバプテスマがある。それを成就するまでは、何と思ひ迫ることか。私が地に平和を与えんために来たと思うか。私はあなた方に言うが、そうではないのだ、反つて分争である。今後、一家に五人いるなら、三人は二人に、二人は三人に分れ争うことになる。父は子に、子は父に、母は娘に、娘は母に、姑は嫁に、嫁は姑に分れ争うことになる。」（ルカ二・四九―五三）

火は何か。聖霊の火である。聖霊の火が胸に点ると、生き方、考え方がちがってくるので、この世的な生き方の人々と分裂が生ずる。しかしこれも分裂のための分裂ではない。真の和合への分裂現象である。しかし、他の者たちがこの不滅の火を受けようとしないならやむを得ない。しかし聖霊は愛の火であるから、聖霊を受けた人は、愛をもって荷い、耐え、望んでゆくのが本当である。キリストと共に十字架を負う光栄を賜る。聖霊の力はよろこんで十字架を負わしめ、天国をそこに現じつつ歩かせる。このような霊燈を万里のかなたまで運んで人々の胸に点火することが本当の伝道であつて、伝燈と申したいくらいである。

徴しるしの宗教

ところで福音的な徴は、永遠界からの具象的な啓示であるから、終末的な性格をもっている。福音そのものが終末的な歓喜のおとずれであつたから当然のことである。カナの婚宴こんえんに招かれたイエスが、葡萄酒ぶどうしゅが尽きて、婚宴が窮きゆうしようとしたとき、水を葡萄酒に化したあの「第一の徴」(ヨハネ二・一二)は、聖霊の饗宴きやうえんの徴であつて、世の終末を突破して開示される新天新地における「羔こひつじの婚姻」の徴であつたに相違ない。洗礼のヨハネがマケラスの牢舎ろうやの窓から弟子たちに語つて、イエスに問わしめたとき、イエスは何と答えたか。「往いつて、おまえたちが見聞きするところをヨハネに告げよ。盲人は見、跛者あしなえは歩み、癩病人きよは潔められ、聾者みみしいは聞き、死人よみがえは甦よみがえらされ、貧しき者は福音を聞かされている。凡そ私に躓つまずかぬ者は幸である」と(マタイ一・四・六)。これはみな天国の現実の預言的な徴、終末的な徴なのである。福音の全内容、キリストの全言動が終末的な徴といつて過言でない。実にイエス・キリスト彼自身が神の最大の徴、象徴体であるからである。

霊なる岩

それゆえに、キリストを信受した者はキリストの徴とならざるを得ないのである。

「工師いえつくりの棄すてたる石はこれぞ隅すみの首石おやしとなれり」(詩一一八・二三)

という石、「凡そその石の上に倒るる者は砕け、またその石、人の上に倒るれば、その人を微塵みじんにせん」(ルカ二〇・一八)とまで烈しいことを言っている。この岩石は、「霊なる岩」を意味するわけ

である。モーセがホレブの岩を打ったとき霊水ともいふべき岩清水が湧きでた（出エジプト一七）。パウロは大膽にも「その岩はすなわちキリストである」（コリント前書一〇・四）と言っている。旧約時代にはキリストは天界にあつた。そして歴史の背後にあつて、いろいろな徴として自らの栄光を顕わした。

このような「言い逆らいの徴」たる彼を信受した「徒輩が黙したならば石が叫ぶぞ」（ルカ一九・四〇）とキリストは喝破した。また「アブラハムの裔を石からも創造する」（マタイ三・九）と言つた洗礼のヨハネの言もキリストの心琴に共鳴を与えたに相違ない。

徴の実存

万人は罪人である。人間が人間を宗教的な角度で審くことはゆるされるものではない。それは罪をあがなう実力のある者だけのなし得ることである。キリストだけが本当にさばき給う。しかもキリストはそのさばきを自らに荷つて十字架につき給うた。キリストの大慈大悲はそのようなさばきを全的に自らに荷い給いながらのゆるしであり、あがないである。これ以上の恵みがどこにあるう。しかもめぐみはめぐみを呼び、あがなわれた者に聖霊をまた無条件に無量に賜る。優渥なる愛の霊である。この愛のみ霊がこの罪びとをして人を愛させる。人を愛するとは自ら十字架を人のため負うということである。ひとを荷いあげることである。この愛においてのみ、ひとがひとをゆるすということがどういうことであるかを体験する。キリストに徹底的にゆるされた自覚において

であるからである。

パウロが自らを「罪びとの首^{かしら}」と告白しながら、「ああなやめる人なるかな、この死のからだ」と呻^{うめ}きながら、キリストの全的なあがない、愛のみたまに浸透されて、福音をのべつたえざるを得なかった。やむにやまれないのだといった。パウロもペテロも人間としては「躓^{つまず}きの石」——自らも躓^{つまず}き、人をも躓^{つまず}かせる可能性あるもの——でありながら、福音をつたえる。この矛盾はいかなる伝道者も自覚しなければならぬ。キリストとはちがった意味において「言い逆らいを受ける徴」なのである。そのような「躓^{つまず}きの石」のゆえにこそ、伝道者はいよいよ平伏^{ひれふ}しのたましいにさせられる。キリストのあがないのゆえに賜^{たまわ}りたる「無」罪、「無」私のどん底に、「無」限、「無」量のみたまを宿してみ名を讃えつつ往くのみである。このことはいかなるキリスト者においても同じことである。言の最も深い意味において、すべてのキリスト者はキリストの証者であるはずである。そうでない者は信徒ではない。「躓^{つまず}きの石」たる伝道者に躓^{つまず}く人は、実は福音そのものに躓^{つまず}いて「言い逆らいの徴」に躓^{つまず}いているのである。

福音の焦点、聖書の焦点、神の焦点たるキリストにのみ焦点を結ぶ。

「私を見た者は父を（神を）見たのである」（ヨハネ一四・九）

という父の徴、象徴体、現象体たるキリストのふところに抱かれること、キリストのみたまを腹に宿^{もも}すこと、キリストと一如^{いちじつ}たる信仰の現実にあること、そこに一切の秘訣がある。

第二転

受洗じゅせん (ヨルダン)

——聖霊のバプテスマ

ガリラヤ湖

西のかたレバノン、東のかたヘルモンの山々は四時白雪をいただいている。この両山系を水源として南へ流れている四つの川が合流して山地の水鏡みずかがみとなつているのがガリラヤ湖。日本の諏訪湖といった感じの湖である。これは亜熱帯的風土のパレスティナの北部にあたるが、四月ですらギラギラと光る陽ざしの中で、深紅の芥子けしの花が咲きみだれている。サボテンの垣、棕櫚しゅろの並木の影に常夏とこなつが匂う。

このガリラヤ湖の西方の山岳地帯がガリラヤ地方で、イエスはその幼・少・青年時代を、この地方の山村ナザレで、大工業だいくの父ヨセフと母マリヤの膝下ひざもとで暮した。イエスがナザレ人といわれるのはこれによる(マルコ一・九、ルカ四・三四、ヨハネ一・四五、一九・一九)。

このガリラヤ湖が地中海に対して、驚くなかれ海拔マイナス二〇八メートルというどんだ底的な湖

であるとは。またの名をゲネサレ湖、キンネレ湖、ティベリア湖などという。この湖畔^{こはん}一帯がやがてイエスの伝道の根拠地となる。この湖からさらに南方に向つて、一路パレスティナ地方を蛇行しながら貫流し、全長二五〇余キロ、流れ流れて死海にそそいでいるのが、ヨルダン川である。

ヨルダン川

ヨルダンはヘブル語で「ヤルデーン」、「下りゆくもの」の意である。因みに言うが、「法」^{ちな}とはその漢字が語るように「水の如く去りゆくもの」であるという。すなわち水は低きに去つてゆくのが自然のすがたであるように、「法」も極めて自然の理にかなつたものであるべしとのところである。このように「法」の本質を、天然自然の理、水のあり方に見て、自然の理に従うところに「法」の真相、「法」の原理があるとなした漢民族の「法」哲理はすばらしいと思う。そしてこのヨルダン、ヤルデーンが「下りゆくもの」、水の天然のすがたをあらわす語であることを思うとき、ヨルダンの意は正に漢字の「法」にあたる。奇縁なる哉^{かな}、冥合なる哉^{めいごう}。ヨルダンとは凡^{およ}そ世界の河川の本質をあらわした語なのであつた。天然、自然の理を象徴する語なのであつた。

ヨルダンは若干の支流をあつめてこの全地域の動脈をなしている。川幅は二四メートルから五四メートルほど、水深は一・五メートルから三・六メートルほどである。注ぎ込んだ死海は海面下三九三メートルで、世界最低の湖であることが面白い。パレスティナ、すなわちアブラハムに約束され、イスラエル民族の故里となつた地は、実に高くまた深い立体的な地勢である。雪をいただく

山巔ありと思えば、塩分強い世界最低の湖あり、山岳地帯の間には高原地帯あり、緑の牧場あれば、憩いの汀あり、岬々とそそり立つ岩山あれば、炎熱灼くが如き荒野あり、といった多様性は、地勢そのものが、民族の劇的な歴史に、その舞台として相照応する景觀をなしている。

少年イエス

イエスの幼少年時代のことは、一二歳のイエスが過越の祭の際に両親に伴われてエルサレムへの都のぼりをしたときの記事（ルカ二・四一―五二）のほか何も記されていない。

イエスの降誕時の記事に詳しいルカ福音書にも次の二つの簡単な記述があるだけである。

「この幼児（イエス）は次第に生い立つてたくましくなり、智慧（ソフィア）が満ち、しかも神の慈悲（カリス）が彼のうえにあつた」（ルカ二・四〇、私訳）

というのと、

「イエス智慧も、年齒も増し加わり、神の前、人々の前にますます慈愛（カリス）を受けた」

（ルカ二・五二、私訳）

というだけである。

三〇歳頃までのイエスの私生活は、聖書の上では全く不明である。が、彼が肉の両親ヨセフやマリヤに、モーセ律法の「汝の父と母とを敬え」の精神を体して、よく奉仕していたことは疑うべくもないが、それとは次元を異にし、神を靈の父として拝し、父と一つになるまでに、祈りの生活を

深めていたことほど確かなことはないと思われる。シナゴークにおける礼拝と經典の身読しんどくもさることながら、朝まだき、また夜更けてか、北のかたネビ・サイーンの山か、さらには東の方あの眺望豊かなタボルの山あたりまで、祈りに出かけたであろう。青年イエスは山のふところを父なる神のふところとして、祈りの秘境を体得したにちがいない。

一二歳のイエスはエルサレム神殿を「父神に關わる」と心得ていた。イエスの両親はお祭りがすんだので帰り路についたものの、息子のイエスが群の中に同道していかないのに気づいてひきかえした。イエスをやつとさがしあてたのは、三日目、神殿の中においてであつた。ところが心配して訪ねて来た両親に向つて、

「なぜほくをおたずねになつたのです。ほくのお父さん（父なる神様）のことに關わつていなければいられないことが、あなた方はおわかりではなかつたのですか」（ルカ二・四九、

私訳

と両親に子供ながら侵おかすべからざる權威をもつて反問したイエスである。専門の祭司や律法学者もたちうちのできぬような問答のできたイエスであつた。少年イエスはすでに天父の中に没入して父神と交つていたたましいであつたからである。少年、青年期のイエスの内的生活は、神を靈とし、父として拝し、交つて、年と共に深まるばかりであつたにちがいない。水が低きにつくこと——ヨルダン——が自然であるように、イエスのたましいは靈界の父なる神の高きに即つくくことが自然であつたといえよう。

洗礼のヨハネ

イエスが三〇歳を迎えた頃、ユダヤの曠野こうやに呼ばれる声があった。この野人は駱駝らくだの毛織衣をまとい、腰に革の帯を締め、蝗いんこと野蜜を食物として永年生きてきた男であった。彼の靈性を帯びた声は、

「みな衆回心しなさい！ 天国は近づいている」(私訳)

と力強く曠野にひびき渡った。ヨルダンの谿谷けいこくには、彼から回心のバプテスマにあずかろうと、群衆がエルサレムやユダヤ全地域、ヨルダン周辺の全地方からこの野に呼ばれるこの預言者の声にひかれて蝟集いしゅうした。

彼は祭司ザカリヤと祭司アロン系の後裔こうえいエリザベツとの間に晩生した宗教性深い人物で、その名をヨハネという。天使ガブリエルから、彼がエリヤの霊と能力を継ぐ預言者であること、イエスのため露ばらいの役を果たす先駆者であることが告知されていた。旧約の預言者のしんがりを承うけたまわつて現われたわけである。彼の禁慾生活から推すと、その当時はそのような禁慾の共同生活をいとなんでいたエッセネ派に彼が属していたのではないかとの推測が現代の学者によってなされている。彼のみでなく、イエスもこの教派と関係があったとすら考えられている。しかしこの洗礼のヨハネやイエスは、たとい教派的関係があるとしても、やはり単独者であつたろう。預言者たるの召命を受けた者は、それがあのエレミヤのように祭司の血統であろうと、おのずから、アウト・サイダー

的存在にされてしまう、なってしまう。

第三のカイロス

かつて紀元前一三世紀の前半、モーセは奴隷的生活の苦難にあえぐイスラエル民族をエジプトから脱出させた。これは「出エジプト」という苦難からのあがないであった。歴史はくだって紀元前六世紀の末、バビロンに捕囚されていたユダ王国滅亡の民にその不信の罪からのあがないのおとずれを告知したのが、あの「偉大なる無名者」第二イザヤ（イザヤ書第四〇―五五章）であった。

そしてこの救済史的第三のカイロス（時期）が今や到来した。第二イザヤが告げた言葉、

「声あり、呼ばわりて曰く、

『汝ら曠野に主の道をうち拓き、

砂漠に神の大路を直く敷け』（イザヤ四〇・三、私訳）

このおとずれは、五百年の時空を越えて、洗礼のヨハネにおいて、今や再び預言の成就となった。ヨハネの、回心（「メタノイア」というこの語は普通「悔い改め」と訳されているが、本来、心の積極的な「転向」、「ひっくりかえり」を意味する語であるから、「回心」と訳した）へのバプテスマの宣告を聞くや、律法主義のバリサイ派や、祭司的貴族階級で神殿中心のサドカイ派の連中も、半ばもの見だかにやって来た。

荒野の声

「するとヨハネは厳然としてこう叫んだ、
蝮の後裔よ、

誰がおまえらに警告したか、

迫ってきているみ怒から

おまえらが逃れるように。

だから回心に価する果を結べ。

そして思うな、

おれたちには父アブラハムがある、

と言いあおうなどと。

だが私はおまえらに言っておく、

神はこれらの石ころからさえ、

アブラハムの子らを起こし得るのだ。

もうすでに斧が樹々の根もとに

置かれている。

だから善い果を結ばない樹は

みんな切り倒されてしまう。

そして火の中に投げ込まれる。

私は本当におまえらを

水の中でバプテスマして

回心に突っ込ませる。

だが私のあとから来るかたは

私より力強い。

私はこのかたのサンダルを

取りあげるにも値しない。

彼はおまえらを聖霊と火の中で

バプテスマなさる。

また箕みをその手にもって

打場うちばで彼はふるい分け、

彼の麦をかき集めて

穀倉こくぐらに納め、

穀かちは消えない火で

焼き捨てるだろう。」

(マタイ三・七、一二、私訳)

実に權威ある言々である。「^{まじし}蝮の後裔^{すえ}」とは何たる辛辣^{しんろう}な表現か。サタンの族^{やから}というわけである。パリサイ派もサドカイ派も、当時の宗教界の^{けんぜん}顕然たる二流派で、死海のほとりのエッセネ派はむしろ隠れた一派であつた。この二派に対して「^{まじし}蝮の後裔^{すえ}」ときめつけたところに、ヨハネの預言者としての鋭い洞察がある。兩派の如く伝統や血統にあぐらをかいたり、サドカイ的に神殿や祭儀を宗教生活の中心と考えたり、パリサイ的に律法・戒律を誇りとしたりするところに、まことの信仰生活があるのではない。「^{よみ}善い果^み」とは父なる神の聖意に即して生きるところにおのずからこぼれる実存的生活である。

聖靈のバプテスマ

ヨハネは水の洗礼、即ちヨルダンの川波に相手を浸すことによつて、回心を起させるバプテスマを使命としていた。これは自己に囚^{とら}われている人間を、神に囚われた人となるように転向させることであつた。自我心からの解放はしかなかなか困難なわざである。水のバプテスマによつて回心が起きて、それは未だ神への方向づけにとどまり、実力が真に伴うところまでは来ない。いわば天極を指す磁針に磁性がつけられていない。

洗礼のヨハネが預言者としての靈的權威はありながら、彼の「後に来る者」たるイエスとは^{けた}桁ちがいであることを自覚しているのは何によるのであろうか。それは彼自ら指摘しているように、イエスは、水をもつてではなく、「聖靈と火の中で」バプテスマを施す人物であるという一点であつ

た。「聖霊と火」とは、聖霊が白熱的な霊であるから、そういう表現になったまでである。聖霊の現象面には霊火現象もあるからである。マルコ福音書にはただ「聖霊でバプテスマする」と書いてある。しかし、聖霊はある場合には水に譬えられることもあることは、イエスがサマリヤの女と語っているヨハネ福音書第四章をみればわかる。あるときは風にもなぞらえられる（使徒行伝第二章）。ともあれ、聖霊は人間固有の霊とはちがう、神から出で、キリスト・イエスが受けた霊で、キリスト・イエスという具体的な神人、受肉のキリスト・イエスと不可離の関わりをもっている霊である。それを「聖霊」と言い、「み霊」という。原語では何も「み霊」の「み」の字にあたる言葉があるわけではない。新約聖書で語られている神の霊はみな受肉のキリストと不可離の霊である。旧約聖書で語られている神の霊、聖霊は受肉のキリスト・イエスとは直接的な関わりをもたないから、區別されねばならない。これは神学的にも、信仰の事態においても、極めて重要なことである。

預言者の最後の人、洗礼のヨハネ、イエスから預言者のうち最大なる者とまで言われた洗礼のヨハネすら、同じくイエスから、キリストを信受した「いと小さき者よりも小さい」と言われたわけは、ヨハネがこの聖霊を受けていないからなのである。この受霊如何が、旧約の世界と新約の現実をわかつものである。このみ霊を授け得る者はキリストのほかにはない。それだからヨハネは、自分はイエスの「鞋の紐を解くにも足らぬ」、いわば「草履とりにも値しない」と自らを告白したのである。

イエスの受洗

さてバプテスマのヨハネのまわりに蝸集^{いしめう}してきたさまざまな群衆のあとから、この預言者の立ちあがりをおねてから聞き及んでいた一人の三〇歳ほどの青年がやって来た。彼ははるばる北方ガリラヤのナザレくんだりから幾日もかかってやって来た。ヨハネとは母同士の昵懇^{じつこん}で知りあっている青年である。彼がバプテスマにあずかるうとして近づいて来たのでヨハネは、

「私の方こそあなたからバプテスマを受ける必要があるのに、反^{かえ}つてあなたが私のところに来なさるとは！」(私訳)

と言つて辞退しようとした。するとこの三十男は言つた。

「今は聞き容^いれてもらうとしよう。このように、すべて義^{ただ}しいことをなし遂げるのが私たちにふさわしいことだから」(私訳)

そこでヨハネはやむを得ずそれを聞き容れた。この青年はいうまでもなくイエスであつた。

イエスは天を仰いでヨハネの示^ししに順^{したが}つてヨルダンに全身を浸した。このようにしてバプテスマ(浸礼)にあずかった。それは彼自身、全身献供の氣がまえの祈りをもつてなされた。

水面を破つて彼のからだが浮かびあがってくると、視^みよ！ 靈界の天が裂けるように開くではないか。するとこはふしぎ、神の靈が靈鳥^{れいちょう}鳩^{ばと}のように自分の上に降臨^{こうりん}するのを見た。また靈界の天から声がひびいてきた。

「これはわが子、わが愛する者ぞ、

この者を私は悦んでゐる」(マタイ三・一七 私訳)

さてイエスは何も回心のため水のバプテスマを受ける必要のない人であつた。彼のたましいはつねに靈界の天に、父神・靈神なる神に向つていた。しかしそれであつても、受肉のキリスト、イエスは人間の弱さを我々と同じくもつ危機的存在であつた。それゆえに、彼が水のバプテスマをあえて受けたことは、自分を我々弱き人間のどん底に置いて、我々の回心を自らの回心的な砕けの相であつたこととされたのであつた。我々罪びとの破れの極限に自らを置いて、徹底的に神への回心をなすつたイエスの愛の悲願を平伏して思う。それ自体がいわば往相であり還相であつた。

ひとはややもすると、誰れ彼れがまだ回心していないとか、回心したくせにどうのこうのとか、冷たい眼で批判する。そういうキリスト者ほど神から遠い者はない。それはパリサイ根性だからである。イエスはそういうパリサイが大嫌いであつた。イエスが「義しいこと」と言つたのは、平伏して神に対する態勢、自己を何者ともせず、ひたすら神意に即しまつらんとする心根。そういう在り方が「義しいこと」であつた。

そのような態勢において水による回心のバプテスマにあづかつたら、それが同時に聖靈のバプテスマとなつた。自己中心を神中心に転向させる回心というものは、換言すれば、我意を否とし、神意を然りとすることである。おのれを否定することは、おのれを十字架することである。自己を突破することである。しかしそれは単なる否定面に終るのではなく、同時に神意を然りとなして百パーセント肯定する積極面をもっている。すなわち神意に生きる面をもつ。だから、おのれに死ぬ真

の回心は、同時に神に生き甦^{よみがえ}る面と表裏するのである。イエスはそれゆえ、おのれを十字架させた
ら、同時に聖霊を受けて神霊に生きた。すなわちイエスのヨルダン受洗は、それ自体が、十字架と
復活の両面を本質的に象徴するものであった。或^{ある}は十字架と聖霊といってもよい。それゆえ、十字
架と復活と聖霊の三相は不可離的につらなっている。三相一貫なのである。受洗のヨルダンは十字
架のゴルゴタに通じ、ゴルゴタは復活のエマオ・ガリラヤに通じ、エマオ・ガリラヤは聖霊降臨の
エルサレムに通じているのである。

かくしてまことのバプテスマは、聖霊に浴することである。キリストの十字架によって自己が突
破され、みたまがその突破口を通して突入し、宿ることである。現代キリスト教界の諸問題の焦点
は、キリストのみ霊^{たま}にバプテスマされねばならぬことに帰する。「キリストの霊を宿さぬ者はキリ
スト者ではない」とパウロがロマ書第八章で明言していることに深く思いをいたすべきである。

洗礼のヨハネがキリストを指して、あの人はみ霊のバプテスマをする人だ、と言っているのに、
キリストを迎えて、これに浴しなかったら、どうしてキリストを迎えたといえよう。

第三転

靈戦（ユダヤの曠野）

——キリスト対サタン（マタイ伝第四章一―二節）

曠野の断食

ヨルダンにおける受洗は、イエスにとつては聖靈の降臨であつた。聖靈の人イエスが伝道に乗り出す前にどうしてもやらねばならぬ戦があつた。それはサタンとの一騎打ちである。普通これを、「荒野の試み」などといっているが、聖靈は不敗の靈である。聖靈が真に内住している人は、こわいもの知らずである。それゆえ、サタンが逆に試みられる結果ともなる。ではあるが、聖靈を宿している人間といえども、肉の弱さをもっている。その意味においては聖靈が内住していても、サタンの詭弁や奸策や甘言や狡智や誘惑など、サタンのこの手かの手によやもすればひかかる危険はある。このようなサタン、人間を滅びへと誘う悪辣なサタンとの靈闘はイエスにとつてなまやさしいことではなかつた。

然らばイエスはサタンとの一騎打ちをどのように戦つたか。これを我々は畏れをもつて観なければ

ばならない。

イエスは聖霊に導かれて曠野こうやに出て行つた。そこでただ独り、断食をしながらサタンとの一騎討ちの時を待った。何たる孤独、寂寥せきりようであろう。強盗や猛獣が襲つて来ないとは限らない。風雨や暗黒などが心身をおびやかす。何より空腹、疲労のくるしみが日に夜につのってくる。イエスはただひたすら祈りに祈つて、それら一切に対する戦をつづけてゆく。祈りにおいて神と一体となつているのでなければ、サタンに勝てない。断食は驚くべし、四〇日、四〇夜つづいた。断食が満期となるや、果然「試こころむる者」サタンがやつて来た。そして言うのに、

「あなたがもし神の子であるなら、命じてこれらの石をパンにするがよい」

曠野には石がごろごろしている。しかもその形が丸味を帯びているので、パンを連想させる。空腹の極限にあるイエスに斬り込んでゆくにはパンの問題に限るとサタンは判断したわけである。

経済問題

「日常の糧かてを今日もお与へ下さるように」と日々祈れと命ずるイエスである。であるからパンの問題、生活問題、経済問題をいい加減に考えているわけではない。

さすがに悪の親玉のサタンである。まず経済問題で斬り込んで来た。これに対してイエスは、

「人の生きるのはパンのみに由よるのではない。神の口から出る凡すべての言ことばに由る」

という申命記八・三の聖句を引用して応答した。肉体は言うまでもなくパンを必要とする。しかし、

人間そのものは、単なる肉体でもなく、単なる精神（靈）でもない。むしろ靈を中心とし、肉体をその衣としているような存在である。それゆえに、神の言をたましいが喰つて生きるのだから、生きているとはいえないのである。

人間の構造は靈肉渾然として分つことが出来ない。しかし肉体がパンを必要とする切実性は、たましいが靈の糧たる神の言を必要とするよりも大であるのが通常である。この通常性のゆえに、実はたましいはやせ細っている。そのことを通常は意識していない。これが神から離れた人間の原罪性といつてよいのである。ところが「神の言」とイエスが言うとき、それは意味をもった言といった程度の觀念のことではない。神の言は、靈言であつて生命をもっている。イエスが、

「わが言は靈であり、生命である」（ヨハネ六・六三）

と言つたように、神の言は正に靈であり生命であつて、たましいを活かす。これは聖靈を受けていないとその内実がわからない。聖書をそのように身読できるまでは、「神の言によつて生きる」とイエスの言つた内実がつかめない。そしてこの靈的生命をもつ神の言は永遠性をもっている。パンは肉体に一時的、地上的生命力を与えはするが、たましいは正にこの永遠的生命力をもっている神の言でこそまことの活力を得るのである。哲学も倫理も政治もおよそ人間の思想は、どんなに立派なものであろうとも、たましいを生かし、救う力をもたない。

かくて、はじめてイエスがサタンに応答したこの言がいかに真理であるかを知る。肉体が断食のため飢えていても、人間の根源生命が神の言の活力にあることを体験しているイエスは、サタンを

一言のもとに撃退したのである。神の靈言にたましいを托して、靈言に生きているキリストなればこそ、このように勝ったのである。

宗教問題

サタンはなおも屈せず、イエスを神の都エルサレムに伴れていった。といつても、具体的に伴れていったのではない。靈において案内したのである。そして神殿の頂上にイエスを立たせた。イエスはそこまでサタンの言うなりにまかせていた。サタンは何を言うかと思つたら、

「あなたがもし神の子なら、ご自分の身体を下に投げてごらんなさい。『汝のためにみ使たち（つかい）に命じ給わん、彼ら手にて汝を支え、その足を石にうち当つることなからしめん』と録（しる）されてゐるから、やつてごらんなさい」

と聖句（詩篇九一・一一―一二）を引用して勧誘するのであった。

聖書の言といえども、時と場合と聖句に対する当事者の心の態度によつて、その真理性が失われる。それどころか有害とすらなる。それは正宗の名刀の如く、執（と）る人の魂の在り方で自らを害（そこな）うわけである。この場合サタンの心は御利益信仰、奇蹟信仰の角度であつた。まことの宗教、まことの信仰は、御利益に非ず、觀念に非ず、パリサイに非ず、傍觀（ぼうくわん）に非ず、靈的傲慢（ごうまん）に非ず、正に平伏（ひれふ）しをもつてする聖意（せいい）体現（たいげん）にある。聖意のあらざるところ、どのようによさそうに見えても、たとい奇蹟が現われても、それは本当ではない。イエスはサタンのこの勧誘に対して、

『主なる汝の神を試むべからず』（申命記六・一六）とあるではないか』

と反撃した。神力を試すのは、自己本位の角度である。この度もキリストはサタンを一言のもとに斥け給うた。

イエスの信仰は、全く神本位、神一切であつてこちらに私心がないのである。無私である、無者である。ひたすら神意を承り、ただこれに信従することあるのみ、自己を献供し挺身するのみ。神意の発動するところ、そこに靈法は働き、神の力があらわれる。それは奇蹟でも何でもなし。神の力が神の靈法に即してはたらくのである。それを人間は奇蹟などというが、奇蹟という言葉はむしろ民間信仰的な言であつて、高度の信仰の世界では奇蹟という觀念はむしろ不信仰ですらある。

政治問題

再度破れたサタンは、三度目には勝つてやろうと意気込み、最もサタンらしい問いをかける。最もサタンらしいだけ、サタンがこれに敗れたら、サタンは完敗となる。

すなわちサタンはイエスを靈において非常に高い山に同道した。「この世の君」たるサタンは自分の配下にある悪の幕屋、すなわち世界の諸国とその栄華とを示して、

「あなたがもし平伏して私に拝跪するなら、これらをすべてあなたに与えますぞ」

果せる哉、サタンは、神の統治下にある全世界を横どりして、世界に君臨している悪霊の首領であるから、政治的権勢の問題、要するに政治問題をもつてイエスに迫つたのである。

現に世界は諸々の権勢の闘争の場である。地上はおろか、制空権、制海権、さらに海底権にまで及ぼうとしている。これは人類の歴史と共に旧く、歴史と共に続く。イデオロギーと経済力と武力がこの権勢と不可離の関連をもっている。権勢欲はサタンの根本衝動である。神の座を横取りせんとするのがサタンの窮極の目的である。もしこのサタンの権勢欲が人類をして核兵器を行使せしめんか、二〇世紀の世界は壊滅する。これサタンの人類壊滅の意図である。たといそのようなことになつても、神の人類救済はこんなことでその目的を失うのではなく、そのようなカラストロフを通して、歴史の終末にあたり、審判の日が到来し、キリストの再臨がある。かくて新天新地が迎えられると黙示録は語るのである。

しかしそのような終末がどのような様相でいつ来るかは、何人も予測することも預言することも出来ない。ただ神のみ知り給うのである。

「あなたがもし平伏して私に拝跪するなら」

というサタンの一言は、イエスに向けられた有毒な決定的な挑戦をふくんだ奸言である。関ヶ原、ハルマゲドンの戦よりも重い決戦である。人類の救済如何はキリストがこの一言に勝つか否かに懸つていた。

もしサタンのこの言を容れれば、神の子、聖霊の人が、サタンに事実上屈服することになるからである。であるから、これほどキリストを侮辱した言はない。たとい全世界を与えられても、全世界に君臨するサタンの配下になることが神の子の道か。これほどキリストを馬鹿にした言はない。

権勢が何か。政治とは権勢のからくりか。キリストのバシレイア（統治）はそんなものではない。イエスは聖憤措く能わず、激怒して大喝した。

「サタンよ、退け！『主なる汝の神を拝し、ただこれにのみ事え奉るべし』（申命記六・一二）と書いてある」

と。キリストの拝跪し給う者は、神のみである。神にのみ仕え奉るのがキリストの在り方である。バシレイア・トウ・テウー（神の統治、神の国）は神の君臨し給うところ。この現世がどれほどサタンの勢力下にあるとも、到るところ、神の手は動く。神の声はひびく。神は遍在してサタンの勢力を破り給う。ただ人間が神に属くか、サタンに属くかだけが、人間の自由にかかされてある。

かくて、キリストは神の前に平伏し拝跪しつつ、サタンを撃退し給うた。

第一は経済問題、第二は宗教問題、第三は政治問題、この三大問題のどれに対しても、イエスはただ神意を立ててのみ勝ち給うた。神に平伏してのみ勝ち給うた。おのれの霊力といったものでサタンに抗したのではなかった。これが極めて大切な態度なのである。もしイエスが聖霊の力を私して、サタンと霊力の争いをして、イエス自身がサタンの敵になる。すなわちイエスは敗北となる。イエスの宗教はいわゆる霊力宗教ではない。み霊の事態も私せず、ただ神に平伏し、神におのれを全托し、神と一如となる心境、無即無限無量、無的実存こそがイエスの在り方であり、イエスの宗教的実存である。そこに無力即無能力があつて、サタンはこれにはかなわない。相手は実は神であるからである。

サタンはここに完敗し、イエスは完勝した。イエスが伝道に出立しゅつたつされる備えは完璧となった。これ以上、サタンはイエスに手向う気はなくなり、退いた。すると天使たちがイエスを囲み、彼に仕えるのであった。

我ら人間には第四の問題として社会問題がある。それはモーセの十誡じゅっかいの第六誡以下の、殺人、姦淫かんいん、窃盜せつとう、偽証、貪婪どんらんの諸問題であるが、これはイエスが山上の大告白で語っておられる如き掘りさげの角度から問題とされることで、イエスは、そのどれに対しても、やはり神に即することによって勝ち給うた。

第四転 伝道

はじめに

地上三〇年の歩みを天父と共に歩み、天父のふところにたましいを祈り入れて生きて来たイエスは、時満ちて洗礼のヨハネを通してバプテスマを受けた。それはさきにも見たように水のバプテスマが同時に天来の聖霊のバプテスマであつた。彼はみ霊に満ちて曠野でサタンと一騎討ちをなし、これに完勝した。

このようにして彼が果たすべき使命が彼を待っていた。それは伝道であつた。

「我は道なり、真理なり、生命なり」(ヨハネ一四・六)

と宣言したその道を伝え、その真理を証し、その生命を与へんことであつた。これが第四転の重厚な内実で、彼の地上最後の歲月はここに權威ある神言の火花を散らし、驚嘆すべき神業を開示する。

まず「神の国は近づけり」の第一声を掲げ、その言説面の代表として「山上の大告白」の第一言、

「恵福なる哉たましいの貧しき者」を掲げた。

その行為面の代表として、自然界をも支配する「湖上のイエス」と人間界の生死をも掌握している「イエスの霊生」の二面を掲げることにした。

神の国は近づけり（マルコ伝第一章二五節、マタイ伝第四章一七節）

洗礼のヨハネが先ずユダヤの曠野で、

「なんじら悔改めよ、天国は近づきたり」（マタイ三・一）

と宣言した。今までの生活態度を転ぜよ、転向せよ、という積極的な勧めの言葉が、「悔改めよ」（メタノエイト）である。天国を迎える準備は心魂の転換である、というのである。

ヨハネはたたみかけて烈しい言葉で、現在の生活態度を責めた。最後の預言者として烈しく審判の言を投げ、特に王ヘロデが弟ピリポの妻ヘロデヤを奪ったことを非として難じた。そのためにヨハネは捕えられ牢に投げこまれた。

この報せに接するや、イエスはガリラヤに退いて深く祈り、故里ナザレをあとにして、ガリラヤ湖の北辺のカペナウムを根拠と定めた。そしていよいよ伝道に立ちあがったのである。

その第一声が洗礼のヨハネの悲願を受けて、

「なんじら悔改めよ、天国は近づきたり」（マタイ四・一七）

「時は満ちて、神の国は近づけり。汝ら悔改めて福音を信ぜよ」（マルコ一・一五）

時は満ちた、機は熟した。ユダヤ教がゆきづまったからである。神の国、すなわち神の威光と恩寵のあふるところ。天国、すなわち神の意志が自由に体现されるところ。そういう天来の靈氣が漂うときが、到来した。その何よりの証拠は、かく宣言するキリスト自身がそのような天国体であり給うところにある。

ヨハネ福音書第一章にある如く、キリストは神の靈言の実体で、不滅永遠の生命であり、罪の世を照破する光であり、神の恩恵と真理に満ちた体现者であり、惜しみなくこの一切を与える救主である。すなわち彼が天国体そのものであり、福音体そのものである。

彼が「悔改めよ」、「回心せよ」というとき、それはおのれを問題とするな、人を問題とするな、右顧左眄は要らぬ、ただ私にひたむきに来よ。無条件に私自身をやる、という気合である。「福音を信ぜよ」とは、この福音体なる私を体で、全存在で受けよ、全存在を私に投げ入れよ、ということである。

キリストの言や行を福音書でいくら研究しても、研究といった角度でそれがわかるものではない。それらの言や行の發現体そのものたるキリストの中におのれを投げ入れ、祈り込んでゆくことこそ肝腎である。キリストの言行は本体の現象面である。この現象面を媒介として本体を体受しないで

何で「福音を信ずる」ということができるか。イエスのこの伝道の第一声はこのような気合で受けとめてかかることが大切なのである。

ルターが一五一七年一〇月三二日にヴィッテンベルク城教会の門扉に掲げた九十五箇条提題の第一条は、

「我らの主にして師なるイエス・キリストが『汝ら悔改めよ』』と言い給うとき、彼は信徒の全生涯が悔改めであるべきを意味し給う」

というのであった。この「汝ら悔改めよ」をルターはラテン文で *transmutamini* と書いた。すなわち、

「肉につける地的な心を霊につける天的な心に移し変えよ！」

という意味である。しかもルターが、我々の全生涯が悔改めであるべきことをキリストは意味し給うたのだ、と宣言したのは実に至言であると思う。さすがに宗教改革者ルターである。

たましいをつねに新たに天に向けよ、とは、絶えず天的に前進せよ、ということである。神に、キリストに立ち帰ることがすなわち前進で、このことはいわゆる努力ではなく、つねに新たに天に向わざるを得ない事態である。いわば向日性のひまわり草の如く、向神性をもつ恒常的なみ霊の内住が最も大切なことである。み霊が内住してくると、磁性を帯びた磁針の如く、つねに天極を指すようになる。これが「悔改め」の本質的な態勢である。

恵福さいわいなるかなたましいの貧しき者（マタイ伝第五章三節）

たましいが貧しいとは何か

ガリラヤ伝道のはじめの頃、ルカ伝第六章一二節以下によれば、山に登って徹夜の祈祷きとうをした翌朝、弟子たちを呼びよせ、その中から一二人を選んで、特に使徒と名づけた後に、彼らと山を降りて来たが、多分その中腹の「平らかな処ところ」に立って、群衆の取り巻く中で、弟子たちを中心にして語り出でたように記されてある。マタイ伝第五章一節によれば、イエスは群衆を見たので、むしろ近傍の山に登って行って、おそらく一段と小高いところに座を占めた。すると弟子たちはそのまわりに環坐したのである。また間もなく群衆はその外側を幾重にも取り囲んだことであろう。うち見ればガリラヤ湖の湖面が朝日に耀かがやうている。

そこで彼は口を開いて、こう言つて教えた。

「さいわいだ、たましい（霊）の貧しい人たちは。天国はその人たちのものだから」（マタイ

五・二、三、私訳）

特に「口を開いて」とマタイが訳し、ルカが「眼を挙あげて」と書いているのは、重大なことを告諭ゆせんとするイエスの態勢を示すものである。マタイの「山上の垂訓すいくん」はルカのいわゆる「平原の

「説教」よりも内容的に整備している。おそらくルカの方がその時の表現には近いと思われる。ともあれ、イエスの言を真につかむためには、その根源の靈言に耳かたむけんとする祈り心が大切である。

「心の貧しき者」「このころの貧しい人たち」と日本訳にあるが、ギリシア語ではプニユーマ、ヘブライ語ではルーアハで、その本来の意味の「^{なまじい}靈」と訳すべきである。

イエスは垂訓の開口一番、人間の最も中心であり、最高である「靈」の事態を端的に指摘なさった。いずれの宗教においても一番中心は靈である。人間の問題で靈の問題が最も根源的な問題である。「靈は意志と認識と情感の根源の座であって、人間の内的生命及び活動の荷い手である」(パウエル)の『ギリシア語・ドイツ語新約辞典』参照。いわゆる「精神」は靈の觀念的な面であって、靈は生命の根源である。肉体の死滅と共に滅びるものではない。

イエスは人間をみるとき、その人のたましいの在り方を見た。たましいの在り方がその人の全実存を決定するからである。

イエスが「さいわい」(マカリオス、blessed, selig「恵福」と先ず^す宣言したとき、その靈の在り方はどうであつたのか。それは「貧しい」という在り方であつた。「^{なまじい}靈が貧しい」とは何か。「貧しい」(プトーチス)とは^{こじき}乞食の如く貧しいことをいう。ドイツ語で bettelarm「ベッテルアルム」という。ルターもここでそのように註解している。乞食のように無一物であることをいう。ルターも青少年時代貧乏学生であつたから、解説におのずからこういう言葉がでて来たのもあろう。

レプタ二枚しか有^もつていなかったのに、それを二枚とも賽銭箱に投げ入れた「貧しい寡婦」があらった。この寡婦の外も内もそのとき真に貧しくあつた（マルコ二・四一―四四、ルカ二・一―四）。

霊が貧しいとは、自分の霊をすっかり神の前に投げ出している事態をいう。この寡婦は「生命の糧」を買^{かて}うべきあり金をすべて投げ入れた。すなわち自分の生命を神の前に捧げつくしたわけである。このような事態を無^む的実存と私は言う。このような棄身^{すてみ}のたましいそのものはかえつて豊かなのである。無^む一物無^{いちぶつ}尺^{むじん}蔵^{ぞう}のたましいである。

「旧い神信仰と神の戒め^{いまし}を嚴格にまもっていた敬虔^{けいけん}な人々は、殆ど全く社会の下層階級に属していた。そういうわけで、一方、敬虔、義、畏神ということ、他方、貧困、窮乏、卑賤^{ひせん}ということは殆ど同義同価値的であつた」とシュニーヴィントが解説しているのを見ても、たましいの謙虚な人々は大方物質的に恵まれない人々であつたわけである。イエスが、

「富める者の神の国に入るよりは駱駝^{らくだ}のへ針の孔^{あな}」（という名の狭い門）を通^{かえ}るかた、反^{かえ}つて易^{やす}し」（マルコ一〇・二四、二五）

と嘆じた意味も、そのような現実からの烈^{こは}しい言であつたわけである。ルカ福音書では、「貧しい者は恵福^{さいわい}だ、神の国はおまえたちのものだ」（ルカ六・二〇）とあるが、これの方が現実すばりである。しかもマタイのは三人称的な言い方であるのに、ルカの方は二人称で相手に率直に呼びかけている。要するに物質的な貧者が同時に精神的に謙虚な者であるのが現実のすがたであつたわけである。

自我というもの

ところで人間には精神的にも物質的にも自己拡充の根本衝動がある。ある意味で、これがなければ文化というものは進展しない。宗教においてこれが物質面にはたらくとき、それは御利益ゴリヤク的なものとなり、靈的にはたらくとき、他を見くだすパリサイとなり、他を異端視したり、他宗排撃の靈的傲慢ゴウマンとなり、果ては宗教戦争の如きを招来した。一般には生命現象が拡充、展開の方向をとること、そのことは自然である。しかしここに注意しなければならないのは、その衝動の奥に巢喰うところの「自我」というものである。これが一切を毒するものである。この「自我」「私」が罪の主体で、この罪がさまざまに相を変えてはたらく。人間の有つ有形無形ものものは、それ自体どんなに善きもの、美しきもの、真なるものでも、それが「私」されるとき、知らぬ間にそれはサタンの配下に属する事態となる。

イエスがあのように古今東西に全く絶する御霊に満ちた人物であつたにも拘らずかかわ、その靈の事態をつゆ私しなかつたこの一事、これを見そなつたら福音書のイエスを読みそなう。また聖書はつかめない。あの曠野こうやでのサタンとの一騎討ちにおいても、イエスの態度はどこまでも神への平伏ひれふしにおいての御霊の權威であつた。

イエスの無的実存

このイエスの言は実に山上の「垂訓」^{すいくん}「嘉信」^{かしん}である以前に、本質的にイエス自らの告白であったのである。垂訓の奥にイエスの告白を靈聴することなくしては、これを真に受けとることは出来ない。イエスは御自分が、靈において全く乞食の如く無一物であつて、ただ神にのみ御自身をゆだね、神から一切を受けとり、かつこれをいつも神のものとして自覚し、私しなかった。無の実存！これである。

「我自らは何事もなし能わず、……我を遣わし給ひし者の御意を求むるに因る」^{ヨハネ五・}

三〇）

「わが教はわが教にあらず、我を遣わし給ひし者の教なり、……己より語るものは己の栄光をもとむ、己を遣わしし者の栄光を求むる者は真なり、その中に不義なし」^{（同七・一六、}

一八）

「何ゆゑ我を善しと言うか、神ひとりの他に善き者なし」^{（マルコ一〇・一八）}

このようにイエスみずからは無能、無教であり、無言、無善である。実にイエスは徹底的に「無」の人、無者であつた。「貧しい」とは正にこの角度の事態をいう。こういう在り方をいう。そうしたら、彼自身に神という天国が入つて来た。イエスはすなわち神という天国の身証体、天国体、福音体となつた。だから、

「汝ら悔改めよ、天国は近づきたり」^{（マタイ四・一七）}

「時は満てり、神の国は近づけり、汝ら悔改めて福音を信ぜよ」^{（マルコ一・一五）}

と宣言したのである。実に彼自らがガリラヤ湖畔に立って、「神の福音」を宣べつたえたこの第一声に天国の臨在があつたのである。終末の世界がイエスの内に内在することなくして、どうして歴史的終末の到来を預言することが出来ようか！

このようにイエスは、その霊、乞食の如く貧しく、一切を神より受け、神に信賴してなし、一切を神に歸し、神の中に生き、動き、在った。それゆえにこそ、実は最も豊かであつた。無即無限無量とはイエスのこの実存態をいう。

十字架と無私

「さいわいだ、たましいの貧しい人たちは、天国はその人たちのものだから」
とは、実にその言の奥に

「私の霊は無一物、何ものでもない、全く神のものだ。そしたら有難いことに、天の父が全く私を支配して下さっている。私はそんな天国になつた」

という自身の体験の告白が秘められてあるのだ。「天国」という原語の「国」(バシレイア)は「支配」を意味する語で、神意の支配するところが「天国」である。漢訳聖書には「虚心者福矣以天国乃其国也」とある。すなわち「虚心なる者は福なり、天国はすなわち其の国なるを以てなり」とよむ。霊の貧者を虚心なる者と訳した。虚心は無私の謙虚な心ばせの意であるから、なかなかよい訳語だと思ふ。

とにかくこの山上の垂訓すいくんの第一言をイエスの告白と気がついたら、要するにイエスの言はすべてその本質においてイエスの告白であると実感するに至り、私はふしぎな力にうたれた。そして私はイエスの中に投げ身するより仕方がなくなつた。「キリストに倣ならいて」ではなく、「キリストの中へ」という棄身すてみの衝動にかられた。するとまたこの第一言はふしぎに次のようにひびいて来た。

「幸しあわせだよ。おまえは、たましいが貧しくなつたね。天国はおまえにやるよ」

と。ああ何をかのぞもう！ このイエスのみ言のほかに。

私の投身したのは、キリストの聖言みことばの中に。それもどうしてできたのか。それは「貧しさ」の極致なるキリストの実存の極みたる十字架の中への投身であつた。キリストの中に入つて、キリストの愛の十字架に十字架され、私がすっかり罪から解放され、「私」からすっかり脱落している無私、無我を受けとつたとき、——相対的現実の者たる私が無私無我となつたのではない——信仰の現実で無私を体受したとき、何とそれは楽な、鴻毛こうもうよりも軽い、深山の靈氣よりもすがすがしいたましいの誕生を見たことか。その十字架の無言の言で、「私」はすつとんでいることに気がついた。十字架という事実になさるいかなる烈しい強い熱い愛の言が天上天下いずこにあるか。行即言である。事実をもつて迫る無言の言、事実という言が人間のたましいを動かす。「十字架の言」とパウロがいったのはこのことである。

私はキリストの十字架で、すっかり自分の靈が「無私」とされ、「貧しく」されているのを発見した！ 私はもう何も憂うれえない。靈的傲慢ごうまんやパリサイ的信仰や御利益ごりやくや觀念は、真にキリストにつ

く者の世界にはない。山上の大告白のこの第一言は、これらの逸脱や転倒や安易やズレに対する最大の否！である。イエスの全福音は実にこの第一言で喝破くわはされている。キリストの福音は何だと問われるなら、私はイエスのこの第一言をもつて答えるに躊躇ちゅうちよしない。

「霊が貧しい」とは、私たちの霊がすっかりキリストの十字架で贖あがなわれ、砕かれてゐる恩恵をうけるとをいう。そして「砕け」そのものを「貧しさ」そのものを「無」私そのものをわがたましいのすがたとなすことである。それは第一のアダム、旧ふるき我の「死」の相である。

天国とみたまの現実

「天国はその人たちのものだから」とは何か。キリストの生命、永遠の生命、あの復活によつて実証された霊生が、当然この「砕け」、「貧しさ」、「無」、「死」のあとから入ってくるではないか！与えられるではないか、恩恵のまた恩恵である。

無一物が無むじんずう尽蔵であり、貧が即ち富であり、死が生である。十字架のキリストが復活のキリストに転ずる。このキリストの中に身を投ずる信においてこそ、み霊のキリストがわがうちに生きてくださる。

これ神のめぐみの意志の支配し給う「天国」である。

このようにして、我らは第一言に通うイエスの息吹を呼吸した。呼とはイエスの十字架と共にものを吐き出すことである。これ「貧しさ」である。吸とはキリストの復活と共にキリストの霊生、

み霊^{たま}を吸いこむことである。これ「天国」である。もともと霊（ブネウマ）とは「呼吸する」（ブネオ）という動詞が示すように、「氣息」であり、天然の呼吸即ち「風」であり、神の呼吸即ち「霊」であることは実に深い連関を語るものである。かくて我らは、山上の大告白の第一言を全くずれなく、キリストの中に投身して、うちがわから聴きかつ受けとった。み言^{ことば}が化体^{かたい}して来た！ 外から聞いていたのでは、いわゆる教訓、誠め^{いまし}では、到底わが身につかない。

福音書のイエスの言^{ことば}は、どれもこれも天的な靈生の息吹^{いきぶき}の言である。生れつきのわれらにとって是不可能な烈しい熱い言で満ちている。しかもその何たる単純さよ！ 率直さよ。イエスは言に水を割り給わない。また聖書には形容詞もない。真正正銘のままの言であふれている。不可能なことをずけずけと言いつ放っている。そして「なせ！」「行え！」と迫り給う。誰かこれに耐え得よう。実は、イエスは、「うちがわから聴くのだよ。まず私の中に入って来なさい。そしたら私から注がれる実力——みたまの——がおまえに不可能を可能にさせるよ。神からの靈的な生命だからね。愛の力だからね」と言っておられる。

イエスの伝道といつても、単にお説教などしていいのではない。いつも実力の裏づけをもつて力を与えつつ語っているのである。わが言は「靈なり生命^{いのち}なり」と宣言しておられる通りである。だから、さきにも触れたように、たといマタイ福音書で、この場合、他称^{たしなう}（二人称）的に言っておられても、それをルカ福音書のように、対称（二人称）的にとらえて身近に感得することが大切である。キリストという「神の国」、「天国」、「永遠の生命」の実体を恵^{けい}与^よされて、その他に何を要しよ

う。私たちは生命と歓喜と力と愛にあふれてくるではないか。「山上の垂訓^{すいくん}」はいましめではない。實力の裏付け、恩恵の現実をもってする現実告知であり、喜ばしき勧告である。正に福音である。終末的恩恵の現在と終末的希望の将来とが「幸なるかな……」の第一言の中に、相共^{あいにとも}にのつびきならぬ関係においてふくまれていのである。「霊の貧しい」生き方の人々にはすでに天国が内住し、かつまた必ず神の新天地は待っている。

私たちは生まの現実が、どのようにみじめでも、このキリストのくださった十字架による「貧しさ」が我らの現実の土台である限り、キリストにあつての平安と、歓喜と實力が臨んでくるではないか。この恩恵の現実を如何^{いか}にせん。躓^{つまず}いても、倒れても、滑つても、転んでも、前進できる。

山上の垂訓！ 大告白！ その劈頭^{へきとう}の一言が即ち全福音、歓喜の福音である。

モーセとイエス

翻^{ひるがえ}つて思う、モーセの十誡を、その第一誡を。

「汝^{かお}わが面の前に我^はの外何物をも神とすべからず」

これは原意に即して訳すならば、

「汝にとつてわが面の前では他の神々はなし（あるまじ）」

という断言^{だんげんめい}命法的な現実告知である。「べからず」という禁止命令の意は是れから派生してくるわけであつて、本来は断言的否定である。それ故に現行訳は、原意の重大な角度を逸している。その

点大ルターも惜しい訳し方をしてしまった。

"Du sollst keine anderen Götter neben mir haben."

であるよりも、根源的には、

"Es sind (seien) dir keinen anderen Götter vor meinem Angesicht."

である。すなわちモーセ十誡の第一言も、神ヤハウェーはイスラエルにとって実存的な人格的關係に立つ神であつて、神がイスラエルに向つて一対一の全的人格關係を宣言しているのである。

「私はおまえの神だから、おまえにとつて他の神々はあれども無きにひとしいね」

という現実告知である。深い信愛關係である。もともとエジプトからイスラエルを救い出した救済の神の実力の裏付けによる十言である。であるから、律法の真精神は、神から民への信愛をもつて貫かれ、実力の裏付けがあることを洞察することによつて、はじめてつかめるものである。それ故に例えば、「汝殺すなかれ」も「汝は殺人はしない(すまじ)」である。

「私が汝の神ではないか、どうして汝が殺人などしようか」

という神意である。十誡(実は十言と訳すべき言)の奥に福音がかくれていた。これをいわゆる律法化してしまつたイスラエル民族精神の悲劇よ。このような律法の福音的性格を預言者たちはやや受けとりかけていたが、イエスにおいて完全に充たされた。

モーセの十言とイエスの山上の大告白とは相照応^{あひしょうおう}している。「始めに言あり^{ことば}」とはこのことだ。モーセの背後にキリストという靈にして言なる實在のあつたことを洞察する者は幸である。ルター

はかなりその角度をもっていた。それゆえ、旧約と新約を貫いて身読、靈読せしめるものはキリストの靈である。モーセの十言を完全に内側から読み、かつこれを実践し、満たしたのが「律法の終末」(テロス)(ローマ一〇・四)となつたキリスト・イエスである。イエスのみが神の意志を全的に體現し、喜悅と信愛をもつて、神言を身証し給うたのである。神の実力のゆえに、信愛のゆえに、モーセの十言をも、イエスの山上の大告白をも、歡喜と勝利の福音として、投身また投身して身読する者は幸である、とイエスは我らに語っておられる。

かくて、第一誡(モーセ)と第一訓(イエス)とは、本来神の断言的本願であるから、今昔相照^{こんじゃく}応して同音同質に我らにひびいてくる。おのずから神への信愛、キリストへの投身が湧く。

栄光、実存の主キリストの聖名にあれ！

(本稿の原型は一九五五年一〇月一六日、武蔵野幕屋における日曜集会での聖書講筵)

舟板を枕に——湖上のイエス・その一

(マタイ伝第八章一八―二七節、マルコ伝第四章三五―四一節)

棄身のたましい

ガリラヤ伝道においてイエスは多くの奇蹟を行った。それで、もの見高い群衆がイエスの周辺に蟻のように群がってくる。イエスはときおり、こういう群衆を避けなければやりきれなかつた。

ある夕、イエスは弟子たちを伴って「彼方の岸」に行こうとなさつた。すこし歩いてゆくと、一人の学者が近づいてきて、こう言つた。

「先生、どこへいらつしゃろうと、私はお従いします」
するとイエスはこれに應えてこう言つた。

「狐には穴がある。空の鳥には罅がある。だけれど、人の子は枕するところがない」と。そしてまたある弟子にこう言つた。

「私について来よ」

するとその弟子はこう答えた。

「主よ、まず往いつて父を葬はうむることをお許し下さい」

するとイエスはこれに對して、

「私について来よ。死人は葬儀屋にまかせよ！ おまえは往いつて神の国を言い弘ひろめよ！

手を鋤すきにつけてのち後うしろをかえりみる者は神の国にふさわしくない」（私訳）

以上の問答をみると、イエスと弟子とはなんと次元がちがうかを知る。この弟子が誰であつたにせよ、同じこと。そしてこの弟子とまた同じなのは我々。この問答の劇中に自分を投じてみればわかる。主の往くところに自分も従いたいと思う。本当にそれができるか。「お従います」と言えるか。言つてみたところで実行できるか。イエスは言つた。

「狐には穴があるよ。夜になればそこへ走り帰つて穴の中で眠る。空の鳥には罅ひがあるよ。夕になればそこへ飛び帰つて翼つばさをたたんで眠る。人間はそれぞれ家がある、小屋がある、宿がある。けれども『人の子』、私には枕するところがないのだ！ おまえはこの宿なしの私に本当について来れるかね」

というのである。

イエスの弟子となるにはイエスと一緒に「枕するところなし」を覚悟の上でなければならぬ。イエスは故里を追われた者、イエスは近親知友に棄てられた者で、家造りが棄てた棄石きせきのような人。ところがこの「棄石」が「隅の首石ぐまのくびし」であることを人々は悟らないのだ。いつの世でも本当の「預言者」、本当の「異端者」はそのようにあつかわれる。イエスを異端視したパウロが、のちにイエ

スの本当の弟子となつたら、こんどはパウロが「異端の首^{かしら}」と呼ばれた。ところがこういう「異端者」たちが実は本ものたちであるのだ。すべては歴史の終末にわかるときがくる。ただ畏れ^{おそ}れをもつて本ものたらんことを念じて進むのみである。

要するにイエスの弟子たらんとする者は、どういう現実を生きようと、棄身^いのたましいであることだ。棄身^{すくみ}とは、どういうことか。おのが身をどこに棄てたら棄身のたましいとなれるのか。そのことは次のイエスの在り方が示してくださっている。

その前にもうひとつ耳を傾けるべきイエスの言があつた。

「死人は葬儀屋にまかせよ」の一言である。普通はこれを、

「死者をして死者を葬らせよ」

ということになっている。ギリシア語テキストがそうになっているから無理もない。ところがこれはイエスが母語たるアラミ語で言つたときは、

「ミッタ（葬儀屋）をしてマッタ（死者）を葬らせよ」

であつたのである、とアラミ語聖書の研究家益本重雄氏が私に語ってくれた。それをギリシア語に訳出するとき、ミッタをマッタと読みちがえたか、伝えちがえたかしてしまつて、両者ともマッタ（死者）にしてしまつたので、いわゆるギリシア語原典がしまつたことをしてしまつた。今だに一般にあやまりとられ、いろいろと深遠そうな解釈を学者どもがひねりまわすようしまつとなつてしまつた。イエスはそんな、もつてまわつたことを言つたわけではなく、きわめてあたりまえなことを

言つたまでである。ではあるが、

「父親の葬儀は葬儀屋にまかせ、おまえはそれに参列しないで、往つて神の国を言い弘めよ」

と言つて、まことに不人情、非常識なことをイエスは命ずる。しかし、相手が普通人ならイエスもこんなことは言いなさらぬにちがいない。相手は弟子をもつて任ずる者である。神の国建設の使者が世の常人と同じ常識で生きようとしたら、それは神の国の使者に価しない、というイエスの厳しい態度である。しかしまことのキリスト者たらんとするなら、そういう在り方を本質的には要求されていゝという自覚がなければならぬ。公事のためには私事を棄てねばならぬように、神事のためには世事を棄てねばならぬ気合である。

父のふところ

このような劇的な問答のあとで、イエスは弟子どもを従えて舟に乗つてガリラヤ湖上に進み出た。すると一天にわかにかき曇り、風とみに吹きすさび、暴風となつた。波がさかまき、舟舷を越えて波が舟に満つるばかりになつてきた。このようなしけ模様であるのにイエスはどうしておられるのだらう。イエスは艫とこの方に舟板を枕にして眠つておられるではないか。これは何たる大胆さか。「枕するところなき」人は、正反對に、いたるところを枕とすることのできる人であつた。野路に往き暮るれば草枕くさいまくら、荒野に断食すれば石枕いしまくら、山に登れば木の根枕ねまくら、舟路を往けば板枕いたまくら。そして人

あつて、どうぞお宿り下さいといわれれば、情けを受けて腕枕。これが「枕するところなき」人が、いたるところを枕とすることの出来るすがたである。しかし、その枕が何であろうと、イエスにとつてその枕は、実は父の膝枕、否実（ひじまへ）に父のふところでもあつた。

この場合、あらしの中に木の葉と揺れる小舟の舟板が、父のふところであつた。イエスは自分の身を父のふところに投げ入れ、投げ棄てていたのである。イエスの棄身の秘訣は、父のふところの中であつた。「父と我とは一つなり」とは、そのように父のふところを全存在の場としていたからである。何たるずぶとい信仰か。倒れても、ころんでも、滑つても、躓いても、父のふところの中である。私たちの相対的現実（じやうたいてきじやうじつ）は、倒れても、滑つても、躓いても、転んでも、空気の中、大地の上である。私たちの身心の、全身の、棄てどころは何処か。イエスの中、キリストの中である。これが私たちの棄身の態勢である、気合である。キリストのふところの中にはキリストのみ霊（たま）が満ちあふれている。だから棄ててみると、俄然（がぜん）、み霊のいのちの力が入ってきて、何とも不思議な力にみつるのである。これが本当の平安というものである。

イエスの眠り、あらしの中の、沈むばかりの舟の中での大胆不敵な眠り！ これは父のふところの中での大平安の眠りである。それは母のふところに安らかに眠る乳児の如くである。乳房を吸っているうちに眠ってしまう乳児のすがた。これほど信頼（しんらい）そのもののすがたがあるか。マリヤの胸に抱かれている乳児イエスのすがたは、実はイエスが父なる神に対する信愛一貫の全生涯のすがたであつた。

弟子どもは、舟が沈む、自分たちのいのちが危いとあわてふためき、眠っている先生のところへ急ぎやつて来て、揺り起こし、

「主様しゅさま、救つて下さい。危急ききゆう存亡ぞんぼうです！」

と。もし、このとき先生の眠りすがたをじつと見る弟子があつたとするなら、その者は、そのみすがたそのもので救われ、平安を得たであろう。イエスの寝すがたに、神的平安が漂うていたに相違ないからである。イエスの身邊に靈光がたゆとうていたにちがいないからである。

奇蹟とは何か

イエスはやおら起きあがり、うろたえる弟子どもに、

「なぜ臆おくするか、信仰しんぎょううすき者よ！」

と一喝した。おそれとうたがいは信仰の世界では禁物である。あるとき、私は北海道への旅の往復を空路によつたが、往きは台風到来に先んじて飛び立ち、還りは台風到来に先んじて着陸したが、天候不調であつたので、一抹の不安が心を掠かすめた。しかし、そのとき湖上のこのイエスを思つて、平安を与えられ、パイロットに同じく平安あらんことを機上で念じた。

イエスにとつては信仰の現実げんじつは、つねに現在の平安そのものである。我々にとって、客観的にはどのような動揺不安定な現実であろうと、希望きぼううすらぎたる如き、暗雲低迷の現実であろうと、そのような現実げんじつに支配されず、断乎だんことして神の遠謀深慮えんぼうしんりょの愛をつゆうたがわず、希望の光を靈視して、

主のみふところに身を投じ、みたまの力を賜り、何ものにも屈せぬ平安を賜って一日を一生として生きる。これこそ「キリストを行ずる」というべく、「キリストを生きる」というべきものである。

イエスは弟子どもを一喝したあと、風と海とを制し、「黙せ、鎮まれ！」と大喝し給うた。すると直ちに風も波もしずまり、大風なぎとなった。人々は、全くふしぎに思つて、「これはどういう人か。風も海も従うとは」と感嘆した。

さてここで、イエスの言はマタイ福音書によると、「信仰うすき者よ」とあり、マルコ福音書によると、「信仰なき者よ」とある。実は信仰は、「うすい」とか「ふかい」とかいつて、相対的な區別はすまじきものである。イエスが「信仰うすき者」といったにせよ、「信仰なき者」といったにせよ、それは同じことで、実は「信仰なき者」なのである。信仰は本質的には「ある」か「ない」かのどちらかである。それは神、キリストを信ずるということとは全的けつてきに「信ずる」ことであつて、パーセントは信じた、などといわるべきことではない。ただ相対的な現実においては、信仰には一応強弱はある。しかし、自分で強弱を問題にしている間は、本当の信仰には到達できない。信仰は *alles oder nichts* 「すべてか然らずしかんば無か」である。それはイエスがいつも全的な身心の投入、体あたりを要求しておられるところを見れば、全一的な在り方が信仰の本質的な在り方であることを知る。

ところで風を黙さしめ、波を鎮めたイエスの奇蹟は何であらう。ゲエテが、

"Das Wunder ist des Glaubens liebtes Kind." (Faust:766)

「奇蹟は信仰の最愛の子である」と『ファウスト』の中でファウストをして言わしめているように、イエスの驚嘆すべき数々の奇蹟によつて民衆の心に信仰が起きたことは事実である。イエスは、「わが言うことを信ぜよ、我は父に居り、父は我に居給うなり、もし信ぜずば、我が業によりて信ぜよ」（ヨハネ一四・一二）

と言っているが、イエスがこのようにいう「業」とは奇蹟的なわざである。常識的な、理性的な判断でわかる「わざ」ならば、何も「信ずる」必要はないからである。「奇蹟」、ひらたく言えば「ふしぎなこと」とは何か。それは神の聖意の発動によることであつて、ひとの理性的次元ではつかみ得ぬこと、理解しがたきことである。

イエスはどうしてそんなことが出来たか。それもイエス自ら明言しておられる。

「我の父に居り、父の我に居給うことを信ぜぬか。わが汝らにいう言は己によりて語るに、非ず、父われに在まして御業をおこない給うなり」（ヨハネ一四・二〇）

イエスの言もイエスの業も、みな父なる神の言であり、神の業なのである。神言、神業である。それは、イエスがつねに父に居り、父が彼の中に居るといふ父子一体一如の在り方に生きておられたからである。これはみたまの貫在、内在の事態のほか何ものでもない。決して思われたような事態ではなく、霊の現実なのである。だから彼のわざは、父の聖意の発動であり、霊法が実力をもつてはたらく事態であつて、実は奇蹟でも何でもない。霊法の厳としてはたらく事態なのである。その次元は、生れつきの人間に理解できないので奇蹟というまでである。

であるから信仰において最も根源的なことは一如^{いちにょ}一体^{いつたい}の貫在・内在關係であつて、イエスは神のふところに、我らはキリストのふところに投身することによつてのみ開示する世界であり、次元であつて、研究によつてわかるなどいうことではおよそないのである。棄身^{すてみ}とは、キリストの中に棄身するときには本当の棄身の態勢となり、平安と歓喜これにすぎたるはない。キリストの中にどうして棄身できるか。それは十字架という門が、キリストの中に棄身できる突入口だから、出来るのである。祈りをもつて、ひれふしの身心をもつて棄身するのである。するとみたまのバプテスマを同時に受けて、みたまが入ってくるから、キリストと同質の内実となる。それでこそ、我キリストの中に、キリストわが中という一如の境地が現実となる。使徒たち、すなわちパウロもヨハネもペテロもヤコブもみなこの現実の中から叫んでいるのである。

「信ずる」とはそのようなみ霊^{たま}の現実に入ることという。だからイエスはさらに言つた。

「誠^{まこと}にまことに汝^{なんじ}らに告ぐ、我を信ずる者はわがなす業^{わざ}をなさん、かつ之^{これ}よりも大いなる業をなすべし、われ父に往^ゆけばなり。汝らがわが名によりて願うことは、我みなこれをな

さん」(ヨハネ一四・一二、一三)

さらにたたみかけてイエスは確言なされた。

「何^{なん}ごとにてても、わが名によりて我に願わば、我これを成すべし」(ヨハネ一四・一四)

「わが名によりて」とは、エン・トー・オノマティ・ムー、「わが名に在つて」である。「わが名に在つて」は直ちに、「我に在つて」である。「我に在つて」の内実は「わが靈にあつて」であり、

「みたまに在つて」である。

人生なやみ多し、現実不如意なること多しである。現実是不合理と矛盾多し。人の世は罪の世だからである。厄介きわまりなき人間どもの世界だからである。もしキリストが我らの存在の根底を、一切にかかわらず支えてくださらなかったら、我らはどうにもならない。しかし、キリストが我らの中に突入し、我らがキリストの中に突入しているこの信仰の事態のみが、一切の現実を耐え抜き、担い抜き、突破し、かつ抱擁することができるのである。使徒たちがそのことの最大の証者であり得る、みたまの恩寵の事態こそが最大の奇蹟であると言つたらよいだろう。

だからキリストの言もわざも、イエスがいかに父と一つであつたかの証拠である。父子一体の証しである。まことの信仰からこそ「奇蹟」が生ずるのである。その角度からこそさきほどのゲーテの言は真理である。信仰が奇蹟を生むのであるから、奇蹟は「最愛の子」といえる。しかし「奇蹟」は神の栄光のあらわれであつて、聖意靈法の発露であつて、まじわざとは全く次元も質もちがう。「しるし」なる「奇蹟」を追う信仰は本ものでない。それは御利益信仰であつて、イエスに蹟いた多くの民衆がそうであつたのである。

濤波を踏破して——湖上のイエス・その二

(マタイ伝第一四章二一、二三節、マルコ伝第六章四五、五二節、ヨハネ伝第六章一五、二二節)

五つのパンと二匹の魚を種子として、五千人の男と、婦女子多数にパンと魚を喰わせ、なお一二の籠に一杯あまったという空前絶後の大奇蹟を行つたあとで、群衆を去らせ、弟子たちを舟に乘るように督促し、先きにゲネサレの地に向わせ、自分はひそかに山に登つて、夕暮から独り静かに父のふところに祈り入つたイエスであつた。

宵は更けゆき、闇は深まり、無気味な風が高まり、夜空も雲に蔽われ、星影もなく、何たる闇黒の夜であろう。弟子どもの舟は湖心に來たが逆風になやまされて舟脚は一向にはかどらない。イエスは夜もすがら祈つておられる。そろそろ東の空が闇を払い始めてくる。夜明けの四時頃である。イエスは祈り終つて、身も軽々と羽化したからだで湖上を渡り始めた。波を踏み越えてくるイエスの姿！

弟子どもは湖上に妙な影が見えるので心騒ぎ、幽霊變化の者とみて、こわがり叫び合つた。まことに無理からぬはなしである。イエスは時を移さず、心おびえる彼らに語りかけてこう言つた。

「安心せよ、私だ、こわがるな」(マタイ一四・二七、マルコ六・五〇、私訳)

力強い愛の言だ！ 言下にペテロが答えて言った。

「主様しゅさま、あなたでしたか。私に命じて、水を踏んでみ許もとに往かせて下さい」(私訳)

するとイエスは直ちに、

「来い！」

と言った。この力強いイエスの言を全身に受けたペテロは水を踏んでイエスに向って歩み始めた。何たる奇蹟ぞ、ペテロまで水渡りをするとは。これが信仰の消息である。靈法のはたらいっている現実である。

ところが元来漁夫であり、その性格が波のようなペテロ、吹きくる一陣の風に心が波のように揺ゆいだ。イエスに向って一念凝集していた心が分裂した。とその瞬間、彼の脚もとの波に心がうばわれ、全身におそれが波及した。するとみるうちに彼は波に吞まれかかった。そこで彼は叫んだ。

「主様、助けて下さい！」

イエスは直ちに手を伸べて、彼を捉えて言った。

「ああ信仰うすき者よ、何で疑うか」

おそれとうたがいは信仰の敵。ドイツ語でも「うたがい」という語は心が「二つにわれる」という意味の語である。心の分裂はキリストと一如いちにとなる境地の障害である。

イエスはペテロを波から引きあげ、彼を伴ともれて舟に乗った。イエスが舟に乗ると、ふしぎや風も

凪い^なでしまった。何という人か。弟子どもは足下^{あしもと}に平伏^{ひれふ}して「本当にあなたは神様の子です」と拝むようにして告白した。

晩年のゲートルはこの場面について所感をエツカーマンに次のように語った。

「これは私が特愛する最も美しい物語の一つです。この中には高次な教えが語られてあるわけです。すなわち、人間は信仰と活き活きした勇氣さえあれば、極めて困難な企てにも勝利をおさめることができるが、無氣力がちよつとでもきざして来た瞬間に直ちに沈みはじめるということ」(一八三一年二月二日)

ヤイロの娘——イエスの靈生・その一

(マルコ伝第五章二一―四三節、ルカ伝第八章四〇―五六節)

ガリラヤ湖畔に民衆が集まってくるのは、イエスという前代未聞の人物がいるからである。するとそこへ会堂^{かいどう}司^{つかさ}の一人でヤイロという者がやって来た。小憩^{せいき}をしているイエスを見るや、つかつか歩み寄つて、その足下に平伏し、切にねがい求めてこう言った。

「私の稚^{おとこ}ない娘がいまわのきわにあります。どうぞいらっしゃってみ手を按^おいて下さい！」

そうしたらきつと救われて活きます」(マルコ五・二三)

この娘は一二歳ほどの少女であつた(ルカ八・四二)。親にとつては何といつても子供のいのちは肌身に感ずる一体感のものである。何とかして助かりたいわけ。イエスに溢れているみ霊(たま)のいのち、それは按手(あんしゅ)を通して充分に与えられる。そのことをヤイロは信じきっていた。イエス自身はいつもこの力を神様から滝を浴びるようにいただいていた。それがイエスの祈りの事態であつた。イエスはヤイロの平伏しの信仰のすがたを可(よ)しと見て起きあがり、同道した。すると群衆も押しあいへしあつて伴いて往く。

その群の中には一二年血漏(ちろう)を患っている女があつた。いろいろ医者にもかかり、あれこれと薬もつかつてみたが、悪化するばかり、しかも身代(しんだい)を無くして全く窮境(きゆうきやう)におちいつていたのである。折もよし、力あるイエスのことを聞き及んだので、必死の思いで群衆をかきわけて、御衣(みころも)にやつと拝むようにしてさわつた。とその瞬間、血の泉がただちに乾き、病氣の治つたのを身に感じた。イエスは同時に力が自分から流れ出たことを感じたので振り反(かえ)つて、「誰が私の衣にさわつたのだね」と訊ねながら見廻し給うた。その女は畏(おそ)れかしこんで、進み出で、平伏してことの次第をありのまま告げ、

「み衣にだけでもさわれたら救われると存じましたので」
と感涙(みせ)に咽(ひそ)んで語つた。イエスは言つた。

「娘よ、おまえの信仰がおまえを救つたのだ。平安(やすみ)に入れよ。おまえの病患(びやまい)から健やかに

なれよ」(マルコ五・三四、私訳)

「おまえの信仰がおまえを救った」という言い方をイエスはよくなさった(ルカ七・五〇、八・四八、一七・一九、一八・四二等)。しかしこの言が一般には、信仰それ自体を主體的に考えて、信仰が何かあるもので、その信仰の力で救われたかのようにとられがちである。そこでひとつ信仰を強くしなければと気がまえる。信仰はそういった信念的、念力的なものではない。イエスの言い方がちよつと「躓き」になるから注意しなければならない。信仰は手ばなしの何かではない。信仰には信ぜられる相手がある。その相手は神、キリストである。この神、キリストが主体であつて、こちらがわの信念や自分の信仰といった何ものでもない。自分の信仰など当てにならない。何か状勢がかわつたり、運命がかわつたり、自分の浮沈などでぐらつくような信仰、信仰それ自体の強弱などを気にするような信仰、そういうものが信仰ではない。こちら側がどんなに揺れようが、躓こうが、失敗しようが、罪を犯そうが、そんなことに拘わりなく、否実にそんな破れの人間であればこそ、いよいよもつてキリストのみ救は確かであるとそのときの具体的念願もろとも全身でしがみつく、投げ身する。全的突入。これが祈りである。それは「主様！」という全身の叫び、全身の平伏し、それがイエスの言つた「おまえの信仰」である。そういう「おまえの信仰」を受けとつたぞ、というのが、「おまえを救った」のである。

次に「安らかに往け」と一般に訳されている言は、「平安(やすき)に入れよ」と訳すべきである。平安(シャローム)の中に入れよ、なのである。平安の中に入るとは、神、キリストと不離、合一、

一体となれ、ということ。平安の真義はこのように具体的な内容であつて、心が平安であるといった心理的なものではない。「私は平安である」とは、「私はキリストの中にいる」という現実を言いあらわしているのである。「平安に入れよ」とは、それゆえ、「わがふところに入れよ」「我と一つになれよ」「我を避所とせよ」という愛のみ言である。この平安においてすべての不義はゆるされ、すべての病はいやされてゆく。

そうこうしているうちに、会堂司の家から、人々が伝令のようにしてやって来て言うには、

「あなたの娘さんはもう死にました。何でもう先生をわずらわせることがありませんよう」

と。イエスはこの言を横耳で聞いておられたが、会堂司に、

「おそれるな、ただ信ぜよ、娘は救われるぞ」(ルカ八・五〇)

と言ひ放った。

そこでイエスは、ペテロとヤコブとその兄弟のヨハネだけを伴れ、その他の者どもの随行を許さないで、会堂司の家に來た。

可愛い少女の死を悼んで、多くの人たちが、泣きわめいていた。イエスは家の中に入って来て、言つた。

「何でそんなに騒いだり泣いたりしているのです。子は死んだのではない。眠っているだけだ」

すると人々がイエスをあざ笑つた。イエスは胸中奮然として、そいつらをみんな戸外に閉め出し、

少女の父と母とさきの三人の弟子だけを伴れて、少女の臥ふしている室に入り、子の手を執つて、

「タリタ、クミ！」（乙女よ、起きよ！）

と叫んだ。言下に少女の霊は還かえつて、起きあがつた。両親は驚きと歎なげびに言うすべを知らなかった。このことをイエスは他人に語るなとかたく彼らを戒いましめ、また少女に食物を与えて力をつけてやるように命じなされた。

「タリタ、クミ！」。何たる權威と愛の言ことばか。死の突破！ 生の勝利！ イエスがこの重大な言を放つたとき、不信の者らはその場から退けられていた。イエスに信賴する者たちだけ、少女の救を悲願する者たちだけに限られていたことも注目すべきである。うたがいやおそれやあざけりや批判や無関心は、信愛一如いちにの世界をみだすからである。聖霊のはたらきの世界は、不信の人々にみだりに語られるべきでない。神への冒瀆ぼうとくともなる。そこでイエスは他言を禁じた。

「タリタ、クミ！」。我らも倒れくずおれたとき、この言を靈聴して靈生まいしんによみがえつては邁進まいしんすべきである。

このことのあつた後、イエスは故里ナザレへ歸つた。シナゴーグ（会堂）で説教をなさつた。すると人々は、イエスの智慧と靈能ちからに驚嘆して、

「二体これは何処いどこから得たのか。イエスは木匠たくみの子ではないか、母はマリヤ、兄弟たちはヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか。その姉妹も皆私たちと一緒にいるではないか。

それなのに此等これらのすべてのことは何処から得たのか」（マルコ六・二、三）

と語り合つていた。故里の人間、近親の人々はみなイエスに躓^{つまず}いた。

「預言者は、おのが里、おのが親族、おのが家の外で尊^はばれないことはない」

とイエスは彼らに告げた。果然ナザレでは「靈能ある業は現^{あら}われない」。それは糠^{ぬか}に釘だからである。故里はイエスのみ名の貴さを知らない目あき盲者であつた。燈台もと暗しであつた。

ナインの若者——イエスの靈生・その二（ルカ伝第七章二一―二七節）

ナザレの町の南東、タボル山の南南西、エストラエロン平原の東の街道沿いにナインという町がある。そこへあるときイエスが歩いて往つた。弟子たちも群衆もそろそろ伴いていった。その町の門に近づくと、異様な行列が向うからやってくるではないか。埋葬のために町の外へかつぎ出されようとする柩^{ひつぎ}を中心とした町の人々の行列である。柩の傍^{かたわ}らを涙ながらにつき添つて歩いているのは、まぎれもないその死者の母である。死者は独息^{ひとりこ}子で母は寡婦^{やもめ}であつた。

キリストはこの行列に近づき、寡婦を見て、深くあわれみ、

「泣きなごるな」

と言つた。そして柩に近寄り柩に手を按^おいた。そこでかついでいた男たちは足を止めた。イエスは、

驚いたことに、柩の中の死者に向つて、

「若者よ、おまえに言う、起きよ！」

すると言下に若者は起きかえつて、もの言い始めた。そこでイエスはこれを母にわたした。驚喜したのは母である。驚倒したのは柩をかついでいた男たちである。驚嘆したのは埋葬行列の全員である。畏れとおののきが人々の胸にのみならず、大氣につたわった。

「大預言者がわれらの中に興った」

とか、

「神がその民を顧みなさつた」

とかいう声が巷を揺り動かしていた。速報の如く、ナインの町で死者が復活したという報せが最寄りはおろか、ユダヤ全土に遍くひろまつた。

「恵福である、悲しむ者は。その人は慰められる」(マタイ五・四)

イエスの言は実力をもっている。イエスの「慰め」は氣やすめ程度の同情とは次元がちがう。悲哀の現実を歓喜の現実に急転させる(イザヤ六一・三)。キリストは特効の油をもつておられるからである。キリストとはその名の如く「油そそがれたる者」であるからである。天来の油、天来の火、天来の水、何というともよい。それは聖霊である。神の愛は観念の愛ではない、具体的な力をもつた愛である。具体的な救の力をもつた愛とは聖霊のことである。パウロが、

「神の国は言ではない、力である」

と言ったのはこのことである。否、真にイエスの言はすなわち力であった。空言に非ず、実言なるがゆえに言下に実現するのである。

ラザロの復活——イエスの霊生・その三（ヨハネ伝第二章一、四六節）

マルタとマリヤ

エルサレムから東方エリコへと下る途上、三キロほどの地点にベタニヤという村があった。そこにマリヤとマルタという姉妹がいたが、マリヤは純情型の女性、マルタは行動型の女性であった。イエスはこの姉妹の家に迎えられたことがあった。そのときもマルタはキリストをかいがいしく出迎えて迎え入れたのであった。マリヤの方はこれとは対照的に家の中にじっとして「イエスの足下に待る」のみであった。マリヤはただキリストのみ顔、み言に見入り、聞き入るといった全存在そのもので受け入れるという心情の女性なのである。ところがマルタの方はさつそく饗応きやうおうのことに心を用い、お手拭の、お茶の、お菓子のと、女らしく具体的なおもてなしに忙しい。自分がこんなをやっているのにマリヤはじっとキリストの側そばに坐まっているのです、マルタは少々いらいらして来て、「主様しゅさま、マリヤは私を一人で働かしておるのですが、何ともお思ひにならないのですか。

マリヤに命じて私を助けさせて下さい」

と言った。するとキリストは、

「マルタよ、マルタよ、おまえはいろいろなことにあれこれと気を配って心を勞れさせているね。だが無くてはならないものは多くないのだよ、唯一つだけなのだよ。マリヤは選

択をあやまらなかつたのだ。これはマリヤから奪つてはならない」(ルカ一〇・四一、四二)

ちよつと躓き^{つまず}そうなみ言^{こしほ}であつた。マルタは活動的、奉仕的であつた。彼女がだまつて、氣もちよく大いにもてなしをひとりで行つていればそれでよかつた。何もマリヤのことを氣にするに及ばなかつた。マリヤのことを氣にしたのがマルタのこのときのきずであつた。活動するとき、奉仕するときはそれに専念すればよい。すべて専念が大切なのである。マリヤはイエスの言に聞き入り、イエスの人格に見入つていた。これがマリヤの専念であつた。マルタが動に徹することと、マリヤが靜に徹することは同じことなのである。マルタが分裂したところに信仰的あり方からの脱落があつた。

一人の人間は、あるときは靜に、あるときは動に徹すればよい。これが靜動一如^{いちぢう}というものである。そうなる^{なる}と靜中の動、動中の靜という境地もひらけてくる。キリストがいつも求めておられる実存の相は全的ということである。私心を脱して全的に打ち込むことである。全的ということと、無的ということがまた全く一つ、全一なのである。

多くをではなく一つを、広くではなく深く、 Non multa, sed multum. Nicht vieles, sondern viel. Not

many, but much. という諺がある。しかし、一つのことに徹すると、そのことを中心として周辺にひろがつてゆく幅ができるのが自然である。求心的なものと遠心的なものがあるのが本当のすがたである。

愛の本質

マリヤは情愛の深い女性であつたから、自分の全身の感恩感謝かんおんかんしゃの気持を彼女らしいあらわし方をもつてあらわした。それはいよいよイエスが十字架にかかる間近の時期を期して。それはヨハネ福音書第二二章に記されている通りである。

この二人の姉妹にラザロという病弱の兄弟がいた。イエスはこの三人兄弟姉妹の家をしばしば訪ね、親しい間柄であつた。それでラザロの病気が重くなつて来たので姉妹たちが、

「主様、ごらんなさい、あなたの愛して下さつてゐる者が重く病んでいます」と使をイエスのもとにやつた。この「愛する」という語は肉親的なまた友情的な愛をあらわす「フイレオー」という語である。

これをきいてイエスは、

「この病は死病ではない、神の栄光のあらわれるため、神の子がこれに由よつて栄光を受けるためである」

という死に対する勝利を確信した答をなさつた。イエスはマルタもマリヤもラザロもどん底から救

うように愛して（アガパオー）おられた、とそのあとで書いてある。イエスの愛が、「フィレオー」であろうと、「アガパオー」であろうと、人間である限り、愛の種々相があらわれるのは自然である。ただそれがいつも根底には「アガパオー」をもっていたのである。恋愛にしてもそれが美しいものなら、相手のためにおのれを捧げるはずのものである。旧約の雅歌を見よ。また夫婦愛もお互におのれを捧げる質のものである。友情もまた然り、親子の愛も然り、師弟の愛然り。主従、君臣の愛すらも、そうではないか。おのれを棄てて相手を、敵をも救いあげる愛。私は愛が愛である限り、その窮極のすがたはやはり十字架的な担いであると信ずる。ひとの躓き、失敗、罪を批判して、どうのこうのといっている限り、そんな友も、弟子も師もまことの愛（アガペー）を生きていない。ところがそういうパリサイ的なキリスト者がいかに多いことか。

私は復活である、生命である

そうこうしているうちにラザロは事実死んだ。埋葬されて四日も経つことになった。多くの人々がマルタとマリヤを慰めようとてやって来た。イエスも来られた。例の如くマルタはいちはやくイエスを迎えようとして戸外に出て、そこでイエスを迎えた。マリヤの方はこの場合も家の中に閉じこもっていた。マルタはイエスに言った。

「主様、もしここに居て下さっていたら、ラザロは死ななかつたのに。でも今でも、あなたが何でも神様にお願いなされば、神様は与えて下さいますよ」

イエスはこれに對して、

「おまえの弟は甦よみがえるぞ」

「世の終りの日、復活のときに甦よみがえると思っています」

イエスはこれに對して重大な答をなさった。

「私は復活である。生命である。私を信ずる者は死んでも生きる。凡およそ生きて私を信ずる者は死なないよ。おまえはこれを信ずるか」(ヨハネ一・二三、二六)

この断然たるイエスの言に全く打たれて、マルタは告白した。

「主様、そうです。私はあなたが、世に来ることになっていたキリスト、神の子であられると信じます」

これはペテロのあのピリポ・カイザリヤにおける告白と双璧そうへきのものである。

復活である、生命である、とは何か。復活の実力をもった生命である、ということ。すなわち死んでも死なない永遠の生命をもった者であるとのこと。

罪と死、十字架と復活

人生で一番深刻な問題は何といっても生命の問題である。肉体的生命ですら、人命は最も尊重されるべき問題である。殺人は何といっても人間社会の最大の罪である。戦争は人類の最大の悪である。その悪がわかりきっていながら、現代の文明文化はいつわりの平和の底に戦力、武力を蓄積し

ている。全世界を滅亡に、壊滅にもたらず驚異的核兵器が現存している。

してみると実は超深刻な問題は、やはり罪の問題である。罪だけが死をもたらすからである。「罪の価は死なり」と喝破^{かつぱ}したパウロの言は永遠に真理である。そうなると罪の問題を解決にもたらずものは宗教のほかにはない。どのように解決しても、現実には人類の歴史の終末まで、罪は消えない。万人が罪びとであることは、地球に空気があるほど変らぬ現実である。だからこれが解決への道は唯一つしかなかった。それが、キリストの十字架の贖罪^{しよくざい}というのつぴきならぬ、歴史を破る事実であった。十字架があつても現実の人間は、キリスト者もみな罪びとにすぎない。それでも仕方がない。しかし、罪びとのどん底を贖^{あがな}いといっている十字架を信受するとき、即ち根底において、ぶつとばされている罪びとの我を知ったとき、無罪の無者たる我を知ったとき、そこに神の生命、神霊の充満した生命たるキリストを受ける。このキリストの恩寵^{おんちゆう}に全身の感動をもつてアーメンとさげぶ。これが「我を信ずる者は死んでも死なぬ」の内容である。相対的生死が問題でなくなる。罪が、罪びとなる我が、すつとんでいるからである。キリストの「この私のいのちに生きて信じぬく者は死なぬぞ」というみ言が圧倒的な力をもつて私を、あなたを、とらえる、包む、支える、荷う。

キリストはなぜ永遠の生命の人か。罪がないからである。罪に勝ち給うたからである。唯一人の例外者で在り給う。だから神の子なのだ、みたまの充満の人なのだ。キリストが死ぬことほど不合理なことは他にない。神と合一、一体の実存者だから、死につこないのである。それは彼が徹底的

におのれを無者とし、神の無限無量の愛と生命と光を体受して生きたからである。無即無量とはこのことである。キリストの十字架の死はそれゆえ贖罪死しよくざいしのほかの何ものでもない。彼がもちまえるの霊生をもつて、霊体をもつて、活現、復活することほど至当なことはない。

大慈大愛だいじだいあい

何とありがたいことか、無条件に十字架の贖罪を受け、無条件に永遠の生命を受け、無条件に聖霊を受ける。もし条件づきであつたら私に何が出来よう。私は八方ふさがり、八方破れの男である。だからこそこの道、

「われこそは道そのものなり、生命そのものなり、真理そのものなり」(私訳)と定冠詞づきで宣言しておられるキリストに満腔まんかうのアーメンをもつて平伏ひれふし躍りこむのみである。豁然かつぜんとして自由自在、大自然の如きたましいとされてくる。この罪びとの正体はつかめないほど自由である。キリストの自由である。誤解、中傷、迫害、疎外、排斥、反逆、何でもいい。そんなものはこの塵芥ちりめくた、この「罪びとの首かしら」に賜たまわっている次元とはくいちがつている。

私には第一流のキリスト教史の聖徒たち、イスラエルの預言者たち、とりわけキリストの使徒たちが親しく、慕わしい。彼らはみな平伏しのたましいであつたからである。破れて神に破られ、碎けてキリストに碎かれ、自己を突破されて、相對界を突破して靈界に突入し、十字架に荷われて、十字架を荷い、キリストの大慈大愛に包まれて、ひとを大きく包み、抱いた。そういうたましいで

彼らはあつたからである。仏教の世界でも次元的には同じこと、そういう仏教の偉大な高僧たち、
最澄さいちやう、空海くうかい、法然ほうねん、親鸞しんらん、一遍いっぺん、日蓮にちれん、栄西えいさい、道元どうげん、白隠はくいん等が慕わしい。

イエスの涙

さきのような問答をマルタはイエスと交したあとで、そつと場を外はずしてマリヤを呼びに行つた。

「先生がいらつしやつたのよ、あんたを呼んで居られるわよ」

マリヤは言下に急たぎ起つてイエスのみ許に走つていった。

イエスはまだベタニヤの町に入つては居られず、マルタと語り合つた場所に佇たたずんでおられた。マリヤを慰めていたユダヤ人たちも、マリヤが急いで出かけたので、歎くために彼女が墓へ行つたのだと思つてあとからついていった。間もなくマリヤはイエスの居られるところに着いた。イエスの足下ひれふに平伏して、

「主様、もしここにいらつしやつたら、ラザロは死ななかつたでしょうに」

と、マルタと同じ気持を披瀝ひれきした。マリヤは泣いていた。あとから来たユダヤ人たちももらい泣きをしていた。イエスは彼らの涙をみて心を痛め、悲しんで言われた。

「ラザロをどこに葬つたか」

彼らは、

「主様、来て見て下さい」

イエスも涙を流した。死者ラザロを甦よみがえらせる実力をもったイエスである。ちよつと考えると、イエスは泣かなくてもよさそうである。しかし、そうではない。ナインの若者の場合には寡婦に「泣きなざるなよ」といったイエスであるが、あのときも、心の中では共に泣いておられたのであろう。ひとの悲しみを悲しみとし、ひとの苦しみを苦しみとし、ひとのなやみをなやみとして受けとるのが、思い遣りやりというものである。イエスはひと一倍、「思い遣る」ことの深い人であつた（ヘブル四・一五、五・二）。「思いやる」は「シンパテオー」で、ドイツ語の *mitleiden, mitfühlen* 同情する、共感する、にあたる語である。しかもイエスにおいては、シンパテオーに実力の裏づけがある。涙を涙とし、呻うめきを呻きとし、嘆きを嘆きとして共感し、同情しながら、涙を歛おさびに、呻きを讃美に、嘆きを感じに変質させてしまう実力をもっておられる。人間性を深く宿しながら、ひとの心の谷底の闇に自らをおきながら、それを光あふる峯みねのいただきに救いあげるキリストである。

「イエス涙を流し給う」、涙なき人は人ではない。愛なき女は女ではない。黙って荷う心のない男は男ではない。ユダヤ人らがイエスの涙をみて、

「ごらん、どんなに彼を愛（フィレオー）しておられたことか」

なかにはこんなことを言うユダヤ人もいた、

「盲人の目をあけた人が、彼を死なないようにできなかったのか」

と。イエスは無理解、不信、無情のひとたちをしり目にして墓にいたり着いた。洞穴の墓であつたが、石で蓋ふたがしてあつた。そこでイエスは、

「石を除けよ！」

と命じた。マルタは、

「主様、彼はもう臭くさくなっています、四日も経たっていますから」

と絶望的な言を吐いた。ここでもペテロと同様、キリストに躓つまずいてしまった。そこでイエスは凜然りんぜんとして、

「私はおまえに、信ずるなら、神の栄光を見るといったではないか」
そこで人々は重い石をとり除いた。

ラザロよ！ 起き出でよ

イエスは目を挙げて、天をのぞみこう叫んだ。

「父よ、私に聴いて下さったことを感謝いたします。いつでも聴いて下さることを存じております。このように申すのは、傍らかたわに立っている群衆のためであって、あなたが私を世に遣つかわし給うたことを人々に信じさせるためです」

このように闡明せんめいして、しばらくあつて、声高らかに呼ばわって、

「ラザロよ、起き出でよ！」（ヨハネ一一・四三）

と叫んだ。言下に死者ラザロが、布で足と手とが巻かれたままで出て来た。顔も手拭いで包まれていた。イエスは、



ラザロの復活（レンブラント、1631年）

「これを解いて、往かせよ」

驚天動地の出来ごとである、このような死者が甦り得るとは。多くのユダヤ人は信じたが、ある者どもは、パリサイ人のところに往って、イエスのなさったことをかげ口した。

「ラザロよ、起き出でよ！」

死の現実から生の現実に呼びもどし、運命の大転換をさせて下さるキリストの實力は、今もなお顕然として存在する。絶望的な状況にあつて、「ラザロよ、出でよ！」と同質の御声を聞いて、蹶然起ちあがる。絶望の突破！ 死の突破！ キリストはいつ、どこでも、全身的に叫び求めれば必ず、

「汝その現実から起きいでよ！」

と励ましたもう。

「私がアルファだ、私がオメガだ、心配は要らぬ。起き出でよ！ 私の力を受けよ。

平安に入れ。みたまの力と智慧にあふれるぞ」

と言つて抱き入れて下さる。

第五輯 変貌（ヘルモン）

（ルカ伝第九章二八―三六節、マタイ伝第十七章一―八節、マルコ伝第九章二―八節）

サタンよ退け！

イエスが弟子たちを伴れてピリポ・カイザリヤの地方を歩いていたとき、ペテロがイエスの間に
対して、

「あなたはキリスト（メシヤ）、活ける神の子であられる」

と告白したことは、彼がみたまのひらめきを受けたからであつた（マタイ一六・一六、一七）。

しかしそのあとで、イエスが十字架の受難の告示をなさると、ペテロは「主よ、それはいけません」と言つた。このときペテロは全く十字架に躓いた。みたまのひらめきは消えていた。イエスはそこで厳然と告げた。

「サタンよ、わが後に退け！ おまえは私の躓物だ。おまえは神のことを思わず、反つて
人のことを思っている」（マタイ一六・二三）

と。ペテロはこのとき「サタン」とまで言われて叱責しっせきされた。全く人間は天国と地獄、天使と悪魔の両面をもっている。

ペテロのこの天国性と地獄性の分裂、光と闇、霊と肉、義と罪の二面性は、万人に共通の危機性である。そこでイエスは弟子たちにキツパリと語った。

「もし私につき従うとするならば、自分を棄て、自分の十字架を負おつてついて来なさい。

自分の生命を救おうと思う者は、生命を失い、私のため自分の生命を失う者は却かえつて生命を得る。ひとは全世界を獲得しても、自分の生命を失つたら、何になるか。またその生命を何で贖あがない得られよう」(マタイ一六・二四―二六、私訳)

要するに棄身すてみでかかる人間は、生命賭けいのちがでぶつかると人は、本当の生命を得る。

エクソードス(出現世)

すなわちイエスは十字架道を語ってから一週間を経たころ、親しい弟子たち、すなわちペテロ、ヤコブおよびヤコブの兄弟ヨハネの三名だけを伴ともれて人寰じんかんを遠ざかり、高い山に登っていった。高い山というのは多分ヘルモン山であろうといわれている。もちろん二七五九メートルもある四時しじ白雪ゆきをいただいている高嶺まで登るわけではないので、ある程度の高み、それも峠のような地点に登ったのであろう。

それは何のためか。特別な祈りのためであった。イエスは今や正にガリラヤ地方の伝道を終え、

不日、エルサレムに向つて南下せんとする時点、伝道生涯の峠、カイザリヤ・ピリポで語つた通り、自ら十字架への道にのぼらんとした終末的な峠にさしかかつておられたからである。

この高山のある峠の地点、森に囲まれたところと推察されるが、そこでイエスは深い祈りに入つた。すると見よ、顔容が日の如く輝いてきた。衣裳も白光を放つに至つた。さらに驚いたことには、イエスの傍らに二人の人が靈光を浴びて現われるではないか。それはモーセとエリヤ！ 旧約の世界の最も靈的な預言者たちである。そしてイエスと語りはじめた。内容はエルサレムにおけるイエスの現世からの脱出、すなわち出現世（エクソドス）のことである。筆者ルカはここにイエスの十字架の受難、復活、昇天の大ドラマを「エクソドス」と表現したものと思う。すなわちこの現世を立ち出でるといふ意味であると思うから、「出現世」と訳した。「逝去」とか、「最後」とかいふ現行訳がなされているが、それでは「おしまい」であつて、イエスの旺（さか）なる靈生をどうしてくれるかと申したい。

十字架の贖罪死を突破して彼は復活し、昇天することが出現世であり文字通りの大往生である。モーセとエリヤはその事態に衷心よりの崇敬の念をもつて語つていたに相違ない。イエスにとつて、モーセとエリヤの出現は正にお出迎え、歓迎の予表であつたのである。天界の預言者たちの二代表が、イエスに深い信愛の情をもつて敬意を表しに來たのである。十字架の受難の死をイエスから聞き及んでは、モーセもエリヤも絶言の思いであつたであらうが、復活、昇天のイエスの旺盛なる靈生をイエスから承り、讃嘆の意を表したのであらう。

イエスが変貌してモーセおよびエリヤと語っていたときの天国的な情景は正に第四次元的なものであった。その後のゲッセマネの祈りのときのように、この場合も弟子たちは睡気に襲われたが、やっと目覚めたら、栄光にみなぎる光景に瞠目したが、彼らの会話の内容はわからなかった。ペテロが例の如く差出て、とんちんかんな提言をした。すなわち、イエス、モーセ、エリヤのために三つのいおりを造ろうというのである。カイロス（時期）をわきまえないこんな提言はイエスにとつて笑止の沙汰であつた。

見よ、靈雲燦然と捲き起こり、彼らを包んだ。すると光雲の中から声がひびいてきた。

「これはわが愛しむ子、わが悦ぶ者である。」

おまえたちこれに聴け！」

ヨルダンにおけるイエスのバプテスマに際してひびいて来た天来のみ声と同じ内容のものである。弟子たちはみ声の下に倒れ伏した。しばらくして目をあげたが、もうイエスの他何者も見えなかった。イエスの変貌は言うまでもなく、復活のイエスの予表である。が、信頼されていた弟子たちすらもそれを予見することができなかった。だから、イエスが復活したとき彼らはみな、あやしみ、うろたえ、うたがいのしもした。

おもうに、イエスの変貌は、実はキリストの天的な本然の原姿が現じたというものである。地上のイエスは実は天的キリストのかくれた姿であつた、というものである。第二イザヤが伝えた「隠れて在ます神」（Deus absconditus）（イザヤ四五・一五）は、キリストの受肉をもって、地上に自顕した

ともいえるわけであった。イエスはその意味で啓示の神（Deus revelatus）であったが、あらわれた受肉のキリストは、自らを顕^あわしつゝ、隠れていた。それは人間どもが、弟子たちすらも、イエスにおいて神が啓示されていることに蹟^{つまず}いたことがこれを裏書きする。ペテロが、さきにも見たように、「あなたは活ける神の子、キリストであられる」と告白したとき、隠れたる神をイエスにおいて見た。これは瞬間的にみたまの光を受けての告白であった。しかし、イエスは、その意味で隠れたる神の表現体であると同時に、弱き人間の姿をもっていたから、隠されていた蹟^{あざ}きの存在であった。人間どもの蹟^{あざ}きの極^はてが十字架という帰結をもたらした。そして今でもイエスの十字架そのものが蹟^{あざ}きで、歴史の終末にまで至る。

変貌のイエスこそ、本然のキリスト、復活のイエス、靈生旺^{さか}んなるイエス、われらの希望の実体であった。

第六転 十字架（ゴルゴタ）

民の長老たち、祭司長たち、律法学者ども、パリサイ派、サドカイ派、ローマの官憲・兵卒などに敵視され、弟子どもに知らん顔をされ、弟子の長ペテロにすら否いなまれ、弟子の鬼才ユダに裏切られ、雷同的な民衆に棄てられ、政治犯、瀆神者ときめつけられ、極悪人と同列に置かれ、悪口あつこうざうごん雑言を浴びせられ、唾つばきせられ、鞭打むちうたれ、荆の冠をかぶせられ、血の雫しずくと汗にまみれ、傷だらけの軀みくらにされ、侮辱の極みの中を七十キロもある十字架を負わされて、エルサレムの城門外北西のゴルゴタ、髑髏されごうべの丘へと、ヴィア・ドロサ「苦難の道」をよろめき辿たどりゆくイエス！

人間の、人類の、世界の、どうにもならぬ不信の、忘恩の、反逆の悪魔的、地獄的、鬭争的、擾乱じょうらんの実相の逆徴が、イエスの十字架を負うこの姿に逆写さかうつしされている。

十字架を負うイエスの他になお二人の悪人が死罪の故に各々十字架を負い、曳ひかれて行つた。クレネ人シモンがイエスの十字架の一端を荷つてくれた。ゴルゴタにやつと到りつく。蒼白、凄惨せいさん、惨憺さんたんたる姿のイエス。だが、彼の胸の中を誰れが知る。やがて彼はぶつ倒され、「ユダヤ人の王、

ナザレのイエス」なる罪標すてふたのつけられた十字架に釘づけにされた。若き血潮が噴流する。イエスは今正に人生の真昼みそじとき、三十路を過ぎたばかりである。

このイエスをはりつけにした十字架がドカンという地響きをたてて、掘った深穴の中に打ち立てられた。イエスの十字架の両側に、二人の悪人が同じく十字架された。

イエスは十字架の痛苦の極みの中で、彼を磔刑なげに処した人々を恨むどころか、

「父よ、彼らを赦ゆるしてやってください。わきまえもない彼らの仕打ちを！」（私訳）

彼らのこの仕打ちは言語道断のわざである。彼らとは我々人間である。人間はいくら論さされても、教えられても、根底から変化するものではない。現象面では百面相のような変化があつても、本質面ではなかなか変わるものではない。神の人イエスを十字架につけたということは、人間がそれほどまでに失われた存在、どうしようもないものだということの自証に他ならない。それ故人間の救われる道は唯一つしかない。すなわち十字架のイエスが、自ら、我々を「ゆるす」という本願を告げ給う一途だけである。それが今の十字架上のイエスの言であつた。

万人は救を要する。ということとは、万人はゆるされることを要する、ということを根底としていえるということである。イエスの十字架上での「赦し」は、人間の決定的な罪、すなわち人間がこの罪、かの罪を犯したなどという罪過のことではなく、神に対する不信、反逆のあらわれとして、神の子を極刑、死罪に処したという人類史上有るまじき極みの不信、冒瀆ばうどくの罪に関わる根本的な罪の赦しなのである。この決定的な罪の赦しは、神と神の子キリストの他にはできない。それ故、イエ

スが十字架上で父に祈ったこの罪の「赦し」こそ、本願の効力をもっている。自らはつぐない得ぬ人間の罪をつぐなったイエスのこの「赦し」こそ贖罪の大愛である。敵を愛する愛の根底は、イエスのこの愛にある。おのれを敵とした敵に対して救をもたらししたこの事実、この現実。これが愛の極みである。我々の過去、現在、未来の罪過一切をゆるしておられる十字架のキリストの碎けそのものによって、我々の心は初めて碎かれる。人間の心一切の問題は、この十字架の贖罪の無条件的「ゆるし」を受けることによって、解決への道が拓かれてゆく。これを本当に身に受けた人は、人を「さばく」ことができなくなる。パリサイ根性がぬけてゆく。

人類の歴史を両断するこの「ゆるし」に圧倒され、キリストの大慈大悲に降参するとき、罪からの解放がその人に事実となる、現実となる、たましいの自由の境地が開示されてくる。

多くの人は法律的犯罪者ではない。しかし、その可能性は万人がもっており、宗教的には万人は罪びとである。「罪の価は死なり」で、宗教的には、万人はこの死刑囚とかわりがない。そのことはキリストの「山上の垂訓」の言にあきらかである。さればこそ、この罪を贖うために、キリストは、聖意を体して自らを十字架にかけられるままになさったわけである。だから、イエスは「われは自ら棄てるのだ」と言ったのである。罪なきイエスは、靈化して、いきなり天界に昇ることができたのであるが、ゲッセマネの祈りにおいて、贖罪の大義・大愛・神義・神愛を無条件に体受し給うて、

「わが意志に非ず、汝の意志を（この身を貫いて）成就し給え」

と挺身の祈りをなして、十字架への道を決然として執り給うたのである。

十字架上の二人の悪人は、贖罪愛の十字架のイエスを、右にまた左に目のあたり見ながら、一方の男はこれを拒み、他方の男はこの前に平伏している。

一方の悪人はイエスを罵つて、ふてくされた言葉を吐いた。他方の悪人は今度はイエスに向つて、
「み国にお入りになるとき、〔せめても〕私を憶えて下さい」

と（現行訳は「御国の權威をもつておいでになるときに」とある）、心情を吐露して願った。人間の交りの世界でも、いつまでも友人に憶えられているということは、大きな慰めである。況してや、神の子キリストに憶えていただくことは、この悪人にとつて、存在的な救いにあずかることである。神を畏れる砕けの心から滲み出た悪人の平伏しの悲願は、イエスの本願の心の緒線の琴線に深く触れたのである。この悲願に対して、イエスの本願はなんとひびき出たか。

「私は本当にお前に言う。今日、私と一緒に、お前はパラダイスだ！」（私訳）

これほどなくさめ深い、情け深い、どん底の思い遣りの、抱きかかえの、白熱の愛の言葉があるか。私には正直なところ、これがイエスの言の中の最愛の言である。私の全存在はこの言に荷われている。抱かれている。私は愛に飢え渴いている男だ。力あるイエスの愛。決して棄てない愛。うらぎらない愛。生命を与え、歓喜をみなぎらせ、光で包み、愛泉を湧き出させ、大慈悲心をわがうちに起こさせ、大乗的に生かされるイエスの愛！ 私はこの愛で生きている。呼吸している。今日も、明日も、次の日も。地上にある限り、毎日毎日がイエスと共にパラダイスなのである。しか

し私は人間だ、私は弱い。時折ぶつ倒れたくなる。その時イエスの足もとに。彼は抱き、ふところに入れてくださる。その時キリストと私は一つだ。パラダイスだ！

「今日、私と一緒に、おまえはパラダイスだ！」

これが私の根源現実である。きよいのきよくないの、義ただしいの義しくないの、そんな品さだめの世界は私の存知せぬものだ。イエスは私の万斛ばんたくの涙を御存知だ。それだけでいいのだ。

私が死んだら、十字架の木の柱を立てて、このキリストの一言を墨書してもらいたい。その十字架は雨露さくらに曝さらされながら、枯木の如く龍吟りゅうぎんして、

旅人よ、友よ、

キリストの大愛に生きよ。

パラダイスで待つているよ。

とささやくであろう。

噫ああ、この悪人に告げ給いし十字架のイエスの一言。何たる福音か。マイナス九九でもあったであろう彼は、生涯の最後の瞬間に砕けの一に立ち帰った。イエスはこの小さな芥種からしだねひとつぶ一粒の信をハタと受けとめ、そこに彼の全人的なひびきを見て、無条件、全的に福音の言を投げ、彼を全的に包み、抱いて、天に昇せてしまった。

人間の善悪が何だ。「我らの義はことごとく汚れたる衣の如し」とイザヤも言っているではないか。潔・不潔、義・不義ときめつけ、品定めするパリサイ根性をキリストは斥しりぞけた。イエスは全的

に自分をぶちまけて、あるがままで向ってくる在り方、イエスの前に降参し、イエスのふところに投身し、全托する全人的な在り方を無条件に受け入れ給う。

まことに、イエスと共に、いの一に、天国に入った者は、一方の十字架の悪人であった。福音を端的に語る事実として、これ以上の劇的なものがあるか。キリストなる哉、イエスなる哉、福音なる哉。

この十字架上の悪人往生の事態に適合する言を東方の親鸞が吐露しているではないか。

「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念仏まうさんとおもひたつころのをこるとき、すなはち摂取不捨の利益にあづけしめたまふなり。

弥陀の本願には、老少善悪のひとをえらばれず。ただ信心を要とすとしるべし。そのゆへは、罪惡深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまざるべき善なきゆへに。惡をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの惡なきゆへにと、云々。」（歎異抄）

昔、「鈴ヶ森のお春殺し」という殺人犯、石井藤吉という人があった。彼はルカ二三・三四にぶつかって、こう懺悔している。

『イエスいひけるは、父よ、彼らをゆるし給へ。そのなすところを知らざればなり。』私の心には、この一節の、誠に僅かな言葉が、五寸釘を打たれるよりもなお強くしみ込みました。そもそもこの一言にて、私はイエス・キリストの、御愛と申しましょうか、御慈

悲と申しましょうか、それを誠に何ともいうことのできない程有難く信ずることが出来ま

した。またこの御一言にて私は聖書の中の全部を信ずることができました。」

ゴルゴタの十字架を見おろしていた天は暗澹あんたんとしてきた。昼の十二時というのに、暗雲全天を蔽い、天地晦冥かいめいである。かくて午後の三時に及んだ。イエスの血は滴りつづけ、生命の限界に達した。そのときイエスは叫んだ。

「エリ、エリ、ラマ、サバクタニ」(「神よ、神よ、何で私をお棄てになった」(私訳))

地のすべての者に棄てられ、ついに神にすら棄てられた天涯孤独の叫びは独語ではない。絶対に信頼し抜いた神への叫びである。それゆえに、これは信頼の極限の叫びである。そしてこれは、聖意を体现し、神を義とし奉って貫いた彼の在り方、神とキリストとの義の關係、実に天地を貫く神の義が立つか倒れるかの叫びであった。神の義——神意体现——の事態が無視されてなるものの抗議。イエスのこの叫びあつてこそその「ゆるし」なのである。神の義と神の愛は、正に十字架の縦棒(義)と横棒(愛)のクロスしている組合わせが象徴している。キリストの義は、人を審く義ではない。与える義として愛に転ずる。義が碎かれて愛となつてゐる。単なる痛みではなく、碎けて愛に溶ける。矛盾を渾然こんぜんたる義愛一如いちによとなしてゐる。それを贖罪愛しよくざいあいという。

この神の義体现の叫びのあとで、イエスは絶叫した。誰もその絶叫の意味を知らない。それは高次の異言であつた。靈言そのものであつた。さればこの絶叫がエルサレムの天地に響くや、神殿の聖所と至聖所の間の幕が真二つに裂けてしまった。これは旧約宗教の突破とその成就を宣言する徴

であつた。自ら大祭司となり、自ら屠^はられた羔^{こひつじ}となつたイエスは、旧約の、イザヤ書第五三章の預言を絶頂とする贖罪の宗教を全うしたのである。

その後で、

「父よ、私の霊をみ手におゆだねします」

と投げ身の祈りをなさつた。大往生^{だいおうじやう}の平安の響きであつた。この情景を終始監視していたローマの百卒長もついに感嘆のあまり告白した。

「本当にこの人は神の子であつた」

これらの凄惨^{せいさん}な情景を、畏れと悲しみの中で、涙ながらに、遠くまた近くに看^みまもっていたのは、ガリラヤの方面からはるばる従つてきた女達であつた。母マリヤとマグダラのマリヤは特に十字架の近くに侍^{はべ}っていた。母マリヤの胸は、シメオンの預言の如く、剣で貫かれるおもいであつたろう。深い魂の傷をいやされたマグダラのマリヤの心は十字架の主にとりすがっていたのであろう。その心境をロダンが大胆に彫刻で表現している。

第七転 復活

第三の旅人（ルカ伝第二四章）

靈震

一週の初めの日、十字架の金曜から数えて三日日の^{あした}晨、女たちがイエスの^{しなは}屍に香料を塗ろうとて墓を訪ねに出かける。墓には岩盤が据えられ、ローマの兵隊が屍の番をしていたはずである。ところが岩盤は転げられ、ローマ兵の影も見えない。そしてイエスの屍も見あたら^{ろう}ない。女たちは狼狽^{ばい}してあたりを見廻した。

すると見よ、二人の人がすぐそばに立っているではないか。しかもその衣は白光に輝いている。女たちは恐^{こわ}くなって面^{おもて}を地に伏せた。その二人の者がそこでこう言った。

「何で死んだ者どもの中に生きた人を尋ねるのです。彼はもう此^{こゝ}処には居ない。復活なさ

ったのです。以前ガリラヤに居られたとき、今回のことについてどう語りなされたかを想い出してごらん。すなわち、『人の子は必ず罪ある人の手に付され、十字架につけられ、

そして三日目にはきつと甦る』^{よみがえ}と言いなされた」(私訳)

「三日目に甦る！」この言葉はイエスがすでに三回語っておられたもので、今天使にこう言われて、ハッと気がついたのであった。

主が復活なさった！ 驚天動地の出来ごと！ 女たちは急ぎ帰って十一弟子と他の弟子たちに告げた。これを聞いて真つ先きに馳せていったのは例の如くペテロであった。ペテロは墓場に布だけとりのこされてあるのを見て怪しんで帰って来た。弟子どもはみな女たちの言を妄語として受けとらなかった。共観福音書をみると、この女たちのなかで筆頭に記されてあるのは、七つの悪鬼を逐い出されて救われたマグダラのマリヤである。

墓穴の岩盤はどうして除けられたのだろう。「大いなる地震」とマタイ福音書は記している。地震は地震でも単なる地震とは思われない。復活のキリストが大喝、霊言を放ったので、霊震が起きて、ローマ兵も逃げ、岩盤も転落したにちがいない。十字架上のイエスが大喝なさったとき、聖所の幕が上から下まで真つ二つに裂け、地震が起き、盤が裂けたのと同然である。

永遠の生命を与えることがキリストの恵みである。そのキリスト自身が永遠の生命そのものであることを実証したのが、この復活の事実である。彼の永遠の生命はもちろんおどろくべき次元の霊生であるから、我々の想像を絶する。人間の考え出すどんな深遠な思想も、どんな美しい芸術も、

どんな進んだ医術・医薬も、人間に永遠の生命を与えることはできない。しかも人間の深層意識から欲求しているものは死んでも死なない生命である。これなくして救いということは不完全である、結局空しい。そのような人間の根源欲求をみたしてくれる唯一の人、それはこの復活して不滅の靈生を自証したイエスのほかにあり得ない。

パウロもコリント前書第一五章で、「もしキリストの復活がなかったら、我らの信仰は空しい」といつている。はじめは疑っていた使徒たちも復活のキリストの顕現に遭つて、初めて目がさめて、証者として立ちあがった。キリストが復活しなかったら、十字架もついに空しい。キリストのすべての言も行為も空手形になつてしまふ。

「甦よみがえった」「復活した」という表現は、在世中のイエスと同じ身体で生きかえった、ということではない。在世中のイエスより純化された靈体をとつて、イエスが再現したことを意味する。肉体のイエスよりはるかに自由であり、力強い存在である。「甦よみがえった」は神がキリストを甦よみがえらせたのである、彼自身がみたまの充溢じゅういつで甦よみがえったのである。ここでは本願と悲願がピタリ一つとなつて天的生命に正に転身、変貌したのである。

エマオ途上

その日のひるさがり、エルサレムの西北方エマオに向つて路を急ぐ二人の旅人があつた。彼らは道すがら、キリストの磔刑はりつけのことについて、あまりにも不合理な、非道な出来ごとであるので、悲

しみやる瀬なく語ったり論じたりしていた。

すると見知らぬ第三の旅人が近づいてきた。二人は、はじめ変な男が来たなあとと思った。果然この男は二人に、

「あなた方が歩きながら、お互に語り合っていることがらは一体何ですか」

と設問した。二人はこの問いを意外に想った。というのも彼らはイエスの無惨な死を痛み悲しんでいたからであった。その一人であるクレオパという名の男がこれに答えて言った。

「あなたはエルサレムに宿っていて、この頃あそこに起こった事件を知らないんかね」
するとこの第三の男は、

「どんなことですかね」

と、とぼけたように問い反した。そこでクレオパはさらに言をつづけた。

「ナザレ人、イエスのことですよ。あの人は神とすべての人の前で、わざにも、言葉にも、霊能ある預言者でしたが、祭司長たちや役人たちが、死罪に定めようとしてあの人をローマの官憲にわたし、とうとう十字架につけてしまったんですよ。私たちはイスラエルをローマの権勢から贖い出してくれる者は、あの人だと望んでいたんです。そればかりか、磔刑があつてから今日はもう三日目なのに、私たちのなかのある女たちが私たちを驚かせたのです。というのは、女たちが早朝に墓に行ってみたら、屍が見えないので帰り、しかも天使たちが現われて、『イエスは生きておられる』と告げたと言うのです。私たちの仲

間も数人同じく墓に往つてみたところ、まさしく女たちの言つた通り、イエスが見えなかつたのでした」

旅人のこの陳述を聞いていた第三の男は、急に調子を変え力をこめて言つた。

「ああ、愚かで預言者たちが語つた^{すべ}凡てのことを信ずるに鈍感な人たちよ！ キリストは必ずこれらの苦難を受け、十字架につけられ、必ず復活して栄光の天界に入ることになつてゐるのではないですか」

二人の旅人は、こんどは別な意外の感に打たれ、急にその男の言に耳を傾けなくなつた。これを直覺した第三の男は直ちに言を継いで、エマオへの路を辿りながら、イスラエル民族の出エジプトを敢行したモーセを始め、エリヤ、アモス、ホセア、エレミヤ、イザヤ等々多くの預言者のメシヤ預言に関わることを中心に靈的な情熱をこめて説き示すのであつた。この人の言のひびきは完全に二人の旅人の心をとらえてしまつた。第三の男の旧約聖書の語らひは尽くるところを知らないありさまである。とうとうエマオ村に近づいたのに、彼はなお語つてやまず村をも通り越して進みゆく氣配であつたので、強いてひきとめて言つた。

「私たちと一緒に留つて下さい。もう夕方になつて、日も暮れかかっています」

そこで第三の男は宿舎に入つて、夕食の席についた。そこで彼はパンを取つて祝し、感謝の祈りをもつてパンを擘^さいて二人に与えた。この動作と祈りの声で、目が覚め、この第三の男こそは、問題の人イエスであることを直覺した。と次の瞬間にイエスは姿を消してしまつた。どこへ行つてし



エマオ途上の旅人とイエス（レンブラント、1634年）

まったのか。目が覚めた瞬間に実は彼らの心の中にイエスの姿が焼印の如く跳びこんだ。と同時に霊体のイエスは電光石火の勢で、またほかの弟子どもの心によりがえりを与えんとひきかえした。食卓に居残った二人の旅人は異口同音に、

「途上で私たちと語り、私たちに旧約聖書を説き明かしておられるとき、私たちの心がうちで燃えたではないか」

と感慨深く語り合った。然り、二人の旅人の胸に霊燈が点ぜられた。彼らの心こそ死にかかっていたのを、復活せしめられた。

二人は夕食もそこそこ、直ちにエルサレムへ逆行した。十一弟子らが心さわがせてキリストの復活を語りあっているところへもどり、ありしことを語った。するとそこにイエスは再び現われて

「平安汝らに在れ」(シャローム・ラーケム)

といった。単なる挨拶ではない。幽霊かとおそれまどう彼らに、自分は幽霊ではない、自分には手も脚もちゃんとある、肉も骨もある、

「撫でて見よ」

とまで言うではないか。彼らはあまりのことに歓喜したもののまだ信じかねていたら、イエスは

「此処に何か食物があるか」

とたずねた。炙った魚一片を供じたら、イエスはみんなのあやしむ前で食べた。

キリストの霊体は驚くべき次元のものだ。おそらく大方の神学者、牧師がこの記事を宗教物語と

して、まともにはうけとらない。ある聖書学者のグループがこの個所を笑って、真剣に受けとめようとしなかったのだ、この馬鹿正直の私はその後そのグループからサヨナラをしたことがある。なぜ私はこう馬鹿なんだろう。私は復活のキリストの霊体が実に想像を絶するおどろくべき次元のものであることを寸分疑わない。もしそうでないなら、死んでも死なないのち、霊生はいつわりとなる。復活のキリストの霊体の骨と肉こそ、わが骨の骨、わが肉の肉と私は告白する。これが私の本当のいのちだ！

そして復活のキリストは弟子たちに最後にこう確言した。

「視よ、私は父が約束なさったもの（聖霊）をおまえたちに贈る。おまえたちは上から霊能を著せられるまで都に留って（祈って）居れよ」（ルカ二四・四九）

ヨハネ福音書にも書かれてあるように、イエスはいよいよ弟子たちと訣別のときが近づいたとき、

「私は父にお願いをする。他に助主を与えて、永遠におまえたちと偕に居て下さるようにする。それは真理の御霊である」

と言った。

聖霊が降臨しなかったら、キリスト教会の歴史は始まらなかった。聖霊が降臨しなかったならば、ペテロもヨハネもパウロもヤコブも使徒にはなれなかった。新約聖書の文字も埋もれてしまったであらう。

世の中には贈物は数かぎりなくある。この世のいかなる高価な贈物も、無代価の、ただの——実

は私たちが罪びとでどうにもならぬので、キリストが十字架という代償を自ら支払って、ただで賜る——贈物、聖霊に比べ得るものはひとつもない。私は二〇歳の青年期に、ともかくも信仰の世界に踏み込んだ。それから約三〇年、内村鑑三先生の流れ、無教会に棹さかさしていた。ところがどうも信仰にどこかものたりなさを感じていた。信仰のすじは確かに良いと思っていた。内村、藤井、塚本と無教会の三先生に相前後して師事して来た。どの一回といえども今日はつまらなかつたなどと思う集会はなかつた。優れた聖書講義であつた。祈りも決して単なるあたまたの祈りではなかつた。心の祈りが充分あつた。しかし霊の祈りというものを知らなかつた。そこに問題性があつた。パウロがコリント前書第一四章一五節で、

「我は霊をもて祈り、また心をもて祈らん。我は霊をもて謳うたい、また心をもて謳うたわん」

と言っている事態は、聖霊を受けなければわからない。聖霊のバプテスマにあずかつて以来、俄然がぜん、聖書の味がちがつて来た。新約聖書は聖霊のはたらきのもとに書かれている文字であることが瞭然りょうぜんとして来た。キリストの十字架のあがないを通して与えられるみ霊たまである。旧約聖書の現実には神霊がはたらいっているのではあるが、受ける人間の側の態勢がキリスト以前であるから、次元的動揺や質の相異が感ぜられる。

イエスの如き霊生の実存あざやかなる完璧の人が、十字架の贖罪しよふぐいの大業を果したあとで、顯然たる霊性の復活体、霊体そなを具えた存在によりみがえらないとしたら、これこそ不合理である。キリストの復活は当然至極な事態なのである。四福音書の復活の記事の比較研究から、果してキリストは

復活したのだろうかとか、それはどういう現象であるかなどと詮索したい人にはさせておけばいい。聖書はまだ伝えそこねている、伝え足りないでいると申したい。旺さかんなるかなキリストの靈生！聖書の記事は伝えがたくて呻うめいている。

「マリヤ！」「ラボニ！」（ヨハネ伝第二〇章一六節）

マグダラのマリヤ

ガリラヤ湖の西の方、テベリヤの街道をはなれ、北西に向つて数キロ歩くとマグダラという寒村があつた。その出身のマリヤはその地名に因ちなんでマグダレナとも呼ばれていたが、七つの悪鬼になやまされていたのを、イエスに癒いされ、心身の救にあずかった（ルカ八・二三）。情熱的なこのマリヤは、それ以来、献身的な純情をもつて他の女たちと共にイエスの伝道に随行し、奉仕していた（ルカ八・二三）。

このマリヤが同じルカ伝第七章の「罪ある一人の女」であるか、マルコ伝第一四章の「ある女」であるか、それともいずれでもないかはわからない。しかし生命の恩人であるイエスに、高価な純粋なナルドの香油の入っている石膏の壺をぶちわつて、そのすべてをイエスの首に注いだ「ある女」

において、私はこのマグダラのマリヤの純情を見たいと思う。

救われがたかったこのマリヤが、キリストに完全に救われたので、感謝の真心をこめて、とつておきのナルドの香油を全的にイエスに注いだ。しかも「壺をわって」とは、自分を全的に献げての心境の現われである。あるがままの自分を全的に投げ出す、そういうあり方がまことの愛であり、まことの信である。イエスが悦んだのは、みなそういう在り方であつた。それがどういふ人であつてもいい。イエスは人間を常識的な定評によつて品さだめをなさらぬ。取税人であろうと、パリサイであろうと、盗賊であろうと、遊女であろうと、放蕩息子ほうとうむすこであろうと、癲病人らいびやうにんであろうと、何であろうと、その人の健全、善悪の如何を問わない。ただその人があるがまま全的に自分を投げ出してイエスに信じ入るとき、無条件降伏をするとき、これを直ちに救うのである。

「ある女」も、「罪ある一人の女」も、マグダラのマリヤも、そのような女であつた。だから救われた。自分の現状がどうであらうと、それ自体を全的にキリストに投げかけること、これがキリストを信ずるということである。文字通り「無条件」の世界である。マルコ伝第一四章の「ある女」はそのような在り方であつたので、イエスは言った、

「この女は、なし得るかぎりをなして、私の体に香油をそそぎ、あらかじめ葬りの備えをしたのだ。本当におまえたちに言うが、全世界どこでも、福音の宣べ伝えつたえられるところには、この女のしたことも記念として語られるであらう」(マルコ一四・八、九)

と。

私が無的実存というのは、こういう在り方のことである。全的自己献供の態勢の人を無者という。この女はそういう無的自己投入をした。香油と共に自分そのものをこの女はキリストにぶちまいた。十字架にかかるイエスに対する葬りの愛の香油よりもイエスをよろこばせたのは、この女の純情そのものであった。

さて、自分という壺をぶちわって神の前に投げ出した最大の自己投入者は、イエスであった。彼は投入また投入の実存者であった。「あなたの聖意をこの自分を通して実現して下さい」が真の「碎け」の心である。そのような無者でキリストはあった。

さてそれではヨハネ福音書第二〇章のドラマにあたることにする。キリストが十字架の刑死を遂げた翌々日の未明、マグダラのマリヤは真つ先きに墓に向った。ところがイエスの墓を封じていた岩盤はとりのぞかれ、イエスの死体が見えないので、驚いて走り帰り、ペテロとヨハネにその旨を告げる。この二人は急いで墓場に馳せつけた。空しい墓を見て、悄然としてどつて来た。

けれどもマリヤは、墓を去りかねて、墓の外側にたたずんで泣いていた。一体あの大岩盤は誰が押し転がせたのだらう。実はその早朝妙な地震があった（マタイ二八・二）。それは単なる地震ではない。霊震と申したい聖霊のはたらきによるものであった。

「主の使が天から降り来って、かの石を転ばし退けた」（マタイ二八・二）

とはこのことである。後日パウロがピリピ伝道の際、獄につながれたが、パウロとシラスが聖名のゆえの迫害を歎び、神を讃美していたとき忽然として起こった地震がやはりそのような霊震であつ

た（行伝一六・二六）。過日、わが松代に起こった連続的地震は何を意味するものであったか。靈震に應ずる地震であつたと思われる。靈界をあなどつてはならない。

聖書には次元の異なる激しい事象がたくさん記されてある。そのような次元の現実を無条件に信受して読まないといふ聖書は読めるものではない。しかし驚嘆し畏敬の念をもつてそのような靈的現実を体受してゆくと、何か知らんこちらが根源的なものに触れつつあることを感ずるようになる。單なる知的判断や理解などで聖書の現実の扉は開かれるものではない。いわゆる聖書研究などで何のかのと議論しても始まらない。研究というなら、祈り心をもつて靈察・靈知する角度をもつべしである。自分の中に靈震が起きる。そこに聖靈のバプテスマを体験することになる。

「マリヤ！」「ラボニ！」

マグダラのマリヤは涙ながら身を屈めて墓の内をうかがつた。すると二人の天使が軀からだのあつたはずの首のところと足のところに坐していた。そしてマリヤにこう問いかけた。

「女よ、何で泣くのです」

マリヤは応えた。

「誰かが、私の主様を取り去ってしまいました。何処いずこへもっていったかわからないのです」

そう言いながらうしろを振り返つて見ると、そこに立っている人があつた。その人が天使たちと同じようにたずねた。

「女よ、何で泣くのだね。誰をたずねているのだね」

マリヤは園守だと思つて、

「旦那さん、もしやあなたがあの人を取り去つたのなら、何処に置きなされたか教えて下さい。わたし引き取りたいのです」

そう言つて一瞬向き直つたその途端、その人が親しげに、

「マリヤ！」

と呼びかけた。その声はマリヤのハートに沁み込んだ。そのなつかしい声の主は誰であろうイエスであつた。マリヤはハタと振り返つて、

「ラボニ！（先生！）」

と叫んだ。

「マリヤ！」

「ラボニ！（先生！）」

この単純な名の呼び交わし。名は全存在の内実をもっている。たとえば我々が「漱石さん」というとき、そこには彼の全作品と生涯と人格が渾然としてふくまれている。

七つの悪鬼になやまされて、絶望的な現実から救い出されて、歓喜にあふれ、献身的にイエスに奉仕していた彼女。自分のもっていた最も大切な香油を壺をぶち破つてことごとくイエスに注いだ彼女。誰よりもイエスを慕つて墓場に馳せつけた彼女。イエスはもちろん、一人一人をその存在の

特性において愛しておられたのであるが、「マリヤー」の呼びかけ一つに、イエスの無量の顧み^{かえり}がこもっていた。マリヤは「ラボニ！（先生！）」と言つてイエスにしがみつこうとした。敬慕と歡喜のあまり。すばらしい霊体のイエスである。靈光があふれていたにちがいない。マリヤがしがみつこうとしたので、イエスは、

「私にさわるな。まだ父のみ許に昇らないからだ。……」

といった。

マリヤがイエスにとりすがろうとしたのも無理はない。純情の彼女である。しかし、彼女が本当にみ霊^{たま}を受けていたら、「ラボニ！」と叫んでイエスの中に全存在をもつて躍り込んでいたであろう。そうすれば、イエスにしがみつくよりもすばらしい現実に入つたはずである。本当の世界は、外からしがみつく世界ではなく、中へ直ちに突破、突入する世界である。すなわち一如^{いちに}、一体の現実である。われらが「主様！」「キリスト様！」と称名するとき、直ちに主と一つとなる。これが祈りの極致、信のまことの現実である。イエスが「父よ！」と呼んで祈つたとき、その祈りはいつもこの現実、一如^{いちに}の世界であつた。だからイエスは「私と父とは一つである」（ヨハネ一〇・三〇）と告白した。

であるから、復活のイエスがマリヤに「触れるな！」と言つたとき、その奥に、

「さわるに及ばないよ。私はおまえの中に入るよ！」

と約束しているのである。天界に昇つたあとで、み霊のキリストとしてマリヤの中に全的に入つて

下さったにちがいない。

マリヤに現われたあとで、復活のキリストは弟子たちに現われたが、幽霊くらいにしか思わぬトマスには、マリヤの場合とは反対に、

「おまえの指をここに伸べて、私の手を見よ、おまえの手を伸べて、私の脅おびに差し入れよ

……」(ヨハネ二〇・二七)

と言っている。キリストの霊体に現実に触れてみたトマスは驚嘆して「わが主、わが神！」と叫んだ。

現在は、イエスが十字架をもつて贖罪の現実を、復活と聖霊降臨せいれいこうりんの事実をもつて聖霊遍在せいれいへんざいの現実を自由に開示しておられる現在である。であるから、「マリヤー」「ラボニ！」の呼び交わしで、直ちに即如一体の信の現実が与えられる。現代キリスト教界が、もし一般に気がぬけているとするなら、この単純率直なる信愛の現実が欠如しているからである。

復活永生のキリスト、現に生きて天界に在り給うキリストをみ霊たまをもつて信受してゆけば、我々自身、甦よみがえりの人となる。パウロがいつている「キリストわが内に」とは、み霊のキリストわが内にであつて、私たちは死を知らない人となる。相対的生死を超えた永遠の生命の人となる。キリスト者とはそのようなキリストの生を生きる人である。復活新生のこの根源現実を現有していると新天地の双葉に我々自身が成っているから、歴史の終末の新天地への希望がはつきりと湧いてくる。そうでないなら、どんなに復活を云々うんげんしても空しいことである。

第八転 昇天（橄欖山）

ゴルゴタに十字架の血を流し、贖罪の大業を果したイエス。その屍は岩窟の墓地に葬られたが、三日目の晨、地震ならぬ靈震起こり、岩窟の扉としてあてがわれた岩盤は転倒し、墓はすでに空っぽである。彼は復活して現われ、弟子ども、女どもを驚異せしめた。しかし彼らはまだ真の歡喜に甦らず、キリストにその心のかたくなさを責められる情けなさであつた（マルコ一六・一四）。

さきにもルカ福音書第二四章の「復活」のところで書いたように、イエスは、エルサレムで弟子たちに、父が約束なさったものの、聖靈をおまえたちに贈るぞ、おまえたちは天上から靈の能力が著せられるまで都に留つて祈つて待つて居ろよと、確言なさったが、その後、ガリラヤでも現われ、全世界を巡つて、凡てのものに福音を宣べ伝えるべきこと、信じてみたまのバプテスマを受ける者は救われること、そのように信ずる者には徴がともなうことを語った。すなわちキリストの聖名を唱えれば悪鬼が追放され、異言がほとばしり、蛇を握つても、毒を飲んでも、害を受けず、病める者に手を按げば病は癒される、といった徴が伴うことを告げた。これは事実、聖靈を受けた使徒た

ちが実証した。

みたまのバプテスマをはつきり受けなくては、こういう徴は伴わない。だから

「信じてバプテスマを受ける者は救われる」（マルコ二六・一六）

という聖言をいい加減に読んでいる一般キリスト教界ではこのような徴が伴わない。だから「使徒の信仰に立ち帰ろう！」と私は自らにきびしく告げているのである。

またキリストは弟子たちに次のことも告げた。

「私は天でも地でも一切の権を与えられている。だからおまえたちは往って、諸々の国人を弟子となし、父と子と聖霊の名に在ってバプテスマを施し、私がおまえたちに命じたすべてのことを守るように教えよ。視よ、私は世の終りまで、いつもおまえたちと偕に在るぞ」（マタイ二八・一八―二〇）

このキリストの言が後の加筆であると学者たちはいう。使徒たちの信仰がこのような告白となつたとしても、告白せしめたものは、その内実から見て、聖霊である。そうであるなら、主体が聖霊にあるわけだから、それはキリストの言として記されてあるとしても、その真理性において何らさしつかえはないことである。

このように、キリストは昇天の直前に、聖霊降臨の約束と、聖霊のバプテスマを土台として福音の伝道をすべきこと、そのような信仰者にはみたまの徴が伴うこと、すなわち、伝道は聖言のみならずカリスマ的み業が伴うことを確言して、然るのちに、

「天に挙げられ、神の右に坐し給うた」(マルコ一六・一九)とある。

天はもちろん霊的天界で、自然科学的な天ではない。「神の右に」とは、天界には地上的な右も左もないが、表現として「神の右に」と申して父なる神と共にその権能にあずかり給うことを語っているわけである。

使徒行伝第一章に記してあるように、イエスは十字架の贖罪死を成し遂げたのち、多くのたしかな証示証言をもって、復活の事実を使徒たちに示し、四〇日間、しばしば彼らに現われて、神の国のおとずれを語り、彼らの集まりの中に在ってこう命じた。

「エルサレムを離れないで、私から聞いた父の約束を待っていないさい。ヨハネは水で回心のバプテスマを施したけれども、おまえたちは間もなく聖霊でバプテスマされるのだ！」その後、さらにハッキリと弟子たちにこう語った。

「……聖霊がおまえたちに臨むと、おまえたちは霊的な力を受ける。そうしたら、エルサレム、ユダヤ全国、サマリヤ、さらには地の極^{はて}まで私の証人となる」(行伝一・八)(ルカ二四・四九参照)

これは復活のイエスの最後の決定的な聖言であつた。使徒たちをベタニヤの方、橄欖山^{オリブ}に連れゆき、手を挙げて彼らを祝し給う間に、天界へイエスは挙げられた、霊雲に迎えられつつ(ルカ二四・五〇)。

慕わしさと靈感に満ちて昇りゆくイエスをかれらが仰ぎ見ていたとき、白衣の天使か、預言者か、二つの影が傍らに立って告げるのに、

「ガリラヤの人々よ。何故天を仰いで立っているのです。あなた方を離れて天に挙げられ給うたこのイエスは、天に昇りゆくをあなた方が今見たように、再び来たり給うのだ」

（行伝一・一二）

イエスの昇天の際、すでに再臨まで約束されていた。キリストは今もなお、歴史の終末に至るまで、霊界の天に君臨して在り給う。み霊は自由自在にわれらに降り、み霊のキリストとして誰を通してでも働き給う。キリストが昇天したということは、顕然たるキリストの実存の一転機であった。キリストが天界に現在する霊的事実の根拠は正にキリストの昇天、霊的天界への突入という啓示的事実に由るのである。

第九転 霊降（エルサレム）

ペテロの場合（使徒行伝第一章二三節―二章四一節）

橄欖山オリブで昇天前のキリストから告げられたように、使徒たちはエルサレムに帰った。そして使徒たちは忘れられない慕わしい最後の晩餐ばんさんの高楼たかどのに登った。祈り場はどの宿であつたか、その集まりにはキリストに救われた女たちもイエスの母マリヤ、イエスの兄弟たちと共に加わって、一同「心をつにしてひたすら祈った」。そのような祈りが連日一〇日間つづけられた。

五旬節ごじんせつ（ペンテコステ）の日、すなわち、過越節すさしのいわいから七週間を経た翌日、換言かんげんすれば旧約の過越節の血の贖あがないを自ら成就したキリストの十字架の日から五〇日目、正に決定的なカイロスの日、満願の一〇日目に、霊界の天裂け、烈風の吹き来たる如き響きこきが突如として天から起こり、祈り居る群を震撼しんかんした。地震ではなく天震的どよめきである。また、霊火が舌のように現われ、分かれて群の

一人一人の上に止まった。正に聖霊の降臨である。彼らは全身に靈動をおぼえ、聖霊に満たされ、聖霊の宣べしむるままに異言で語りはじめた。その異言は高次なもので、彼らの知らない諸地方の方言を語らせられた。

そこにはこの異常な響きに驚いて群衆が蝟集して来たが、

「見てごらん！ この語る者どもは皆ガリラヤ人ではないか。それなのに、どうして私たちの故里の言葉が聞けるのだろう。私たちはパルテヤ人、メデア人、エラム人、またメソポタミヤ、ユダヤ、カパドキヤ、ポント、アジヤ、フルギヤ、パンフリヤ、エジプト、リビヤのクレネに近い地方など、いろんなところに住んでいる者、それからローマからの旅人で、ユダヤ人やユダヤ教への改宗者、それからクレテ人やアラビヤ人など、さまざまであるのに、みんなその国語で、神がキリストによつてどんなに大きな御業をなさったかを彼らが語るのを聞くと、一体どういふことなのか！」

全く次元のちがった現象に驚嘆驚異してとまどつてしまった。なかには嘲る者があつて、「あいづらは甘い葡萄酒に満たされ酔心地で勝手な熱を吹いているのだ」といったようなことを口走つた。そのような驚きと混乱のありさまを見て、ペテロは十一の使徒たちと共に立ちあがつて大声で、この聖霊降臨の事態を説明した。すなわち、さきほどの異常な現象は酔つたのでも何でもないこと、預言者ヨエルの預言が成就して、今こそ万人に聖霊が臨むときが来たのだということ、ナザレのイエスの「力ある業と、不思議と徴」を今こそみ霊が証しておられること、メシヤの予表たりしダビ

デとも次元のちがった力強き真のメシヤがイエスで、彼は死に勝ち復活したこと、自分たちはその証人であること、イエスは神の右に挙げられ、約束の聖霊を父より受けて、かれらが見聞するこの聖霊を注ぎ給うこと、イエスこそキリストであること、などを滔々^{とうとう}と述べた。

聖霊に溢れて語ったペテロの弁舌は、これを聴いていた人々の心をとらえた。そこで使徒たちに、「兄弟たちよ、我らは何をなすべきであるか」

とたずねた。そこでペテロはハッキリと明言した。

「君たち回心せよ、自分の罪のゆるしを得るため、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けよ。そうすれば聖霊の賜^{たまひ}を受ける。……」

これを聞いて、その日、弟子に加わった者が、およそ三千人に及んだ。

以上のように、全く画期的な事態が起きた。これはイスラエルの民族宗教が世界宗教に突破拡大する画期的な出来ごとである。この拡大は質的、次元的革新である。ナザレのイエスが、キリスト（メシヤ）たるの実を、その十字架と復活によって贖罪^{しよくざい}と永生を実証し、霊界に昇り、聖霊を降^{くだ}して、み霊のキリストとして、信ずる者の中に内住する実をペテロをはじめ使徒たち、その他いかなる人においてでも実証したということである。彼らの中にみ霊が止^{とど}まって本当の霊止^{ひと}となった。

聖霊の降臨なくしては、十字架も復活も画餅^{がべい}に過ぎない。聖霊の降臨をもってキリストの実存は極めて具体的な身近なものとなった。第九転たる聖霊降臨は、キリスト者の実存にとつては、第一転たる受肉、イエスの降誕よりも切実なものであり、第十転たる再臨への確実な保証なのである。

第九転は正に急転（九天）直下！ 我らの腸の中へ突破突入して来るキリストのみ靈こそ、我らを真に活かす靈であり、不滅の燈火であり、不断の源泉であり、永遠の生命である。「み靈を宿さざる者はキリスト者に非ず」とパウロがロマ書で明言している如く、み靈なきキリスト信者は画餅を餅と思つてゐるにすぎない。そのような観念的キリスト教徒がしかし何と多いことか。キエルケゴールが、真のキリスト者は天才より少ない、と皮肉つたのもそのような現実を見ての鋭い批判であつたのである。私自身、永い歳月を聖靈のバプテスマなしに過ごして来た。その信仰がいつわりであつたとは思わない。しかし、聖靈のバプテスマを受けて、聖書の次元が膚で感ぜられるようになり、パウロやペテロが何でこんななみ靈のことを語っているかがしみじみとわかり、「わが言は靈なり、生命なり」と言われたキリストの言が身に沁みて来て、以前の信仰が観念的であつたことを明らかに悟つた。福音の福音たるはこの聖靈を受けないでは決してつかめない。百聞一見に如かずというように、百聞一験に如かずである。

ここに聖靈降臨とエクレシアとの関係について一言しなければならぬ。すなわち、ペテロをはじめ、ヨハネ、ヤコブ等の使徒たちの場合は、集會を催して集団として祈つていたときに聖靈が降臨したということである。キリスト教の歴史は、心を一つにして祈つていた群に聖靈が降臨したことによつて始まつた、ということである。そこにキリスト教の土台が築かれたということである。それゆえ聖靈の宿つていないエクレシア（教会）は教会でないということを、現代の現実の教会は銘記すべきである。

エミール・ブルンナーがかの異色ある名著『教会の誤解』(„Das Missverständnis der Kirche“)の中でこう言っている。

「このエクレシアの歴史のはじまりには、聖霊降臨の奇蹟がある。そもそも降誕節、受難節及び復活節の如き大きな祝祭日は、それぞれ非常に重要な救済の事実、すなわち、受肉、贖罪及び復活を記念しているのであるが、キリスト教界は聖霊降臨節をこれらの大いなる祝祭日と同列に置くことによって、聖霊の降臨、すなわちエクレシアの成立もまた、啓示の歴史における偉大なる救済の事実の一つ、つまりその最後のものであることを告げようとするのである。聖霊の降臨とエクレシアの実存との間には、両者を互に同一視し得るほどまでに密接な関係が存する。けだし聖霊の在ますことによって、教団(Gemeinde)が存在するのであり、聖霊は、この教団に対して与えられたる靈にほかならぬ。さればこそ、キリストの言と、キリストの靈との把持者たる教団は、個々人の信仰に先立つのである。」

(酒枝義旗訳)

全くその通りである。信徒の集まりたるエクレシア(教団)——原語はむしろ「召団」——はブルンナーも言う通り、聖霊の降臨を受けて初めてエクレシアの名に価するのである。キリストを首とし、教団を体として自覚する限り、聖霊が臨在していなければならぬ。今日のキリスト教界の諸教会、諸集会は現実にどうであろうか。

パウロの場合（使徒行伝第九章、第二章、第二十六章）

キリストの福音に言い逆らった急先鋒は誰であろう、あのパウロであつた。彼は、イエスを信じイエスの道を歩む者なら、老若男女を問わず、縛りあげることを可しとしていた。彼はパリサイ派の首魁であつたし、宗教的にも、律法的にも、智的にも抜群の人間であつただけ、所信を曲げず、批判も行動も強烈であつた。神のために熱心という堅い自我が動いてゐた。これが宗派根性という癌である。これを神に在つての熱心に転向し得る者はイエスのほかになかった。このことは彼自身の告白にあらわれている（ローマ一〇・一―四参照）。

復活のキリストがとうとうダマスコ途上のパウロに電撃的に現われ、彼を靈撃し照破した。パウロは大地に倒れた。キリストは、

「サウロ（パウロのヘブル名）、サウロ、何で私を迫害するか」

と叱責した（行伝九・三、四）。この間の消息については、彼自ら使徒行伝第九章、第二章、第二章で三回に亘つて語っている。これが彼の回心の劇的な第一場である。

聖霊のバプテスマを、パウロは靈界のキリストの顕現によつて受けたのである。

「わが眼より鱗うろこの如きもの落ちたり」(行伝九・一八)

という通り、彼は開眼させられたのである。自己主張、パリサイ主義、おのが義、律法の義をかなぐりすてて、キリストの義を信受した。十字架の贖罪しよくぐいを体受した。ダマスコ途上の聖霊のバプテスマを通して、復活のキリストの霊生たまわを賜った。「言い逆らいの徴」たるキリストは逆にパウロを救いあげてしまった。キリストの御霊みたまの勝利である。この勝利は相手を仆たおすのではない。愛の御霊の中に救い入れるのである。どん底の担いのすがたである。

パウロはこのような開眼のあとで、アナニヤの按手によつて聖霊に満たされたが、彼はその後、曠野こうやに行つて深く瞑想して祈り、キリストが彼にとつて何であるか、キリストの福音、キリストの十字架、キリストの復活、キリストのみ霊たま、創造、救済、終末、信仰、希望、義、愛、永遠の生命、再臨等々、鴻大なる福音の構造と内実が重畳ちようじようたる夏雲の如く湧き立ち、彼はこれに圧倒され、包摂され、聖霊の内住により、キリストとの福音的神秘の一体の実存に入るや、彼は決然として立ちあがり、あの大伝道に押し出されたのである。

彼のうちなるみ霊の力は、口に発しては靈火を吐くような宣教となり、人々をみ霊の中に救い入れ、手に現われては病める者をいやし、なやめる魂にみ霊をそいで歓喜せしめる態の力ある伝道を展開した。正にパウロはキリストの霊の乗りうつった人となった。ペテロもまた然りしかであつた。しかし、サタンの反抗も強く、使徒たち自身がキリストの如く迫害に遭い、「言い逆らいを受ける徴」となった。

しかしキリストの使徒となつたパウロは告白する、

「我は福音を恥とせず、この福音はユダヤ人を始め、ギリシヤ人にも、凡て信ずる者に救を得させる神の力たればなり」（ローマ・一六）

「われ福音を宣べ伝うとも誇るべき所なし。やむを得ざるなり。もし福音を宣べ伝えずば、我は禍わざわいなるかな」（コリント前書九・一六）

「我れ弱き者には弱き者となれり、これ弱き者を得んためなり。我れすべての人には凡ての人の状さまに従えり。これ如何にもして幾許いくばくかの人を救わんためなり。われ福音のためには凡てのことをなす、これ我も共に福音にあずからんためなり」（コリント前書九・二三、二三）

その他パウロの言葉を引用したらきりがないからやめるが、彼はキリストのみ霊たまの愛の力に圧倒されて、福音を言ことばとカリスマ的なわざとをもつて身証したのである。

第十転 再臨（マタイ伝第二章、マルコ伝第三章、ルカ伝第二章）

新約聖書の現実、世の終りが近づいた終末的現実で、キリストの在世、十字架、復活、そして再び来たり給う再臨の約束と希望のもとにあるという現実であった。「聖国を来らせ給え」という主の祈りは正にそのような聖国の到来を間近に待望しての祈りであった。現存者の中には死を見ぬうちにその日を迎える者があるうとまでイエスは言った。

ところで再臨という熟した言葉は聖書にはない。再臨を意味する言葉としてのパルーシアという語は「到来」を意味する。これは王者たるメシヤの「到来」を意味する語で、旧約聖書の預言者たちが待望した終末の日は「末の日」（ミカ四・一、イザヤ二・二）とか「その日」（アモス九・一二、イザヤ二二・一、ゼカリヤ一三・一、ヨエル三・一八等々）などの表現でいわれている。

世界は漸進的に改変されて神の国を迎えるような、浪漫主義的、理想主義的なものではなく、世界は破滅的な終末を迎え、審判を経て救済的に新天新地を迎えるという極めて劇的な終末観が聖書の歴史観である。それはマルコ福音書第三章、マタイ第二章、ルカ第二章でイエス自身が語

つておられる通りである。「一つの石も崩れずしては石の上に残らじ」というエルサレム神殿の預言が、世の終末の預言の徴とも見られ得るのである。

「戦争と戦争」、「地震と饑饉」といった人災と天災がたたみかけてやってくる。

「日は暗く、月は光を發たず、星は空より隕ち、天にある万象、震い動かん。そのとき人々、人の子の大いなる能力と栄光とをもて、雲に乗り來たるを見ん。その時かれは使者たちを遣わして、地の極より天の極まで、四方より、その選民をあつめん」(マルコ一三・

二四―二七)

というキリストの言葉は世の終末と再臨と神の民の救済を預言している極めて注目すべき聖言である。

旧約聖書イザヤ書第三四章は神の審判と共に天変地異が起ることを語り、同第三五章は救済された新天新地の天国的情景を預言している。そしてこの第三五章の続篇の如きがイザヤ書第六五章一七―二五節である。

イザヤ書第三五章には、

「荒野とつるおいなき地とはたのしみ、沙漠は飲びてサフランの花の如く咲きかがやかん。……そのとき瞽者の目はひらけ、聾者の耳はあくことを得べし。そのとき跛者は鹿の如くに跳び走り、啞者の舌は歌うたわん。……ヤハウェーに贖い救われし者歌うたいつつ帰って、シオンに來たり、その首に永遠の歡喜をいただき、樂しみと飲びとを得ん。しかして

悲しみと嘆きとは逃げざるべし」

と、自然界と人間界の天国的な歎呼の相が描かれてある。

イザヤ書第六五章では、

「視よ、われ新しき天と新しき地とを創造す。……かれらが呼ばざるさきにわれ応え、彼らが語り終えざるに我聞かん。豺狼おおかみと羔こひつじと食物を共にし、獅子は牛の如く藁をくらい、蛇は塵を糧とすべし」

などと言って動物界の平和をも描き出している。ともあれ旧約の預言書には終末の審判と救済の深刻にして輝かしき描写が、あちらこちらに波状的に繰りひろげられている。そのうち最も著しいのは何といってもイザヤ書第四〇章から第六六章の第二、第三イザヤの預言であるが、新約の主として黙示録がこれに照応している。

神の民のありさまを描いて黙示録第七章には、

「かれらは大いなる患難なやみより出できたり、羔こひつじの血にて己が衣を洗いて白くしたる者なり。このゆえに神の御座みくらの前にありて昼も夜もこの聖所にて神に事つかう。御座に坐し給う者は彼らの上に幕屋まくやを張り給うべし。彼らは重ねて飢えず、重ねて渴かず、日も熱も彼らを侵すことなし。御座の前にいます羔は、彼らを牧して生命いのちの水の泉にみちびき、神は彼らの目より凡ての涙を拭い給うべければなり」(黙示録七・一四―一七)

さらにもう一個所引用するならば、

「我また新しき天と新しき地とを見たり、……我また聖なる都、新しきエルサレムの、夫のために飾りたる新婦の如く準備して、神の許をいで、天より降るを見たり。また大いなる声の御座より出づるを聞けり。曰く、『視よ、神の幕屋、人と偕にあり。神、人と偕に住み、人、神の民となり、神みずから人と偕に在まして、かれらの目の涙をことごとく拭い去り給わん。今よりのち死もなく、悲しみも、叫びも、苦しみもなかるべし。……視よ、われ一切のものを新たにするなり』」（黙示録二・一―五）

そして天来の言として聖書の最終に伝えられている聖言は、天界の新郎たるキリストの言、

「然り、われ速かに到らん」

であり、これに対して聖霊と新婦たるエクレシアの言は、

「アーメン、主イエスよ、来りたまえ！」

である。

そのような「羔の婚姻」という輝かしい新天新地到来の預言は黙示録になおあふれているが、ここには省略する。

再臨による新天新地の超現実的現実の徴はイエスが地上にあつたとき、その全実存をもって身証した内実である。すなわち諸々の罪と病と死の絶望的現実を救済したあの四福音書に溢れている劇的天国的現実がそれである。

山上の大告白に約束されている「恵福なるかな」の恵福の実現の日が、この再臨の日である。再

臨こそはキリストの十転の最終最大の、決定的転機（カイロス）である。第十転を迎えてそこに展開される新天新地の大歓喜の現実には、バツハ、ヘンデル、ベートーヴェン等の大音楽、ダンテ、アウグスティヌス、ゲーテ、藤井武等の大詩篇大文学が夫々の表現をもつて聖書に应じて謳歌している。なお万斛の涙を霊泉となし、満身の血潮を烈火となし、全身にみなぎる聖霊を台風となして、この二〇世紀の危機の世に一篇の大詩篇を投ずる人はないものだろうか。

第二部

人間の福音的実存七相

まえがき

キリストほど人間を知っている人はない。それはイエスが深い思い遣りをもっていた人であり、霊的洞察力が桁^{けた}ちがいの人であつたからである。キリストの「よろこびのおとずれ」すなわち福音とは、キリストがどのように人間を知り、どのように人間を愛したか、という関わりの事態である。それを私は次の七相においてとらえた。第一相は、「破れ」である。精神的にも肉体的にも「破れ」が人間の内的な実相ではないか。イエスはそれを深い思い遣りで知っていた。人間は一応整つてはいる。だが深層は「破れ」ている。それを哲学や教育、法律や政治、経済や医学等々で修養、錬磨、改造、改変を試みるのであるが、「破れ」そのものは人類の歴史と共にだんだん深刻になるようだ。それが人類の惨憺^{さんたん}たる歴史ではないか。キリストの福音は、この破れた古い皮袋を無縫の「新しい皮袋」に変質させる力をもっている（マルコ二・二三参照）。デルファイ神殿の「己れ自身を知れ」とはまずこの「破れ」を自覚することではないか。

第二相は「砕け」である。「破れ」を破れていないと思つたり、言い張るところに、人間の自己弁護、自己義認という我執的な偽善的ですがたが出てくる。そのような心が砕けないかぎり、まこ

との人間性が生きてこない。どうにも「つぐない方ない」(ルカ七・四二)破れを自覚するところに、神に対する「砕け」の心が出てくる。自己否定、自己嫌悪が本当になると「砕け」たる魂となる。これが救への関門である。

さらに心をひそめてみると、はたして人間は手ばなしで徹底的に砕けきれんだろうか。ところが心魂の砕けをイエスはもっていた。我々の心が砕け切れないところに我々の罪がある。この罪のため、イエスは十字架の「砕け」をもって決定的に罪びとをあがないとった。それが旧約のイザヤ書第五十三章で預言されている事態である。曰く、

「彼こそはわれらの罪のために傷つけられ、われらの不義のために砕かれ、自らこらしめを受けてわれらに平安^{やすき}を与う」(イザヤ五三・五)

これがあのゴルゴタの十字架で自分を決定的に砕いて、贖罪^{しよくざい}を果したイエスの「砕け」である。この十字架の「砕け」を信受して、決定的な「砕け」の魂を賜^{たまわ}るわけである(詩五一・一七)。

第三相は「突破、突入」という事態である。十字架の砕けを賜って、罪なる自我から解放された無私、無我の根源現実！自我から解放された自由のよろこび！しかしそこには何か積極面が欠けてはいないか。生きたい人間の根元衝動を新たに受けとめてくれる本願の事態がないものだろうか。果然、霊界からわが中に突破突入してくるものがある。それが、聖霊の「突破、突入」で、前者と不可分の啓示的絶対恩恵の事態である。キリスト信仰の中核は、まさにこの「砕け」と「突破・突入」の二相一貫に在る。永遠的靈性をもって自現した復活のキリストの霊生が現実^{じげん}にわが生

命となってくる。これが無的実存の根源相である。福音はこれだ、といって証者となつたのが、ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、パウロらの使徒たちであつた。

聖霊がこのどうにもならぬ我を突破し、突入することによつて、すなわちみ霊のバプテスマによつて、神霊の止まる靈止たる本然の人間性を得ることになる。知・情・意がその人らしいバランスにおいて有機体的関連性を得ることになる。そして一切のイデオロギーを超えた次元に、人間本然の生き方の根源があることを体得できるようになつてくる。

第四相は「内住・常燃」である。すなわち突破し突入して来た天来の聖霊が深く内に住まい、しずかに常燃している事態である。そのためには、三度の食事をするように、つねに聖書を祈り心をもつて血となし肉とすることによつて聖霊を内住せしめ、常燃せしめるのである。聖言は聖霊の肉であり、祈りは聖霊の血である。

第五相は「担い・抱き」である。このみ霊の力、キリストの霊性が、上述のごとく実存の底力となり、内住し、常燃することによつて、おのずから隣人をこの力で、この生命で「担い」、「抱く」という愛のはたらきとなつてくる。「敵を愛する」とは、このような「担い」で敵を担い、救いあげることである。また、さまざまの異分子を大きく抱いてしまふ、包んでしまふ。一切を包摂し、担いゆく本願力に通ずる消息が次第に体现されてゆく。

「愛はすべての罪を掩う」(箴言一〇・一二)

とはこのことである。

第六相は福音の終末的段階である。それは即ち「棄身・棄石」といった表現であらわしたい事態で、担いながら、抱きながら、この相対的存在たる現実の我らの実存の相としては、ついに仆れる事態で、自らは献身、棄身の態勢、殉道的な質のものである。世の人々からはのけ者にされ、然り、むしろ同類のキリスト者という人たちに誤解され、躓かれ、異端視され、棄てられ、——古来改革的先駆者たちはそういう運命を担わされた——いわば棄てられた石となる。キリストが「おのが十字架を負え」といったのはこのことである。しかし、どうあつかわれても、聖霊の内住が本ものであるなら、常燃の火となつていなければ、微笑みつつ耐えてゆく。本当の愛は死よりも強いからである。このようにして棄石となつた実存者こそ神の歴史のどん底を担う「隅の首石」となる。

第七相は「栄光」である。福音的実存のたましいは神の国到来を悲願として、終末的希望に生きている。「聖国を来らせ給え」という祈りが呼吸となつてい。「われ速かに到らん」とのキリストの本願の言は、二千年前よりも歴史と共に質的に濃度を増した聖言としてひびく。この本願が究極のところ成就することを確信している。このような存在は神の栄光体と化せられてゆく。

全福音書は、渾然としてこの七相から成つていゝといつて可いであろう。それはあたかもキリストの白光に映えて七彩の光を放つ虹の如く美しい人間の本来の相である。

そういう見解のもとに、福音書の中から、各相にふさわしかるべき箇所をいくつか選び出してみた。しかし夫々の例証自体が、夫々の相と共にいくつかの相をうちにふくんでいる。それはむしろ各相の有機体的、生命的連関が然らしめてゐるわけで、それが福音的現実相なのである。(コリント

前書二二・二二―二六、黙示録二・一八―二〇。そして

「栄光より栄光に進み、各自の相をもちながら、主のみ霊なまにあつて主と同じ像に化する」
 ことが約束されている（コリント後書三・一八）。

第一相 破れ

姦淫かんいんの女（ヨハネ伝第七章五三節―第八章二一節）

いけにえかあわれみか

弟子たちが、多くの取税人しゅぜいにんと、律法りっぽうに無知な庶民でアム・ハーアーレッツ「土民」といわれている
 いわゆる「罪びと」たちと共に食事をしている（マタイ九・一〇―二三）。例のごとくモーセ律法厳守
 をもって自ら任じ、然らざる人々を見下し、自分たちを義人として「区別」していた律法主義者た
 る「パリサイ人びと」たちがそこへやって来て、弟子たちに、

「きみたちの先生は、なぜ取税人や罪びとたちと食事を一緒にするのか」

と刺とげをふくんだ問いを發した。それに応答したのはイエス自らであった。

「健康者は、医者是要らない。ただ病人だけが医者を要する。おまえたち、往って学ぶが

いい、『我あわれみを好みて、いけにえを好まず』（ホセア六・六）とはどういう意味か。私は正しい者を招こうとしているのではない。罪びとを招くために来たのだ』（私訳、傍点訳者）

福音書をみると、いつも対立しているのは、取税人、遊女、罪びと、不具者、精神病患者などと教師、祭司、パリサイ人たちである。そしてキリストはつねに前者たちの味方になっている。ここにイエスの福音が「躓きの石」であるすがたがある。精神的欠陥者と肉体的欠陥者を救わんとて、イエスは来たのであって、宗教家、道德家、学者、健康者は彼に関わりなき者であった。

しかし、誰が精神的にまた肉体的に本当に健康者であるのか。パリサイ人中のパリサイ人であったパウロは、復活のキリストにダマスコ途上で靈撃されたあとで、

「義人はいない、ひとりもない」

「自分こそ罪びとの首である」

と告白するに至った。いかなる健康者も死病には勝てない。イエスは、自らを義としている連中に

「わざわざいなるかな、偽善なる学者、パリサイ人よ」

とたたみかけて大喝した（マタイ伝第二三章）。

あわれみかいいけにえか、というイエスの言は、きわめて重要である。預言者ホセアを通して啓示された上掲の言は、まことの宗教の何であるかをずばりと宣したものである。祭儀をこととするユダヤ教的祭司宗教、誠律宗教に対する根本的批判である。預言者の宗教のハートを示した言である。

しかもイエスは自らいけにえとなつて（十字架）、祭儀と律法にとどめをさした。道はあわれみ（愛）の一途たる福音にあることを体现した。議論ではない。全存在をもつて誰がこのような解決をなし得るか。いけにえではない、あわれみである、と宣言したイエスは、全く逆説的に、自らいけにえとなつて、あわれみの極致を体现した。これがあがない（贖罪）のあわれみである。イザヤ書第五三章の体现である。

身体障害者をことごとく癒し、死人をもよみがえらせ、いかなる精神病者をもなおし、罪びとを無条件にゆるす、おどろくべき実力あるあわれみのイエスに驚嘆し、平伏すほかに我々のすがたがあるだろうか。

義しいとか、潔いとか、立派だとか、相対的な人間の価値をあがないぬきに問題にしている人たちと、私は本質的には関わりがない。キリストにあがなわれた私は、あがないを必要としない人たちとは本質的には関わりがない。

「我れ汝の足を洗わずば、我れ汝と何の関わりあらん」と言つたイエスに「足を洗つて」いただかなければ——罪をあがなつていただかなければ——どうにもならぬ私であるからである。

アウグスティヌスとペラギウス、ルターとエラスムス、このいずれの関係も水と油のようにくいちがひ、次元がちがうのは、この消息による。福音か道徳か、宗教か文化かである。道徳や文化は、福音や宗教によつて否定されて、はじめて肯定さるべきもの、二〇世紀の文化文明が相対的人間主

義によつて直線的に肯定されるところに危機がある。人間中心のあらゆるイズムは、要するに相対的な価値と相対的な真理性があるにすぎない。絶対的なものによつてまず否定されて肯定を与えられるまで、人間存在は実はどうにもならないのである。このことを、イエスは「姦淫の女」の一件で劇的に示した。

捕われた女

さてこのヨハネ伝第七章五三節―第八章一一節は、本来この箇所にあるべきものではなく、ルカ伝第二一章の終りに来るべきものであると学問的には言われている。つまりイエスがエルサレム入城をする前、いよいよ最後の晩餐ばんさんを迎える少し前の話である。

「イエス、オリーブ山にゆき給う」とは山で全霊をうちこんで祈らんがためであつた。イエスは夜もすがら祈り明かして、夜明けごろ宮に入つてみ霊たまに満たされて語つていた。

すると、教法師やパリサイ人びとらが姦淫の現行犯の女を伴れてきて、衆目環視しやうもくのただ中に立たせて、

「先生、この女は姦淫の時、そのまま捕えられたのです。モーセは、こういう者は石で打

ち殺されるべきであると我らに命じていますが、あなたはと言われますか」

と問うた。姦淫罪にはいろいろな場合があることは、申命記第二章、レビ記第二〇章に記されているが、大方の場合石で打ち殺されることになるので、彼らの言う通りなのである。

もしイエスがこれを許せば、モーセの律法に触れて、宗教会議に引き出され、訴えられることになる。またもし「殺せ」といえば、ローマ法に触れて殺人の煽動者にされる。どちらにしてもイエスは捕えられることになる。そこに質問者どもがイエスを陥れる^{おとしめ}筈^{おとしい}があつた。そのような悪^だくみを看破したイエスは、第三の答をもつて彼らの意表^{いひょう}に出たのである。

地にももの書くイエス

それは「身を屈^{かが}め、指で地面にももの書く」という行為であつて、同次元に立つての言葉の答えではなかつた。

このようなイエスの動作は聖書にここだけである。きわめて印象的な一場面である。学者もパリサイ人も、物見高い群衆も、イエスのこの行為に瞠^{ぼうもく}目し、何を地面に書くのかと覗き見をしたにちがいない。衆目環視のただ中で地面に書いていたイエスの文字は何であつたか。永遠の謎である。

沈黙のイエス、もの書くイエス。イエスは答えに窮^{きゆう}してこんなことをしているのだらう、そう思った「彼らは、問いつめてやまなかつた」。あまりに押し迫つてくるので、イエスはおもむろにからだをもたげて、鋭くもまた深いまなざしで、

「おまえたちのうち、罪のない者（アナマルテートス、聖書にここだけの語）がまず石を擲^うて！」

この一言は、モーセの律法を楯^{たて}としてゐる彼らに対して、律法以上の靈法を矛^{はこ}として立ち向い、彼らの楯^{たて}を突き破る一言であつた。善きにつけ悪しきにつけ、人の心腸を深く透視する靈能はイエ

スにおのずから備わっている。彼は全く私心がないからである。レントゲン線は病患を透視するが、イエス線は心患を透視しつつ救いあげてゆく。

「すべて色情をいだいて女を見る者は、既に心のうちに姦淫かんいんをしたのである」(マタイ五・二

八)

と彼はいったことがある。であるから、モーセの十誡の第七項「汝姦淫するなかれ」をキリストの光でよむと「姦淫」とは、よこしまな肉情の行為以前の心情の内的衝動に関わることとなる。この場合この女ばかりが現行犯として捕えられたが、相手の男はどこにいいのか。イエスには、すでにその点も見えていたにちがいない。

「律法は聖なるものである」とパウロが言ったのは、イエスの内的な律法じようぽうの消息にかかわる消息である。このような律法を内的に充たし、成就じゆうじゆできる人はイエスの他にはいない。モーセの十誡は、どれもこれもそのように内的にもっと文字の奥を受けとるべきものであることは、イエスの「山上の垂訓」がこれを語っている。「山上の垂訓」は十誡を超える靈言れいげんなのである。

去りゆく偽善者たち

イエスの權威ある言と、深い鋭い眼差まなざしは、今やこの女を石打ちにしようとして身構えていた偽善者たちの肺腑はいふを貫いた。彼らの手の石がにぶい音をたてて地面に落ちた。高慢な、冷酷な、悪意を孕はらんだ、無慈悲な偽善者たちこそ、自分の心を自分の石でうたれたというものである。一人また

一人と環^わを崩してそこを去っていった。「義人はいない、一人もない」とパウロが言った通りである。破れ^{やぶ}のこの女を責めた連中こそ、実はもつとひどい破れ^{やぶ}をごまかしていた偽善者たちであった。

「彼らはこれを聞いて良心に責められ、老人をはじめ若い者まで、一人また一人と出てゆき、唯イエスと中に立っている女とだけが残った」と、その光景をまざまざと伝えている。そのイエスはしかし、彼らの去りゆくすがたすら見てはいない。彼はその間すでに「また身を屈めて地にも書いていた」。何という人であろう。權威をもつて彼らに鋭い言を發した彼は、次の瞬間には眼をそらして地面に何か書いているのである。何の必要があつて、何を書いているのであろう。

「おまえたち、人を審^{さば}くな。おまえたちも審^{さば}かれるぞ。自分が審^{さば}く審^{さば}判^{はん}で自分もさばかれるぞ。なぜはらからの目にある塵^{ちり}を見て、自分の目にある梁^{うづはり}木を認めないか。偽善者よ！」

(マタイ七・一―五)

とても書いたのか。それとも「女を見て色情を抱く者は……」(マタイ五・二八)の句を書いていたのか。あるいは未だ聖書につたえられていない何か別な言^{ことば}を書いていたのか。それとも異言的な文字をつづっていたのか。そんな詮索はこの場合どうでもいいようだ。

イエスのところは、人の弱さに対する深いあわれみであるようだ。一面教法師(律法学者)やパリサイ人ら(宗教や道德の実践自任者)の偽善に対しては鋭く叱咤^{しつた}しつつも、他面彼らの人間としての弱さをあわれんでイエスは目をそらした。

私もおまえを罪^{つみ}しない

イエスはあたりがしずかになつたので、身を起こした。その女のほか誰の影も形もない。

「女よ、おまえを訴えた者どもは何処^{どこ}にいるかね。おまえを罪^{つみ}する者はいないか」

女は答えた、「主様、誰もおりません」。するとイエスは言つた。

「私もおまえを罪しない。往きなさい。もう二度と罪を犯しなざるな」

「私もおまえを罪しない」、イエスのこの言葉は、それより七百余年前に姦淫^{かんいん}の妻をもつた預言者ホセアの言葉のひびきと相通^{とおとよ}う。

イスラエルの神ヤハウェーが、あだし神々を拜んで宗教的姦淫を犯しているイスラエルの民を、それでもなお自分は棄^すてないで愛しぬくのだ。おまえ、預言者ホセアよ、おまえもおまえの姦淫の妻を棄てないで愛しぬけよ、とさとした。そこでホセアは妻を身の代金^{しろきん}であがないもどして、妻に言つた。

「おまえはこれから永く私のところにおちついて、もう淫行^{いんこう}などせず、他の人に往つたりするなよ。私もまたおまえに対して同じようにするから」(ホセア三・三)

預言者ホセアは不貞の妻をとがめず、ねんごろにあしらい、深い愛、あたたかいおもいやりをもつて、自分を妻と同じ立場に置き、「私もまたおまえに対して同じようにするから」といった。夫または妻が、不貞の相手に対してこのような心をもつて包み得る者は、あかつきの星より稀^{まれ}である。

う。しかし相手の過去のあやまちを^{えぐ}振り出して、^{なじ}詰り責めるのは、冷たいパリサイ根性か、サタンの冷酷な心である。

一般にアガペーというと、単に天的な靈的な精神的な愛と思われ、地的な愛エロースと天地のへだたりがあるように考えられている。しかし本当のアガペー愛はエロース愛の次元にまで深く降りてきて、罪を犯す危機性をもったエロース愛を包んでこれをアガペー愛の中に溶かしこんで変質させる力をもった^いどん底の愛である。

「何ごとよりも先ず互に熱く相愛せよ。愛は多くの罪を^{おお}掩えばなり」(ペテロ前書四・八)
とか、

「愛はすべての罪過を掩う」(箴言一〇・一二)
とかいう愛がこれである。ホセアに神は別なところでこう告げている。

「エフライムよ、我れいかで汝を棄てんや。……わが心わが内に^{あわれみ}変りて、わが愛憐ことごとく燃え起れり」(ホセア一・八)

神の義が強いだけ、その義の審判を自らの胸にひきうけて(それがやがてキリストの十字架の砕けとしてあらわれた)、より強烈な愛として(のちにキリストの復活と聖霊のそそぎとしてあらわれた)突破、突入し、燃えあがり、燃えつづけてゆく。

イエスはこの女の次元に自らを置き、地にももの書くすがたをもって女を包み、罪をどん底からゆるした。「あわれみはさばきに勝つ」のであった。色情を抱いて女を見る可能性を——ほかのあら

ゆる罪の可能性と同じように——彼ももっていた。しかし罪の可能性はイエスにおいては罪の現実とならなかった。それゆえに彼はゆるしの実力をもっていた。これが本当の「恕」^{じよ}、おもいやりというもので、そのことはヘブル書四・一五にある通り、「われらの弱きを思い遣^やることのできる」心で、十字架の贖罪^{あがない}に通ずる「大祭司（キリスト）の思いやり」である。

この女はおそらくペンテコステのとき、聖霊のバプテスマにあずかり、イエスの愛の化体^{かたい}した女になったであろう。

放蕩息子^{ほうとうしこ}（ルカ伝第二十五章一一―三三節）

次男坊の破れ

鬚髯^{あごひげ}に白髪^{しらが}がまじり始めた親仁^{おやじ}が窓辺によつて、夜明けにまた夕暮に野末を見やっている。今日も明日も次の日も空しく過ぎてゆく。この親は何を待っているのだらう。

家には息子がひとりいる。毎日野良に出て働いているが、いかにも律義者^{りちぎもの}らしいユダヤ的な真面目さがその相貌^{そうぼう}にうかがわれる。四角四面といった感じである。

と、あるひるさがり、そろそろ陽が傾きはじめた頃あい、ぼつと一つ動くものがはるか彼方に

見えるではないか。あれは人か、野獸か、幻影か。親仁はじつと見詰めて目を離さない。家を出ていったあの次男坊にしてはあまりにも変り果てた姿ではないか。跣足で檻褸をまとうている。正に乞食同然の恰好である。破衣そのもののすがたである。見る影もなく痩せ細ってはいるが、その歩きっぷりから察すると次男坊らしい。直感した親仁は、家を飛び出して走っていた。七十路を迎えた人とは思えぬほどの力強い走り方ではないか。親仁と書くように、正に父の仁が力の秘密であつたようだ。

イエスはこの情景を述べて次のようにいった。

「彼（息子）がなお遠く離れていたのに、彼の父は彼を認め、情動してあわれみ（エスプランクニステー）、走つていつて、その頸に倒れかかるようにして抱きつき（エペベセン）、彼に心ゆくまで接吻した（カティレーセン）」（私訳）

普通の親だったら、家の中に坐り込んで、帰つて来たともない姿の息子に、「どうしたんだ。そんなだらしない恰好で、よくも帰つて来たもんだな」とさんざんひとくさり文句をならべ、それからおもむろにゆるしてやる、といった勿体ぶった段取りをとるところであろうか。ところがこの親仁は、一見さっぱり権威のないやり方である。自分の方から野らへ走つていつて、倒れかかるように抱きついて、熱い接吻をしてこれを迎えたとは。

いったいこの次男坊はどうしたというのか。この息子は一本立ちになりたくなかった。独立心の芽生えである。それはそれで一応男としてたのもしい結構なことなのだ。父親から財産を分けてもら

った。長男の半分をもらうのがユダヤの習わしであつた（申命記二二・一七）。

彼は荷造りをして間もなく家を辞した。大分遠い国へ出向いた。はじめは金まわりがよかつたが、金があるとつきものなのは誘惑である。酒色にふけり出した。そのためとうとう財産を蕩尽してしまつた。弱り目に祟り目というわけで、その国が饑饉に見舞われた。そこでいよいよ困り果て、その土地の豪農に身を寄せて糊口の道をやつと得た。彼の仕事は豚を飼うことであつた。極めて卑しい仕事である。彼の食物は豚と同様の蝗豆である。日に日に瘦せ衰えてゆく。これでは死を待つようなものである。ぎりぎりの現実に追いこめられて、やつと我とわが身に立ち還つた。そして父の家の豊かさが思い出されてきた。彼は自分の在り方の非がしみじみと自覚されてきた。彼の自覚は、まず自分が天に対して罪を犯し、その結果父に対して罪を犯した、破れそのものといふのである。天に対して罪を犯したとは何か。人間の在り方が、関係の仕方が、第一に絶対者に対してのものであることを示す。それはあたかも地球とその中の生きとし生けるものが、太陽の存在によって在らしめられているように、人間は信ずると信ぜざるとに関わらず、絶対者によって在らしめられているというのが聖書の語る人間存在の大前提、根源現実である。神はモーセに「我は在りて在る者なり」と告知したというが、私はこれを「我は在りて在らしむる者なり」とよむ（このことについては別のところで詳述しよう）。

そのような「在らしむる神」のめぐみの意志に信頼することをせず、手ばなしの人間主体、人間自主の在り方をしたこの次男坊は、いかにも自主自由のようだが、実は自分の慾心の奴隷となつた。

神の意志の奴隷となると、全く逆説的にまことの自由がある、義がある。傍若無神の手放しの自由は逆に罪であり、不自由であり、不義であることはパウロがロマ書、ガラテヤ書で論じ、ルターが「奴隷意志論」をもつてエラスムスの「自由意志論」を論駁した通りであり、宗教体験の根底的な真理である。アダム・イヴの「原罪」も神意に反いたという神話をもつて啓示された人間実存の根底の問題に関わる真理である。この次男坊の在り方は、神との関わり方においてまず破れたのである。人間の存在的な「破れ」がそこにある。そしてこれは誰でもがもっている破れなのである。万人が罪びとであるとは、このように神意を体现し得ない我執的な存在であるということである。

この放蕩息子ほうとうしこの父に対する信愛関係の断絶、父を父とも思わぬ心、高慢、それが自分の生活に放蕩、破綻はたんという相に結果してきた。しかしこのことに気がついたとき、彼ははじめて神に対し、父に対して罪を犯した、という告白となった。神に対する断絶、これが人間の破れのすがたである。自己の破綻、破滅へと路はおちてゆく。

次男坊の碎け

このような次男坊も、罪の自覚を胸に抱いたとき、彼は碎けのたましいとなった。この放蕩息子ほうとうしこの親仁おやじさんは、彼の「破れ」の奥に「碎け」の相を見た。父のもとに立ち還って来たその姿において。



放蕩息子の帰還（レンブラント、1636年）

果然、次男坊はこう告白した。

「お父さん、私は天に對し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私はあなたの息子といわれるに値しません」(私訳)

おれみたいな野郎は、もう息子でもない、と告白して、自分を吐き棄てるように、自分を悪んで平伏している。傲慢な手ばなしの自主、独立、自由の彼は、今や無条件降伏の碎けの魂になった。放蕩息子このあざやかな逆転、ひっくりかえり。

ルターはあの有名な九十五ヶ条の第一条で何と提唱したか。

「我らの主にして師なるイエス・キリストが『汝ら悔改め(回心)をなせ……』と言ひ給うとき、彼は信徒の全生涯が悔改め(回心)であるべきことを意味し給う」(私訳)

と。「悔改め」とは心の全面的転向の意味であることは別のところで述べた通りである。神に向つて絶えず向き直しをやってゆくこと、あたかもゆるれる磁針が絶えず新たに磁極を指し直すが如くであることをいう。危機的存在たる人間の在るべき在り方である。問題は然らばその磁極を指す磁性はいかにして得られるかであるが、そのことには今は触れないでおこう。ルターのあの有名な宗教改革への狼火となつた九十五ヶ条も、この磁性の問題を掘りさげることにおいてなお不充分であつたように思う。

ともあれ、この親仁は僕どもに命じて最上の衣を持って来させ、これに着せ、その手には指輪をはめ、その足には鞋をはかせ、さらには肥えた犢を屠らせ、饗宴を開いて、感謝と讚美にあふれ

た。次男坊は、あまりの恵みに手の舞い、脚の踏むところを知らぬ感謝と感激であつたろう。イエスはしばしば饗宴の譬えをもつて語る。それは彼自身が、ヨハネ福音書第六章で語っているように、生命のパンであり、生命の葡萄酒であるので、これを人々にわけ与えたかった。イエスの与える生命は聖霊そのものである。無条件のゆるしのあとに必然くるものは無限無量の生命、聖霊である。すなわち、立ち還りは饗宴に、回心は聖霊の恩沢にあずからしめる態勢なのである。

破れの文化文明

親仁はそのとき満悦していった。

「このわが子は死んでいた（も同然）、ところが生き甦つた（アネゼーセン）。失われていた、ところが見出された（ヒューレター）」（私訳）

源泉を離れた水溜りは腐る。乳房をさぐり得ない乳児は渴く。預言者エレミヤは叫んだ。

その神を替えた民があるか、

それは（偶像の）神々ではないか。

然るにわが民はその栄光を替えた、

役にも立たぬものに。

「汝ら諸々の天よ、このことを驚け、

おののけ、度を越えておそれよ！」

——とはヤハウェーの言である——

「そはわが民は二重の悪事をなした、

彼らは活ける水の源泉たる私を棄てた。

自ら井戸を掘った、破れた井戸で

水をもつていない。」（エレミヤ二・一二―二三私訳）

不信の国民、人間がつくりだした諸々の偶像を拝み、おまもりとしている国民。それは洋の東西、時の古今を問わない。そしてこの終末の様相の二〇世紀の文化文明は最も甚だしい偶像崇拜におちいつている。あらゆる種類の文明の利器においてあらわれている。核武装から享樂的諸現象に至るまで。そして偶像の最たるものは驕慢なる自己そのもの。これが偶像の根源である。驕慢なる自己はサタンに拝跪する者であり、謙虚なる自己は神に奉仕する者である。

たましいの源泉を離れ、忘れ、失い、侮り、嘲けるかぎり、民族も、国家も、社会も、個人も、どうにもならない。三次元的混沌から絶対次元の光明界への突入をなし、これとつらなりをもつのでなければ、ゆきづまりを来たす。真の平安はこの神仏の世界にたましいが呼吸するところにある。この縦の平安のないところに、横の平和は在り得ない。それはいつわりの平和に過ぎない。

イスラエルの宗教における平安、シャーローームは、元来、神の霊を賜って神の生命にあずかる底力あるつらなりの事態をいう（士師六・一二―二四のギデオンの記事参照）。

長男のバリサイ根性

夕暮になつて長男が野良仕事から帰つてきた。どうも様子がおかしい。楽しげな音楽と舞踏のひびきがあるではないか。このどんちゃん騒ぎは何ごとか。家僕の一人を呼んで、

「一体何だ、あれは？」

と訊いた。するとその家僕は言下に答えて、

「あなたのお父さんが来なさつたので、あなたのお父さんが肥えた憤を屠りなさつたのです。それというのも、弟さんを恙なく迎えたからです」(私訳)

これを聞いて兄は憤然として家に入ろうともしない。父の遣り方があまりにも不公平であり、一方的であり、非常識であると直覺したからである。これを見た父は兄をなだめ、弟を迎えるように勧めてみたが、どうにもならない。兄は次のように不平たらたつたのである。

「ぼくは何年もあなたに仕えて、かつて一度だつてあなたの言いつけを踏み破つた(バレールトン) ことがあります。それなのにあなたはぼくについてぞ小山羊一匹もくださつて、ぼくの友達と一緒に楽しませてくださらなかったじゃないですか。ところがこのあなたの息子、あなたの放蕩児が、遊女と暮して来たのに、彼のために肥えた憤を屠つてやりなさるとは！」(私訳)

長男の不平不満はまことに尤もなはなしである。百人のうち九十九人の兄が同じような判断で不平を言うだろう。ねたむだろう。うらむだろう。合理的判断、道義的判断からいって正当だからで

ある。この場合自己義認はいかにもよさそうである。ところが福音の論理はそうではない。福音の世界では自己義認、自己弁護は成り立たない。義認し、弁護する者がある。それは神自らでもあり、神と人との間に立つ唯一人の仲保者である。また仲保者のみ霊である。

しからばこの場合、長男は黙って我慢するよりほかになかったのであろうか。そうでもない。長男のとるべき態度があつた。それは父と同じ心となつて、このみじめな弟をあわれみ、「よくぞ帰つて来た。これからやり直したなあ。大きなマイナスを逆に大きなプラスにするのだなあ!」といつて肩を叩いていたわつてやるのが、本当に兄貴らしい在り方というもの。

だから父はこの兄に次のように諭している。

「子よ、おまえはいつも私と一緒にいるじゃないか。だから、私のものはみんなおまえのものだよ。このおまえの弟、死んだ（も同然だった）のが、生き甦り、失われたのが、また

見出だされたのだから、楽しみ欲ばないではいけないじゃないか」（私訳）

兄は父と同じ屋根の下で生活していた。それで父は兄と財を共有しているのだ、といっている。しからば兄は父と心も共有、即ち同心であるべきであつた。「父、父ならば、子、子たり」という言が論語の中にあるように、親子がそのように同心であるなら、この兄は父と共に弟をゆるし迎え、共歎すべきであつた。それができなかった兄はそれならどういう範疇の人間であらう。自己義認、これをパリサイ根性という。おのれを義として（どんなに客観的に義であらうと）他を見くだし、審く根性、人の罪過をあばいたり、指摘したり、第三者を批判して人格を傷つけたりするさもしい心。

その人はどんなに立派であろうと、品行方正、學術優等であろうと、それをイエスはパリサイとし、福音の敵とした。実に使徒パウロ自身がキリストにひっくりかえされるまでは、このパリサイの権化^{けいけ}であった。この兄もそんな根性であったから、自分の弟のことを「このあなたの子」という表現をつかつて、「私の弟」とはいわないのをみてもわかる。

この譬話^{たとえばなし}の構造

以上は有名な「放蕩息子^{ほうとうしこ}」と題されているイエスの譬話中の白眉^{はくび}である。譬話といっても、これは事実ありそうな、また人間の現実を实によく洞察し把握した構造をもっている。

兄は道義的、自律的な人間であるがパリサイ性が巢をつくつていた。父との同居はいかにもよさそうであるが、実は心の距離の遠かったことが弟の帰還によつて曝露^{ばくろ}された。

弟は自主独立的で一面結構のようだが、父との心の交りが断絶したところに大きなあやまりがあった。自由が慾心^{よくしん}とからんで遊蕩に墮^だし、破れ^{やぶ}れそのものとなった。しかし純情型であるので、魂^{たま}が砕けて回心を起こした。父から離れた弟は逆に兄よりも父に近くなった。否、実に父のふところに投身したのである。

父の弟へのかえりみは遠隔の地まで及んでいた。弟はそれを知らない。父は審判^{さばき}を乗り越えて、愛で包んだ。父の抱きに弟は救われた。箴言一〇・一二に「愛はすべての罪過^{つみ}を掩^{おほ}う」とある。そういう愛である。第二イザヤにもこうある、「至高、至上なる永遠者、聖者と名づくる者かく言い

給う、我は高き所^{きよ}聖き所に住み、また心砕けてへりくだる者と共にすみ、謙^{へりくだ}る者の霊を活かし、砕けたる者の心を活かす」(イザヤ五七・一五)。

キリスト・イエスは十誠を満たし得ない人間のまじめさをよく知っている。だから罪がどうのこののと、そんな詮索^{せんさく}はしない。唯一つのことをのぞんでいる。それは本来樂園喪失の破れ^{やぶれ}の人間が、この放蕩息子のように心砕けて全身をもつて立ち還^{かえ}ってくるだけである。立ち還る者を無条件に彼はゆるし、包み、抱き給う。罪はみんな私がひきうけた！ というのがキリストの大悲^{だいひ}である。彼の十字架である。しかもみたまを無量^{なまわ}に賜^{たま}つて愛のいのちに化して下さる。これが彼の大慈^{だいじ}である。

その後のこの放蕩息子^{ほうとうし}はどうなったか。放蕩息子は心の中でこういった、

「どうぞ私をあなたの雇人^{やといび}のようにして下さい」(ルカ一五・一九末尾)

その心はこうだ、「どうぞこんな奴ですが、お父さん、雇人のように使つて下さい！」。神は、キリストは、この棄身^{すてみ}の献身の心をいたずらにしたまわらない。世につまはじきとなり、自分も自らに愛想をつかせた奴を、無きが如き奴を、キリストはつかまえて、彼の僕^{しもべ}となし、力を与えて神の栄光の器とする。この放蕩息子はもはや肉の息子ではなく、霊の息子とされておのが天賦^{てんぷ}を無限に鍛えられ聖名^{みな}のためその後の生涯を燃やし尽くすのである。否燃えて尽くることを知らぬ白熱の靈火的存在となり、湧きて尽きせぬ靈泉的存在となる。このような人間をキリストの無者と申したいのである。人生はこの無者^{むじや}修行^{しゆぎやう}たるのみ。

盲人の叫び

(マルコ伝第一〇章四六、五二節、マタイ伝第二〇章一九、三四節、ルカ伝第一八章三五、四三節)

「ダビデの子よー！」

この記事は共観福音書に共通ののだが、マルコ福音書を基準として見ていくこととする。イエスがエルサレムに向つての最後の旅路で、ヨルダンの下流、海面下二四〇メートル、世界最低の位置にあるエリコという町を今しがた出て来たばかりの出来ごとである。

イエスを先頭にして弟子たちがこれに従い、ガリラヤから伴ついて来た女たちも少なくない。それに「大いなる群衆」が延々長蛇をなしていた。テマイの子、すなわちバル・テマイと通称されていた「盲目の乞食」が路みちのほとりに坐っていた。マタイ福音書ではもう一人いたように記されてある。もちろん物乞いをしていたことはルカの伝えるとおりであろう。大群衆が通りかかるのを耳ざとく知って、

「えらく賑にぎやかな行列が来たようだが、一体何だね」

といったような問をそこらの人に向つて発した。

「あれはナザレのイエスの行列だよ」

という答が返つて来た。これを聞くや、盲人は猛然と声を張りあげて、

「ダビデの子、イエス様！ 私をあわれんで下さい！」

と叫んだ。この叫びはイエスに自分を全的にぶちあてている。信仰そのものである。

「ダビデの子よ！」という呼びかけは、相手を「メシヤよ！」と呼ぶのと同じことで、メシヤはユダヤの王者を意味し、ローマ側にとつては、ローマ帝国に対する政治的叛逆者を暗に意味することになる。そのようなわけで、「ダビデの子」は危険な表現であるから、群衆はこのバル・テマイを禁めて黙らせようとしたのも無理はない。ところが盲人はそんなことにはおかまいなく、ますます叫んだ。

「ダビデの子よ！ 私を憫あわれんで下さい！」

声は一段と強くなった。その全身をふりしほった声を耳にしたイエスはちよつと立ち止まって、

「あの者を呼んでやれ！」

と言った。人々はそこで盲人を呼んでいった、

「安心しなさい。お起たち！ あんたを呼んでなさるよ！」と。

上衣を脱ぎ捨て

バル・テマイは、上衣を脱ぎ捨て、躍りあがって、声の方に向って勇躍突進して往った。

盲人のこの劇的な動作、「上衣を脱ぎ捨て、躍りあがって」、この一句にこの盲人の全存在が文字通り躍動している。これが信仰というものであるのだ。信仰行をこの盲人の姿に見る。信仰とは心理状態ではない。信仰とは全実存的な動きそのものである。

近づいて来た盲人に対してイエスは、

「何をしてもらいたいのだね」

と問うた。もちろん問うまでもなくイエスにはわかつていることではあったが。

「見えるようになりたい」

「先生、見えるようになりたいのです！」

と答えた。「見えるようになりたい！」地上の不幸で、目が見えないほどせつないことがあるのか。私も失明した母をもっていた。私事にわたって恐縮であるが、はやくも夫に死別した彼女は、女の細腕で五人の子女を育ててくれた。多年に亘る大變な^{わた}労苦であった。長兄政美が、大学を卒業して二年目、北京の日本公使館へ赴任した。一年も経たぬうちに彼の地で悪性腸チフスで^た仆れた。母はその遺骨を抱いての帰途、長年の過労と長男の急死のための失望悲嘆のあまり、黄海の船上で失明してしまった。時に母は五〇歳であった。爾後^{じこ}八八歳まで三八年間の失明生活をおくったが、失明当初は自殺したいと思ったこともあった由を、後になつて聞いた。「見えるようになりたい！」

は私の母にとつても心の奥底の沈黙の叫びであつたに相違ない。それを私に平素一度も洩らさなかつた母の忍耐を察して私は時折断腸の想いであつた。肉体の破れの中で失明は最も深刻なものであらう。

失明詩人ミルトンの『サムソン・アゴニステス』の詩句を引用してみよう。

「……だが、何はさておき、

失明、これをこそ私は最も訴える。

諸々の敵中で目が見えないとは！

鎖や土牢や乞食や老衰よりも悪い仕末だ！

神のいや先のわざなる光が私には消え失せている。

……

おお暗黒、暗黒、暗黒。真昼の光明のただ中でも

取りかえしのつかぬ暗さよ、全き日蝕よ、

そこには真昼の望みが全くない！」

（ミルトン『死闘者サムソン』、私訳）

さらに『パラダイス・ロスト』の中にもこういう詩句がある。

「……年ごとに

季節は帰れど、私には帰らない、
日も、夕、朝のうましき接近も
または春の花、夏の薔薇の眺めも
羊牛の群も、人のたふとき顔も。
むしろただ雲と消えやらぬ暗黒とに
囲まれ、人々の楽しき途より
断たれ、美しき知識の書に代へて
私には掻き消されし自然の業の
涯もなき白紙を供へられ、かくて
智慧は一つの門に閉めいだされて。
さればいよいよ寧ろ汝、天の光よ、
内に輝け、心の能力すべてを
照らせ。そこに眼を植え、あらゆる霧を
そこより掃ひきよめよ、そは人の目に
見えぬものを私は見また告ぐべく。」

(ミルトン『樂園喪失』第三篇四〇、五五行、藤井武訳)

イエスはこの深刻な「破れ」そのものたる失明のバル・テマイの悲願をハタと受けとめて、

「往け！ おまえの信仰がおまえを救った」

と言った。何たる權威！ 何たる力ある愛！ 盲人に向って直ちに「往け！」とは！ 間髪を容れず、言下に開眼し、この盲人は歩き出し、イエスの行列に加わった。

「おまえの信仰がおまえを救った」というイエスの発言は、その他の場合にもしばしば聞くところであるが、これは誤解してはならない。我々の信仰が何もので、その信仰の力が救をもたらした、などと解してはならない。

「おまえがこんなにも自分を投げ出して全的に神を、私を信じたので、私を通してはたらく給う神の力がおまえを救ったのだ」

という内実である。

跛者も、聾者も、啞者も、癩病人も、当時は病名が定かでなかった諸々の病者も。——その中には癌患者もあつたろう——実に死者をもよみがえらせたイエス。実に「すべての罪をゆるし、すべての病を癒す」実存者イエス。そのイエスは自分を何ものとも思っていなかった。父なる神を一切としていた！

肉眼の失明！ 深刻な肉体的な破れである。しかし盲人で心眼の開けた人もある。「番町で目あきが盲人にものを聞き」と詠われた塙保己一もその一人であつた。これに反し、肉眼があつても心眼の盲人はどれほどいるのだらう。神の国が来たときにその黒白はあきらかにならう。

第二相 砕け

取税人の祈り（ルカ伝第一八章九、一四節）

パリサイ人の祈り

エルサレムの北東部にあたるシオンの山に聳^{そび}える莊嚴な神殿は、エルサレム巡礼の憧憬^{せうけい}の靈所であつた。二人の者が祈るためにのぼつて來た。そのうちの一人は、凜然^{りんぜん}たる容姿の人であつた。敬^{けい}虔^{けん}な氣構えをもつて神殿の境内^{けいだい}深く内庭にまでのぼつて來た。そして心足^たらわれる面持ちで、立つたまま心の中で自意識強くこう祈るのであつた。声こそ出さぬようではあつたが。

「神様！ 私はほかの人たちのように強奪したり、不義なことをしたり、姦淫^{かんいん}したりするような者でないことを、或はまたこの取税人のような者ではないことを、あなたに感謝いたします。私は週に二回断食しています。私はおよそ私が取得するものの十分の一をお献

「げしております」（私訳）

この人は自分の縄ばりをしっかりと確保する性の男らしい。律法に通じ、律法的な義を定規で線（じようぎ）画するようにきちんと遵（まも）っている。女をややもすると不浄とみなし、すこしでも色っぽい女がいれば、けがらわしいと思ったりするほどにまで苦々（にく）しい顔つきの男であるようだ。また「この取税人」と言つて、並んで立つているとでも思った取税人のことを、心の中で批判して、こんなローマ官憲の手先になつて賄賂（わいりゃく）をつかつている取税人のような者でないのを感じ、といっている。また戒律に従つて週二回の断食を実行しているし、総収入の十（分の）一献金を励行している立派な宗教人である。内容からいうと、キリストの弟子となる前のパウロは、こういう型の人間であつた。

一体このような道德堅固な、そして宗教的戒律生活を重んずる人間は、この場合どういふ種類の人であつたか。イエスはこの譬話（たとへ）のこの人間をパリサイ人（びと）としてゐる。パリサイ人というのは、ヘブライ語では「ペルーシム」といつて「分離された人々」という意味で、一般に律法、特にレビ記の聖潔法などを厳守する宗教的党派で、祭司的貴族階級で政治的文化的な色彩をもつたサドカイ派と対立していた。パリサイ派の人たちは、「土民」（アム・ハアレッツ）すなわち律法をあまり知らず、戒律にこだわらない下層の庶民階級を軽蔑して、自分たちを「土民」から「わかたれた者」といふ自負心をもつてゐた。

そしてイエスはこの種の人間の特色を一言をもつて

「自分たちは義（ただ）しいのだと自認し、他人を軽んずる者たち」（私訳）

といっている。すなわち、自己義認、他者輕視の驕慢な、たとい客觀的に義であるとしても、それを自認し、他者を批判輕蔑する心根で、キリストにとつては耐え難きものであった。歴史的にいうと、紀元前二世紀頃に發したハシデイム「敬虔派」の流れに由来する一団の人々で、パリサイ派としての活動はヨハネス・ヒルカヌス（紀元前一三五—一〇四年）時代から開始されたものとされている。自己義認的宗教的エリート意識の彼らのことは、マタイ三・四、九・一四、一二・一一—一二、マルコ七・五、一一、一二、ルカ一四・一—六などの事例をみても、イエスといかに見解を異にするかがうかがわれる。

戒律遵守の「律法の義」、これはパリサイ派のチャンピオンであつたサウロ、のちのパウロが自ら誇つていたもので、彼がキリストの「福音の義」を受けてからは、前者即ち「律法の義」を塵芥となしたることによつて、その偽善さがハッキリされたものである。律法を遵つても、それは内心のまことのよろこびからなされていない。もし本當によるこびをもつて内側からまもられているなら自ら誇つたり、他をけなしたりすることはないはずである。律法そのものは固定した表現のものであるから、これに支配されず、直接その時その場で、実存的に神意を体受して、律法の根本精神を内側からとらえて、これをみatisたものはイエスの他にいなかったのであるから、イエスは律法を突破して、律法をみatisたのである。

律法に関して知的に詳かな律法学者と、戒律の実践を誇りとするパリサイ人とは、いずれもイエスの眼からは偽善者であつた。彼らは、マタイ福音書第二三章において、キリストから七度もた

たみかけて、

「偽善なる学者、パリサイ人よ！」

とこつぴどく攻撃され、さらには「盲目なる案内者たちよ」と叱責されている。読者は是非ともこの章をよんでみるがよい。イエスはそこでも、パリサイ人が「見えのために長い祈りをする」と指摘し、マタイ六・五では

「偽善者たちは人に見せようとして会堂や大通りの辻に立つて祈ることを好む」と言っている。

この譬話では、神殿の内庭に立つて、敬虔ぶった様子で、祈っている。その内容を見ると、感謝の仕方そのものが、何と自己宣伝的で、自己顕揚的であるか。しかもそれが神の前においてである。神はこのような祈りにひそむ偽善の心を受け給わない。

「十分の一の神殿奉納をしながら、律法の中で最も重要な公平とあわれみと忠実とを見のがしている」

等とイエスは彼らの本末顛倒の在り方を指摘した。

ところでここにいう偽善とは、言動そのものが、見せかけの偽りの善という消息のほかに、言動それ自体は一応立派であるが、実は真の善ではないというものである。それはパウロがガラテヤ書やロマ書で明言しているような「律法の義」（律法を外的に、結果的には立派に行っているのだが、内心からよろこんで律法の根本精神に即しているのではないやり方）であって、これは、自分の全心全霊的な

心根^{こころね}から発しているものでない故に、偽善なのである。キリストが「偽善なる学者、パリサイ人」と叱責^{しつせき}されたのはこれである。

ここにおいて明らかなことは、イエスが自己を何ものかとして自己義認する宗教的、道德的な心のあり方を偽善として蛇蝎^{だかつ}視した一事である。自己義認は必ず他を見くだす角度となる。否、さらにおそろしいことは、神に対しておのれを立てることになる。これはサタンの角度で、イエスの宗教、イエスの信仰と正反対の角度なのである。イエスにとって靈的高慢^{れいこうぼく}が最大の罪であった。イエスは自らを神の前に何者ともしなかった。そのことはいずれ他の項でじっくり語るが、私がイエスを無者^{むじや}というのはそのことである。この無とは、虚無ではなく、私心の無いこと、神の前に全くおのれの価値など無き者として自覚していることである。

ところが人間は誰でも主我的、利己主義的ではないか。自主自律^{しゅじゆりよく}ということとは道德的範疇^{はんにちゆう}としては結構なことである。人格者はそうでなければならぬ。けれどもこの自主自律が真に自我心から解放されているだろうか。残念ながら現実には自我心から真に自由な天衣無縫^{てんいむほう}の人はいない。自我にパリサイ根性が巣くっている。公害公害というが、もろもろの公害現象の素因^{そいん}になっているものは自己を害しているパリサイ根性という私害ではないか。人間のいとなみの文化文明のもろもろの問題の根本悪は、実はこの自我に巣くっているパリサイ根性であった。

イエス・キリストが烈火の如く責めたパリサイ根性こそ罪の罪たるもので、人間の原罪の根本性格^{きやく}といってよいのである。

取税人の碎けた心

さてもう一人の人は、このパリサイびとの傍らに來ているかと思いきや、はるか後方外庭のところに立ちすくんでいた。彼は目を天にあげることもなし得ないで、自分の胸をうつて、

「神様！ あわれんで下さい。この罪びと私を！」（私訳）

そのほかにもう言葉がなかった。彼はどういう人であったか。前者すなわちパリサイ人の祈りに出て來た「取税人」である。一般のユダヤ人に蛇蝎だかつの如くきらわれている取税人である。パリサイ人は、祈りの中でこの人をみくだして、「この取税人のようでないことを感謝します」といつている。こちらは自分を「こんな奴」、「罪びと私」といつて自分を否定し、自分を棄てて平伏ひれふしている。何たる対照（コントラスト）！

この取税人の生れつきの性情の中の欠陥は守銭奴しゆせんぬ的なものであったか、打算的な性癖であったか、ものほしさであったか、狡猾こつかうさであったか。それはどうでもよい。彼は誰よりも自分を知っている。自分で自分を吐き出したい氣持になっている。彼は神殿にのぼつて來たものの、やりきれない氣持で一步も中に入れなくなった。ただ神の大慈大悲だいじだいひにおすがりするほかはない。心は碎け、立っていただけもくずれかかる。

人間は誰の胸にも自己義認的パリサイ根性もあり、利己的な守銭奴的取税人根性もある。その他もろもろの罪の衝動が混在している。要するに自我という慾心が罪で、この自我が碎けるか碎けな

いかにおいて、人類は最も根本的に二分されると思う。

人種的差別、民族の相異、国家国籍のちがい、社会層の差異、主義、主張、思想、イデオロギーの対立、そういうものが天国か地獄かの相異にはならない。人間を本質的に天国か地獄かに分かつものは、その他、強弱でもなければ、貧富でもない。賢愚でもなければ、能不能でもない。美醜でもなければ、義不義でもない。聖俗、清濁でもなく、善悪ですらもない。その人のたましいが砕けるか砕けないかだけである。

もつともらしい祈りをもつて自己義認をした偽善者パリサイびとは義とされず、かえって、「神様、あわれんで下さい、この罪びと私を」と平伏しひれふのたましいとなつて叫んだ取税人が「義とされて（デディカイオーメノス）自分の家にくだつていった」とイエスははつきりと言った。

砕けざる義人（偽善者）パリサイ人は地獄ゆきとなり、砕けたる罪びと、取税人は天国ゆきとなった。イエスの鋭い人間批判と深いあわれみとをここに見る。このあとに

「おのれを高くする者は卑ひくうされ、己れを卑ひくうする者は高くせられる」

という言葉もつけ加えられてある。もちろんいわゆる低姿勢などというものではない。本当に平伏しひれふの心、砕けのたましいとなることである。

実にあのパリサイ人の首魁しゅかいであつたパウロは、復活のキリストに靈撃されて以来、「律法の義」を、偽善を、かなぐりすてて、「われは罪びとの首かしら」と告白して、神、キリストの前に平伏し、キリストの義をめぐみとして信受したのであつた。

キリストの砕け

砕けるか砕けないか、天国か地獄か、人類を二分する最大の区別！キリストは人間をそのどちらかに分ける。そして実は万人がこの砕けのたましいになることを本願しておられる。その本願のすがたが、砕けの極み、十字架のキリストなのである。そのことはキリストの「十字架」の項でつまびらかにしたが、端的にいえは、根源的には砕けきることのできない人間の罪を荷って、十字架で贖罪しよくざいしているのがキリストの砕けなのである。だからパウロが告白した、

「私はキリストと共に十字架された」（ガラテヤ二・二〇）

と。それは「私はキリストが私の自我というかたくなな罪を荷って、十字架の砕けをもつて贖罪して下さったので、はじめて本当に砕かれた。こうしてキリストの砕けを賜たまわったので、私自身は現実はどうであろうと、根源的に砕かれて、自我から自由になった」という意である。

砕けきれぬ「この罪びと私」のために、十字架のキリストが、砕けそのものを与えた。取税人の「われをあわれみ給え」のねがいは、十字架の贖罪のキリストにおいて聴かれているわけである。であるから、自分が砕けるか砕けないかということは、実は相対的判断であって、それはもはや問題でない。この「私」「自我」「罪びと私」は、あそこに、キリストの十字架に砕かれてあった、ということに気がつきさえすればよい。そこに砕けが与えられ、まことの平伏ひれふしとなり、罪から解放されている無者とされている。これが我々一人一人の告白となるまでは、真の砕けが根源現実とな

らない。キリストの砕けという恩恵の事実をわが根源現実として信受しつつ、つねに新たに相対的な我も砕かれてゆくというものである。このようなキリストのめぐみの玉砕ぎよくせきを信受しつつ、めぐみの玉成へと進みゆくのである。

悪人の悲願（ルカ伝第三章三九、四三節）

砕けざる悪人

イエスがゴルゴタ（髑髏さねこうべ）の丘の上で十字架に懸かけられたとき、同じく十字架の極刑に処せられた二人の悪人があった。二人はイエスの両側に懸けられた。一方の十字架の男は、イエスを罵ののしって言った、

「あんたはキリスト（メシヤ）ではないか。〔その権能で〕自分も俺たちも救ったらいいだろ
う」

棄て鉢ごうまんの傲慢な語気である。すると他方の十字架の男が、

「おまえは同じく〔死刑〕罪に定められながら、神を畏おそれないとは！ 俺たちはやった〔悪〕事の報いを受けているのだから当然なのだ。けれどもこの人は何の不善もしなかったのだ」

(私記)

と、たしなめた。

この悪人の言の中に一つの重要な句がある。それは「おまえは神を畏れな^{おそ}いとは！」の一句である。この悪人はいまや神を畏れている。神の前に砕かれた魂となつてゐる。人間の悪の極限を突き抜けて、忽然^{こつぜん}として神に向つて心を回^{めぐ}らした。魂を翻^{ひるがえ}した。これが回心^{かいしん}の相^{すがた}である。

してみると、この両側の十字架の二人の男において、人間の二つの相が歴然と顕れている。一方は、畏るべき者を畏れぬ傲慢な人間の相^{すがた}。他方は、畏るべき者の前に平伏^{ひれふ}している謙虚な人間の相。人間の善悪、賢愚、強弱、美醜、といった相異は相対的なものであるが、絶対者に対して魂が砕けるか、砕けないかは、人類を二分する根源的な、次元的な、決定的な相異である。信、不信をわかつものは、魂が砕けるか、砕けないかにかかつてゐる。神を信ずるとは、神のまゑに魂が砕けるとき、はじめていい得ることなのである。そのようなわけで、キリストの十字架の両側の二つの十字架の男において人類を二分する明確な質的相違が顕然とあらわれた。この二相は人類の歴史の終末までつづく。

この二人が、殺人、姦淫^{かんいん}、窃盜、偽証、どのような罪を犯したにせよ、その種類、軽重が問題なのではない。多くの人は法律上の犯罪者ではない。しかし、いわゆる法的な犯罪者でなくとも、いかに多様の犯罪的行為が人間社会には混在していることであろう。人間社会の悪業は、昔の封建社会においてはもちろんのこと、法治国においても権力、徒党、地位、財力、腕力、その他さまざま

な手だてをもつて行われている。矛盾、不合理、不正、不義、無秩序、勝手気まま、だまし、あざむき、ねたみ、あらそい、等々、この世は態のいい地獄といつてもいいだろう。あきらかにいつわりの平和である。どう見ても救を要する。

救を要しない人間はどこにもいないはずである。だから万人は宗教に最も深い関わりをもっているわけなのである。それを宗教は最も縁遠いこととして無関心でいるのが現状ではないか。逆に言えはそれだけ救を要するのである。

砕けたる悪人

十字架の極刑を受けるほどの悪業をした二人の悪人の中、一人は傲然としてイエスを譏ったが、他の一人はイエスにこういった。

「イエスよ、御国にお入りなさるとき、（現行訳、「み国の權威をもつておいでになるとき」）こんな奴ですが、憶えて下さい！」（私訳）

惨憺たる人生を送ったこの者が、いまわのきわに十字架の苦しみのどん底から発した全的に砕けた心の悲願、血の切願であった。孤独と絶望！ 悔恨と悲嘆！ 地獄の劫火が待っている終末の一瞬。地獄の鬼が堕ちゆくおのれを呑みこまんと口を開け齒をむき出しているおそろしい光景が目についたでもあらう。

しかし、イエスはこの悪人の断末魔の一言をハタと受けとめた。彼は何と答えたか。

「私は本当にお前に言う、今日、私と一緒に、おまえはパラダイスだ！」（ルカ二三・四三私

訳）

地獄ゆきの下降のからだだが、忽然として天国ゆきの上昇のからだとなった。地獄の鬼の口は徒らに空^あいていた。この悪人は誰よりもさきにイエスと共に天界に突入した。

キリストの福音はいかなる人をも、たましいが碎けて立ち還^{かえ}るならば、無条件に救いあげる。善人とか悪人とかいう差別がどこにあるか。誰でも救いを要する人間ではないか。神の前に誰が、自分^{おれ}は正しいとか善いとか清いとかいって立ち得るか。神の聖法に即していると誰が揚言^{ようげん}できよう。この「十字架の悪人」のように、

「こんな奴ですが、せめて憶えて下さい」

と言^いつてするほかに言^{ことば}があるか。

十字架上のイエスのこの言以上に慰め深い言はない。地獄ゆきが天国ゆきに一変する歓喜以上の歓喜が世の中にあるか。地上のどんな歓びも、パラダイスに迎えられる歓びにまさるものはない。然^{しか}り、日々^{これ}は天国であらんがために、ただ碎けの魂で生涯を貫いてゆきたいのみである。

「今日、私と一緒に、おまえはパラダイスだ！」

このようにキリストから呼びかけられつつ、毎日毎日を歩くにまさる生活があるか。人生の暗雲、風雨、酷暑寒冷、いかなる現実にもめげず、春の野を往くが如しである。そういう悲願靈願で、このキリストの本願に助けられつつ進んで往こう。

第三相 突破・突入

深みへ漕ぎ出でよ！（ルカ伝第五章一一一節）

「預言者はおのが郷、おのが親族、おのが家の外にて尊ばれざることなし」（マルコ六・四）
とイエス自ら故里ナザレのために嘆き、故里を立ち出で、ガリラヤ湖北岸のカペナウムで、かつは福音を説き、かつは病を癒したり、悪鬼を逐い出したりして、靈肉渾然たる伝道をしていた。

我々が見のがしてはならないことは、イエスがいかに、日が暮れてから、また朝まだきに、時には夜もすがら、深く祈ったかということである。イエスは祈りにおいて聖靈の力を深く宿したのである。み霊が身に満つることなしにイエスは福音を説かない、癒しをほどこさない。力ある言、力あるわざはみな聖靈の力による。

「わが言は靈なり、生命なり」

とイエスが言ったのは正に彼がみ霊の人であつたからである。

カペナウムの群衆がイエスをとどめおこうとしたとき、イエスは言った。

「私はまた他の町々にも神の国のことを福音せざるを得ない。私はこれがために遣わされたのだ」(ルカ四・四三、私訳)

そう言つてガリラヤ地方のシナゴーク(ユダヤ教の会堂)で、または路傍で、野辺で、湖畔で伝道をした。

またあるとき、それはガリラヤ(ゲネサレ)湖畔であつたが、群衆が磁石にひきつけられる鉄くずのようにイエスのまわりに蟻集して神の言を聴いていた。群衆の波でイエスは汀に押し出されそうである。すると渚に二艘の舟が寄せてあるのを彼は見た。漁人たちは舟から出て来て網を洗つていた。イエスはその一艘であるシモン・ペテロの舟に乗り、ペテロに少しく舟を押し出してくれと頼んだ。イエスは舟板に腰を卸して舟の中から群衆に道を説いた。語り終るとペテロに言った。

「深みへ漕ぎ出でよ！ 網をおろして漁れよ！」(ルカ五・四 私訳)

と。突如たるイエスの勧めに驚きながら、ペテロは答えて言つた。

「先生(エピスタータ)、夜通しやってみたんですけど、空らつきし駄目でした。だけれど、お言葉通りに網をおろしましょう！」(ルカ五・五 私訳)

ペテロは漁りにかけては多年の経験を積んだ玄人漁夫である。漁りのことにかけてはイエスといえどもかなわなはずである。昨夜の時化から判断して、今日漁獲があるとは考えられないから、

網を洗つて、しばらく様子を見ようとしていたのだろう。

しかしペテロが、素人なるイエスの言葉を率直に受けとめ、「だけれど」といって、自分の玄人判断をも突破して、直ちに順つたところに、信仰の大切な気合があつた。しかもそれは「深みへ漕ぎ出でよ！」である。

信仰とは、自分の過去の経験、一般の常識、状勢の判断をも、ある時点においては、換言すれば、神意の動く時点においては、突破し、深みへと大胆に突入することである。そのためには、欲心、私心を脱する祈り心が大切である。

イエスの言を信受し、直ちに信従し、深みへの行動に出た。これが自己突破、神意突入である。果然、大漁で網も裂けんばかりであつたので、他の一艘をも差し招いて援助を求めた。魚は二艘の舟に満載され、しかも舟が沈まんばかりの大漁であつた。

シモン・ペテロはこのありさまに驚嘆して、イエスの膝下に平伏して言った。

「どうぞ私から離れて下さい。私は罪ある者です、主様！」（私訳）

素人が玄人に勝つた。ペテロはもちろん、この素人がただの素人でないことはわかつていた。イエスがケタちがいな霊の人であることをつらつら見て知っていた。ではあるが、あまりの大漁に全く驚嘆したのである。そしてこの大漁をただよろこんだのではない。大漁という現象、徴を見てこの徴を起こしたその人に対して驚異と畏敬の念に打たれ、平伏したのである。ゼベタイの子でシモンの友であるヤコブもヨハネも同じく驚嘆した。ルカはしかし大漁に驚いた、とのみ記して、この

徴を起こしたこの霊人に驚いたとは記していないが、筆の奥は、大漁ではなく、大漁を起こした霊人を指すと見るべきであろう。

おのれを罪ある男と自認し、平伏したペテロの態度はいかにもペテロらしい。

イエスはペテロの正直な心根を受けとめて、

「^{おそ}懼れるな、おまえは今から人を^{すな}漁ることになるぞ」(私訳)

大漁という徴は、ペテロを、そして他の弟子たちをも、時が来たら、人を漁る伝道者にするぞという将来を見通しているイエスの預言的な徴であったのである。

「だけれど」といって自己を主張して神意を拒む者は亡びてゆく。「だけれど」といって自己を否定し、つねに新たに自己を突破して、神意に即く者は栄光の道を往く。

このときペテロを始め、ヤコブもヨハネも、

「一切を棄ててイエスに従いて往った」(ルカ五・一一)

「一切を棄てて」、この語の奥義は、自己を棄てて、ということである。自己を棄ててとは、おのれをキリストの中に投げ入れてということである。それが本当の現実となるには、まだ時間を要した。というのは、聖霊の降臨を俟_{まち}って始めて、これが本当の現実となったからである。

桑の木によじのぼる（ルカ伝第十九章一―一〇節）

本文

ルカ伝第十九章

¹さてイエスはエリコに入つてその町を通つて往つた。²するとそこにその名をザアカイという男がいて、彼は取税頭で、金持であつた。³彼はイエスがどんな人であるかを見たいとあがいていたが、なにさま背丈が低いので群衆のためそれがかなわなかつた。⁴彼はイエスを見ようと前方に走り出て桑の木（スコモレア）によじのぼつた。⁵イエスはその場所に来たので見あげて彼に言つた。「ザアカイよ、急いで降りてきなさい。今日、私はあなたの家にきつと泊まるからね」⁶そこで彼は急いで降りてきて喜んでイエスを迎え入れた。⁷するとみんなはこれを見て^{つばや}吹きあつて言うには、「イエスは罪びとところに泊まり客となつて入つていった」⁸ザアカイは立つたまま主に言つた、「主様、誓つて私の財産の半分を貧しい人たちに施します。またもし誰かから不正な搾取^{さくしゆ}をやつていましたなら、四倍にして返します」⁹イエスは彼に言つた、「今日、救いがこの家に來た。彼もまたアブラハムの子なのだから。¹⁰人の子が來たのは、

失われた者をさがし出して救うためなのだから。」（私訳）

エリコのザアカイ

このザアカイの物語は、ルカ福音書特有の記事で他に並行記事はない。

イエスがエルサレムに上る途次とじにおいてエリコ「棕櫚の町」しゅろ（申命記三四・三参照）を通り過ぎようとした。エリコという町は、当時ローマの一州であるところのユダヤの東辺の相当重要な町で、今でいうと税関みたいなものがあり、その税関の取税人の長のザアカイという名前は、旧約から来ていて、「純潔」「潔白」という意で、税吏ぜいりは当時ローマの官憲かんけんの手先となっていたので、ユダヤ人には非常に嫌われ、そして、自分の懷を肥やしているいわゆる「取税人」で、「富者」と特に書いてあるわけである。イエスの如何なる人であるかを見ようと思っただけども、背丈が低くて群衆のために見る事ができない。イエスのことはすでに、うわさで充分聞いているので、

「どんな人だろう」

とにかく、一代の預言者イエスを見ようと思っただけである。

ところが、このザアカイという人は、普通の取税人とは、ちょっと人物がやはりどこか違っていったと思われる。取税人の長であるならば、もう少しその振舞も、勿体ぶるわけだけれども、それとは反対に、「前方に走り出て、桑の木によじのぼる」といういかにも率直な人柄だった。

イエスとザアカイの出会い

当然、キリストがエルサレムに上る時には、もちろん、ガリラヤの方から、いわゆる「原始使徒」たち、ほかに弟子たち、沢山の女たちが随行して来たし、過越の祭の時であるから、沿道に多くの群衆がうごめき、半分物見高に集まって来てイエスを迎えたわけだろう。ところがイエスがなかなか見えない。それでザアカイは前方に走り出て桑の木によじのぼった。いわゆる昔の大名行列だったら、上からなんか見ようものなら大変なことであるが、このザアカイはこの預言者を迎えるのに、「桑の木によじのぼる」というような人の意外の行動に出たわけである。この桑の木というのは預言者アモスが栽培していたものと同じで「いちじく桑」という植物で、かなり大きくなるたちのものであった。日本のいちじくに似てもっと太くなるものの由（松村義敏著『聖書の植物』五〇頁参照）。「イエスはその場所に来たので見あげて彼に言った」とあるように、イエスの方が逆に、ザアカイを仰ぎ見た。樹の上によじのぼった奇人がいたので。

「ザアカイよ、急いでおりてきなさい。今日、あなたの家にきつと泊まるからね」

さあ、どうしてこのイエスはザアカイという名前をご存知であるか。あるいは、ザアカイという人物のことを聞いておられたのかも知れない。けれども、この木の上の人がザアカイであるということ、どうして知ったか。まわりの人たちが「あ！ ザアカイだ」といつてさわいだかも知れない。とにかく、イエスはいきなり名を呼んで、「急いで降りてきなさい。今日、私はあなたの家にきつと泊まるからね」と。ザアカイは急いで降りて、喜んでイエスを迎える。ところが、人々がみ

なこれを見て^{つふや}呟いていうのに、「イエスは罪びとのもとに泊まり客となって入っていった」。一般の判断からいうと、取税人の長などというのは、罪びとという部類の中に入る私腹を肥やしている連中、このザアカイもその一人である。そんなけがらわしい人の家に入って客となるとは、とあやしんだわけである。

イエスの言の中で「きっと」と私が訳した言は、ギリシア語では「デイ」という語で、「ざるを得ない」という強い言である。イエスという人の言行はすべてこの「ざるを得ぬ」天的必然性、靈法に即したものであることに深く注意しなければならない。

さてザアカイの「前方に走り出て桑の木によじのぼる」という行動は、身分も、体裁も、他人のおもわくも考えず、イエスという人物を見たさの一念、一切の他念を捨ててしまった一念の故であった。

桑の木によじのぼる

集会でも、教室でも、前方に出て来ないで、うしろの方に席をとるのは、心の態勢がわるいように、この福音というものは、「前方に走り出て、桑の木によじのぼる」という態勢でぶつかって来なければ駄目なのである。信仰とはこのような全身の投入、突破、突入である。ザアカイのこの行動が彼の信仰告白であった。イエスを見たいの一念の中に信仰の核があった。

「求めよ、さらば与えられん」とは、このような全身的、全存在的な求めのことである。町から帰

ってくる母親を待ちわびて、姿を見るや否や「お母さん！」といって走り迎える幼児の心、幼児のあり方、分裂のない求め。イエスが「幼児の如くならなければ」といつているのがこれらである。イエスがザアカイのこの気魄を非常に喜ばれたわけである。人々に嫌われている取税人の長ザアカイであればこそ、かえってその人の中に光っている大切なものをハタと見ぬき、そこからその人を救うのがイエスのイエスたるところである。

人生の決定的瞬間

人生には、決定的な瞬間がある。その瞬間を捉えるか捉えないかが、その人の生涯に大きな開きを来たすものである。そういった決定的な瞬間を棄身でつかまえる。全身を投じて何がどうなっても、その瞬間に立ち向う。そういった気構えで集会に立ち向ってくる人は一回の集会で非常な飛躍をしたり、回心を起こしたりする。こちら一回の集会を棄身の態勢でやっている。非連続の連続をもって前進しつつある。み霊にあつての火花の散る集会はやめられない。パウロが「やむを得ざるなり」（コリント前書九・一六）と言ひ、「福音を宣べ伝えざれば 禍である」（同節）といった気持が私なりにわかる。語る者も聴く者も、ザアカイとなつて、キリストに肉迫するわけである。

「今日、きつと泊まるからね」

「急いで降りて来なさい。今日、私はあなたの家にきつと泊まるからね」

こんな言葉をいきなり一面識もない人に発し得る者は、普通の人ではない。これは本当につきぬけた愛の人の言である。ザアカイは、自分が求めた以上のこの意表を越えた言を聞いて、全く驚倒せんばかりのうれしさであつたろう。あやうく桑の木から転落せんばかりであつたろう。キリストの本願は我々の悲願をはるかに越えたものである。実に悲願を貫いて成就せしめる本願の劫力（ごうりき）を大胆に信受、体受することを真の信仰とはいふ。

イエスは木の上のザアカイを一目見て、

「ああ、この男は本当にいつわりのない魂だ、救わるべき魂だ」

と直観したのであろう。人間は皆五〇歩百歩。仕方のない者である。けれども大事な一事は、その人がある瞬間に、本当にあるがままの自分を赤裸々に投じ出して、ひたすら絶対なるものに体当りするかということである。たとえば、あるがままの、分裂のままの自分をそのままぶち込むことが、分裂のない突破・突入という逆説的真相である。いわゆる真実でも、力（りき）んだ信仰でもない。そこにはしこりもこわばりも、つくろいも整いもない。破れであり、砕けであり、全的突破であり、突入である。行き詰り、苦しみ、悲しみ、落胆、何であつてもいい。そういう破れをさらけだしてキリストの中に倒れかかったらいい。キリストは必ず、きつと迎えて下さる。抱きとめて下さる。俄然（がぜん）力が来る。みたまの力である。キリストは心身一切に対する万能薬である。無代価で最高の薬が与えられるのに、人々はこれだけを遠慮して受けようとしない。何たる損害ぞ、何たる愚かさぞ、何たる躓（つまず）きぞ。み霊の味を知った者は、これを何ものとも替えようとは思わない。

「私は今日、あなたの家にきつと泊まるよ」は「泊まらざるを得ない」であるように、ルカ一三・三三の「今日も明日もその次の日も、私は進み行かざるを得ない」である。ルカ二四・二九ではエマオへの旅人たちが復活のイエスに「私たちと一緒に泊まり下さい」といっている「泊まる」と同じ語であり、ヨハネ一五・四五の「私につながっていないさい」も、場合によっては「私のもとに泊まりなさい」といって可い語である。そのようなわけで、キリストの愛の迫りは泊まりとなると申して可い。ペテロもヨハネもパウロも聖霊を受けてからは、み霊のキリストをふところに迎え入れ、泊まっていたいた人たちであった。キリスト者とは何か。キリストをうちに宿している者である。ロマ書八・九にも原語は少しちがうが、「み霊があなた方の内に宿っているなら」とあり、

「キリストのみ霊を持たない人がいるなら、その人はキリストのものではない」

と同節でパウロは明言している。どんなに聖書の研究ができており、神学的に理解できていても、現に十字架の贖罪にあずかり、み霊のキリストを宿していないなら、これは聖書がいうところのキリスト者ではない。み霊が宿していなければ、キリストの生命がないからである。パウロが「キリストわが中に」「われキリストの中に」という消息を書翰の中で百回以上も語っているのは、この現実である。

眩き

ザアカイが急いで降りて来て、喜んでイエスを迎え入れた。「するとみんなはこれを見て眩きあ

つて」とあるように、この「眩き」というのが、どこの世界にもある。これは、聖書によく実例が示されているパリサイ的な批判がましい人たちの心のうごきである。己れを義としている連中がこの「眩き」をやる。眩きは妬みとも通ずる。この「つぶやき」や「ねたみ」が人間の心の中に巣喰う癌のような毒素である。「つぶやき」「ねたみ」「あらそい」が精神的公害とでも申したい毒素である。世の平和を害すること測り知れぬものである。人間の団体、組合、学校、会社、協会、教会、集会、何であろうと人の群れているところ、そこに眩きがあり、そこに妬みがあり、そこに争いがある。人間は、宗教的救済なくしてはどうにもならぬことほど、あきらかなことはないという現実である。

キリストからの近づきとキリストへの近づき

ヤコブ書四・五以下に、

「神は、わたしたちの内に住まわせた霊を、ねたむほどに愛しておられる」とあり、

「神は高ぶる者をしりぞけ、へりくだる者に恵みを賜う」(同四・六)

とある。霊は人間存在の最高最深の領域にある。であるので、これが神の世界に対してアンテナを向けていなかったら、神との霊交はできない。この一番大切な操作を忘れて、名誉だとか、地位だとか、財産だとか、健康だとか、学問だとか、事業だとか、芸術だとか、いろんなものにとらわれ

ている。それらはみんなもちろん悪いものではない。どれも結構ではある。ただ、人間が造り出したどんな立派なものも、どんな美しいものも、どんなに望ましいものも、一人の人間の靈魂をどうにも出来ない。靈魂がそういったものに売られては駄目である。

人間界のどんなものに捉われていても、神は妬みをおこし給うという。旧約聖書がそのことを語っている。

「われヤハウェは妬みの神である」(申命記五・九)

と。「妬みの神」とはエール・カンナーという原語であるが、これは「熱愛の神」と訳してもさしつかえない。神は我々の靈を慕い求めている。それがサタンや人間の文化文明に売られては、神は妬み給うという熱愛である。

人間の側でいうと、人間のたましいは、いかなる文化文明の有形無形の財をもつてしても、それで死んでも死なないほどの生命にみたされることはない。してみると、たましい(靈)というものは、実は神に最も飢え渴いているわけなのである。靈は靈の窮極的実在に対して根源的な飢え渴きをもっているわけなのである。

それゆえ神の慕い求めに對して、人間の慕い求めで応えるのが最も自然なたましいの態勢なのである。そのような慕い求めが即ち祈りなのであって、たましいは実は祈らざるを得ぬようにできているのである。祈りを忘れたたましいは、歌を忘れた鳥のようなものである。

キリストが、

「天国は近づいた、心を回らせよ」

といわれたのも、天来の神の呼びかけ、天国の到来、本願の成就に対して、たましいの目ざめを警告されたわけである。

エレミヤ記三〇・二二に、神の言としてこう書いてある。

「私は彼をわたしに近づけ、私が彼に近づく」

と。しからば、人間の側から、何者に対してよりも、神に近づくのが、人間の第一義的な在り方ではないか。近づいて来たのは神であつた、キリストであつた。これに生命賭けの態勢で近づいたのがザアカイであつた。そこにザアカイの救いがあつた。

私たちも限りなく、このキリストの中に、みたまのキリストの中に、聖書の中に、福音の中に、近づき、進み、入ってゆくだけである。突入である。立場も、主義も、主張も何もない。いわゆる信仰でもない。信入とでもいった方が適切なようだ。

私はキリストの十字架の贖罪で、自分の側に何もない者、無者にされた。これは信仰の根源現実である。するとみ霊たまがのぞんで来て宿つて下さる。かくて無者は無限無量者の質を賜るたまわ。ふしぎな現実である。このことは別項「霊の貧者」で詳述した。私は、カトリックでもプロテスタントでもない。キエルケゴールではないが、使徒たちと同時的である、否、同質的である。使徒たちが証言している福音、キリスト直結の事態に無限に深く信入してゆくのみである。

「今日、救いはこの家に来た」

このようなイエスに出会って、ザアカイは先ず自分の前非ぜんびをいたく悔い、貧者への施しや、搾取の行為の代償を誓った。そういう砕けた心をイエスは無条件によるこんで、

「今日、救いがこの家に来た」

と宣言した。人々に蛇蝎だかつのようにきらわれている取税人たるザアカイも、本来アブラハムの末である。信仰の芽生があれば、血肉ではない霊のアブラハムの末なのである。

「人の子が来たのは、失われた者をさがし出して救うためである」

この場合のイエスはまだ十字架にかかつてはいないイエスである。十字架以前のイエスが「今日、救いはこの家に来た」という。イエスは神学者のような考えでものを言わない。イエスそのものは十字架も聖霊もみんな渾然と身につけておられるからである。我々もキリストを迎え入れるとき、何らおそれはなくなる。十字架、復活、聖霊の主を渾然と体受することである。かくて本当に救われ、生かされてゆく。そういう不思議な世界である。

第四相 内住・常燃

まことの葡萄の樹（ヨハネ伝第五章一～九節）

本体と影像

ヨハネ一五・一、

「われはまことの葡萄の樹ぶどう、わが父は農夫なり」

イエスは、自分がまことの葡萄の樹だという。それは、例えば、私が机上に飾られてある菊の花を見て、「私が本当の菊の花です」というのと同じことである。それはちよつとおかしいではないかと思われる。「私はこの菊の花のようなものだ」というならわかるけれども。ゲーテの『ファウスト』第二部の最終の一段の詩句に、

„Alles Vergänglichhe

Ist nur ein Gleichnis."

「すべてうつろいゆくものは影像に過ぎず」

というのがあつた。現世において我々が見、聞き、触れるこの移りゆく儚^{はか}なきものは、影像、似姿にすぎない。本体界の本体がこの現象界に投影しているにすぎない、本体は彼岸にあるというのである。どんなに鮮やかに水に映っている鳥の影もそれは影であつて、鳥は空を飛んでいる。プラトンもそういう角度から現象界を見ていた。

ところがイエスは、「自分が本ものの葡萄の樹」で、普通の葡萄の樹は影像だといわんばかりの語調である。イエスはまことに、天界のロゴス・キリストが、現象界にサルクス・キリストとして、受肉のキリストとして現象していたわけである。それで

「我はまことの（アレーティネー）葡萄樹なり」

といった。本体界の實在（エッセンシア）が現象界に実存（エクシステンシア）として投じ出でたといふことは、まことに「日の下に新しきことなし」（伝道一・九）という事態を破つた新しきことであつた。イエスの「我はまことの葡萄の樹」とはそういう事態の表現として実に重大な内実のものである。自然界の葡萄の樹は枯れることがある。けれどもイエスという葡萄の樹は枯れない。

これと同じようなことをイエスはサマリヤの女に語つた。即ちヤコブの井泉^{いずみ}がどんなにすばらしい井泉であろうとも、ヤコブの井泉の水を飲む者はまた渴く。けれども私が与える「活ける水」を飲むものはいつまでも渴くことがないと。これはイエス自らがまことの井泉であることを語つてい

たわけである。即ち彼は靈泉で、その水は聖靈であることを示したわけであつた（ヨハネ四章参照）。

これらはみんな、本体界の根源現実を現象界の現実をもつて表現せんとしているわけなのである。イエスという人は、彼自身が、神を体現している神の「言」^{ことば}であり、神の「業」^{わざ}である。それゆえ、

「我を見し者は父を見しなり」（ヨハネ一四・九）

といった。このような啓示的事実をどうしたら受けとれるかというなら、それは単なる理解でも、認識でも、研究でもない。信仰、信受、体受のほかあり得ない。聖書の世界は信仰的応答、行為的認識によるほかはない。

神は農夫

「わが父は農夫なり」

イエスにとつて神は親しい父であり、聖なる靈であることは、同じくヨハネ福音書第四章のサマリヤの女との会話でわかる。ここでは農夫であるという。葡萄園を栽培する農夫のこと、葡萄園のことは、著しい例としてはイザヤ書五・一―七がある。また創世記九・二〇―二七を見ればノアが農夫で葡萄園を作つたとある。その他葡萄は橄欖^{オリブ}や無花果^{いちじく}と共に聖書の所々方々に散見できる重要な植物であることは周知のことである。

農夫は季節や天候をわきまえ、土壌の成分性質を知り、環境地勢に順応していろいろ^{かんばい}按配するすべを心得ている者。そのような農夫として神にイエスは全幅の信頼を置いている。

内住

「およそ我に在る枝にして果を結ばざるは、父これをとり除き、果を結ぶものは、更に果を結ばんためにこれを潔め給う」(ヨハネ一五・二)

本当に「キリストに在る」者なら、果を結ぶのは当然であるが、「キリストに在る」という在り方が、観念的であるか、霊的であるかで、果を結ばぬか結ぶかにわかれることをキリストは語っておられる。葡萄の幹につらなっている枝でも、日あたりが悪かったり、虫に喰われたり、害虫が枝の中にもぐりこんだり、風通しが悪かったりすれば、果を結ばないわけであるから、人間の現実でも、自分の信仰の在り方が、環境や運命や誘惑などでぐらいついたり変ったりすれば、果を結ばぬことはいくらでもある。

「キリストに在る」ということが本ものであるとキリストの生命がはたらくから枯死することはない。そういう枝は果を結ぶから、キリストはいよいよ霊生をもつて潔め給う。

「汝らは今や潔し、わが汝らに語りたる言に因りてなり。我に居れ。さらば我も汝らに居らん。枝もし葡萄の幹に居らずば、自ら果を結ぶ能わざる如く、汝らもわれに居らずばまた然り。われは葡萄の樹、汝らはその枝なり。我に居る者あらんか、我も彼に居らん。彼は多くの果を結ばん。我を離れんか、汝らは何ごともなし能わず。

誰にてもわれに居らずば、枝の如く外に棄てられて枯る。人々かれらを集めて火に投げ

入れ、彼らは焼かるるなり。汝ら我に居り、わが言葉汝らに居らば、何にても望むがままに求めよ、さらば汝らに成らん。汝ら多くの果を結ばば、わが父これによりて栄光を受け給う。しかして汝らはわが弟子と成らん。父の我を愛し給いし如く、我も汝らを愛したり。

汝らわが愛に居れ！」（ヨハネ一五・三―九）

以上のキリストの言には「居る」という語がたたみかけて出ている。原語「メネイン」は、あるものの中に「留まっている」「宿っている」という意味の語であるから、枝が幹につらなつて不可離のように、自分がキリストの中に宿ること、キリストがわが中に宿ること、泊まり込む非常に生命的な親しみ深い言葉である。日本人にはよくつかめる事態である。信仰とはそのようにキリストの生命の中に宿り、泊まり、住むことで、常住的な事態である。

それではそれはどのようにして可能か、ということになると、どうしても深い祈りを要する。祈り入ることを要する。祈りとはおのれをキリストの中に投じ入れることである。それはどうして可能か。それはキリストの門を通ることを要する。キリストの門とは何であるか。それは十字架という門である。こういう漢字はないが、門構えの中に十の字を書いたらハッキリするだろう。十字架は罪のわれを無条件にゆるして通らせて下さる門である。

「われは門なり」

とはそういうことだと私は思っている。平伏して無条件にこの門を通らせていただと、その先は聖霊の気の漂うすばらしい「緑の野べ」「憩い（い）の水（み）ぎわ」で詩篇第二三篇さながらの現実である。

すなわち、わが首に聖靈の油がそそがれ、われという杯は聖靈の水であふれるのである。このように、十字架を真に受けとると、必然聖靈のバプテスマにあずかることになる。これを祈りににおいて深く体受することである。聖靈を賜らずして、「我キリストの中に泊まる」とか「キリストわが中に泊まる」とか、申しても、それは空言にすぎない。観念的な信仰ではこの靈的な現実とは本ものにならない。

ペンテコステにおいて弟子たちや女どもが一同となって心を合せ、ひたすら祈り続けていたところに聖靈が臨んだように、心を合せて祈る群に聖靈がのぞむ場合が多い。それでキリストがここでも「汝ら」といつて複数で語っておられるわけである。エクレシア（召団、召されたる者たちの群、普通「教会」と訳しているが）とはそのように聖靈をうけた群のことであることを銘記すべきである。歴史的にはそのようにキリストを首とし、聖靈を受けた群を体とした構造の自覚で、この体がエクレシアである。それで「われキリストの中に」という個的な自覚が同時に、我らは互いにつらなる枝であるという連帯性と一体になっている。愛はこのように、縦と横との両面をもっているから、キリストが、神を愛することと、隣人を愛することとは一つだと言明している所以である。もちろん聖霊を受けるということは深い祈りににおいて個的にも体験できるが、——預言者も使徒もそういう場合があつた——聖霊は必ず愛としてはたらく霊である。

かくてキリストとの交り、内住関係は聖靈のバプテスマを通して、聖霊の内住をもって、現実となる。聖霊は火にもたとえられる。天来の愛の火であるから、この火はいかなる人生のあらしにも

消えない、祈りをもって神・キリストと交っている限り。内住の霊、常燃の火として聖霊を有つことは実存の最も中心の事態である。

結実

さて葡萄の根幹から枝葉に流れてくる樹液のように、人体においては心臓から血液が流れてくる。そして「血は生命のあるところ」とされている（創世記九章）。そのように、キリストの生命は、霊生で、聖霊のもつ生命である。であるから、み霊を宿してキリストとつらなるとき、いわば霊血があるわけで、これが果を結ぶ源である。聖霊が結ぶ果は、パウロがガラテヤ書五・一二で語っているように、

「愛、喜悅、平安及び平和、寛容、仁慈、善良、忠信、柔和、節制」

等である。また聖霊の賜物としては同じくパウロがコリント前書第一二章で挙げている如く、

「智慧の言、知識の言、信仰、病を医す賜物、霊能の業、予言、弁霊の力、異言、異言を
と
ちから
積く能力」

等である。要するに聖霊はキリストに宿っている霊で、福音の原始核の如き驚くべき霊で無限無量の内実があるので、各個人の文化文明の健全な実存的なとなみの原動力であることを銘記すべきである。二〇世紀の文化文明は、この聖霊をもつ福音乃至高次な宗教を根底にしない限り、非常に危いと言わざるを得ない。

聖潔

キリストが「潔める」ということを言った。アンドリウ・マーレーの注解によると、この場合、旧き枝を相当深く枝もと近いところから切り落とすことと類比の意味の由。柿なども枝をよく払わないと結実しがない。信仰もつねに新たに旧き自分を切り棄てて進むを要する。信仰の事態で私心は禁物、無私の無が大切。しかし自ら潔まろうと、おのれの実存そのものを問題にしていると苦しくなる。いわゆる「潔め」派的な角度になつては、キリストの十字架は空しくなる。贖罪の血によつて既に潔められているのである。「わが語りたる言」を端的に信受することによつて「今や潔い」のである。

「永遠の御霊により、瑕なくして己を神に献げ給ひしキリストの血は、我らの良心を死にたる行為より潔めて活ける神に仕えしめざらんや」(ヘブル九・一四)

である。

「まして神の子を踏みつけ、己が潔められし契約の血を潔からずとなし、恩恵の御霊を侮る者の受くべき罰の重きこと如何許りと思うか」(ヘブル一〇・二九)

という聖言が確言している通りである。

キリストに躓いた祭司、律法学者、パリサイ人、サドカイ人たちは果を結び得ず、キリストに平伏し、泣き、叫び、しがみついた取税人、遊女、罪びと、病者、不具者たちは、まずイエスに救わ

れ、やがて十字架の贖罪による潔めと聖霊による聖なる熱き愛の生命にあずかって本当に聖名を讃えることができたにちがいない。

万能の愛

キリストが、上掲の如く、

「我を離れんか、汝らは何ごとをもなし能わず。……汝ら我に居り、わが言葉汝らに居らば、何にても望むがままに求めよ、さらば汝らに成らん」

と言っているように、み霊に在ってキリストに内住することをやめたら、霊的な力がなくなるから、本当のことができなくなる。またキリストの言は霊言で、聖霊と共にある言葉であるから、キリストの言葉が泊まるということと、み霊が宿るということは不可離である。それゆえに聖言がわがうちに泊まっていると、力があるから、望むことが成ってゆく。キリストの言は万願成就を約束するかの如くである。こちらの悲願はそれ以上の本願に包まれて成ってゆく。けれども現象や結果を問題にしてはならない。どう現象しようが、結果しようが、み霊に在っての悲願は根源現実において成っていることが確実であることを信じて往くのみである。み霊にある祈りの力はそのにある。聖霊は力ある愛の霊であるからである。み霊にある祈りの成就において、現われるのは神、キリストの栄光である。

「父の我を愛し給いし如く、我も汝らを愛したり。わが愛に居れ」(ヨハネ一五・九)

という言葉は聖書の中で極めて重要な聖句の一つである。イエスが神を信じぬいたのも、父なる神の愛に圧倒されていたからである。信ずるということは愛することと一つのことである。信愛一如、愛信一体なのである。神がイエスに、

「われ汝を愛す、汝を悦ぶ」

という声を降し給うたのは、ヨルダンでイエスが聖霊のバプテスマを受けたときであった。父の愛をみ霊において受けたキリストは、同じみ霊の愛をもつて弟子どもを愛し抜いた。だからいよいよ「わが愛に留まつて居よ！」

と言った。ということとは、み霊を宿してわが愛を受けて暮せよ、ということである。そしてその愛はまたおのずから隣人に流れてゆく。そうでないならそれは聖霊の愛ではない。聖霊の愛は火の如く燃え移り、泉の如く湧きて流れる。

第五相 担い・抱き

サマリヤ人（ルカ伝第一〇章二五―三七節）

本文

ルカ福音書第一〇章

すると見よ、ある律法学者が立ちあがり、彼を試して言うには、「先生、何をしたら永遠の生命が嗣^{つぎ}げるでしょう」そこで彼はこの者に言った、「律法には何と書いてあるのですか。どうあなたは読みなさるか」²⁵この者は答えて言った、「『主なるあなたの神を、心一杯に、魂をこめ、全力を尽し、念^{おも}いを専^{もっぱ}らにして愛せよ、そして隣人を自分のように愛せよ』とあります」²⁶彼はこの者に言った「よく答えなされた、そのように実行しなさい、そしてこれらのちが得られますぞ」²⁷するとこの者は自己義認をしようと思ってイエスに言った、「ところでわたしの隣人というのはだれのことです

か」³⁰これを受けとめてイエスは語った、「ある人がエルサレムからエリコにくだつていった。すると強盗どもが彼を襲い、その着物をはぎとり、おまけに傷を負わせ、半殺しにしたままで逃げ去ったのです。³¹するとたまたまある祭司がその街道を降りて来たが、この人を見ると向う側によけて過ぎ去ったのです。³²また同様に、レビ人もこの場所にさしかかってきたが、この人を見ると向う側によけて過ぎ去ってしまったのです。³³ところがまたあるサマリヤ人³⁴が旅をしてこの人のところにさしかかったのですが、彼を見ると気の毒におもひ、³⁵近よつてその傷にオリブ油と葡萄酒³⁶とをそそいで包帯をしてやり、彼を自分の家畜にのせて、とある宿屋に伴れてゆき、介抱した。³⁷そして翌朝出がけに、デナリ二つをとりだして宿屋の主人に手渡し彼にこう言つたのです、『あの人を³⁸見てやつて下さい。費用が余計にかかったら、私が帰りがけに、あなたにはらいますよ』と。³⁹さてそういうわけだが、これらの三人のうちで一体誰が強盗どもに襲われた人の隣人となつたとあなたは思うのですか』⁴⁰彼は言つた、「その人にあわれみ深い行いをした人です」そこで彼にイエスは言つた、「さあ行つて、あなたも同じように実行しなさい！」（私訳）

永遠の生命の問題

イエスは故里⁴¹のガリラヤ地方からいよいよ、

「エルサレムへ行こうと決意して顔をしかとすえて」(ルカ九・五一)

地上最後の旅の途上にあつた。あるところで、多分イエスのはなしのあとで、律法学者が高慢ちな様子で起^たちあがり、学には素人であるイエスを試^なそうという魂胆^{こんたん}で質問を投げた。しかも表面は一応敬意を表するかの口調で、

「先生、何をしたら、永遠の生命が嗣^{つぎ}げるでしょう」(ルカ一〇・二五)

我らはまずこの問の性質について考えてみよう。ユダヤ人が人生問題の究極として「永遠の生命」を問題としているのは、人間の根源的要求を課題としている点において、ねらいはまことによい。同じエルサレムへの途上で、ある金持の青年も、

「善い先生、永遠の生命を嗣^{つぎ}ぐために、私は何をしたらいいですか」(マルコ一〇・一七)

と問うている。両君とも「永遠の生命」を思弁的な問題としてはとりあつかわず、実践的な問題として「何をなすべきか」と設問している。ギリシア人であつたら、「永遠の生命」とは「何か」と思弁・認識の問題として考えるであらう。しかしユダヤ人は実存の問題としてとりあつかう。ここに知的な傾向のギリシア人と、意志的、倫理的傾向のユダヤ人との人生に対する態度の、また思惟^{しゐ}の様式の相異を見ることが出来る。

そして聖書の真理の性格は、神の認識の問題ではなく、神に対していかに行動すべきかの実存の問題である。啓示の神に対する関係と態度の問題である。

身証こそが問題

イエスは、しかし律法学者の質問に対して直ちに答えない。イエスの問答を見ているとしばしばそうである。反問する。律法学者ともあろう者が、そんな根本問題がわからなくて、よくも人を教え得るものか、というわけで、イエスは逆に、

「律法には何と書いてあるのですか、どうあなたは読みなさるか」(二〇・二六)

と専門家に答を要求した。専門家としてこれに答えられなくては恥辱である。律法学者の答そのものは幸にも正解であった。彼はすなわち、申命記六・五とレビ記一九・一八後半をもつて答えた。申命記六・五は「聴けイスラエル！」(六・四)に始まるところの有名な命題で、ユダヤ人が日夜誦じているような文句である。丁度^{ちやうど}クリスチャンが「主の祈り」や「使徒信経」をそらんじていて、すらすらと答えるようなものである。レビ記一九・一八後半をこれにつけて答えたのは律法学者らしいところであろう。レビ記には、

「あなた自身のようにあなたの隣人を愛さなければならない。私は主である」

と書いてある。この「私は主である」をおとししまったところに、律法学者の実は重大な欠陥がある。そのことをイエスは指摘しなかったが。しかしこれを今ここでは論じないが、律法学者の答はひとまず及第。倫理の答案としては満点で、イエスは

「よく答えなされた」

といった。しかしイエスにとつては、神学的、倫理的な言や、紙上の答案が問題なのではない。身

をもつて答える答案、身証しんしょうこそが問題である。だからイエスはつけ加えて、

「そのように実行しなさい。そしたらいのちが得られますぞ」(一〇・二八)とさとした。

キリスト者が、いかに聖書を研究し、これに通じ、すらすらと答えられ、あるいは論文が書けようと、説教ができようと、それが満点であろうと、それで天国には入れない。天国の門は、神が生活を文字と判じて入れて下さる門である。万人共通の文字とは生活そのものである。その他の一切の資格はここでは通じない。「いかに生きたか」は、もはや単なる信仰でもない。人間は何びともこれを判定することをゆるされない。ただ神のみの判断による。それがイエスがここで「行え」の一語で要求した内容である。「全生涯そのもので行ぜよ」という意である。イエスはあるときは、ただ「信ぜよ」(ヨハネ六・二九)と言う。それも「全生涯そのもので信ぜよ」なのである。この「全生涯」も、ある場合は一日であるかも知れない。否いな一瞬であるかも知れない。その一日、一瞬が全生涯をひつくりかえすような一日、一瞬であるならば。

「信ぜよ」も「行え」も同然なのである。それは信行不離、信行一如いちによう、信行一貫であるからなのである。いわゆる信仰と行為とによって因果關係的に、二段がまえ的に考える消息ではない。

信即行

そのような信行一如いちにようは、どこにこれを体得する秘訣があるのか。それはレビ記一九・一八の

「私は主である」(原文「私はヤ・ハウェー〔実存神〕である」)

の一言にかかっている。それは単なるつけ足しの言ではなく、土台石の言である。原動力の言である。

「かく命ずる私はおまえの主である。信頼せよ、私が力を与えてやるから。おまえはでき
るぞ、させてやるぞ!」

という上からの力、我らの中に入ってくる力の言なのである。とかくプロテスタント信者が「聖言」ということをいうけれども、ルターも「神の言」を強調したけれども(しかしルターはルター派の人たちよりもずっと聖言と聖霊を結びつけていたのではあるが)、もし神言を、み霊たまと共に現に受けとるのでなかったら、信仰は結局律法主義たるをまぬがれない。もちろんわれらの現実には信仰一如いちにょたることがむずかしいが、信仰一如の呼吸を身に体することが重要である。またまが内住していると、たとい信と行の關係が跋行的はつこうであつても、信と行とが不可離の質をもつてくることはたしかである。またまにあつて、根源的に信即行の受け方をしない限り、福音は生きたものとならない。神の言が力とならない。

キリストに「行え」と言われるとき、私たちはこれを律法の命令と解してはダメである。ところが福音書にたくさんでてくる、そういう命令または禁止的なキリストの言を福音として受けず、律法的にとっている読者が何と多いことだろう。キリストの「行え!」はただちに

「私が行わしてやる、私が力だから、私そのものをまず受けよ!」

とひびいてくる。そこがすなわちみ霊のキリストをうちに迎える事態なのである。そこに「行」が「信」と渾然融合する境地が開かれる。「信」そのものが、烈しい内的「行」として全身の投入、突入であり、行が信か、信が行か。信行一如、無私無我。在るはただみ霊の主の御はたらき。これを無実の実存という。しかも、一人の僕、一人の婢、がいとも人間らしく、心砕け、微笑をもつて行ずるところの天的自然である。

愛の生命、無実の実存

そしてこの「行」の内実は何であつたか。ただひたすらの「愛」であつた。全心、全霊、全力、全思の愛であつた。全存在の愛である。縦は神に対し、横は人に対しての愛。縦横一貫の愛！永遠の生命は、単に山にこもつて瞑想祈祷して得られるものでなく、不老不死の妙薬を飲み、健康法を案ずることによつて得られるものでもない。ただ神と人とを愛することによつて得られるのである。ここにキリストの福音の真価がある。

さてこの律法学者は、「行え」と言われて実は最も痛いところをつかれたにもかかわらず或はつかれたがゆえに、自己義認、自己弁護の角度から

「ところで私の隣人というのは誰のことですか」(一〇・二九)

と、イエスに逆襲した。しかしこの逆襲自身が、気の毒なことに、いかに現実に人を愛していないかを自己曝露しているわけである。まことに人を愛しているなら、彼は隣人が何であるかを知って

いるはずであるからである。問題はどこまでもあたまの問題や机上の問題ではないのである。律法学者が自らの律法知識を誇り、パリサイ人が自らの実践を誇り、キリスト者が自分の信仰、自分の宗派、自分のグループなどを誇り、聖書学者が自説を固守したり、すべてそのような自己義認の心根を、キリストは、偽善と称し、パリサイ根性として斥けた。^{しりぞ}

サマリヤ人の譬話の構造

そこでイエスは誰にでもわかる^{たいてい}譬話のかたちでこの学者に答えた。サマリヤ人の譬話は、第一場が、旅人と強盗の場。第二場が、半死半生状態の旅人のわきに來ては過ぎ去る祭司とレビ人。それからねんごろに介抱^{かいほう}し、家畜に旅人を乗せ、宿屋をさしてゆくサマリヤ人の場。第三場は、サマリヤ人と宿屋の主人との場。イエスはおそらく即興的にこのような譬話を創作する。真理は彼にとつて具象的である。「われは真理なり^{まこと}」といったのも、このように、イエス自身が真理の具象であるからである。

祭司やレビ人は宗教、祭儀のことにかけては専門で、宗教生活の師表たるべき人々である。それが現実には、あわれむべき人を道ばたに見て、見ぬふりをして、道を「あちら側によけて過ぎ去つて」しまった。(アンティパレールテンというギリシア語はそういう意味あいをもっている。)イエスのこの表現の奥には、時の祭司、レビ人、および律法学者などへのするどい批判がこもっている。

ところが第三番目にさしかかったのは、元来ユダヤ人の仇敵^{きゆうてき}であるサマリヤ人である。ヨハネ

福音書第四章でサマリヤの女が井戸端にやって来たイエスに向つて、

「あんたはユダヤ人でありながら、どうしてサマリヤの女の私に、飲ませてくれとおつし

やるんですか」(ヨハネ四・九)

と言つたように、ユダヤ人とサマリヤ人は犬猿の間柄であつた。このサマリヤ人にとっては、そこに横たわっている旅人は、仇敵のユダヤ人だろうから、「ざま見ろ！」くらいの棄台詞で冷笑して立ち去つても不思議はないところである。ところが彼は、あわれみに堪えず、近よつて、まずねんごろに言をかけ、同時にオリブ油と葡萄酒で外科的治療を施し、多分驢馬に乘せて、旅籠屋にかつぎこみ、さらに介抱し、多分旅人の横にねていたわり、翌朝出かけるときは、宿屋の主人にデナリ二枚をあたえて、二日間の労銀とし、看護をたのみ、「不足だったら、帰る時に立ち寄つて支払いますから、よろしくたのみます」という肉親も及ばぬばかりの心づかいである。仇敵に対して、これは現実にはちよつと考えられないほどの思いやりである。「敵を愛せよ」とは、まことにこのように敵を荷い救いあげることである。

隣人愛

イエスは語り終えて、律法学者に、

「これらの三人のうちで一体誰が強盗どもに襲われた旅人の隣人となつたとあなたは思うのですか」

と問うた。この場合イエスは、「誰が隣人を見いだしたか」とは言わなかった。主客の転倒である。「誰が隣人となったか」である。これでは律法学者の高慢な鼻のもつてゆきどころがない。彼は

「その人にあわれみ深い行いをした人です」

と自明の答をした。そのとき、彼が正直な魂なら、絶言。イエスの前にただ「まいりました。わるうございました」と平伏ひれふしたろう。ところが律法学者は、イエスに

「さあ行つて、あなたも同じように実行しなさい！」

と言われて、すごすごと退陣した。

人間愛の回復

さて我らはさらにこの話の中心に入つてゆこう。このはなしの中心人物たるサマリヤ人の愛は何であろう。彼は半死半生の旅人においてユダヤ人を見ず、おのれにおいて、ユダヤ人と仇敵関係にあるサマリヤ人を見ていない。彼は旅人において、一人の人間を見、おのれにおいて一人の人間を感じている。敵も味方もない。イデオロギー的対立をも超えている。ソ連人もドイツ人も同じ人間である。東独も西独も同じく人間である。北鮮も南鮮も同じく人間である。中華民国人も中国人も同じ人間である。種族、民族、国民の奥に人間を見る。今や世界の人間が、人間自身を人間として自覚することを忘れたかの如くである。一人の人間の痛苦を痛苦としてなさけ深くおもいやり、これを癒さんとするところに、本当の人間性、人間味、人間らしさ、人間愛の発露はつろがある。

二〇世紀後半は、イデオロギーの深刻な対立下に、民族や国家のブロックの対立が生じている。政治的解決には限界がある。そのさきはどうにもならない。イデオロギーは自己主張とからみあつて、にくしみとなる。イデオロギーは武力の裏づけをもつて戦争への危険性を孕む^{はら}。そのような対立が、ある一つの問題を発火点として、大爆発をしないとはいえない。世界歴史が幾たびとなく実例をもつて証している。何びとも第三次大戦を心からおそれている。それなのに、何故真の解決へと、平和へと展開しないのであるか。それは単に政治とか軍備とか経済とかの問題ではなく、今や人間そのものの問題が大暗礁^{だいあんしきょう}になつて来ているからである。真の人間性の回復、人間愛の回復、これが焦眉^{しやうび}の問題なのである。

サマリヤ人の心

大自然を見よ、そこには限界がない。大地にも、大海にも、太空にも限界はない。ところが人間界には何と多くの境界線がほどこされてあるではないか。ヨーロッパには沢山の国境がある。わけでも東西ドイツの境界線は「鉄のカーテン」といわれる物々しいものである。力ではとりのぞき得ない。イデオロギーを乗り越え超える人間のハートはどうしたのか。ユダヤ人たる敵の倒れているのを見て、ねんごろに抱きおこしたサマリヤ人^{びと}の心はもうないのか。このような人間愛が回復されない限り、平和は来ない。このイエスの譬話は、実に二〇世紀の人類の寒心すべき、実に情けない現実への深い警告ではないか。

わがサマリヤ人、イエスよ

私自身、胸に手をあてて想う。私は何か。半死半生の旅人ではないか。あの旅人は私のすがたではないか。この惨憺^{さんたん}たる私。パウロと共に、

「私は、何というみじめな人間なのだろう。だが、この死のからだから、私を救ってく

れるだろうか」(ロマ七・二四)

という人間である。私はモーセの十誡のどれを全く信仰的に実行できただろうか。山上の垂訓^{すいくん}に至ってはなおさらのことである。もちろん私は法律上の犯罪をしたことはない。しかし神の眼には完膚^ぶなき者である。「みじめ」という通りである。しかしまた主は知りたもう、私が過去幾星霜^{いくせいそう}真心をこめ、無的実存を悲願とし、キリストの福音に迫られ、使徒的信仰の正道を目指して前進して来たことを。今ひとりドイツにあつて「この稿は一九六二年九月に書いた」アルスター湖畔に出で、夕暮に瞑想、夕陽だけを相手に、「汝、太陽よ、汝は私の心を知る。今汝は湖面に光をおとしている。汝のその紅波^{こうは}、金波^{きんぱ}は私の心に通う。汝は万象を照し、生きとし生けるものを生かし、一視同仁である、キリストが言ったように。偉大なるハートよ！ 諸々の遊星をひき廻す汝の力よ。自然の愛の力よ！ 汝は私を知る」と声なき声で呼びかけた。

鳥と虫とは鳴けども涙落ちず、

日蓮^{にちれん}は泣かねども涙ひまなし

無者^{むしや}を悲願とし、福音的恩寵^{おんちよう}、無的実存を主より賜り^{たまわ}、一切の運命、環境、失敗、蹉跌^{さてつ}、紆余^{うよ}曲折、誤解、中傷にもかかわらず、平伏^{ひれふ}すところ豁然^{かつぜん}として天路開かれ、一步また一步前進し得る恩寵の力、何ものにか替えん。偉大なる福音よ！ 一切を歓喜にまで救いあげる力よ！ 愛よ！

ただおのれを見れば、涙。完膚なき傷だらけの弱体、半死半生。ただひとり、ある旅人がこれを知って、ねんごろに介抱し、いやして下さる。真のサマリヤ人、イエスであつた！ み霊^{たま}のキリストがわが胸三寸に來たり給う。私の心臓の破れを包み、深い傷をいやし、涙を拭つて下さる。

もう私はどうなつてもいいのだ。私の存在はキリストに捧げられたものだ。私はこの福音のためには、一步も退くことができない。躓^{つまず}いても、滑つても、転んでも、起きあがる、前進する。退くは滅びである。傷だらけでも、こんどは私がサマリヤ人ではないか。なぜだ。キリストはこの半死半生の人間に葡萄酒^{ぶどうしゆ}、自分の靈血、十字架の血をもつて贖罪し、オリブの油、靈油なる聖靈をそそいで、私を不滅の愛で聖靈の人にして下さったからである。キリストは私にとって、こんな最も身近な、否、身内のサマリヤ人である。

サマリヤ人^{びと}！ 何と親しみ深い言か。この一言にキリストの本願がこもる。

「汝、サマリヤ人であれよ！」

と肩をたたいて下さる。み霊のキリストがわが内から、

「地の極^{はて}までもサマリヤ人として歩けよ！」

と言われたら、力は限りなくやってくる。歩きに歩いてどこまでも。

托鉢僧たくはつそうフランチェスコは正にその典型的な人物であつた。

隣人のなかにキリストが

今やキリスト教界は、あの使徒的な聖霊内住の信即現の現実に入すべき転機にあると申したい。荷いの愛が天的本能となつて来るであらう。人間性を豊かに備えつつ、それが天的本能に変質されてゆく。

靈火がともり、靈泉が湧いたら、信愛いちにぎ一如、信行一貫という質の根源現実が次第に身について来る、どんなに相對的現実はみじめでも、心配は要らない。

キリストはいろんな姿であらわれる。否、かくれて在あります。あるときは子供となつて、あるときは老人となつて、また空腹者となつてやつて来たり、一杯の水をくれといつてあらわれたり、旅人のすがたで来たり、裸身で衣をくれといつたり、病人のすがたで横たわつていたり、牢獄につながれていたりする。そういうさまざまな隣人を助けたと思つたら、実はそれはキリストを愛していることであつた、というわけである。マタイ福音書第二十五章三一―四六節のイエスの言がそのことを語っている。

私たち自身がサマリヤ人なる隣人となつて生きるならば、いたるところに隣人を見いだすのである。そしてキリストは私たちをサマリヤ人にしつつ、私たちを通してサマリヤ人をつくり白眼を消して慈眼じがんにかがやかしめる。にくしみの心を解いて、いつくしみの心に変質させる。愛の力は最も

強い！ 愛のみが生命を与える。愛のないところに生命はない。だからキリストは、愛するならば永遠の生命を嗣ぐといった。何たる真理か。

愛のない人は人間でない

人間である限り、愛はある。愛のない人は人間でない。そして人間が最も飢え渴くものは愛である。しかしこの愛が今の世界に失われてきた。愛の喪失！ 自我愛の渦巻いている巷にこそ愛が喪失しているのである。電車の中を見よ、人の波、人の渦の都会に愛が稀薄になっている。何たる妙な現象か。一触即発の眩き、不平、非難、怒鳴り、喧嘩といった冷たい感情が漂っている。しかし愛の言、愛の行為がそこに現われると、ハツといかに愛が喪失している世の中であるかに人は気がつく。しかし次の瞬間にそれとなく消えてしまう。何となさけない、情ない都会の風潮か。

しかし人間は本来神性、仏性が宿っているはずである。神の似すがたの影があるから、その本体を、根源を深層意識は慕っているのである。それを意識的に、無意識的に拒んでいるのが現代人の現実ではないか。快^{こころよ}かるべき人間相互の人間愛の真の回復は根源的な愛の体現者キリストにぶつかるより他に道がない。十字架のキリスト、棄身^{すてみ}の愛のすがた！ 復活の主、永遠の生命の体現者！ 聖霊の主、我らの中に宿って無量者の質を賜^{たまわ}るキリスト。大愛の霊なるキリスト（ヨハネ一五・三、ロマ五・五）。人類は今、この霊を要する。この霊のみが力ある愛を与え、平安を与え、平和を展開する。

福音的饗宴（ルカ伝第一四章一五―二四節）

無法の法

イエスはユダヤ教徒が神聖な日として厳守しているある安息日のこと、パリサイ人のかしらの家に何らかの作意で招かれて食事をしようとしていた。パリサイ人と言えばイエスの敵方である。それでもイエスは平然として入っていった。人々はイエスがわなにかかる折もやあらんと秘かに窺っていた。するとイエスの前に水腫^{すいしゆ}をわずらっている病人がやってきた。それでイエスは逆手を使つて専門の律法学者とパリサイ人にこう訊ねた。

「安息日に人を癒^いすことはいいかね、悪いことかね」

彼らは答に苦しんで黙然としていた。彼らが如何に儀文的な律法万能者であるかを証明しているわけである。イエスにとつて律法は彼らが思うような律法ではない。イエスにとつて律法は、神の生きた律法で、文字を超越したものである。神法は神愛の法で、人を縛る法ではなく、人を活かす法である。靈法^{れいぽう}といつてもよい。つねに新たな啓示として実存的に受けとつてゆくもので、天つ風^{あま}に飄々^{ひょうたう}として飛ぶ鳥の軌道の如く無法の法^{むぽうのぽう}というものである。

「イエスその人を取り、癒して去らしめた」

このように力ある愛の自由を本質とした法にキリストは生きていた。そこでイエスは言った。

「おまえたちのなかで自分の子供や牛が井戸に落ちたら安息日だからと言ってすぐ井戸からひきあげないものが一体あるかね」

儀文的に律法に拘泥^{こうでい}する者は人を見殺しにするけれども、靈法によって神の力にあずかる者は人を活かし救って行くのである。「儀文は殺し、靈は活かす」と言ったパウロの言葉はこのことにも文字通りあてはまる。イエスにここまで問いかけられても偽善なる教法師やパリサイ人は豁然^{かつぜん}として悟り、自分たちはまちがっていたといさぎよくかぶとを脱ぐことをしないで黙っているばかりである。やはり根本からの偽善者である。このパリサイ人の首領の家には、食事に招かれた者がかなり居たらしい。上席を選んで着席する者が少なくないので、イエスは或る人にこんなことを言った。

「君は婚宴に招かれたら上席につくな。君よりも高貴な人が入って来たら主人が君に、この人に席をゆずって下さいと言うだろう。そしたら君は恥じて末席に行くことになる。だから招かれたらむしろ末席に着け。すると今度は招待者が来て、友よ、上席の方に進んで下さいと言うだろう。そのときは面目をほどこすわけだ。およそ自分を高うする者は神からも人からも低うせられ、己を低うする者は神にも尊ばれるのである」

イエスがこう言ったからといって、妙な謙遜ぶりを発揮する人があるなら、それは偽善的謙遜になる。ではどうしたらいいか。自分をほんとうに根から無者と自覚しているなら、相対的高低など

問題でなくなる。そして常にどん底に立つ態勢を自然にとるようになる。そういったどん底の角度からつかまえてゆかないと、くだらぬ気苦労でつかれるまでである。

イエスはパリサイ人に招かれながら招いた人に向って遠慮なくこんなことを言った。

「あんたは昼餐や夕餐を設けると、このような兄弟、親族、富裕な隣人などを呼びなされるな。こういった人たちは又お返しにあんたを招くだろうから。饗宴をするときはむしろ貧乏な人、不具な者、跛者、盲人などを招きなさい。彼らは報ゆることができないからあんたは幸いなわけだ。義人たちの復活のときに、あんたもむくいられる」(私訳)

イエスは、現世でのそろばんはあわない生き方をせよというのである。ほどこし、あたえ、なぐさめ、よろこばせて、生きよというのである。要するに棄身の愛で生きなさいというのが真義だと思う。「義しい人たちが復活するとき」とあるから、このように愛することが義しいことであるとの意である。

イエスの道徳は超道徳、イエスの経済は超経済、イエスの宗教は超宗教である。なんであろうとすべて超越の次元なのである。それは終末の世界を規準としているからである。永遠の世界が到来したときに、その本当の果が結ぶからである、結論はそのときにわかる。それをイエスは「むくい」ということばであらわした。ユダヤ人は「むくい」の觀念の強い民族であるから、そういう言い方をイエスはしたが、内容はちがう。真の因果応報は靈法による。

イエスのこういった言を聞いていた同席の一人がイエスに言った、「では神の国で饗宴にあずか

る者は幸いですね」そこでイエスはこれに対してある決定的な話をなされた。これはイエスの福音の重要な焦点である。

盛大な晩餐

ある人が盛大な晩餐をもうけて、多くの人を招待した。いよいよ晩餐の時刻がきたので、案内を出した人たちのもとに従僕をつかわして、さあ、御来宴下さい、宴会の準備が整いました、と言わせた。

よろこんでやって来るかと思いきや、みな一様に何のかのと自分の都合を理由に断り始めた。

第一の者は、こう言った、「私は実は田地を買ったのでこれから行ってみないわけにはいきません。折角ですが欠席をゆるしてもらいましょう」。

第二の者がこう言った、「私は五くびきの牛を買い入れました。これがどんなかのためすために行つて来ます。折角ですが欠席をゆるしてもらいましょう」。

第三の者はこう言った、「私はこのほど妻をめとりました。それで参上するわけに参りません」。

従僕が帰つてこれらのことを主人に報告したところ、主人は怒つてその従僕に言った、「はやく街の大路と小路に行つて貧者、不具者、盲人、跛者などをここに連れて来てくれ」。

従僕は直ちにそのようにした。そして主人に言った、「ご主人様、仰せのように致しました。まだ余席があります」。主人は従僕に言った、「道やまがきの辺に行つて人々を強いて連れて来て、わが家に余席がないように満たせよ。私はおまへたちに告げる。あの招待しておいた者たちのうち一人も私の晩餐を味わい得る者はない」。(自由訳)

キリストのこういう譬話をみても、いわゆる専門的な宗教家、学者などの立派な人たちとキリストとは、ものを見る角度、関心の焦点、人間との関わり方などがどんなにちがうかを知る。

社会的に白眼視されたり、見下されたり、毛嫌いされたりするみじめな人々がいつもイエスの心を引く相手であつた。貧者、弱者、不具者、取税人、遊女、罪びとといった連中であつた。こういう人々の心も身も救いあげ、担いあげ抱きあげるのが、キリストの「愛する」という内実であつた。福音において「愛する」とは、感情的に愛好することではなく、深い情感をかたむけて担いあげ、抱きあげ、助けあげ、救いあげて相手の心身を天国的境地におくことである。そのことの可能なためには、聖霊の力を要する。

さてこの譬話の内実はどういうことか。大饗宴とは、終末の日に開かれる神の国の饗宴を暗示している。開催者は言うまでもなく神御自身で、あらかじめ招かれた人々とは選民ユダヤ人、選ばれたキリスト者たちといったところであろう。従僕はキリスト・イエス御自身。いろいろな理由でこの饗宴列席を断つた第一の者は地上の不動産を第一問題として生きている連中。第二の者は地上の動産を計算して生きている徒輩。第三の者はマイホーム族的幸福追求者。要するに有形無形の地上

の財宝と幸福を第一として生きている人々がみなイエスの招待勧告を断った。これらの人たちが神の国を第一義として生きていない連中であることは明白である。信仰信仰といっても、この軽重がハッキリしていない者は「神の国にふさわしからず」といって天国から追放される。それは実はまず自らを天国から追放していることなのである。何となれば彼らはみな第二義以下のこと、現世の有形無形の財宝や幸福を、不滅の宝、即ち永遠の生命、聖霊、天国の国籍よりも大切なものとして、天国入国を断っているからである。

日常生活にこの気合がはたらいっているか否かで、信仰が本ものかどうかがわかってくる。たとえば、日曜の集会を一例としてみるならば、「来客があるので集会に今日は参上できません」といつて断る人がある。特別な来客ならいざ知らず、普通の場合、それは来客に日曜の集会は自分にとっては生命賭けのものでこれはずすわけにゆかぬといつてねんごろに断るべきである。来客はそのようなことならといって、むしろ敬意を表わすであろう。場合によっては、「どうですか、一緒に集会に来てみませんか」と来客を連れて来たらよい。それがその来客にとって生涯の転機とならぬとは限らない。そうであつたら、連れて来た自分も、同伴された来客も大なるめぐみにあづかつたわけである。筆者自身は毎回の集会を棄身すてみの態勢でやっている。み霊たまのはたらきなくて集会をもつことは福音に対する冒瀆ほうとくと思つてゐるからである。

すべての信仰者は危機的な存在である。いつキリストにこの譬話のような事態を通して試みられるか知れない。そのとき第一義に即して生き、第二義以下のものに決然として否を宣して、突進で

きたいものである。ところがいわゆる選民とか、キリスト者はダメだとキリストは見ている。だから、

「あの招いておいた者のうち、一人も私の夕餐を味わい得る者はいない」(一四・二四)と厳しい判断をした。

大方の信仰者に斥けられ、断られたキリストは誰を天界に呼び集めるか。饗宴に招き入れるか。街の大路小路を経巡^{めぐ}つて世のしみめな人たち、悲しむ者、泣いている乙女、虐げられた人、病める者、不具なる人々、罪に泣く人などに呼びかけ、肩を叩き、手を取り、腕を取り、或は担いあげなとして饗宴に招き入れるのである。

彼らは望外のことに夢かと驚き、喜んでこの饗宴の席に着く。そして、はじめてキリストとその福音に驚くにちがいない。饗宴の御馳走はすなわち力ある愛の御霊であるから、心は靈的なよるこびにあふれ、体は健やかにされる。

担い、抱き

ここに呼び集められた人々には、何かある一つの特色がありはしないか。それは心の碎ける質の人たちばかりであるようだ。少なくとも傲慢な人間はそこには居ないはずである。罪過を犯しても、心碎けて告白する魂ばかりであろう。

さてイエスのご利益^{りやく}にあずかった——イエスはご利益をしたのではない——と思っている大いな

る群衆が、そろそろイエスに随いてきた。するとイエスはこれを顧みて言い放った。

「人もし私に来て、その父母、妻子、兄弟、姉妹、自分の生命までも憎まないなら、私の弟子となることはできない。またおのが十字架を負って私に従う者でないなら、私の弟子となることができない」(ルカ一四・二六、二七)

自分の肉親、自分自身をも憎むとは、棄身すてみということである。ただこの棄身はどこに棄てたらいのか。ありがたいことに、この身の棄てどころは、キリストの中なのである。キリストの中に投身すれば、もの凄い力が来る。棄てたと思つたら、力が来て、我ならぬ我が活動をする。人生の秘義秘訣はただこの一点に焦点する。そしてキリストの中に己を棄てることが十字架を負うことの秘訣である。十字架を負うといつても、上からの力が来なくて負えるものではないからである。またの主がわがうちに来て、白熱の生命に変質されるから、そこに力が湧くわけである。それでこそ担いとか抱きとかいうことが出来るのである。イエスは神のみ霊なまの人、イエスは神の中にいつも自分を棄てていた。それで神が彼に充滿していたから、

「我と父とは一つである」

と告白できたのである。

「我とキリストとは一つである」

と、み霊に在れば、言える。しかし、それはどこまでも恩寵おんちようによる信仰の現実であつて、なまの現実ではない。我らの一切にかかわらず、われらをどん底から愛してわれらを救わんためにおのが

生命を棄てたもうたイエスは、ご自身を、今も述べたように、神の中に棄てておられた。これをしても無的実存という。イエスを私が無者という真骨頂しんこつちやうはそこにある。しかも人に棄てられ、棄石となつたイエスは全人類の隅の首石おやしとなり給うた。われらもキリストの中におのれを棄てて、キリストのふところに入り、キリスト御自身を喰くひ、キリストという「福音的饗宴きふじ」にあずかろう。そしてこの御馳走、永遠の生命を隣人に頒わちつつ、新天新地の神の国の「羔こひつじの婚姻」の饗宴にあずからん哉！

第六相 棄身・棄石

寡婦やもめのレプタ（マルコ伝第二章四一―四四節、ルカ伝第二章一―四節）

イエスは地上を去るときが近づいて来た。しかし、そんなことを別に気にもかけていない様子である。神殿宗教の一つのあらわれはその賽銭箱さいせんこばの賑やかさにあるとも言えよう。イエスはそれを傍観的に観ていた。市のあらゆる階層の人々が思い思いに投げ入れている。金持ちが貧乏人の何十日分かの糧代を投げたりする。すると檻褸衣ほろぎぬを身にまとった一人の寡婦やもめが現われた。彼女は財布をさかさまにした。なかからレプタ二枚が手の中にこぼれ落ちた。財布はもうからっぽである。彼女はそのレプタ二枚を賽銭箱に投げ入れた。そして心からの祈りを捧げて、いかにもすがすがしい面持できざしを降りてゆくではないか。これをじつと見ていたのがイエスである。

イエスはこれに感動した。とその瞬間、すぐに弟子たちを呼び寄せて言った。

「よく聞けよ、あの貧しいやもめは、この賽銭箱に投げ入れている人たちの中で、誰よりもたくさん入れたのだ。みんなの者はありあまる中からその幾分かを投げ入れたが、あの婦人はその乏しい中から、あらゆる持ちもの、その生活費全部を入れたからである」(マル

コ二・四三、四四)

レプタはユダヤの貨幣で最低のもの、それを二枚投げ入れたやもめは、実はその日の糧代を全部投げ入れたわけである。そうするとあとは断食するより仕方がないのである。彼女のお宮参りは生命賭けのものであった。自分自身を神に捧げたと同じことであつた。

神殿詣でが貴いのもなければ、お賽銭を投げるのが敬虔なわざであるというのでもない。焦点はやもめの生命賭け、棄身すくみの心根にある。その一点をハタととらえたイエスの目。それとも知らぬやもめのすがた。真の礼拝が、真の宗教が、真の敬虔がそこにあつた。

一日を一生として、棄身で生きること。全存在、全生活を神への捧げものとして生きること。そのすがたがやもめのすがたであつた。これが神を愛するということであつた。

イエスはそのように生きた、徹底的に。それだからこのやもめのすがたがたまらなかつたのである。弟子たちよりも本当の弟子がそこに動いていたのであつた。彼女は人知れず姿を消した。

ナルドの香油

(マルコ伝第一四章一〜九節、マタイ伝第二六章六〜一三節、ルカ伝第七章三六〜五〇節、

ヨハネ伝第一章一〜八節)

受難へのキリスト

「さて、^{すざし}過越と除酵との祭の二日前になった。祭司長たちや律法学者たちは、策略をもつてイエスを捕えたうえ、なんとかして殺そうと計っていた。彼らは『祭の間はいけない。民衆が騒ぎを起こすかも知れない』と言っていた」(マルコ一四・一、二)

マルコ福音書第一四章の背景は、イエスがエルサレムに入城して第四日目、ニサンの月(今でいうと三、四月の頃)の一二日という時。ニサンの月の一〇日というのが、マルコ第一章から始まっている。即ち、受難週間といわれる時期で、キリストが十字架に向って、進みつつあるときである。

過越の祭というのは、ニサンの一四日に始まり、午前に、パン種を除いたものを作り、午後には、羊を屠る。^{ほつむ}日が暮れて即ちユダヤでは日没から日没が一日だから一五日の始から一二時間の間に過越の食をとる。これが「過越の祭」である。それから二一日まで七日半という期間、除酵祭が続く。であるからその間に、イエスは十字架にかけられたわけだが、祭司長・学者・長老たちがなんとか

して、この新興宗教のイエスを、この民衆のデマゴグ（煽動者）を、片づける折もがなとねらっていたわけである。ユダヤ教の正統派がイエスを異端とし、イエスは彼らの「言い逆らいを受ける徴」であつた。

今でも正統信仰と自任する人たちが、ややもすると、本当は聖書の根源現実を最もよく把握している人たちを排撃し、白眼視し、除け者にしようとする。いつの世にも、預言者はその時代に容れられない。故里に貫ばれない、というわけだが、教会史を繙いても、先覚者、改革者たちは、殆どみな誤解されたり、認識されずに迫害を受けた。

イエスはその最大の宗教改革者、人間革命者であつた。全世界の歴史を二分した精神界の革命家である。「紀元」といわれるのは、正にこのキリストという霊界の大革新者に基づいたわけのものである。ところがその当時において、イエスは大異端者で、磔殺の刑に処せられた。

一般民衆は、イエスのめぐみにあずかつており、一応イエスの味方であるので、暗殺の実行が簡単にはできない。けれども結局、民衆は彼ら専門宗教家たちの煽動に乗つかつて、イエスを十字架にかける手先になつてしまった。

マルコの本文とその他の福音書との比較

「イエスがベタニヤで癩病人シモンの家にいて、食卓についておられたとき、ひとりの女が、非常に高価で純粋なナルドの香油が入れてある石膏のつばを持って来て、それをうち

こわし、香油をイエスの頭に注ぎかけた。すると、ある人々が憤って互に言った、『なんのために香油をこんなにもだにするのか。この香油を三百デナリ以上にでも売って、貧しい人たちに施すことができたのに』そして女をきびしくがめた。するとイエスは言った、『するままにさせておけ。なぜ女を困らせるのか。わたしによいことをしてくれたのだ。貧しい人たちはいつもおまえたちと一しよにいるから、したいときにはいつでも、よいことをしてやれる。しかし、私はおまえたちといつも一しよにいるわけではない。この女はできるだけのことをしたのだ。すなわち私のからだに油をそそいで、あらかじめ葬りの用意をしてくれたのである。よく聞け。全世界のどこでも、福音が宣べ伝えられる所では、この女のしたことも記念として語られよう』(マルコ二四・三―九)

四福音書にこの記事は、類似関係において載っている。が、マルコとマタイの記事は非常に似ているが、マルコが台本であろう。ルカのはイエスがガリラヤの多分カペナウムにいた時のものである。ヨハネのは「過越の祭の六日前」というので、時期は大体似ているがヨハネの方が少しはよい。この場合もマルコの記事がもとであろう。

マルコとマタイでは「ある女」、ルカでは「罪の女であつたもの」、ヨハネでは「マリヤ」という名が明示されてあるが、このマリヤはラザロの姉妹マリヤであるとしても、油のそそぎ方ではルカのに類似しているので、マルコ、マタイとルカの折衷がヨハネのような感じである。

マルコの「ある女」が、理由なくしてキリストにこのような油のそそぎ方をしようとは思われな

い。何か救われた体験の女にちがいない。ルカの「罪の女であつたもの」と相通する者ではなからうか。するとこの女は、ガリラヤのマグダラにいたマリヤで、彼女はキリストに救われて、悔改の涙ながらにキリストに香油を塗った。ところで今度はいよいよイエスが十字架につかれるというので、嘗ての石膏の壺をたずさえて再び現われた。そしてその石膏のつばは「もうこの度限り要らない」と心に定め、「それをうちこわして」イエスの頭から全身に香油をそそいだ。これは彼女の全愛をキリストに捧げた行為であつた。

ナルドの香油

さて、「イエスがベタニヤで、癲病人シモンの家において、食卓についておられたとき」とあるが、この癲病人はもう癒されていたであろう。食事の際に首に油を注ぐということは一種の敬意の表わし方であつた由だが、この場合は、もちろん特別な意味があつた。詩篇第二三篇に、実存神ヤハウェが敵前に饗筵きやうえんを設けて下さるので

「私の首に油がそそがれる。私の酒杯さかずきはあふれる」

とあるように、これも、油が具体的にそそがれ、酒杯が具体的に溢れたという事実にもとづいて詠われたもので、それが霊的具体性をも表現しているというものである。

そんなわけで食事のときに、香油が芳香を放つとは何と美しいことではないか。さてこの香油は「非常に高価で純粋なナルドの香油」である、というのだが、「ナルド」はインドのナルドという草

の根から作られたもの。サンスクリットではナラダー、ペルシア語ではナルデーンという。印度産のナルド油は、ペルシア人もギリシア人もローマ人も非常に珍重なものとしていた。これは塗料にも調味料にもなる非常に高価なもので、彼女もアラバストロン（石膏つば）に入れて大切にしていた。

ここに三百デナリ余と価をふんでいるが、一デナリは職人一人の一日の労銀であるから、三百日以上上の労銀に相当するわけで、殆ど一年間の労銀に近い高価なものであった。ドイツの参考書に二百マルクとも書いてあったから、今の日本の貨幣価値でいったら大変な額になる。この女はアラバストロン（石膏つば）をぶち割ってこれを全部そそいだ。

ところが「ある人々が憤って互に言った」。マタイによるとそれは「弟子たち」であった。ルカの場合は「パリサイ人」。この場合弟子たちの心にパリサイ根性が出たと見てさしつかえないようだ。彼らは、これを三百デナリ以上に売って、貧しい人たちに施すことができたのに、何とむだなことをする女か、と呟いた。^{つぶや}いかにも信仰的、道徳的なようである。それはイエスの「貧しき者に施せ」を律法的に受けとつての四角四面の考え方であろう。弟子たちが、女をそんな考えからきびしくとがめたので、イエスは弟子たちがむしろなさけなく思われたにちがいない。

「するにまかせておけ、なぜ女を困らせるか。私によいことをしてくれたのだ」

この「よいこと」の何であるかが弟子どもにわからぬと見たので、イエスは畳みかけて言った。

「あらかじめ葬りの用意をしてくれたのである」

と。そしてそのためこの女がベストを尽してくれたのだと言った。

なぜこの女がこのような行為に出たかは、さきほど触れたように、何か罪を犯したのに、イエスに救われたから、その御恩がえしに、感謝の心をそそいだと見るのが至当と思われる。してみるとヨハネ八・三―一一の「姦淫^{かんいん}の女」であつたかも知れない。この記事はもともとルカ伝第二一章の終りにおかれるべきものとすれば、むしろ時期的にもふさわしいことになる。この女は遊女的な女であつたのであろう。そういつた深刻な危機から救われたこの女であつたかも知れない。あるいは自分でどうにもならない「つぐのい方なき罪」(ルカ七・四二)から救われたルカ伝第七章の「罪の女」であるとしても、心一杯の香油をたずさえてイエスとのこの世のおわかれのときに現われたと見るのがむしろ真相に近いかも知れない。

つばをうちこわして

それで私は、どうもこれらの相似の記事を二段にとりたい気がする。ルカ七・三六―五〇は、ガリラヤにおけるできごとで、やはり食事の席に香油の入った石膏のつばをもつて来て、ここではつばをこわさず、

「泣きながら、イエスの足をぬらし、自分の髪の毛でぬぐい、そしてその足に接吻して、香油を塗った」

とある。すなわち罪の女が、心打たれ、悔改^{くわいごう}の涙をそそいで感謝しているすがたである。そのと

きはイエスの首に注ぐ気には到底なれなかった。イエスはこれを見て、

「おまえの罪は赦された」

といった（ルカ七・四七）。さらに、

「おまえの信仰がおまえを救った。安心して往きなさい！」

となぐさめはげました。この女はそれ以来、何かとイエスにつくし、かつエルサレムへの途に伴いつて行った女たちの中に加わっていたに相違ない。

そうだとすれば、マルコ伝第一四章、マタイ伝第二六章の「ある女」がこの「罪のあった女」であるとも見てもさしつかえないわけである。そしてこの女が同じルカ八・二の「七つの悪鬼を追いつ出されたマゲダラのマリヤ」でないともいえない。霊的な女性の直観は、弟子たちよりも深いものがあつたであろう。イエスの死期を洞察し、主への献身、棄身の心を一壺の香油に託さんとした。このナルドの香油をのこりなく主に注ぎかけよう。もうこの香油つばは二度とつかうまい。それならアラバストロンをぶちこわそう！ そういった女の棄身の一念。全身、全霊をこめた一念。こんどはイエスの首にナルド油をそそいだ。惜しみなき愛、言い難き愛惜の情、感恩の涙と共に、「つばをうちこわして」、すなわち、己れをぶち碎いて、棄身の心で。彼女の心はナルドの香油よりも芳香しくなっていた。香油以上に彼女の心がそそがれたのである。

イエスの寂しさをなぐさめた「ある女」

かかる心魂に対して、この場合三百デナリで売ってどうのこうのという弟子どもの方式的、律法的な考え方がいかにあたらないかは最早論を要しない。おのれをことごとく注ぎかけてくるこの女の愛に、イエスは無量の心で反響した。ただひとり十字架にかかろうというイエスである。弟子どもが主の心を知らず、散ることも予測しているイエスである。ただひとりの女性が、——おそらくマグダラのマリヤ——葬りのためあらかじめ最高の香油をそいでくれた。人間イエスとしてもそれはたまらなくさめられたわけである。この「ある女」は真つ先に、自分の棄身の行為をもつて、キリストの十字架の受難を予告したわけである。その意味において、あの大使徒ペテロよりも、この「ある女」の方がイエスを知っていたというものである。神の子の寂しさは誰も知る者がない。弟子たちもだめである。ところがこの「ある女」がイエスの寂しさに応えた。

イエスの全身に香油をそいだこの「ある女」の心と行為を全的に受けとめて、イエスは弟子どもに、「よく聞け、全世界のどこでも、福音が宣べつたえられるところでは、この女のした事も記念として語られよう」と驚くべき裏づけを与えた。

アラバストロンをぶちこわして！ここに「ある女」の行為の焦点がある。一切を捧げた、一切を棄て切った棄身の態勢。これが「心を尽し、精神を尽し、思いを尽し、力を尽して」の具体的なあらわれである。信仰といい、愛といい、要するに棄身の一語につきる。

詩篇三篇に、「わが首に油をそそぎ給う、わが杯は溢るるなり」とあるが、我々はキリストに聖霊という霊油をそそがれた。それで我という杯はあふれるのである。我々もまた、隣人に霊油を

そそいで、同じめぐみにあずかしめなくなる。その他に本当の伝道はない。

この「ある女」は限らない女性らしさ、やさしい思い遣り深い愛の女であった。雑草の中に花咲く一輪の撫子の如き存在であった。イエスはこの小花を激賞した。全世界に拡まるべき福音の芳香の一息吹をこの女性の香油に体感したので。

聖霊の香油

人生において、自分自身が、このような聖霊の香油となり、キリストの霊生の開花となつて、この荒蕪たる曠野に福音の香りを放つ。それが、キリストの十字架の恩寵と苦難に応え、復活の恩恵と歓喜に通ずる存在的証示である。また最後の審判、新天新地の到来まで、「ある女」と同じ霊香となつて、十字架道を辿り、復活の霊生の歓喜を世につたえん哉である。

福音は福音することによつてのみ把握される。誰が空気を観察して生きているか。誰が水はエロであるということを理解して渴きをいやすか。誰が米の成分を研究し分析して飢えをみたすか。たましいの糧たる聖書の現実を観察し、理解し、研究し、分析して聖書の現実がつかめるか。聖書の現実、全身投入をもつてそのドラマの活人物となり自ら活現するまではつかめないのである。

天下の女性に申したい。

「神の栄光はキリストに現われ、キリストの栄光は男に現われ、男の栄光は女に現われる」

とパウロが言っているが、女性は栄光の最高の冠である。女性が有すべき正当な権利は民主的社会

人として得べし。しかし、女性の本領は愛の権化^{ごんけ}となつて神の栄光をあらわすにある。

この「ある女」(マルコ一四、マタイ二六)が、「罪の女」(ルカ七)であろうと、「マゲダラのマリヤ」(ルカ八)であろうと、「姦淫^{かんいん}の女」(ヨハネ八)であろうと、「ペタニヤのマリヤ」(ヨハネ一二)であろうと、それは要するにどうでもいい問題である。彼女らは皆キリストの靈愛に浴し、同質的な棄身^{すてみ}の愛をキリストに捧げたたましいであつた。

人生は曠野^{こうや}である。キリストと共に曠野の中で、自ら光となり、水となり、塵芥となり、肥料となつて、イザヤ書第三五章に「沙漠はサフランの如く」と詠^{うた}われているように、曠野を百花繚乱^{ひゃっかろうらん}の原野に化することである。問題中の問題は、運命、環境、社会状況、政治問題に非ず^{あらず}、人の心に在り。万人は宗教心を有たざるべからず。然らずんば二〇世紀の人類は亡^{しな}びゆく。

一粒の麦(ヨハネ伝第二二章二〇―二八節)

人の子が栄光を受くべき期^{とき}

過越^{すきこし}の祭で礼拝をしようと思つて、ユダヤ教に改宗したギリシア人が数人、ガリラヤのベツサイダ出身のピリポのところに来て、「君よ、イエスにお目にかかりたいのですが」と言つて頼んだ。

ピリポはアンデレのところに行つてそのことを話し、アンデレとピリポは、イエスのもとに行つて伝えた。

するとイエスは答えてこう言つた。

「人の子が栄光を受けるときが来た。よくよく君たちに言つておく、一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかしもし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる。自分の生命（ブシユヘー）を愛する者はそれを失ひ、この世で自分の生命を憎む者は、それを保つて永遠の生命（ゾーエー）に到る。もし私に仕えようとする人があるなら、その人は私に従つて来るがよい。そうすれば、私の居るところに、私に仕える者もまた居るよ。もし私に仕えようとする人があるなら、その人を父は重んじて下さる。

今、私は心が騒いでいる。私はなんと言おうか。父よ、この時から私をお救い下さい。しかし、このために、この時に至つたのです。父よ、み名の栄光をあらわして下さい」

（ヨハネ二・二二―二八）

異邦人が数名やつて来て、イエスに会いたいと言つたことはふしぎである。いよいよ異邦人に福音が伝えられるさきがけとなつたといえよう。イエスはしかし十字架の死が近いことを予見していた。しかし十字架の死の突破をするとその先に復活、昇天、聖霊降臨、最後の審判、そして再臨の栄光が待っている。そのことをこそ希望している（ヨハネ二・二八―三六）。それでギリシア人たちに答えるが如く、告白するが如くに語り出でた。それが右に引用したイエスの言葉であつた。

「人の子の栄光を受くべき時!」、何たる新事実の到来であろう。有史以来の新しい啓示の出来ごとである。復活、昇天、再臨の栄光の前に受くべきバプテスマがあった。それは十字架であった。直接天界へ変貌して昇って往ってよいイエスである。正に文字通りの大往生、天界に往って生きるべきイエスである。しかるに十字架にからざるを得ないとは。彼の十字架が贖罪の死であるがためである。自分のためではなく、人のため、我々一人一人のための死である。イエスは地上では全く一個の人間であった。それはパウロがいつている通り、「聖子は罪の肉のさまで罪のために遣わされた」からである(ロマ八・三参照)。これが受肉のキリストの相対的現実である。

だから、

「今、私は心が騒いでいる。私はなんと言おうか。この時から私をお救い下さい」と率直に人たるの現実からの言を吐いた。けれどもイエスはそのあとで

「しかし、このために、この時に至ったのです。父よ、み名の栄光をあらわして下さい」と祈った。この偉大なる「しかし」で人間の現実を突破して、「このため」即ち十字架の贖罪死のため、「この時」すなわち、いよいよ地上の生涯を終る時、独一の使命を果すべき時を迎えたのである。父の聖意を体现してこそはじめて「父の聖名の栄光があらわれる」わけであるので、このように祈った。神性の権化キリストが、同時に人間イエスである受肉の事態であるから、キリスト・イエスと表現する。神性のキリストと人間性のイエスとがふしぎな一体をなしている。相対的存在(人間)でありながら、同時に絶対的存在(神)である。地上において、キリストは質的存在として

神の子であり、使命的存在として神の僕しもべであつた。イエスはしかし祈るとき「父よ！」といつて祈つていたから、質的存在としての神の子の自覚が根底であつた。実存としてはどこまでも使命的存在として自らを実証していた。罪をゆるし、人を救うという事態は神の子の使命的存在においてのことである。しかし使命的存在の奥には神の子たるの質的存在があることは当然である。しかもそれが相対的存在としての人間に内在しているという構造である。これがいわゆる *vere Deus vere homo* (まことの神にしてまことの人) たる所以ゆえんである。

一粒の麦、地に落ちて死なずば

一粒の麦が石の上に落ちたら、本当に枯死してしまう。いわゆる大死的な死と同じである。しかし一粒の麦が地に落ちると、殻を破つて根が生えて、芽を吹き出す。麦の殻が破れることを「死ぬ」とイエスが表現したのには実存的な意味がある。そうすると一粒の麦から夥おびただしい新麦がやがて実るわけである。人間の場合は存在を投げ出したら死である。それで「地に落ちて死なずば」と言つたわけである。聖書の神話的表現や譬たとへば話的表現が啓示的および実存的な内実に関わることは、この場合もそうである。

「一粒の麦」とは我々一人一人のこと。「地に落ちて死なずば」は、単なる死をいつているのではない。死をして死たらしめるものは、日常の生活ぶりが心一杯、全存在的なものである。そういつた生きざまを生きた人の死はいたずらには終らない。何らかの果みを結んでゆく。私事にわたつて恐

縮であるが、舎兄政美は一高時代から大手町日本衛生会館の大講堂における内村鑑三先生の日曜集會に会員として列席していた。彼は東大法学部を卒業して大蔵省に勤務ということになったが、二年目に當時の中華民國北京の日本公使館勤務となり、翌一九二一年夏、出張旅行に出たが、旅行中に発病、悪性腸チフスに罹っていた。北京病院での治療も効なく、九月二二日に召天した。急遽死の床に馳せつけ、看病をしていた母に、「キリストが迎えに来られたので、お母さん、お先に失礼いたします」と母に告げた由である。それは死の二、三日前に白衣輝くキリストの靈像を幻の中に拝したからであつた。詳しいことをここに記すのはひかえるけれども、この兄は二七歳を一期として召天したが、おわりの数年間の生活振りと、兄ののこしてくれた宗教関係の書籍が——その中には内村鑑三主筆の『聖書之研究』のそれまでのものは大方揃っていたが——私にとって回心への導きとなった。最初に手にとって読んだのが内村鑑三著『宗教と現世』で、これは直ちに私の心を捉えた。このようなわけで舎兄が私の信仰の第一の恩人である。私にとってこの兄は地に落ちて死んだ一粒の麦となった。私の小さな伝道三〇余年間に、私を通して信仰を得た人は数百名にはなっていると思うが、一粒の麦小池政美の死なくして私なきを思うとき、

「一粒の麦死なば多くの果を結ぶべし」

はそのままここにも事実となった。ただ聖名をたたえるのみである。

イエスは「一粒の麦の死」において、御自身を語っておられる。この麦一粒は正に原始力をもつた一粒である。この十字架の死、贖罪死は無数の人々のための死である。「多くの果」どころでは

ない、「無量無数の果」を結びつつ、歴史の終末にまで及ぶのである。

棄身^{すてみ}もイエスにおいて極まる。またイエスは自らも引用しておられるように

「家造師^{いえづくり}の棄てた石は隅^{すみ}の首石^{おや}となった」(詩二一八・二三)

で、専門の宗教家、学者らに斥け^{しりぞ}られ、十字架にかけられ、棄てられた石なるイエスは、キリスト教の隅の首石となっている。そのイエスが

「わが神、わが神何ぞ我を棄て給いし」

と叫んだ。この深刻な叫びは一切の説明、解説以上のものである。神はしかしイエスの復活をもつてこれに応えた。

一粒の麦の棄身の実存的な事態、棄石の終末的な事態、そこにキリストの福音に生きる者のどん底のすがたがある。担いと抱きの愛すらも裏きられ、棄てられた人々こそは、歴史の終末にあたり、新天新地の神の国においてキリストと共に最も貴き存在とされるであろう。東西のキリスト教史上の多くの殉教者たちは、正に福音のための棄石で、聖国^{みくに}では宝玉の如く輝く存在である。

第七相 本願・栄光

十人の処女おとめ（マタイ伝第二章一―一三節）

「このとき天国は、燈火ともしびを執りて新郎はなむこを迎えに出づる十人の処女おとめに比なぞらうべし。その中の五人は愚かにして五人は賢さとしし。愚かなる者は燈火をとりて油を携えず、賢き者は油を器に入れて燈火と共に携えたり。新郎遅かりしかば、皆まどろみて寝ぬ。夜半よなかに『やよ、新郎なるぞ、出で迎えよ』と呼ばわる声す。ここに処女皆起きてその燈火を整えたるに、愚かなる者は賢き者に言う、『汝らの油を分け与えよ。われらの燈火消ゆるなり。』賢き者答えて言う、『恐らくは我らと汝らとに足るまじ。むしろ売る者に往きて己がために買え。』彼ら買わんとて往きたる間に新郎来たりたれば、備えおりし者どもは彼と共に婚筵こんえんに入り、而して門は閉ざされたり。

その後の他の処女^{おとめ}ども来たりて『主よ、主よ、われらのために開き給え』と言いに、
答えて、『まことに汝らに告ぐ、我は汝らを知らず』と言えり。されば目を覚しおれ、汝

らはその日その時を知らざるなり」(マタイ二五・一―一三)

地上の生涯は百歳を越えること極めて稀である。晩かれ早かれ、万人は地上を去らねばならない。
しかしロングフェローの「人生の歌」に詠われているように、

Life is real! Life is earnest!

And the grave is not its goal!

Dust thou art, to dust returnest,

Was not spoken of the soul.

生くるは現実! 生くるは真剣!

奥津城^{おくつぎ}はその終局^{おわり}に非ず。

塵より出でて塵に帰る、

そは魂^いの謂^いには非ず。(私訳)

それならば魂^{たま}の去処^{きょこ}如何。靈界の天国か、地獄か。誰が地獄ゆきを願おう。靈界の何処^{いずこ}に往くかは、地上の実存が決定する。だから現世は醉生夢死^{すいせいむし}はできないのである。人生は夢ではない、「現実であり、真剣である」のだ。「血氣^{けつぎ}の体^{たい}」は塵に帰る。しかし「靈の体」を魂はまとうて来世に入ってゆく。

さて上掲の譬話はキリストの創作であるが、天国は、カンテラを携えて新郎を迎えに出てゆく十人の処女のようなものだという。そのうちの五人は燈油を器に入れてカンテラと一緒に携えたが、他の五人は燈油をもつてゆかなかつた。新郎の到来を待つとは、キリストの再臨を待つこと、歴史の終末に臨む新天新地を待望することである。しかしそれはいつ来臨するかわからない。新郎がなかなか現われないので、みんなまどろんで寝てしまう。二千年経った今日もなお到来しない。歴史の経過と共に人類は次第に不信になってくる。「末の世に信を見んや」とはキリストの預言であった。実際そんな様相である。文明は五里霧中のようなのだ。神の民といわれるエクレシアの大勢はこの譬話の如く、まどろみ寝ている。

ところが夜半に突然、

「さあ、新郎が来られた。出で迎えよう！」

と誰かが叫んだ。そこで処女たちは皆起きて、カンテラに燈火をともした。燈油をもっていた五人はそれができたが、燈油を携えて来なかつた五人はそれができなかった。燈油の五人に向つて、

「あなた方の油を分けて下さいよ。燈火が消えかかっているの」

といった。燈油の乙女たちは、

「きつと私たちとあなた方とに足りないでしょう。お店へ往つて買つて来なさいよ」

彼らが行っている間に新郎が到着したので、燈油の乙女たちは新郎と一緒に婚筵おらじに赴いた。門は閉ざされてしまった。

我々は今この譬話の学的註解を云々する必要はない。イエスの心を推し測つてみればよい。この譬話のポイントは燈油をつねに身近にもつて、いつでも備えあり、ということであろう。

「汝の聖言^{みことば}はわが脚の燈火、わが路の光なり」

と詩篇一九・一〇五にある。また

「汝らは聖なる者より油を注がれたれば、凡て^{すべて}の^{こと}を知る」

とヨハネ第一書一・二〇にある。神の国を待望する実存の根拠となり、源泉となるものは、聖書一卷に溢れる真理と、これを悟^{さと}らしめる光明たる聖霊である。カンテラが聖書、燈油が聖霊。カンテラも燈油なくしては光を放たないように、聖言も聖霊なくしては生命とならない。

神の国を待つ実存は、それゆえに、聖言が聖霊によって化体^{かたい}し、聖書の次元を呼吸するたましいとなつてゐることを要する。み霊の燈火があかあかと胸三寸に燃えていないなら、それは観念的な信仰で、油がきれてゐる五人の処女と同じことである。

新天新地を待望し、キリストの再臨を待望する実存は、み霊とみ言^{ことば}が渾然として化体して、目を醒まして福音を身証しつつ闇の世に輝くカンテラをたずさえて歩いてゐるということである。それが「備えあり」ということであろう。それは「我すみやかに来らん」との本願のゆえに、「聖国^{みくに}を来らせ給え」との悲願をもつて生き抜くことである。み霊が内住して、愛に生きているなら、そこに天国は内住しているから、聖国来臨の悲願が本ものとなる。

燈油の備えのなかつた五人の処女は、燈油を店に買いに行つてもどつて来たが、時すでにおそし

で、婚筵の門が閉ざされていた。これは言うまでもなく、天国の門が閉ざされて、天国に入りそこなつたことを意味している。

「主よ、主よ、私たちのために開いて下さい！」

と泣き叫んでも、

「私はおまえたちを知らない」

という答が扉越しに響いて来た（マタイ七・一五―二三を参照）。これは厳しい審判の言である。「知らない」とは、「もうおまえたちとは関わりがないのだ」ということであろう。地上の生活で、聖意に従わんとせず、神を神とも思わず、愛の実存に生きず、手前勝手のマイ・ホーム主義に生きているなら、天国の門は開かない。

もっと卑近なことを申せば、「シルバー・シート」の貼り紙を無視して、老人、弱者を思いやることなしに、平然と腰をかけている若者たち、山や海辺の自然の中で、空缶その他の飲食の残骸を棄てて顧みない在り方等々の類似現象が絶えない無信仰、無道德、無秩序のわが同胞はどうなるのか。天国に日本人の影が少ないとしたら、何とさびしいことではないか。

天変地異、戦争等の天災、人災に際して、物的備えのあることはもちろん大切であるが、もっと大切なことは、平常の実存の備えである。燈油をもっていたこの五人の処女の在り方は、要するに聖霊の愛に生きていたということになろう。これは決して寓喩的な解釈ではなく、キリストの譬話のこころであると思う。

キリストが最後に、

「目を覚ましておれ！」

といましめてゐるのは、たましいの目醒めであり、たましいの目醒めは、たましいに聖霊の火が常燃していることであり、そこにキリストの本願の地上での成就があり、天的栄光の前徴がある。

このマタイ福音書第二十五章一―一三節の「賢き処女」と「愚かな処女」の譬話と相照応するキリストの天国地獄のさとしは、同じく第二十五章二―四六節の羊と山羊の譬話である。すなわち愛の実存に生きたか生きなかつたかの聖言である。これほど決定的な天国、地獄の差別はないであろう。聖霊の光をもつ愛の実存にこそ真の栄光が約束されている。

羊と山羊（マタイ伝第二十五章二―四六節）

この世のいかなる栄光も天界の栄光に比ぶべくもない。霊的幻影の顕現にあった旧約の預言者エゼキエルは象徴的にこう記している。

「首の上なる穹蒼の上に」

青玉の如き宝位の状式あり、

その宝位の状式の上に人の如き者在^います。

そのまわりに輝^{かがやき}光あり、

そのまわりの輝光は雨の日に

雲にあらわるる虹の如し、

ヤハウェーの栄光かくの如く見ゆ」(エゼキエル一・二六―二八)

新約の使徒ヨハネは、

「われ都の中にて宮を見ざりき。

主なる全能の神及び羔^{ひつじ}はその宮なり。

都は日月の照すを要せず、

神の栄光これを照し、羔はその燈火^{あかり}なり」(黙示録二一・二三、二三)

これは実に驚くべき次元である。およそ宗教的形態を超絶した活ける無形態宗教の真現実である。

ダンテは『神曲』天国篇第三三歌で、父神、聖子^{みこ}、聖霊の栄光をこう詠っている。

「いと深く輝ける高き光の

本体の中に三つの円こそ現はれにけれ、

色は三つ、その大きさはひとつにて。

その一つ、虹より虹の出づることくに

他のものを映すと見えつ、第三は

その両者より等しく息吹く火とぞ見えたる。

ああ、わが歓喜を言ふに言葉は足らず、

弱きかな、これはわが見たるものには

及ばずと言ふさへもおろかなるかな。

ああ、ひとり汝が中にあり、ひとり汝が身を

さとり、かつ、汝れに知られ、また知るに依り、

愛し、かつ、微笑む永遠の光よ」(天国三三・一一五―一二六 竹友藻風訳に準ずる)

さすがに宗教的大詩人の句である。栄光の質は愛であることを洞察している。

キリスト、神の羔が終末の期にこのような栄光をもて御座にあり、その周囲には白光に輝く翼をつらねて天使たちが環状に舞っている。キリストの前にもろもろの国びとが集められる。そしてこの無数の群を左右にわかし給う。それはあたかも牧羊者が羊と山羊とを弁別する如くなし給う。すなわち羊を右に山羊を左におくように、多くの人々を右と左にわかつのである。

牧羊者たる王が右におかれた者どもに言う。

「おまえたちはわが父なる神に祝福される。さあ来て、創世のときからおまえたちのために備えられた国の世嗣となりなさい。おまえたちは、私が飢えていたとき食べさせてくれた。渴いていたときに飲ませてくれた。旅人であったときに泊まらせてくれた。着物がなくて困っていたときに着物を衣せてくれた。病気でねていたときに見舞に来てくれた。

牢獄につながれていたときに慰問してさし入れをしてくれた」

すると右におかれた者たちがふしぎそうな顔で問い返した。

「主様しゅさま、わたしたちは何時いつあなたが飢えたのを見て食わせ、渴いたのを見て飲ませましたか。何時いつあなたが旅人であるのを見て宿らせ、裸であったのを見て着せましたか。何時いつあなたが病んでいたり、獄ひとやにあるのを見て、あなたを訪ねたのでしょうか」

そこで王は答えて言うのに、

「本当におまえたちに言うが、私の兄弟姉妹であるこれらのいと小さい者たちの一人になしたのは、すなわち私にしたわけなのだ」

左におかれた者たちに対して王はこう言った。

「詛のちわれた者よ、私から離れ去って、悪魔とその使つかいらとのために備えられた永遠の火の中に落ちて往け。おまえたちは、私が飢えたときに食わせず、渴いたときに飲ませず、旅人であったときに宿らせず、裸であったときに着せず、病みまた獄にあつたときに訪ねなかつたからである」

彼らはこれに対して反問して言う、

「主様、いつあなたが飢え或は渴き、或は旅人、あるいは裸、あるいは病み、或は獄に在つたのを見たでしょうか。訪ねなかつたとて当然ではないですか」

すると王は答えて言った、

「本当におまえたちに言うが、これらのいと小さい者の一人にしなかったのは、すなわち、私にしなかったということだ！」

と。この王の宣告によって、これらの者は追いやられて永遠の刑罰の地獄入りとなり、さきの者たちは永遠の生命を享けて楽園に入って往くことになる。

以上はイエスが十字架の受難を迎えんとした過越の祭の二日前に語った極めて重要な説話である。私はここに聖書の原文通りに書いたのではないが、行間の言葉を察しながら書いたわけである。

ここに言う「王」とはキリスト御自身のことである。この羊と山羊とに、動物として、ここに譬えられているような道德的な区別があるわけではもちろんない。人間の実存を二分する決定的な、根本的な規準は愛を生きたか、愛を生きなかったかだけである。

人倫の諸徳絶頂は愛である。愛するとは、この説話の如く、人を助けるということである。「小さき愛」の運動が元東大学長の茅誠司先生によって行われているが、茅さんもおそらくこのキリストの言を土台としておられるのであろう。イエスが最後のこの説話で語ったことは万人に共通な万人の課題で、愛の実践は誰にもできるはずである。そしてこれが地上最大の課題である。天国往生か、地獄横死かの別は、正に愛したか愛さなかったかである。神の、キリストの審判の最後の、最重要の項目は愛の実践の有無であるという。これはパウロもコリント前書第二三章で愛の讃歌を詠っている通りであり、ヨハネもその書翰で愛を懇々と語っている通りであり、ペテロも

「愛は多くの罪を掩う」

と告白している通りである。

私はこんな大事業をしましたでもなければ、私はこんな大著述をしましたでもなければ、私は何々運動をしました、でもない。私は使徒信經を信じています、またこれこれの宗教的な断食・祈祷・鍛錬・勤行をしました、でもない。日曜礼拝を厳守しました、モーセの十誡を踏み破ったことがあります、でもない。

福音書のイエスの全言動の源泉は何か。自分自身を神に捧げている献身の愛、神の本願の愛を全的に体受している事態である。そこから本当の隣人愛が滲み出で、進み出でている、というものである。その愛の相は千態万様である。いかなる病者をも癒し、死人をも甦らせる力ともなり、湖上をわたって弟子どもを助けるはなれわざともなり、わずかなパンと魚を五千人に頒けてなお余りありとのめぐみともなり、ついには十字架上の贖罪愛に極まった。

私はここに一つの実例を挙げよう。その人のこの行為は彼女の愛の全生涯そのものを証する象徴の如きものであるからである。

一九五〇年五月三日のことであつた。群馬県松井田の町に彼女はある友を訪ねた。その人の肉親は次から次へと肺患で仆れ、その人は残された唯一人であつた。樂しかるべき青春の十幾年を肺患のため、病床に暮している人であつた。その病室は畳の室であつたが、土足でなければ踏み入ることが出来ないほど塵に塗れていた。およそ考え得る最も慘憺たる病室であつた。しかしそこに臥している病者の顔は泥中の白蓮の如く、荊棘の白薔薇の如くであつた。信仰の勝利と平安をそこに

見た。私はこの病者を見舞に行つた友自身が脊椎カリエスの持病をもつ病弱の人であるのでその付き添い役と、この日は特別の意味があつたので同道したのである。この友とその病者との会話は、かつて私が聞いた最も美しきものの一つであつた。

私がしばらくその座をはずして戸外にいる間に、その友は病者のために地上最後の衣替えをしてやつた。友はそういう衣を用意して持つて行つたのである。特別の意味とは、そこで生ける告別式ともなる最後の集まりをするためであつた。

「一、三人私の名で集まるところに私も居る」

の如く、その集りは正に我ら三人で、キリストが見えざる主催者として聖霊をもって臨在して下さいたわけである。

聖書は黙示録第七章九―一七節を読んだ。「彼らは大いなる患難より出で来たり」のくだりに来て私の声は途切れた。涙を禁じ得なかつた。天界の祝福された幕屋生活のくだりのところは力強く読みあげた。私は地上で患難を負つた女性の神の国における歓喜と栄光について心をこめて語つた。病者にはやく天国に往きたい面もちであつた。我らは、「主よみ許に近づかん」(讚美歌三二〇)を歌つた。病者には声を発する体力はなかつた。ヤコブの夢に現われた天橋とそこを昇り降りする天使を夢みる如きまなざしで聴き入つていた。腹からの祈りを我らはなした。地上で初めて会つたこの病者と地上では再び会うまじき訣別をした。この病者にわが友は「伊都子さん!」とささやいてい

た。最後のなぐさめの言葉であつた。その姉妹はその月の十九日に主のみ許に昇つた。今はの際に

は慰める人もあらず。……ただ独りで。

わが友はそれ以前に病身を推して時折見舞って、たましいの世界の平安と希望を領けていたのであった。優しさの中に静かな平安と勝利をもっていた「伊都子さん」の印象は鮮かであった。しかしながら家族の中で唯一人信仰をもち、病と闘った彼女の涙を誰が充分に知り得よう。死の枕辺には『我れ独りにて酒槽さかぶねを踏めり』（イザヤ書第六三章）という主題の『旧約と新約』誌（藤井武著）第三二号が遺のこされてあったという。これは私の愛読のものであったが、私が訪ねたときカバンの中に有もちあわせていたので、彼女の存在にふさわしい内容のものであると思ったから、「読んで下さい」といって置いて来たものであった。この号は煙となったが、彼女の胸中には不滅の文字となって天界への旅の相伴をしたであろう。

この病者をかくなくさめ、いたわったわが友は川口愛子という人であったが、その名の如く全生涯を福音的な愛で献さげきった人であった。このような人々に主の十字架の栄光が輝く。

最後にパウロの言葉を書いて、人間の福音的実存七相の結句としよう。

「たとい私が人間や天使の異言を語っても、

もし私に愛がないなら、

私はやかましい鐘やさわがしいどらとなつてしまふ。

たといまた、私に預言する力があり、

すべての秘義とすべての知識とに通じ、

また山を移すほどの全き信仰があつても、もし私に愛がないなら、私はむなしい。

たといまた、私の全財産を施し、

また私のからだを焼かれるために渡しても、もし私に愛がないなら、私は無益である。

愛は寛容であり、愛は情け深い。

愛は妬^{ねた}まない、愛は誇らない、高ぶらない。不作法をしない、利己的でない。

いらだたない、ひとの悪をことあげしない。不義を喜ばないで、真理と喜びを共にする。

愛はすべてを担いぬき、すべてを信じぬき、すべてを望みぬき、すべてを耐えぬく。

愛は断じて滅びない。………

いつまでもながらえるものは、

信、望、愛の三者である。

これらのうちで最大なるものは愛である。」（コリント前書第一三章より、私訳）

第三部 無の実存

まえがき

無において私の意味するところは、虚無とか空無ではなく、実存的な無私、私心の無いことを根底とした実存的な無である。孔子が論語の中で、

「意なく、必なく、固なく、我なし」

といった我執のない心境に通ずるものである。イエスの全生涯は、

「わが意志に非ず、汝の意志が成らんことを」

という神意一切を以て貫かれていたが、そういう実存相がこの無である。

おのれを神の前に投げ身し、投入し、信入して、聖意を体現してゆく態勢であるから、この無はすなわち無限無量の内実をもっている。このような実存を無的実存と呼ぶ。無的実存を百パーセントに体現したのがイエスで、そのようなイエスを無者と私は呼び奉る。無者はすなわち無限無量者である。

我々は自らこの無私の無には至り得ない。我執の罪びとだからである。それゆえ無的実存の可能根拠はキリストの十字架の贖罪にある。この罪の贖いによつて無私の根源現実を賜るからである。

そこに聖靈が臨むことによつて無即無限無量の質が現実となる。このような無は太陽の白光の如きもので、白光が一切の光彩をふくむ根源相である如く、無は無限定無量なるがゆえに一切の徳相の根源相である。この無はそれゆえ有の相對概念としての無ではない。對極を絶した絶對極である。

「神は愛なり」

というよりも

「神は無なり」

という方が本当は深い。何となれば、神は一切の概念的表現で限定しきれるものではないからである。「神は無なり」とは、神は無限定者なり、ということである。パウロが、

「ああ神の智慧ちえと知識との富は深いかな、その審判さばきは測り難く、その途は尋ね難し」(ロマ

一一・三三)

といつてゐるように、不可測の神である。神は本来「隠れて在ます神」(イザヤ四五・一五)である。神意は深遠無量である。人間の合理的思惟しゐ(理性)でうなずかれるような神は神ではない。御利益ごりやく的に拝まれるような神も神ではない。この慘憺さんたんたる人間界、自然界を傍觀ぼうくわんしているかの如きひどい神が神なのである。人間をして傍若無神の如くふるまわせて知らぬ顔の如き神が神なのである。

「わが神、わが神、何で私を棄てなさつた！」

とイエスをして叫こゑばしめた神こそが神なのである。矛盾、逆説はなだしき神である。このひどい神が実はおどろくべき靈法の神であることが、いずれわかつき来る。それは今は秘められてい

る。「最後の審判」という表現をもって示されている終末のときに判然とするにちがいない。このような無神であるかの如き神こそ最も畏るべき神なのである。概念的表現をもってするなら、対極を絶した無量の愛の神なのである。

二〇世紀の文化文明が、いかに危機的様相を呈して来たかは火を見るより瞭らかである。文化文明の諸現象の根底たるべき高次な宗教の根が腐って来たら、文化文明という大木はやがてぶっ倒れてしまう。真の人間性回復のためには、強烈なる靈性、深遠なる宗教性を要する。今や靈的人格の飢饉である。この靈性なきところに本当の生命も愛もない。神、キリスト、聖靈の靈性は、無限無量の力をもった愛である。活現自在なる本願愛のキリストは万人の中に生きてはたらかんことを本願して居給う。

第一章 無者Ⅱ無的実存者

(マルコ伝第二〇章一七―二三節、マタイ伝第十九章一六―二三節、ルカ伝第一八章一八―二三節)

無者！^{むしや} こう唱えるとき、私の念頭にあるはただイエス・キリストのほか何者でもない。イエスは無的実存そのもので在^いますからである。何故であるか。

たとえば、あの「富める青年」とエルサレム途上のイエスとの問答を見るがいい。

(青年)「善き先生よ、永遠の生命を受けるには何をすればよいでしょうか」

(イエス)「なぜ私を『善き』と言うか。神様のほかに、だれも善い者はない。掟^{おきて}は君が知^しっている通り。――殺すな、姦淫^{かんいん}するな、盗むな、偽りの証言をするな、奪い取るな、父と母とを敬え」

(青年)「先生、それはどれも若い時から遵^{まも}っております」

(イエス)青年をじっと見て、愛惜して、「君、一つ足りない。行^いって、持っているものをみんな売^{ばい}って、貧しい人たちに施^{はくし}しなさい。そうすれば天に宝を積むことになる。それか

ら来て、私の弟子になりなさい」

彼はこの言葉にももの憂くなり、悲しげに立ち去った。たくさん資産があったからである。

(マルコ一〇・一七―二二)

即ち善なる者は天上天下唯神のみとイエスは喝破^{かつぱ}した。青年はこの聖者イエスの前に「跪^{ひざまず}いて」敬意を表して言ったのであろうが、イエスは青年の「善さ」なる語を拒んだ。そのころは無善であるとの自覚である。彼は正に聖者であり、善者であるのだが、自ら善を私しない。聖を私しない。「主の祈り」でも「汝の御名が聖としてあがめられんことを」と父なる神の聖名^{みな}のみを聖とした。イエスは無善の善者であった。パウロも、

「義人なし、一人だに無し。善をなす者なし、一人だに無し」

と詩篇第一四、第五三篇等の聖句を引用して叫んだ(ロマ三・一〇―一二)。しかし唯一人の例外者があった。それは神の子イエスであった。そのイエスが自らは無善者であると言った。彼はすべての美名の上に「無」の字をつけてこれを否定する自覚者、覚者(仏陀^{ぶつだ})であった。だから私はイエスを無者と申すのである。

またヨハネ福音書によれば、イエスはこう言っておられる。

「よくよくあなた方に言っておく、子は父のなさることを見ているのでなければ、自分からは何ごともすることができない。父のなさることなら何でも同じように子もまたするのだから」(ヨハネ五・一九)

また彼はこう言った。

「わたしは、自分からは何事もすることができない。聞いた通りにさばく。だから私がするさばきは義しい。私の意志を求めているのではなく、私を遣わしなされた者の意志を求め

ているのだからである」(ヨハネ五・三〇)

すなわち、イエスは自分から(アポ)は何ごとも出来ない、無能者であると言い給う。また我意はなく、父の聖意をひたすら求めて、聖意に順つてなすだけのことだと言う。すなわち無意者であるとのことである。これは親鸞のいう「無義」や「非行非善」に通じる。

あの「主の祈り」の中心をなしている句、「汝の御意の成し遂げられんことを、天における如く地においても」は正に以上のイエスの言と同精神で、神の本願の成就を祈つて、おのれは本願のおもむくままにと挺身されている姿である。即ち、聖意を体現せんことこそイエスの全実存全生涯の祈願であり、またそれを完璧に成し遂げ給うた。

「わが意志でなく汝の意志を」

は正にゲッセマネの祈りが白熱的にこれを告白し、彼は世のそむきと罪の一切を一身にひきうけて、神の番きの下に立ち、十字架にかかり給うた。

全生涯を貫いて神意体現を実行して来られたイエスを、神はいきなり旧約の靈能豊かな預言者エリヤよりもはるかにすばらしく天界に入れなさりたかったであろう。神の愛と義は実存者イエスにおいて渾然一如であったが、これが十字架で裂かれて、さばきの義、あがないの愛として碎きまた

碎けて、復活のキリストの中に新しき一となって顕現した。義にして愛であつた実存の果として、いきなり天界に入りたかつたであらうイエスの正当な「わが意」すらも十字架にかけて、神意に従い贖罪の大業を果したイエスの無私！これを無的実存という。このような無私なる無の内実は無限無量である。それは決して虚無でもなければ空無でもなく、また禪宗の無とも質がややちがう。さとの無よりも実存的な、倫理的な、しかも神秘的な投我、おのれを与えてやまぬ無私である。その内容が無量であるというのは、福音書を開けば直ちにわかるように、驚天動地の愛であり、乾^{けん}坤^{こん}貫徹の義であるからである。

神の聖意に対して「然^{しか}り」ということは、おのれに対しては「否^{いな}」ということである。アブラハムの信仰が正にこれであつた。

「アブラム、ヤハウェーを信ず。ヤハウェーこれを彼の義となしたまへり」(創世記一五・六)

老齡のアブラムに嗣^{よつぎ}子がいないのでエリエゼルを嗣子としようとしたが、神はこれをゆるさず、アブラムを幕屋のそとに呼び出して、夜空の星が数えられるかと問い、その無数であるようにアブラムの子孫も無数になる。その基となる嗣^{こいば}子がこれから与えられるというのであつた。今までの自分の経験や常識や判断では不可解な神の言であるが、そのおのれの経験、常識、判断を踏み越え、己れに対しては否を心の中に宣し、神の言であるから、神の意志であるから、必ず成ると神の意志と言の中に自分を托して「然^{しか}り」「本当です」(原語は「アーメンとする」という語)といった。これが直訳すると「ヤハウェーに在つてアーメンとした」ということである。別な言い方をすれば、信ず

るとは「神に即して然りとする」ということである。すると、この信じ方を「神は彼に対して『義(セデカー)』と見なした」が直訳である。すなわち、神の意志を、聖意を全実存的に「然り」と体受し、自己を全実存的に「否」と棄てること、これが信仰であり、そこから「義」の宣言がくる。義とは、そのように神の聖意が全実存的関係において立てられている事態を言う。決して一般に思われているような「正義」ではない。

そもそも我ら人間の罪の中の罪は、神の意志に対しておのれの意志を主張する我意である。これが一すなわちサタンの反逆心である。それゆえにイエスは神意の前に「自己の意志に非ず」ということを最深の自覚としていた。これが福音的無私、無我である。このようなたましいの在り方を私は無的実存というのである。そしてパウロによれば、自分の側、人間の側を肯定することが肉であるから、聖意を立てることが福音的な意味の霊的ということである。神意が全実存的に受けとられ、神意がその全実存を貫いている事態を霊的という。決していわゆる心靈的な霊的ではない。それゆえ「無的」ということは、「聖意の受けとられている」現実であり、その内実には「義」であり、その事態は「霊的」ということである。無—義—霊、これは不可離の相関的、円環的、一貫的概念である。およそ福音的諸概念は、実に十字架を要とした有機体的な関連の内実をもつものであつて、神学者や聖書学者がややもするとおちいり易い分析的な諸概念ではない。

このような聖意に全実存の貫かれていることが義であり、イエスこそ真の義者、義人であるが、さてその聖意そのものの深奥の内実は何か。それは「神は愛なり」において表現されている愛(へ

セッド、アガベ」である。人間が神を表現し得る最深にして最後の言は何といっても「愛」であることは、聖書の啓示が示す通りである。しかし、この「愛」の内容と表現は多種であり、劇的であり、矛盾的であり、不合理、非合理、超合理である。むしろ「愛」という概念ではわりきれない場合が現実にはしばしばである。「ひどい愛」であるという方が、神の神らしい愛である。そういう「ひどい愛」「わからぬ愛」は無限無量な深刻なもの、それを無量愛というか。そのような無限定の愛を信じ抜くところに、義がある。そのような神と人との愛信の関係を義という。

律法の根源は聖意志にある。神がヤハウェー神として「わが民」イスラエルと結んだ「契約」のしるし、保証としての「律法」の根本精神は、神のイスラエルへの信愛の断言命法である。

「汝にとつてはわが顔の前に他の神々は無い」

がモーセへの「十言（誠）」の第一言（誠）であった。「十誠」は原語では「十言」でこの言い方の方が根本的表現である。実存的に拝一神^{はいいつしん}の人格関係である。理論的な唯一神ではない。啓示宗教である限り、いわゆる理論的ということは意味をなさない。すべてが啓示の現実の事態であるから。

「富める青年」との問答でイエスが言った「殺すなかれ」も実は「汝は殺さじ」乃至は「汝は殺さず」であつて、禁止命令ではなく、断言命法である。神はイスラエルの民を信じて、

「汝は殺人はすまいぞ」

ないしは、

「汝は殺人はしない！」

と断言しているのであった。その背後には、

「私が汝をエジプトから救い出した神であるから」

というような最初の宣言（出エジプト二〇・一二）がこだましているのである。この恩寵おんちようの神のものである汝イスラエルが「どうして殺人などしようか」という意がかくされている。神の意志はそのような信愛のつらぬきである。意志そのものの中に信愛がこもっている。神の言はこのような信愛の意志のつらぬきである。言そのものの中に信愛がこもっている。神の言はこのような信愛の意志に発している言である。だから聖意みこころの貫く垂線的な神と人との関係において義が存する限り、この義の内的性格は、そのような信愛である。義の律法的内容は十言（誡）そのものが示すとおりで、十言の内容を総称すれば「義」の一語であらわし得よう。パウロが「律法は聖なるもの」といったのは（ロマ七・一二）、聖意に発するからである。

このように、深い神の信愛のこもった「十言」が義である。「神の義」は律法の中にすでに福音的な意味でかくされていたのである。この神の義たる律法を内がわから完全に受けとめて充たしたのがキリストである。だから「神の義」はキリストの福音の中にあらわに、もっと積極的な内実をもつてあらわれて来た。それはキリスト・イエスが、神の義を全うし、神の律法を成就し、神の義そのものとなり給うたからである。そしてその「義」を贖罪の十字架をもって人に与えたもうたからである。それゆえイエスにおいてあらわれた神の義は直ちに神の恵みであり、神の愛である。このことはイザヤ書にすでに預言的に告知されている。すなわち、

天よ、上より滴らすべし、雲よ義を降らすべし。地はひらけて救を生じ、義をも共に萌え

いだすべし、われヤハウェーこれを創造せり。(イザヤ四五・八)

われは義を行い、救を施す神にして、我の他に神あることなし。(イザヤ四五・二二)

わが義はちかづき、わが救はすでに出でたり。(イザヤ五一・五)

されどわが救は永遠にながらえ、わが義はくだることなし。(イザヤ五一・六)

これらの句をみると義と救とが同義語として用いられている。義が救であるということは義がめぐみとして与えられることと同然である。

聖意を実存をもつてつらぬいたイエスは、神からアブラハムよりもはるかに深い意味において、実質において、決定的に神から義とされた。否、実に神の義そのものとなった。しかも聖意は深い信愛であるから、キリストの義の内実はつねに旧約の律法を超える積極的な愛で、パウロのいうように、

「愛は律法の完成である」(ローマ三・八、一〇、コロサイ三・一四)

ロマ書第三章でパウロが、

「これ今(神が)おのれの義を顕わして自ら義たらんため」

といっているのは、神が聖意靈法たる義を不義(罪)に対してあらわさんために、キリストを十字架にやむを得ざる唯一の道として、つけたもうた。神の信愛を人がうらぎったのが人間の罪である。神の律法の奥義は「すべしすべからず」という冷たいわゆる「律法」では本来なかった。パリサ

イ的な「律法の義」と真に預言的な「義」とはちがう。そのことはアモス、ミカ、イザヤの諸書に瞭らかである。

「人よ、彼さきに善きことの何たるかを汝に告げたり、ヤハウェーの汝に要めたもうことは、唯だ義を行い、憐れみを愛し、謙遜りて汝の神と偕に歩むことならずや」(ミカ六・八)

この句をみても、義とあわれみは同義語的で、義の裏は愛、愛の裏は義である。

「公道を水の如くに義を尽きざる河の如く流れしめよ」(アモス五・二四)

公道と義とを同義語にしている線の太い言である。それから、たとえば詩篇第八五篇の一〇節に

「あわれみと真実と共にあい、義と平安(平和ではない)とは互に接吻せり」

とある。あわれみ(愛)と真実(信)とが一如、義と平安とが同義語的に用いられている。平安は神との深い交りの事態である。すなわち深い縦の關係が信仰において遂げられれば、それが平安であり、義である。

ところでイエスが全うしたのは「律法」の根本精神であり、預言者の精神の根底にあつたものである。聖意を体现したイエスが、聖意に従わない人類の不義を負つて、神の聖意貫徹たる義の審判を身に受けたのが、イエスの十字架の第一義であつたから、パウロはあのように言った。しかし、このイエスの十字架の義を信受する者は、このイエスの義を賜る。これが、

「信仰によつて義とされる」

ということである。また同じ第三章でパウロが、

「功いさおなくして、神の恩恵めぐみにより、キリスト・イエスにある贖罪あがなによつて義とされるのである」

という通りである（ロマ三・二四）。

この消息をパウロが信仰者の告白として、最もよく言いあらわしているのは、何といつてもガラテヤ書二・二〇である。

「私はキリストと共に十字架につけられた。でも私は生きている。だが最早私ではない。私の中にはキリストが生きて在います。今私が肉体にあつて生きているのは、信仰に在あつて生きているのだ。神の子に対する信仰である。彼は私を愛して、私のために自分自身を棄ててくださった」（私訳）

キリストの十字架の砕けによつて、私は砕かれている。死んでいる。罪から解放されている。無私無罪の「無」を賜たまっている。これを全存在をもつて信受している事態、然しかり、主のあの十字架の贖罪あがなの事実が主体主語となつて、私に事実をもつて宣言しておられる事態である。これが私の救のたしかさである。パウロと共に「十字架につけられた」と告白できる絶対恩寵おんちようの信仰の現実である。キリストの無的実存の事態を恩寵として受けとることのできる所以ゆゑんはここにある。しかし生みの現実私は罪びとに過ぎない。キリストの十字架は死に至るまで私に不可欠の罪のゆるしの恩寵、贖罪あがな愛である。十字架を通して神の義と愛が一貫いちに一如の恩寵として私に臨んだ。直接に臨むはずであつた神の義と愛とがわたしの罪のためにどうしても十字架を通して来なければならなかつた。

罪びとたる私たちは十字架を通して初めて神の義も愛も一貫一如の相で受けとる。

神の直接愛は我々の罪のために北森氏のいわゆる「神の痛みの愛」とはなったが、一度キリストの十字架の砕けの愛を経てからは、聖霊の降臨によって圧倒的な愛となつてのぞんでくる。十字架の砕けの愛にもかかわらず、我々が罪びとである限り、神の側に痛みはのこるとしても、キリストの砕けの愛のゆえに、神の痛みの愛はうちにかくされ、神はみたまをふりそそぐよろこびの愛をもつて我らに臨み給う。みたまにこもる神の愛は、光を放ち、力にあふれ、生命を与える。そこに痛みは全くかくれてしまつてゐる。十字架の砕けの愛を通してもお神の痛みの愛が前面にでていたのでは、我々がやりきれない。我々に直接関わりをもたしめ給うのは正にキリストの十字架の砕けの愛で、そこに無罪無私の恩寵の現実が与えられ、そこに直ちに聖霊の歡喜の愛が圧倒的にのぞむ復活、新生のよろこびがつねに新たにくる。それでこそ福音である。イエスが受洗されたとき、臨んできた聖霊と共に、聞えてきた天来の声は、

「汝はわが愛しむ子なり、我汝を悦ぶ」

であつたではないか。聖霊は歡喜のみ霊である、愛のみ霊である。

かの預言者エレミヤに神はすでにこう宣言しておられる、

「然れどかの日の後にわがイスラエルの家に立てんところの契約はこれなり、即ちわれわが律法をかれらのうちにおき、その心の上に録さん。我は彼らの神となり、彼らはわが民となるべし、とヤハウェー言い給う。人おのおのその隣人とその兄弟に教えて汝ヤハウェ

「我を識れとまたいわじ、そは小より大にいたるまでことごとく我を知るべければなりとヤハウェー言いたもう。我彼らの不義を赦し、その罪をまた思わざるべし」(エレミヤ三二・三

三、三四)

すなわち「新しき契約」といつて新約への預言とされているこの有名な聖句において、罪のゆるしと共に罪の忘却が宣せられている。況んやキリストの十字架の恩寵の事実のあとでは神の痛みが前面に出るわけのものではなく、キリストの砕けとみ霊の降りこそ我らに最も深い関わりをもっている恩恵の現実である。かくてみ霊の内住によりキリストと一如の現実である。

そのようなわけで、パウロの、

「われキリストの中に、キリストわが中に」

なる使徒的信仰の現実を实によく喝破している内村鑑三の次の言は、彼の信仰告白の白眉であると私は思う。

「キリストに同化されし者、キリストの活ける体の一部分となりし者、其困苦と歓喜と、其恥辱と栄光と、其死と復活とを、彼の中に在て彼と偕に父なる神より分与せられし者、是れが基督信者である。へ信ずるゝとは此の場合においては知識的に是認することではない。亦感情的に信頼することでもない。キリストを信ずるとは彼の神格の中に我が人格を投入することである。そうして我を無き者として彼をして我に代つて我が裏にあらしむることである。是れが即ち信の極であつて、キリストは我等より斯かる信仰を要求し給うのであ

る。キリストが神であり、靈の宇宙であり、我等が其靈界の一部分となるを得て、始めて我等の聖化も満足に行われ、亦キリストの光は我等を通して世に顕われるのである」(内村

鑑三全集第一三卷)

この文字は無教会の信仰の前進の方角を示している予言的なものである。しかしすばらしい文字ではあるが、なお一つを欠いている。それは聖靈の事態がこの中に入っていないことである。ここに述べられてあるキリストとの一体の事態を可能ならしめるもの、それは上にも触れた如く、キリストの十字架の贖罪が私を、根源的に罪「無き者」、私「無き者」とし、無的実存の根底を与えて下さったこと、そしてみ靈のバプテスマにあずかり、「キリストわが中に」という現実をみ靈の内をもつて与えて下さること、これである。今なお十字架の贖罪の信仰に踏みとどまって、ペンテコステに突入しないところに無教会一般の限界がある。無教会において、それを突破した先駆者は手島郁郎氏である。「聖靈の愛」を唱道したことは彼の歴史的業績である。

私は死に至るまで^{さんたん}慘憺たる我であろうとも、もうそんなことにおそれなく、わが衷^{うち}に宿り給う聖靈のキリストが原始核^{さんたん}として在^いまし給うから、キリストの靈生が、永遠の生命が顕然と与えられているから、救のたしかさあり、栄化への希望ありである。私は、

「栄光より栄光に進み、主たるみ靈によって、主と同じすがたに化せられる」(第二コリント

三・一八)

こと、パウロと同質のめぐみの中にいる。み靈^{たま}のキリストはわが内に在って、この破れ器^{うつぶ}、土の器

を通してでも、その栄光をあらわし給う。觀念でも、御利益でもない。身証することである。その身証の内容は、各人各種各様でよい。学生は学生らしく、会社員は会社員らしく、主婦は主婦らしく、乙女は乙女らしく、芸術家は芸術家らしくありながら、それぞれにおいて主の栄光が変貌してあらわれるのである。性来の旧き我が、いよいよ死に、いよいよ砕かれ、いよいよ無き者とされてゆく、キリストの十字架のゆえに。新しき我が、ますます生き、ますます力を得、ますます自由となり、愛にあふれてゆく、み霊のキリストのゆえに。そのような事態を無即無限無量の無的実存という。

さてこの辺で再びマルコ福音書第一〇章の前掲の個所にもどることとしよう。

イエスが青年に十誡をまもらうと問うたとき、その青年は、

「先生、私は幼いときからみんなこれを遵したがつてきました」

と答えた。イエスは彼をじつと見つめ、愛惜して（エーガペーセン即ちアガバオーが使つてある）言つた。

「おまえはなお一つを欠いている、往つておまえのもっているものをみんな売つて、貧し

いものに（その代金を）施しなさい。そうすると財宝を天に得ることになる。そして私に伴

いて来なさい」

とたたみかけて迫つた。

この言葉をきいて青年は憂い悲しんで、そこをすくすく去つていった。青年は大金持であつたから。イエスが「なお一つを欠いている」といって青年に迫つたものは、財力がないのではなく、

ありあまるほどあることで、何も欠けているのではなかった。欠けているとは、逆説的な言で、すべてのことが満ちているが、その大切なものを投げ出す心がまえが欠けているのであった。イエスはその人がこれだけとは思っている大切なものを投げ出せ！ というのである。この青年は実は財宝を惜しんでいることにおいて、おのれ自身を惜しんでいるのである。イエスの心はそれゆえ、自分自身を棄てよ！ ということ。それがなかなか出来ないものである。学者は学問に執着する。事業家は事業に執着する。その他どのような対象であれ、人間は自分の好きなものにおいて実はおのれ自身を惜しんでいるのである。だからイエスは自分自身を棄ててかかれ！ と言うのである。ではどこにわが身を棄てるのか。路傍へか、谷底へか、海底へか。そうではない、キリストの中へである。棄てどころはキリストの中。そのときこそ見たまの力により、富も芸術も学問も事業も神の栄光をあらわすことになる。

すなわちこの青年は結局富において自分自身を惜しんで、キリストの言に従えなかった。「彼は憂いを催し、悲しみつつ去った」のであった。

そこでイエスは弟子たちに、

「富者が神の国に入ることとは何とむずかしいことか」

と嘆じた。そしてさらにつづけて、

「子たちよ、神の国に入ることとは何と難かしいことか。富者が神の国に入るよりは、駱駝らくだが針の孔あなを通る方が反つて易しい」

と言った。〈針の孔〉というのはそういう名のいとも狭い門があつたのでイエスはこう言つたわけ
で、何も無理な針小棒大な譬^{たとえ}を言われたのではない。このことは実は私が、エルサレムのある古本
屋の親爺さんに、旅人として問いてみたら、言下にその親爺さんは私に答えたので、私はああそ
うだったのか、と合点がいったのである。今から十一年あまり前のこと、一九六二年の春のことであ
つた。

富者とは何か。この青年は財の富者であつたが、実は財において心がおごつていたわけ、執着し
ていたわけ。その他、知識慾の富者あり、事業慾の富者あり、健康の富者あり、腕力の富者あり、
地位の富者あり、権力の富者あり、要するに、たましいの貧者の正反對の事態である。たましいの
貧者であるなら、財があろうが、学問があろうが、地位があろうが、権力があろうが、そういう相
対的な価値に支配されることなく、神の国が無比な現実であることをよろこび、神の国の民となれ
る。それには何としても聖霊が宿ることを要する。

弟子どもがイエスのこの言葉を聞いて、

「それでは誰が救われるでしょう」

と嘆じたら、

「人間にはできないのだが、神には出来る。神には何でもできる」

と言いなさつた。そのことは神がおまえたちの中に入つたら、即ち、

「みたまの神が内住して下さつたら、できるぞ!」

というところである。

さすがにペテロはこう言い得た。

「私たちは一切を棄ててあなたにお従いしました」（マルコ一〇・二八）

そこでイエスはさらに、

「私のため、福音のために、家も、兄弟も、姉妹も、父も、母も、子も、恋人も、妻も、田畑も、一切を棄てる者は、誰でも今の時の百倍を受けないことはない」と

と。マルコにもマタイにもルカにも、「恋人も」とか「妻も」とかは記していない。随分私は乱暴な書き方をする。学者は学問的に文句を言うだろう。しかし、今私はイエスの気合に乗って書いているのだ。地上の親しい者に例外をゆるしては、イエスの気合は読めない。然り、主・イエスのためには、おのれ自身を棄ててかからなければ、本当にイエスを百パーセントに愛しているとはいえない。おのれをイエスの中に棄ててかかる。これが信仰の秘訣である。これが愛の極致である。するとみたまの力がくる。みたまの愛がくる。このみたまの愛が、こんどは棄てた親しい者たちを、否実（いな）に敵をも、一切（いっさい）を救いあげる人たらしめる。これが「百倍を受けぬはなし」ということなのである。まずキリストとの縦の関係を百パーセント、全的なものとせよ。一切を棄てよ、右顧左眄（うごさへん）するな。するとこんどは東西南北、一切の者を救いあげ、助け起こす人となるぞ。何たる福音か。キリストの福音のものすごさはそういうところにあるのだ。これが永遠の生命というものだ。永遠の生命も私するのではない。永遠の生命を人々に頒（わ）かたざるを得ないのである。無量なるがゆえに、

無量に頒ち得るのである。本願の愛のありがたさよ。こちらは本願無！ という実存にされるのである。

本願無の焦点はキリストの十字架である。この無の焦点に無限無量がやどり、かつ展開する。十字架のキリストから復活の主と聖霊の主が地の極までも世の末までも光を放ち、生命をわかち、義を貫かせ、愛をもつて包みつつ、全うしたもう。

パウロも言った。

「十字架(という事実)の言は、滅びゆく者には愚かであるが、救にあずかるわたしたちには、神の力である。……知者はどこにいるか。学者はどこにいるか。この世の論者はどこにいるか。神はこの世の知恵を、愚かにされたではないか。……ユダヤ人はしるしを請い、ギリシア人は知恵を求める。しかし私たちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝える。

……召された者自身にとつては、ユダヤ人にもギリシア人にも、神の力、神の知恵たるキリストなのである」(第一コリント一・一八―二四)

イエスが、

「恵福なるかな、霊の貧しい者、天国はその人のものである」

と道破されたとき、それは実はイエス自身の大告白で、イエスこそ、さきほどから見て来たように、たましいの貧しい、霊的に無一物の実存的無者であった。であるから彼の中に神という天国そのものが入って来た。

「父と私とは一つである」(ヨハネ一〇・三〇)

とか、

「私を見た者は父を見たのである」(ヨハネ一四・九)

とかいう言がそのことを語っている。

さきほどのパウロの言のあとで、パウロは、神がこの世の愚者、弱者、卑賤者、輕侮者(輕んぜられる者)、無者ども(タ・メー・オンタ)を選んでこれに福音をゆだね、キリストを彼らの知恵と義と聖と救贖となして、この世の智者、強者、有力者を辱めんとした。これはただ主を誇らんため、主に栄光を帰せんがためと語っている(第一コリント一・二六―三一)。

また同じ精神のことを、同じ手紙の三・一八―二三でパウロは語って、福音のためには真の「愚者たれ」とすすめ、大愚が大賢であることを喝破、万事万象がかかる愚者のもの、かかる愚者はキリストのもの、キリストは神のもの、といっている。良寛も自分のことを「大愚」と号したが、気魄はパウロと相照応するものがある。

そしてパウロはさらに同じ手紙の第四章で、

「我らはキリストのために愚者となった。……我らは弱く……我らは卑しい。……罵られ

るときは祝し、責められるときは忍び、譏られるときは勧めをなした。我らは今に至るま

で世の塵芥の如く、万物の垢の如くされた」(第一コリント四・一〇―一二)

と言っている。まことアーメンである。どうあつかわれてもいい。十字架の主と共に責められ、棄

てられるのは幸である。みたまの愛がどん底の力をもっている。相手をつつんでしまふ、荷ってしまふ。キリストの福音の身証のためには一步も退くわけにゆかない。聖意体现は、この土の器の天来の義であるからである。道であるからである。無的実存は天来の愛であるからである。聖意体现も無的実存も、同じ事態の表現にほかならない。表現はおのずから多様になる。無色透明のダイヤモンドは光の屈折で多様の光を放つではないか。福音という無限無量の内容のものは、パウロもヨハネも表現しきれなくて仕方がなかったに相違ない。神の言は無限である。限られた言のなかに盛られている神の根源語たるキリストという原始の言そのものをつかまれないで、これにつかまれないで、人間的ないわゆる学問的厳密性のみをこととしてゐる学者どもに對してキリストは何と言われるだろう。

私も塵芥のように大地の中にとけこんで、何でも受け入れて万物を生成化育する土壤となりたい。春が来る。万物復活の春だ。祝福をもたらず土壌。陽光を受け、天露を吸っている天地の胸から新緑が萌え百花が咲き出でるように、使徒的信仰のキリスト者となって、信仰の新緑が萌え、百花が咲き出でるかくれた力になりたい。また処女地をこそ開拓して、そこをサフランの花咲く楽園としたい。真理を無私の心で愛する人は、カトリックの中にも、プロテスタントのもろもろの教会の中にも、無教会の中にも、未信の人々の中にも必ずある。それらの人々が、「新しきパン種」(マタイ三・三三)となってくれるように。私は平和を愛する。しかし、パリサイとは主と共に戦う。相対的差別を絶し、主義主張を越えよ！

自己義認や、おのが主義、主張に——それがどんなにそれ自体義しいものであろうとも——こだわらなれ。福音は無限無量の多次元のものだ。パウロが、

「その長さ、深さ、広さのいかばかりなるを知らず」

と申した通りだ。福音の前に碎かれた魂で、それぞれ賜りたる使命を、いつもキリストにゆだねながら相たずさえて進みたいものだ。パウロが第一コリント第二二章で説いているように、おたがいさまが、大きな有機的な身体の各部分であることを自覚しながら。

福音にはキリストの聖霊の知恵があり、力があり、光があり、生命があるから、世界のどんな精神的な真理も、この福音の力でつかめる。この福音の光に照してその価値を、限界を知り得る。絶対自由の、絶対次元の福音であるから、決して他にとらわれることがない。また排他的になることがない。およそいつわりでないもの、およそ背理でないものは、何でも大きくこれを摂取、内包することができる。われらはその意味で仏教の言葉や概念を、単に彼らの用いる意味内実そのままにおいてではなく、それをもっと高次なものへと引きあげて用いることができる。キリスト教の世界に一般に用いられていなくとも、仏教の世界で高次なものは、虚心をもつてこれを学び、これをキリスト教に援用する。仏教用語には、しばしば実に深い適切な表現があるのであるがたい。例えば「本願」、「即如」、「体现」、「円現」といった表現は実によい。みたまの次元からの光でこういった表現をみると、福音の事態を言いあらわすのにまことに適切な表現であることを知る。その他、儒教の言であらうと、回教であらうと、老子であらうと、何でも自由に用いることができる。こうい

う在り方、つかみ方では、キリスト教が仏教化するとか、混淆宗教化するとか思つたりするならば、それは、その人の福音の事態が観念的で、主義的で、次元が低いからで、警戒し、恐れるのである。それは自らの福音の硬化、パリサイ化を曝露するにすぎない。

内村鑑三も次のように言っている。

「言辭を共にする者が、我が信仰の友ではない。信仰の目的物に対し心の態度を同うする者、其者が我が信仰の友である。神と称び、キリストと唱え、天国と云う者にして、我が信仰の敵が尠くない。之に反して弥陀と称び、如来と唱え、浄土と云う者の中に、我が我が信仰の友を見るのである。我は勿論今に至て我がキリストの福音を去て仏教に帰せんとはしない。然れども我は基督信者なるの故を以て、神が我国に遣り給ひし多くの信仰の戦士を認めざらんと欲する能わず、我は日本人である、故に情においてはルーテル、ウエスレー、ムーデーに對するよりも、源信、法然、親鸞に對し、より近く感ずるは止むを得ない。我は彼等が弥陀を慕ひし其心を以て我主イエス・キリストを慕う者である。

夏ころもひとへに西を思ふかな うらなく弥陀を頼む身なれば

の源信僧都の一首は、移して以て我がキリストを頼むの心を歌うに足る。我は我が国人の中に斯くも懐かしき信仰を抱きし人の多く有りしことを歎びかつ感謝せざるを得ない」

（全集第二三卷）

内村鑑三も亦、キリストの偉大なハートをもつて、仏僧たちの言説や実存に傾聴した。そして

自由にこれと親しみ、いよいよ福音のすばらしさを知り、仏僧たちの信仰をもキリストの光で充分評価し、かつ心の糧にもした。また先生は「全信の道」という短文の中で次の如く喝破した。

「基督者の信仰生活は半信半行ではない。全信無行である」

「全信無行」、然り、イエスがこれを百パーセントに果した。それゆえイエスは全信全行であった。これが無的実存の極致である。それゆえ、イエスは言った。

「神の業（行）はその遣わし給える者を信ずる是なり」（ヨハネ六・二十九）

この「を信ずる」という原語も、キリストの「中へと信ずる」といった気もちの表現である。キリストへの信入である。それが神的行為であるとの驚くべき言である。すなわち、信仰こそ最も内的な神的行為である。私がつねづね信仰と申し、信仰一如というのもこのような消息から発しているのである。

いわゆる行為が直ちに信仰から結果するなどと言っているのではない。どんなに我々人間の実存の行為面がはじめなものであろうとも、行為の本質はどこまでも信と同質であることを言っている。信と言との関係も同じである。信は口に発して言となり、手足に動いて行となる。信——行——一貫にこそいのちがかようのである。

ゲーテがファウストをしてヨハネ一・一の、

「元始に言があった」（„Im Anfang war das Wort.“）

を

「元始に行爲があつた」(„Im Anfang war die Tat.“)に改めさせた。しかし私は言いたい、

「元始に信があつた」(„Im Anfang war der Glaube.“)

と。「信は神と偕ともにあつた。信は神であつた」である。信が根源であつてこそ、発しては言となり、動いては行となる、である。「全信無行」の全信も私されてはならない。神わざである。むしろ人間の側からは絶信の信なのである。信仰が変に凝りかたまると、それは鼻もぢならない。何か信念的な、私された信となる。自分の信仰などはあてにならない。そんなあてにならない信仰を厚いの薄いのと問題にするのは、そもそも間違いである。あてになるのはキリストだけである。だから逆説的に言わざるを得ない。自分の信仰など棄てろ、と。自分の信に絶するところに、上から「神のわざ」としての「信」がのぞむ。それこそがキリスト主体の信である。これは正に聖霊の内実をもつたものである。これらの事態はいつも十字架を焦点としている限り本ものである。しずかな深い祈り心がそこにある。

現代キリスト教界が、ややもすれば、神学偏重、聖書の学的研究偏重からくるところの信仰の觀念化現象を一般にもたらししていることは事実である。神学も聖書研究も、それ自体はもちろん重要な課題ではある。しかし最も大切な問題は何か。それはキリストがみ霊たまをもつて集会の中に、各個人の実存の中に生きているか、ということである。使徒たちが身証し、証言しているあの活き活きとした事態は、全く聖霊のはたらきによる。聖霊のバプテスマを受けていない限り、この消息はつ

かめない。

パウロが、ギリシア文化の中心アテネの都で伝道していたときに、エピクロス派やストア派の哲学者たちを相手に、アレオパゴスの中に立つて証言したとき、彼は、

「我らは神の中に生き、動き、また在るのだ」(行伝一七・二八)

といつて、聖霊の神の遍在を彼らにわかるように暗示したが、彼の手紙を読めば、いかにパウロがみ霊に貫かれ、み霊を宿し、み霊の生命と力と、智慧と、愛の中にあつて福音していたかを知る。神・キリスト・聖霊、三位一体という教理的な構造において彼は理解していたのではなく、実存的に、体験的にしっかりと相互不可離の關係において把握し、彼の実存の中に貫かれていたから、あの自由な、重厚な、また迫力ある、またねんごろな、また奔流的な、爆発的な、また輝かしき言説となつて縦横無忌にあらわされている。私はみ霊の賜^{たまもの}やもろもろの霊的現象に重点をおいてゐるのではない。キリストとの深い力強い生命的關係、義の關係、愛の關係も、この聖霊の内住において初めて根源的であることを言っているのである。その点、現代キリスト教界一般が、深くおもいをいたし、使徒的信仰からずれを來たしている現状を正直に認め、一つの突破をなすべきを言わざるを得ない。私が育てられた無教会も——いつまでもその恩義を私は忘れないで深く感謝しているのであるが——もう一步前進すべき課題は、言の深き意味において、使徒的なみ霊の信仰現実に突入すべきことにあると痛感するものである。このことを裏書きする如き文章を内村鑑三先生は遺^{のこ}しておられる。

「道を聴くこと数年また数十年、キリスト教の真意は我れことごとくこれを解せりと思ひし人の一日聖霊の閃光に接するや、彼れ地に伏して叫んで言う、我は罪人なり、キリストの十字架のために我を救ひ給へと、而して後、彼の全身に始めて平和あり、依つて知る、聖霊のともなわざる伝道の全く無効なることを。……聖霊に点火せられずして、多量の聖書知識も一人の靈魂を神の救済に導くに足らず」(全集第二二卷)

また「救済の三階段」という短文に曰く、

「行うて救わるるにあらず、信じて救わるるなり、信じて救わるるにあらず、聖霊を受けて救わるるなり。行為は信仰をうながすために必要なり、信仰は聖霊を招くために必要なり。行為、信仰、受霊は救済の三階段なり。人はそのすべてを経由するにあざれば神の天国に入る能わざるなり」(全集第二二卷)

私が黙せば石が叫ぶであろう、

「現代キリスト教界よ、使徒的信仰に立ち還れ！」

と。そして誰よりもこの私自身が、死に至るまで、パウロの如く、ヨハネの如く、私自身は芥種一粒の如き存在であるが、いよいよ彼らと同質の信仰者となつて、キリストのものでありたいと靈願する者である。このねがいはずでに成就しつづつある。何となればキリストの深き御本願が、十字架、復活、聖霊の事実かつ現実が私を圧倒し滲透して下さるからである。

内村先生が「晩春の黙考」なる短文の中で次のような抱負を語っている。

「余輩は私かに思う、最後に召されつつあるところの日本国が、終には人類の最も要求する所の純粹に最も近きキリスト教を世界に供する置位に立つ者ではあるまいかと……親鸞、日蓮、蓮如のような高僧となつて開きし大和魂は、ルーテル、ウエスレー、ビーチャーに優るの大宗教家を出すに適するの精神ではあるまいか。神と人類とは日本人より宗教的大革命を埃ちつつあるのではあるまいか、日本国の二千年間の歴史は我等にこの大責任を委ねんための用意であつたのではあるまいか……」(傍点筆者)

このような大抱負を瞑想された先生に應えるためには、キリストの原始力の靈生をたましいに深く宿す無的実存者を要する!

無的実存者、無者キリスト、主イエスよ、汝の無的実存、すなわち聖意体现をわれら土の器に、塵芥的存在に成らしめたまえ、聖名に在つて懇願し奉る。アーメン。合掌。

〔註〕 本稿の原型は『曠野の愛』誌第三三号(一九六〇年春季号)の主題「無的実存」である。

第二章 天鐘（キリストの福音の靈想）

諸行無常

一九五五年の大晦日の夜、除夜の鐘を聞きながら瞑想した。少年時代に、母や兄や姉と除夜の鐘を炬燵こたつにあたりながら聞いた小石川同心町時代は今いずこ。母は失明生活三〇余年の苦杯を味わいながら今年（一九五六年）米寿を迎える。その兄も姉もすでに地には居ない。（母は一九五七年一月一九日召天した）

北は北海道、南は九州の鐘の音がゴーン……ガーン……。いんいんたる鐘のひびきである。
「祇園精舎ぎおんしょうじやの鐘の聲、諸行無常しよぎやうむじやうの響きあり、娑羅双樹さらかうじゆの花の色、盛者必衰しょうじやひつすいのことわりをあらわす。おごれる者も久しからず、唯春の夜の夢の如し。たけき者も遂にはほろびぬ。偏に風前の塵に同じ」

平家物語のこの名句によれば、梵鐘ぼんしやうは人間界の諸行無常をはかなみ、煩惱ぼんごうより解脱げだつせよと響くが如くである。

同じく「無常」を語る散文詩、有名な方丈記の一節が連想される。

「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず、よどみに浮ぶうたかたはかつ消えかつ結びて、久しくとどまることなし。……朝に死に夕に生くるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。不知、うまれ死ぬる人いづかたよりきたり、いづかたへか去る。又知らず、かりのやどり誰がためにか心をなやまし、何によりてか目をよるこはしむる。そのあるじとすみかと無常をあらそふさま、言はばあさがほの露にことならず……」

いかにも日本人らしい無常観である。

これらに対比さるべき無常観が聖書の中にもある。

「コーヘレス曰く、空の空、空の空なるかな、すべて空なり。日の下には人の勞して作すところの諸々の勞作はその身に何の益かあらん。世は去り、世は来る。……万の言用い尽くされて人なお言い尽くす能わず。目は見るに飽くことなく、耳は聞くに充つることなし。さきには有りしものはまた後にあるべし……。日の下には新しきものあらざるなり。……」

(伝道の書第一章より)

ギリシアの哲人ヘラクレイトスも「パンタ、レイ」(一切は流転す)といった。生きとし生けるものが「死」という現象によつて一線を画されているこの現実を直視せよ。つめたい墓石の前に立つて人生を瞑想せよ。この「死」を如何にして突破するか。私は五歳のとき父の亡骸を見た。その後幾度か知人の葬儀に列して同じような相を見た。彼らのたましいの去処如何。

和合同心

ドイツの詩人シラー（一七五九—一八〇五）の瞑想詩『鐘の歌』の詞書に、

Vivos voco,
生者をば吾れ呼ばうなり。

Mortuos plango,
亡者をば我れ嘆くなり。

Fulgura frango,
電光をば我れ破るなり。

とある。これは元来一四八六年に鑄造され、スイスのシュタフハウゼン市の精舎の鐘樓に吊された巨鐘の銘であつた。

この詩の終に近いあたりに次のような節がある。

「来たれ、来たれ！ 皆の衆、列に連なれ。我らいざ、この鐘の命名をなさんかな……」

『和合』の名をばこれに負わしめん。この鐘のもと、衆生集まり、一致団結、睦まじき群と成らんが為に」

「和合」（Concordia）——文字通りの語義は、「一つの心」「共通の心」「同心」である——ドイツの自由の使徒ルターと同じ月と日（二月一〇日）に生れたシラーが同じくそのいくつかの劇詩をもつて自由を謳歌したことは奇しき^く coincidence^{めいごう}である。しかも、前者は自由が愛に展開すべき消息を説き、後者は自由が和合の土台たるべきを謳う。この詩人の予言をよそにしてなおドイツは半世紀間、「和合」を招来し得なかつた。偉大なる政治家ビスマルクの出現によりドイツは一九世紀の後半に

到つて初めて統一ある国家となった。しかし世界は今、この「和合」を真に必要として来た。何故このように分裂するか、対立するか。問題は人間相互の「和合」などでおさまるものではない。そこには、終末的角度の深刻な様相がかくれている。神につくか、サタンにつくかの人間実存の相である。

この瞑想詩の最終節はかく叫ぶ。

「今や引綱に力をこめて、鐘を坑より引き揚げよ。響音の国に高く、天空の城に高く昇るまで引けよ！ 引き揚げよ！ 鐘は動けり浮び揚げられり！ この市の歓喜と響け、その初

音、平和と響け！」

歓喜 (Freude) 平和 (Friede) を鳴り響かせるのが鐘の使命であれ、とシラーは叫んでいる。しかも「和合」こそは歓喜と平和の源であるという意であろう。ルターの如く福音的でなかったシラーは、どうしたらその「和合」が得られるかを謳うことをしなかった。

耳を転じて欧州の一角に、光榮ある独立を保つ島国から響き来る鐘の音を聴けば、

「響き送れよ、地位と血統の虚しき誇と

市政の醜聞と憎しみを。

響き迎えよ、真と義との愛を。

響き迎えよ、善への共通の愛を。

響き送れよ、いとわしき古き病相を。

響き送れよ、狭き守銭根性を。

響き送れよ、古き幾千の戦禍を。

響き迎えよ、平和の幾千年を。

響き迎えよ、雄健にして自由の人を。

更に大度の心と更に柔和の手とを。

響き送れよ、国に遍き暗黒を。

響き迎えよ、後在らんとするキリストを。」

これ、有名なテニスン（一八〇九―一八九二）の『イン・メモリアム』第一〇六連中の詩句である。ここに福音の鐘の音を初めて聴くのおもいがする。

シラーが掲げた鐘銘「和合」の由つて来るべき源と質とを指しているからである。人間社会、国際間の和合も、源は各個人の魂が何よりもまず絶対者と「和合」するにある。しかしそのことは、キリストと同心一体になることによつてのみ得られる。

「主に結びつく者はこれと一つ霊となるなり」（第一コリント六・一二）

信仰がそのようなものであることは、ルターが『基督者の自由』の中で美しくかつ適切に言つた。

「信仰は魂をキリストと一つにする、あたかも花嫁がその新郎と一つになるように」

と。二〇世紀後半の此の世界が、偉大なるコンコルディア即ち大和を招来せんことを願い、政治家も国民もごまかしくなく実現せんとするならば、道はこの福音の一途のほかにはない。少なくとも、平

和の鍵は愛にあることが深く自覚されなければならない。

東方の鐘の音が「諸行無常」の現実よりの「解脱」を告げるものであるならば、西方のそれは現実のただなかで「真と義との愛」を求めて「和合、同心」を得よ、と鳴り響く。

鐘身一如

さてここに我ら東洋の子でありながら、西方からの福音を呼吸している者において、新たに鳴り出でる響きはどんなものであろうか。除夜の鐘を聞きながら瞑想しつつ、私自身はどんなことになったか。除夜の鐘は百八ツの煩惱を消す徴として、百八ツうち鳴らすと幼少の時から聞かされていたが、梵鐘ぼんしやうの音を聞くことによって罪業が打ち消されれば文字通りの福音だが……。星を仰げば星となり、花を眺めれば花となり、水を浴びれば水となる心境、即ち鐘を聞きつつ全身を鐘にした。鐘と身と一如の境地である。煩惱の願慮は消えてゆく。撞かれる鐘そのものとなって瞑想をつづける。

「百八の煩惱を撞く梵鐘を瞑想すれば鐘身一如」

鐘には足がない。鐘はすなわち足場、立場をもたぬ存在である。足場、立場なく、主義、主張なき者といえ、いかにも不定見の如く聞こえるが、私は水母くらげの如くふらふらと漂いつつ、主義主張を朝三暮四ちようさんぼし的に変える亜流であらうとするのではない。また主我的に主義、主張を固執して人を審くパリサイになって、キリストの敵とは毛頭なりたくない。さりとて円転滑脱えんてんかつだつの巧智者流こうちしりゆうは御免である。

それでは何か。頭上に鉄索をもつ吊鐘つりがねのように、わが頭上にはキリストの不見不斷の「愛の網」（ホセア一・四）がおろされている事態である。鐘に足場があつたら、鐘は鳴り響かないのである。もし私が福音の事態を自己の信仰、自己の神学、自己の主義、自己の実存、といったように私したら、福音は小主観の限定を受けて、その偉大さを発現してくれないのである。無私、無色、無立場、無主義。絶信の信、絶学の学、「無義の義」（親鸞の言葉）、無愛の愛とつねづね申す所以ゆえんである。おのれの側の主観も主義も力みもはずれてゆくのである。それは地球が太陽のおどろくべきエネルギーで引き回されているという自覚、覚他かくたである。地球それ自体はなんたる無力者ぞ。かくてこそ、この自転も公転も妙えなる天則をもつて行なわれている。地上の生きとし生けるものみな太陽の光熱に依存している。此の如く、我らがキリストに依存する事態を、主体的覚存かくぞんという。

天鐘一体

しかも見よ！ 東洋の鐘の腹の中を。そこには何も無い。西洋のその如くガラン、ガランと鳴るベルがない。東洋のはただこれがらんど（空）である。しかしこの「無」は虚無の無ではない。空無である。鐘の空胴は無限の天空を宿しているのである。鐘は天空に抱擁され、天空は鐘の中に宿る。鐘が撞木で衝かれるとき鳴るものは天か鐘か。実に空無の如き鐘の腹の中の天空が鳴るのである。それはまた天空を宿したる鐘の音でもある。鐘と天とはここに一体である。天と鐘とはかく一如である。

「天空を腹に宿せる鐘の如き靈の君を宿しまつらん」

それぞれの鐘の大小、鐘の鋼質、鐘の形状、鐘の厚み等に應じて天空が種々の音質をもつて鳴るのである。何たる秘義ぞ。

私という鐘が、原始福音体たるキリストに、愛の靈網をもつて吊され、無私、無立場、無主観とされ、聖靈に包摂され、聖靈を宿して、神の聖旨に打たれて、天韻を発する。そのとき天鐘は天韻無鐘の相を呈する。然かあらしめ給え！ 栄光み名にあれ！

まことに私は十字架のキリストの贖罪により「私」という旧きアダムから解放されて無「私」とされた。これ恩寵の現実、信仰の現実である。このなまの現実の私自身はしかし相変らずの罪びとに過ぎないにも拘らず、キリストは十字架の事実をもつて私に無私、無罪を宣して下さっている。それ故に、いよいよ現実は無私となれ無罪となれ、否無私の人にしてやる、罪なき者に完成してやるとて実力をもつて推進させて下さる。その実力とは何か。罪に勝ち、死に勝ち、陰府を踏まえ、サタンに勝ち給うた神の義そのものなるキリストの生命、復活のあの聖なる靈生、聖なる生命である、キリストのみ霊である。禪宗的な悟入の「無」ではなく、恩寵の実存的な「無」であるが故にこそ、み霊における「無限」の生命である。これ私が「無即無限」という所以である。かかるキリストの恩恵の現実を誰に否み得んや。この惨めな私が、惨めさの奥に「至聖所」を賜っている（ヘブル二〇・一九）。我らは「聖霊の宮」（コリント前書六・一九）「神の宮」（コリント前書三・一六）である。かかる事態は私の私すべき信仰ではない。賜りたる信仰である。それ故にかかる信仰を告白するこ

とは主の恩恵を讀えること、栄光を主の十字架と復活と聖靈に歸することの外の何ものでもない。だから無私なりというのであって、私が何か偉そうに自分を無私の人間であるなどと揚言しているのでは絶対にない！ 無私も大死も砕けも、私にとっては全くキリストの恩恵を、恩恵の実力により全身全霊をもつて受けて限りなかるべき一貫せる事態であつて、その質は無限に深めらるべきものであつて、地上にて完了など思いもよらぬところである。さればこそみ霊の生命の充滿の無限に進展してゆくはずのものである。否、実にみ霊の実力こそが旧き私を排除して限りなく新生展開せしめ給うのである。この死生の展開はパウロが申した如くである。すなわち、

「罪につきて死にたる我らはいかでおおその中に生きんや。汝ら知らぬか、凡そキリス

ト・イエスに合うバプテスマを受けたる我らは（キリストとの靈的合一）、この死に合うバプ

テスマを受けしを（キリストと偕に十字架されたこと）（ロマ六・二三）

正にこの贖あがなわれたる罪びとそのものが、かかる恩寵おんちゆうによりキリストと一つにされる事態を受けとることを信という。神の「言」たるキリストが罪「人」たる私に一体となつて下さる事態を人偏ひとへんに言という「信」が表現しているではないか。かくの如く神の「言」たるキリストが私に「成」ることをこそ「誠」とはいう。この外に誠は私にない。私にとつては根源的な意味における靈的とは、キリストがわがうちに受肉して下さるこの恩恵の事態を意味する。その他の靈的な諸現象（カリスマタ^タ賜）と明らかに区別する。

十字架のキリストによって「無」罪とされ旧き我に「死」に、旧き我が「砕かれ」、復活のキリ

ストのゆえに深き全我を投じての祈りを絶えずすることにより、み霊がわが「有」となり、新しき
 我に「生」き、砕かれた瓦が新たに「玉成」の道を辿る。この私という鐘自体は「土の器」に過ぎ
 ない。けれどもキリストのみ霊を呼吸しているうちに、すなわち天空を空胴に宿しているうちに、
 次第に金銀も及ばぬ天鐘にされてゆく。かくて天空すなわちみ霊のキリストが、鐘すなわち私に一
 体一如となつて下さる。この恩恵のゆえに、天鐘とはいうのである。しかもそれはキリストという
 原始福音体により天に足場を、否、頭場をもつからいよいよもつて天鐘なのである。そして総ての
 基督者はこの意味において天鐘ではないか。少なくとも使徒たちの信仰の現実はかかる質のものであ
 ったと信ずる。私はとるに足らぬ基督者であるが、その信仰の質は使徒たちの信仰の質と同質たら
 ん事を願う。原始福音という語もキリストこそ福音の原始であり、使徒たちの伝えた福音がこれに
 正しく直結しているから申すのである。原始の生ける福音は歴史的にも限りなく展開してゆく。し
 かしその展開にあたつて福音の奥義からずれを来たすような事態に対しては、どこまでも原始の質
 がとりもどされねばならない。根源のキリストのみ霊は無限の内実をもつて展開し給う。これに投
 我し、即せんと願う。これ、真に神の歴史に参与する所以である。

信行一貫

かくて鐘身一如の霊想は、すなわち天鐘一体と化したのである。東洋の鐘の相は素晴らしい無即
 無限の相を呈している。福音はこの東洋的な「無」を新たな「無」となし「無限」たらしむる内容

である。相対的な「無」（教会）でもなく「有」（教会）でもない。「あれかこれか」でなく「一切か無か」でもない。無即無限、無即有、無即全、無即一切の消息である。しかしこの「即」は安易な「即」ではない。単なる瞑想が生んだ「即」ではない。この「即」の鍵は十字架、復活、聖霊のキリストである。この「即」を体得、体現することが人生の目的といって過言でない。この「即」を追求せんとあらば、この三相一貫の恩恵のキリストに全霊、全身、全力をもって投身するの「信」を要す。「信」はまたこの罪人がキリスト、すなわち神の言を受けてついに栄化して、言たるキリストと一体となり、「キリストの像に化する」事態をも意味する。体現が還相ならば、帰入は往相である。かくて「信」とは観念的なものではなく正にそれ自体烈しき内的な「行」である。深い祈りのないところにこの「行」の消息は体得できない。而もこの「信」の原動力はキリストにある。さればこそひたすら投身投我が出来るのである。我らの呼吸が自然である如く祈りが魂の呼吸となつて初めて、み霊の内住は身についてくる。有難きかな、生けるキリストの聖愛の力よ。パウロがロマ書第八章の終りで絶叫している所以である。

東西融合

かくて東西融合を念じていたゲーテの悲願も正に福音によらずんば満たされない。しかも福音の世界は東西をも南北をも超絶したる天界であり、その天界は東西南北何処にも遍在するものであるがゆえに、東西南北を打って一丸となし得るのである。大和への道、キリストの体としてのエクレ

シヤの実存共同体への道はここに在る。

「諸行無常」も未だ相對觀にとらわれているからのなしである。無常をつらぬいてこそ、無常ならざるものが現成して行くのである。天鐘体的実存となればどんな小さな言も行もむなくないことを知るのである。

「わが名のためにかくの如き一人の幼児を受くる者は我を受くるなり」(マタイ一八・五)

キリストを受けた者には、もはや死はすでに死ではない(ヨハネ一〇・二八)、本質的に打ち勝たれている。

「若しキリスト^{よみがえ}甦り給わざりしならば我らの信仰はむなく我らなお罪に居らん」(コリン

ト前書一五・一七)

キリストはその聖なる霊生をもって罪と死に打ち勝ったことをその復活によって実証し給うたからである。十字架は全く我らの贖罪のための死であつてキリストは実は死を経ずして直ちに天界に昇り得る神の人であつた。キリストが復活することにも優^まして当然なことは実は天上天下にない。これが当然でなかつたら、聖とは何か、霊とは何か！

戦争が罪悪であることは明白であるのに、原子兵器を製造する二〇世紀の人間は火山を掘っているようなものである。世界をいつ爆発させようというのだらう。全世界がもし本当に平和を願うなら、原子兵器全廃、否、軍備全廃、即ち無刀流となつて、キリストの愛を百パーセントに受くるの道是れである。全世界の平和はこの角度から志さねばためである。キリスト・イエスの十字架はこ

の零々無を与えんためであり、復活の靈生はこの百々全を与えんためであつた！ 聞く耳ある者は聞くべしである。日本のためこれからさき何年であろうと、キリストの本願たる天鐘を打ち鳴らすのほかない。

天鐘！ み靈わが内に來たり臨み給う。この終末的現實において、いよいよ、キリストの御靈宿り給うて（ロマ八・九）、汝が聖意をこの土器に現成せしめ給え。天鐘一体の消息を静かに冥想し深く祈らしめ給え。新たに原始福音の天韻、この鐘に鳴り出で、これを聞く旅人の心をなぐさめ、その人々を天的歡喜に入らしめ給え。武蔵野の一角、吉祥寺に鳴るこの天鐘を主はいかに用い給うかを知らず。ただ限りなく誠の天鐘と成らんことのみがこの小さき者の悲願靈願。十字架は聖意貫く義の縦線と聖生 みいのちあまね 遍き愛の横線である。そしてまた何を新たに語らんとするか。天地を貫く縦木は東方的な静の相、靈生合一の祈りの境地、静中に強き力ある神意神愛の降下する相。東西を連ねる横木は西方的な動の相、実存共同体展開の面、動中にあつき生命ある隣人愛發現の相である。福音は東方的なるものと西方的なるものをその十字架において象徴し包摂 ほうせつ している。み靈の祈りにおいて深く、愛の実存において強き、静動一如の福音こそ今後のキリスト教界の課題である。

主の栄光の証者

パウロの言に従つて、私たちも告白したい。神意の靈知（エピグノーシス）で満たされ、主のみ旨にふさわしく歩んで真に主の歡喜となり、いよいよキリストの聖意體現へと生長させていただきた

い。また神の栄光の勢によるすべての力でこんな私たちを強化し、何ごとも欣んで忍びかつ荷う力を与え、光の中にある聖徒たちの嗣業にあずかるに足る者としつつあり給う父に感謝せざるを得ない。私たちは聖子に在って贖罪すなわち罪の赦しを得、罪から本質的に解放され、キリストという義を宿している。神は神性の充滿（ブレーローマ）を彼の中に宿して居られる。私たちはこのキリストに宿っていただくことを無限に求めてゆくのである（コロサイ・九―一九参照）。

願わくは日本国中の梵鐘に代って、今こそかの偉大なりし仏門のあとを受けて、基督者の天鐘、山間に農村に都市に漁村に、新しき信仰の終末的実存をもって鳴り出で、教会といわず、無数会といわず、幕屋といわず、いずれの集会においても、原始福音の誠の響きを伝え、この社会の諸々の問題に対して真の解決への道を開き、光を投じ、真理を示し、力を現わし、愛をもって一切を荷いあげ救済しゆかんことを。かくてキリストの栄光を身証せんことを！

「視よ、我は世の終末まで常に汝らと偕に在るなり」（マタイ二八・二〇）
と主は宣たもう。

〔註〕 本稿の原型は『曠野の愛』誌第二四号（一九五六年春季号）の主題「天鐘」である。

第三章 三一^{みいつかみ}神の所在

神は何処に

現代のように自然科学的意識の強い時代に、「神は何処に^{いすこ}」と設問しても、当惑するか、そのような問は、といって馬鹿にするかであろう。

神といつても、宗教現象の上では、さまざまな様相があるわけであるが、我々がここに意味する神は、絶対的な実在としての最高次と信ぜらるべき神のことである。そのような実在は、自らを相対界に自現するのでなければ、我々相対的な存在はこれを知るよしもない。思索や瞑想の上で定められるような神は結局人間の所産の範疇^{はんちゆう}を出ないことになる。ところが聖書に証言されている神は、イスラエルの歴史を通して自現なさった啓示の神で、まずこのことに注目して、神の声、神の手として現じている事態に驚き、そのドラマティックな現実を自ら今の現実として再体験しなければ

ば、聖書に証言されている神に出会うことはできない。聖書は現実に我らに迫る現実の書であつて、単に歴史的記述の書ではない。

「神はいずこに」——聖書を通して現実に我らに自顕じけんしつつあり給う。

「神、『光あれ』と言いたまひければ、光ありき」(創世記一・三)

我らは光において神の栄光の大切な一つの現象を見る。しかし単なる光では、神は我らにとつてなおかくされてある。我らの設問、「神はいずこに」にもっと直接に応える事態はどこかにないのであろうか。

創世記第三章の物語にぶつかつてみよう。アダムとエバがサタンの使者である蛇の誘惑にひつかかつて、ついに禁断の木の果を食べたところが、神に対して何かうしろめたさを感じて、二人は「神の顔を避けて、園の木の間に身を隠した」そこで神はアダムによびかけて、

「おまえはいずこに在るのか」(創三・九)

と問いかけた。この「汝いずこに在るや」といつて神から呼びかけられた、という事態は非常に重要なものである。神が、「我」という主体となつて、我々の側が「汝」という客体として自覚される現実！これこそ最も正しい宗教的な「我」と「汝」の関係なのである。「我」を「汝」に呼びかけられ、つかみかけられているものとして自覚するところ、そういう主体としての「汝」なる神、人間を「汝」といつて呼びかける主体たる「我」なる神、そのような主動的な神、そこに「神はいずこに」という問への答がかくされてある。

それゆえ「神はいずこに」の問はまず何はさておき、「汝はいずこに」という神からの問によつておきかえられねばならない。このアダムのように、かがやかしい光の神の前から逃げかくれるのではない。あるがままの自分をそのまま神のみ前にさらけだし、平伏して、

「ハイ、ここに」

と答えまつるところに、神がハッキリとつかめる。この我は、実は、いつでも、いずこにおいても、神の現在のもとにあることを知る。呼びかけ、つかみかかる神のみ声、み手に接してこそ、「神はいずこに」という問は消え去つてゆく。

思索や思想や瞑想から発した「神はいずこに」の問に対する答がどんなに立派なものであろうとも、それはその人を歓喜と生命と光の中に救いあげるものではない。これに反して、神から、「汝はいずこに」と問われ、たずねられ、つかみかかれたとき、その深い愛の顧みの前に平伏し、压倒されて、抱きあげられたときこそ、「神はいずこに」の問はおのずから消え去つて、「我は汝のみ手の中にあり」と叫び、「神は」といつて三人称的に問う角度の間がいかにも外的であるかを知らしめられるのである。宗教の事態、信仰の現実には第三人称的でないかなる表現も第一義的ではない。ここにおいては自称と対称、そして自対一如の事態にこそ信仰の現実の真骨頂があるのである。

そのようなわけで、旧約聖書において、神に呼ばれた一連の人々こそは、預言者たちであつた。

「汝の国土を出で、親族に別れ、父の家郷を離れ、わが汝に示す地に往け。我、汝を大いなる国民とし、汝を祝福し、汝の名を大にせん。汝は祝福の基とならん」(創二二・一、二)

私記

と神に呼び出されたアブラハム然り。またハラシへの旅路で、日暮れて路傍の石を枕として寝たヤコブが、夢の中で現われた神から、

「我は汝の父アブラハムの神、イサクの神、ヤハウェーなり。汝が伏したる地を汝と汝の子孫に与えん。……」

と祝福を与えられたとき、このヤコブがそうであつた。

また神の山ホレブで、靈火のもえる柴の中から語りかけた神の声、

「モーセよ、モーセよ……我は汝の先祖の神、アブラハムの神イサクの神ヤコブの神なり」

にはじまるモーセの召命のくだりは余りにもあざやかな神の顕現であつた（出エジプト第三章）。

数え来れば限らない。士師たちや、エリヤ、エリシヤの如き預言者。サムエルまことに然り。さらにはアモスから始まるいわゆる文書預言者たちのきわめて顕著な召命の事態、また神の言を賜つてこれを民らにつたえる預言の消息。これみな「神はいずこに」に應える証明である。神は即ち、預言者たちを通して自在に自らを啓示なさつた。預言者たちは神の口となり、神の手となつて言動したのであつた。それは彼らは神の靈をそそがれた「あぶらそそがれたる者、メシヤ」となつたからである。神の証者たちは神の靈を注がれた靈言、靈行の人たちである。

預言者たちが抱いていた神に対する畏敬の念はあまりにも別世界のことであろうか。今の若き人々といわず一般に現代人はあまりにも畏るべき者を畏れることを忘れてはいないか。若き人々に

においてはむしろ意識的に神否定に向っている。気の毒なことに彼らは神体験の質を知らないからである。そしてこの頃は腕力のな力があると言う暴力横行、暴力まかり通るような事態となっているとは、法治国の威信はどこへ行ったかと思われるなげな状態ではないか。傲慢の靈が跋扈している。教育者の今後の責任と課題重大なものがある。教育者自らが畏るべき者を畏れないならば百年河清を待つともいたずらである。

「神の国は近づいた。悔改めて福音を信ぜよ」

とは、まず教育者自らこの聖書の実践者となることである。今は非常の時、末世的現状。しかしながら、いかなる人間の状況も「悔改め」すなわち回心、心の方向転換をするのにおそすぎることはない。「神の国は近づいた」とは、神の審判の迫りはいよいよ烈しいとの半面を持った宣告である。世は澆季であることを意味している。キリストの復活に出会って使徒たちが目覚め、悔改めを起こし、活けるキリストの靈を賜って立ちあがったように、今こそ使徒的信仰に突入しなければ、キリスト教界はもろもろの精神状況にうち勝つことはできない。

日本の教育界も、教育者自身が、宗教的なものを身につけていないならば、人間形成といったところでそれは空念仏に終ってしまう。

「エホバを畏るるは知識の本なり……」(箴言一・七)

とあるように、畏神こそ学問の基である。真理に対する謙虚な心もそこにおのずから養われてゆく。実在者に迫られて生きる人が起きてこなくてはダメである。天来の權威ある言の前に平伏す魂は神

的權威を与えられる。人間の側からは限定できないもの、神という名称すら暗号である無限定者からの權威ある言、これが聖書の言である。そういう言を示され、圧倒されて、神の靈的人格な言を告知していたのが、アモス以降の預言者たちであった。そういう神の靈的な力を現わしたのがカリスマ的人物であった。エリヤ、エリシヤの如き。

「主エホバ言い給う。視よ、日至らんとす、その時われ饑饉ききんをこの国におくらん、これはパンの乏しきに非ず、水に渴くに非ず、エホバの言を聴くことの饑饉なり」(アモス八・一二) まことに今は神の言を聴くことの饑饉である。民主主義といつても人言のみ、しかも自己主張的闘争の言が幅をきかせている。神は傲慢ごうまんの靈にむかつて、

「汝たとい驚の如くに高くあがり、星の間に巢をつくるとも我そこより汝を曳きくださん」

(オバデヤ一・四)

と言った。神の求め給う善事よきこととは何か、

「ただ義を行い、あわれみを愛し、へりくだって汝の神と共に歩むこと」

であった(ミカ六・八)。エレミヤに向つてはエホバはこう言いなされた。

「われ汝を腹につくらざりし先に汝を知り、汝が胎たいをいでざりし先に汝を聖きよめ、汝を立てて万国の預言者となせり」(エレミヤ一・五)

またエレミヤは、

「エホバついにその手をのべて我が口につけ、エホバ我に言いたまいけるは、視よ、われ

わが言を汝の口に入れたり」

というような霊的現象と共に聖言をさずかった。エレミヤはこうして、

「エホバとその聖言のためにわれは酔える人の如く、酒に勝たるる人の如し」(エレミヤ二

三・九)

というほどにまで神の言を全存在に受けた。であるからエレミヤは言った。

「汝われをとらえて我に勝ち給えり」(エレミヤ二〇・七)

と。これは実に神に圧倒され神につかまれた人の告白である。「神はいずこに」の間に、これほど判然たる答はない。神がどうのこうのと論議されているあたまの世界とはおよそ次元の異なった現実、根源現実である！

ところで預言者たちのあとに一人の人があらわれた。それは超預言者ともいうべき人であった。ナザレのイエスである。どんなに自然科学が進もうと、どんなに精神科学が理論的な掘りさげをしよう、ナザレのイエスにおいて自らを啓示した神は、それらの次元とはちがった次元の实在である。それは人間の側からの探究に絶した神である。「神はいずこに」、それはナザレのイエスに自現しておられるというのほかはない。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四福音書において自らが主人公となりてイエスに自現しておられる神を神としないならば、もはやいずこに行こうと、神らしき神には出会わないのである。イエスにおいて神をまざまざと見ない人は、ついに神に出会うわけにはゆかない。このことだけは明言しておく。

すなわちイエスは、

「われは道なり、真理まことなり、生命いのちなり。我に由らでは誰にても父のみ許にいたる者なし」

(ヨハネ一四・六)

と明言している。イエスは父なる神への道であり、まことに父なる神からの道でこそある。真理の具現者、真理そのもの、生命の実証者、生命そのものである。ところがピリポが「主よ、父を我らに示し給え、然らば足れり」と言いよつたのに対して、イエスは、

「ピリポ、我かく久しく汝らと偕ともに居りしに我を知らぬか。我を見し者は父を見しなり」

(同一四・九)

と言いなさつた。これほど明瞭な証言はない。イエスを見た者は神を見たものである。私たちも、福音書でイエスを見ている。それはとりもなおさず神を見ていることなのである。「神はいずこに」の問への最適な答は、今のこのイエスの言である。ヨハネ福音書一〇・三〇にも、

「我と父とは一つなり」

という断然たる確言がある。無に徹した人であるからこそ、この言が発せられたのである。

この机上のバラは私に言う「私を見た人は太陽を見たのです」と。正に太陽の光を受けないでこのバラはないからである。イエスが父なる神と語らい、祈り、行じたその在り方は父子一如いちにょのあり方であつた。われら無条件に全く降参して十字架の主に平伏ひれふすとき、愛あつき靈波を復活の主はおくり給う。このようなキリストの十字架と復活による贖罪と生命を与える愛に圧倒されてこそ、信

ずるといふことがいかに愛するといふことと一つであるかを知るのである。キリストの愛に應えるに愛、キリストの本願的な信に應えるに信。世の何ものにも絶対的な信愛がおかれ得ないとすれば、このキリストの絶対的な信愛に対してのみ全存在的な信愛が捧げられる。ああ人生とはこういうものか、人間とはこの他に救いなき者か、そうだ、その通りだ。ただこの主の愛を生きる人だけが十字架を負う人だけが神の国の本当の民である！

イザヤ書第四〇章から第五章に極まった「主の僕」の預言にイエスを見、イエスにおいて神を見る。ああイエスを知った幸福を何に比べ得よう。イエスの天衣無縫のすがた、天然もイエスにはかなわない。これを神然と言わんか。「神だけ、父だけ」と叫んで全托していたイエスよ！私は祈ろう。私も「主様！あなただけ！」と叫んで突進します。どうか、あなたがこの罪びとの中に化体変貌して現われて下さい。みわざをあらわして下さい。私は福音的無に徹して生きたいです。「幸なる哉、霊の貧しい者、天国はおまえの中に」を文字通り、主様あなたの恩恵の現実として受けとります。どうぞ主様、私がそこに死んで、あなたがここに生きて下さい。

神よ、汝は、イエスに現われ給うた。もはや「いずこに」などという愚問は不必要。「汝はイエスに」そしてイエス・キリストは宇宙的な存在である。人間の思想の多くのイズムなどは何と味気なきものか。イエスと共に宇宙を歩む。月世界どころではない。キリストの霊を受けると宇宙を天翔けるたましいとなる。ああ宇宙的キリスト！

我らのこの宇宙的キリストは同時にいとも身近に深い深いおもしろいやりをもって荷って下さる。す

べった、ころんだ、泣いた、もだえた。そんなとき我らを抱き、みたまをそそいで天的な力を与えて下さるこのイエスこそ、われらの神である。一切を包摂し給う主、ここにのみまことの神を我らは拝する。

キリストは何処に

キリストはいずこに。

「聖書は我れにつきて証しするなり」

とイエス自ら言った。すなわち旧新約全聖書一卷がイエスの証言の書である。「キリストはいずこに」、それはマルコ、マタイ、ルカ、ヨハネの四福音書にまぎれもなく証言されている。ペテロ、ヨハネ、ヤコブの三大使徒は、直々にイエスと暮した人たちであった。それなのに彼らはイエスに躓いた。これほどイエスにとって残念なことはなかったであろう。しかしイエスはすでにそのことを予知しておられた。「胸によりそう」までに親しかったヨハネですら、直かにキリストのみたまを受けることは出来なかった。いかなる使徒も主が十字架にかかって贖罪を果し給うまでは、どうにもならなかった。それは世の末まで、いかなる人にとっても同然である。

イエスは結局唯独り。天涯孤独とはイエスのためにつくられた言葉である。しかしイエスが一切を耐え抜き得たのは、父の愛を深く深く受け、祈りの世界で聖言みことばをハッキリ聴き、これに従うに充分な聖霊の力を受けていたからであつた。

「神はいずこに」それはキリストに現われたのであつた。「キリストはいずこに」、それはキリストを身証した使徒たちに。その最も著しき使徒とは誰であらう。パウロであつた。

使徒行伝の第九章、第二二章、第二六章における使徒パウロの回心の事態ほど熱いあざやかな転心はその類を見ない。このパウロにこそイエスは自現したのである。もともとパウロ（サウロ）は、ユダヤ教徒として反キリストの首魁しゅがい、急先鋒きゅうせんぽうであつたが、ダマスコ途上で復活のイエスの靈撃を喰くつて完全にうちのめされた。一八〇度の転向をさせられた。それは聖霊と聖言の力と啓示によつた。贖罪の大業たいぎやう終るや、イエスは墓を蹴破けやぶつて、ローマの兵隊のうろたえる中を決定的な勝利の前進をされた。このイエスは誰よりもあざやかにパウロに現われて

「われは汝が迫害するイエスなり。起きて汝の足にて立て。わが汝に現われしは、汝をたてて其の見しことと、わが汝に現われて示さんとする」との役者また証人たらしめんた

めなり」(行伝二六・一五―一八)

と宣告なさつた。この言を受けたパウロは、その後彼の言動をもつてことごとくイエスの証者たるの実を示している。それは使徒行伝にまた彼の諸々の手紙にあまりにもあざやかである。

イエスの活動がもし福音書のイエスだけであつたならば、キリスト教はどんなことになつたか。

福音書のイエスはけたちがいにすばらしい。しかし福音書のイエスは福音の序曲であつた。神は福音書にイエスとして自現し、イエスは使徒行伝において使徒たちの中に自現した。アテネ人に語つたパウロの言、

「我らは神の中に生き、動きまた在るなり」(行伝一七・二八)

とか、

「我れキリストと共に十字架せられたり。われ生く、されどもはや我に非ず、キリストわ

が内に在りて生くるなり」(ガラテヤ二・二〇)

とか、^{まいきよ}枚挙にいとまなきパウロの証言、「力あるわざ」「ふしぎなわざ」は皆聖霊なるキリストの顕現にほかならない。

また福音書のペテロは彼の漁夫たる職業の如く浮沈して定めなかつたが、使徒行伝のペテロは全く聖霊の權威の人になっている。行伝第三章の^{はしや}跛者の記事をみれば、

「ペテロとヨハネとの宮に入らんとするを見てどこしを乞いたれば、ペテロ、ヨハネと共に目をとめて『我らを見よ』と言う。かれ何をか受くるならんと、彼らを見つめたるに、

ペテロ言う『金銀は我になし、然れど我に有るものを汝に与う。ナザレのイエス・キリス

トの名によりて歩め』(行伝三・三―六)

ペテロやヨハネの中に在るものは、みたまのキリストであつた。その實力によつて^{げんか}言下に生れながらの跛者が立つた。福音書の現実では使徒たちは未だだめであつた。それは十字架の^{しよくざい}贖罪以前

であつたから。しかし、十字架の贖罪を経て、祈りの中でみ霊を賜つてからは俄然彼らは一変した。そこに「キリストはいずこに」がかくされてあつたのである。キリストは使徒たちの中に入つて生きかつ力をあらわさないではいられないのであつた。この本願が成らずして何の福音ぞやなのである。

ペテロにとつてもヨハネにとつても「聖名」は直ちに実体の存するところ、即ちキリストのみ霊であつた。使徒たちといえども罪びとに過ぎない。彼らも贖罪の事態をぬきにしてあり得ない。贖われたる罪びと、ただしみ霊を宿す罪びとであつた。主は罪びとと自覺して平伏して全托するたましいをよるこんで用い給う。自分を何ものかにしているうちは絶対に主のみ力にはたらし給わない。聖霊の場は私たちがぶつつぶれている場、そこにのみ本当の御力と權威が臨む。

使徒たちはそういう人間だつた。であるから、跛者が直ちに立つて歩くのを見て、民衆がはなはだ驚きあやしんだとき、

「ペテロはこれを見て民衆に答えた、『イスラエルの人々よ！ 何でこの事をあやしむか、何でわれらがおのが能力と敬虔とによつてこの人を歩ませた如く、われらを見つむるか。

アブラハム、イサク、ヤコブの神、われらの先祖の神は、その僕イエスに栄光あらしめ給

うた。』……」(行伝三・一二―一三)

といった。「われらを見よ」とさきに言つたペテロが、こんどは「何で我らを見つめるか」といつていることに注目していただきたい。これは矛盾ではなく、全く一つのことの二面なのである。

「我らを見よ！」とは、

「われらの中なるキリストを見よ！」

であり、「何で我らを見つめるか」とは、我らそれ自体は何ものでもないから、我らは何ものかと思つて見てはとんでもないことだ、というのである。何もものでもない者の中にこそキリストは宿つてはたらき給う。その意味で、正に「キリストはいずこに」は、十字架に贖^{あがな}われてみたまを受けた使徒たちの中にある。

しかも我らが忘れてならない一人の人在る。それは使徒パウロの先駆者であつたステパノである。彼は「信仰と聖霊とで満ちていた」(行伝六・五)。行伝第七章にも「知恵と御霊にみちた」ステパノが大祭司の前で語つた証言がある。そのときステパノの顔は「御使^{みつかい}の顔の如く」かがやいていた。イスラエルの信仰史を説いた揚句に彼は叫んだ。

「うなじこわくして心と耳とに割礼なき者よ、汝らはつねに聖霊に逆らう…」(行伝七・五一)

実に聖霊に逆らうところにイエスは絶対に臨^{つまず}みたまわない。「律法の義」にこりかたまつていたユダヤ教徒は皆、キリストの恩恵による義に躓^{つまず}いた。イエスはこのようにみたまのバプテスマを受けた連中^{みちから}に御力^{みことば}、御言をもつて自らをあらわしなされた。

であるので、福音書以外の新約聖書においてもキリストは自在に現われている。これがすなわち「キリストは使徒たちにおいて」と申す所以^{ゆゑん}である。

聖霊は何処に

聖書は創世記から黙示録にいたるまで、終始一貫、神の霊の貫いている書である。であるから神の霊に触れないで聖書を読んだなどとは言えない。

詩篇第三三篇に、

「諸々の天はエホバの聖言みことばによりて成り、天の万軍はエホバの口の靈氣によつてつくられたり」(詩三三・六)

とあるように、聖言と聖霊とは同義語として用いられ、不可離、一如いちにょの關係にあることを忘れてはならない。ある人々はしきりにみ霊たまみ霊といつて、いわゆるいのり三昧さんまいにふけて、靈的と称して実存の伴わない神秘性をよしとする。またある人々はみ言、み言といつて聖書の言をむやみに引用したり、解釈をどうのこうのとひねくりまわして、それが聖書に忠実なことだと思っている。どちらも的をはずれているわけである。

み霊、み言ことばは啓示の事態において、信仰の現実において不可離の内実である。

み霊は神、キリストの霊であり、み言は神、キリストの根源語である。靈言であり、言霊である。そしてそれは我らの生命の根源に関わる事態である。たとえばヨブ記の中でエリフが、

「神の靈われを造り、全能者の靈氣われを活かしむ」(ヨブ三三・四)といっている。

「聖靈はいずこに」、旧約のヨエル書に著しい預言がある。

「その後、われわが靈を一切の人に注がん……その日、我またわが靈を僕婢に注がん」(ヨエル二・二八、二九)

そしてこの預言がまずペンテコステに際して成就された。

「五旬節の日となり、彼らみな一処に集いおりしに、烈しき風の吹ききたる如き響き、にわか天より起こりて、その坐するところの家に満ち、また火の如きもの舌のように現われ、分れて各人の上にとどまる。彼らみな聖靈に満たされ、み靈の宣べしむるままに異邦の言にて語りはじむ」(行伝二・一―四)

高次な異言現象であつて、聖靈の著しいはたらきである。いかに人々がこのことをあやしんだか、またこのことに躓いたかも知れる。イエス自らの預言の中に、

「然れど、聖靈汝らの上にのぞむとき、汝ら能力を受けん、しかしてエルサレム、ユダヤ

全国、サマリア、及び地の極にまでわが証人とならん」(行伝一・八)とあるとおりである。

「聖靈はいずこに」、以上の預言とその事実によつてもわかるように、聖靈は万人にのぞむ可能性をもっている。そして聖靈はこれを受けた人がイエスの証人となるのである。使徒たちは特別な意

味内容において復活のイエスの証人であつた。それはイエス自身が復活後四〇日間顕現したことによつて。そして使徒たちは言うまでもなく、聖霊を賜つてみ霊の実証者でもあつた。

そもそもイエスは人に何を与えようとして來られたのであろう。それは洗礼のヨハネが指摘したことであつた。自分は水のバプテスマを施すのだが、自分よりのちに来る人は「聖霊と火でバプテスマする人である」と。イエス自身「この火燃えたらんにはまた何をかせん」と言つた。聖霊も火も同じ内容のことである。火とは聖霊の現象面の表現である。あるときは水ともいわれる。その水は活ける霊的な水のこと、聖霊のことである。ヨハネ福音書第四章にそのことがでてゐる。要するに「求めよ、さらば与えられん」の究極的内容は聖霊のことである。私自身の経験から申しても、聖霊を賜つてからは、これ以上のものはないということがハッキリして來た。聖霊はたまもの中のたまもので、これによつてはじめて生命の根源を知つた。

「罪人のうちに我は首なり」(テモテ前書一・一五)

といつたパウロは聖霊の証者として第一人者であつた。

さて、ここに一言しておかねばならないことは、聖霊といつても、旧約聖書における場合と新約聖書の場合とはあきらかにちがうことである。旧約においては、「聖霊」と申しても、それはモーセが十誡を賜つたときのことや、出エジプト後の「ヤハウェの霊」の導き、士師たちにのぞんだ「ヤハウェの霊」、エリヤ、エリシヤにおけるみ霊のふしぎなわざ、預言者たちにおけるみたま、み言の多彩にしてあざやかな御はたらきは、これみなヤハウェの神として顕現し給うた全能の神

の自在なるみわざである。そこに「アブラハムより先在し給うた」キリストの霊が、かくれたるすがたにおいてはたらいておられたのである。それらの旧約的なみたまの事態と新約聖書にみなぎりあふれている聖霊の事態とは、ある質的相異がある。新約の聖霊の背後には贖罪を果した十字架の主が立つて罪のとりなしをしておられる。新約聖書における聖霊はどのように十字架と離すことができない。我らとしては、あるがままで平伏し、十字架にしがみつくのが、みたまの事態への正道である。

然らば「みたまはいずこに！」。それは山上の大告白の第一言、

「幸なるかな、霊の貧しき者、天国はその人のものなり」

の中にかくされてある。すなわち、

「幸なるかな、汝わが十字架によって自我からぬけだされ、霊が無私の貧しさに化せられ

た者よ、天国即ちわが聖霊の支配するところの人と汝はなったのだ」

この一句によって、みたまの内住し支配する絶対恩恵の場と私自身がされたのである。過去、現在、未来の私が相対的にどう変化しようと、そんなものをもう気にしない。また運命、環境がどんなに不如意であろうとそれにも支配されない。わがうちなる聖霊はものすごい白熱の原始力をもつた霊であり給う。これが私をして一切の事態に処してゆかしめ、そこに天国を現じつつ進ましめ給う。どんな暗黒をも光の世界に化し、どんな薄情の環境へも人間性豊かな愛の波動を流し、どんな迫害の苦境においても笑ってこれに耐え、敵を愛する力、すなわち敵を担う十字架の愛、キリスト

の愛が私を貫いて発してゆくであろう。

もし集会というものが、あの人がいるからとか、あの人はどうであるからといって人を問題にして集会にくることをいやる人があるなら、その人は自らみたまから遠ざかる人、みたまの愛をもたぬ人であるといわざるを得ない。真に聖霊のバプテスマを受けて、うちにパウロやヨハネやヤコブのように、キリストの愛が燃えているなら、その人のいるところに天国が現じ、その人が集会そのものを救ってゆく。そして集会員は誰でも各員が、全集会をこの質をもって担ってゆくの實をもたないなら、どうしてキリストのよろこび給う集会といわれ得よう。他人に求むる勿れ、自己に求めよ！ 主のよろこび給う人と我々一人一人がならなくて、どうしてキリストのエクレシア（召団）たり得よう。みたまなきところにエクレシア（教会）はない。

パウロ的「罪びとの首」小池は、キリストの本願のもと、この悲願霊願をもって集会にのぞんでいる。誰に何と言われようと、小池はキリストの白熱の愛に貫かれつつ歩いている人間である。万斛の涙と万丈の歓喜と終末的希望に生きている。私の終末的現在はこのようなものである。

「聖霊はいずこに！」それはエクレシア（教会・集会・召団・幕屋）の一人一人の胸の中、個体の核心に生きているキリストの霊。宗教はどの宗教であろうと究極のところは、その宗教の核心がその個体の中心に一如の相をもっているときはじめて本ものである。況やキリストの聖霊をうちに宿さないで何でキリスト者であろう。パウロのロマ書第八章はこの白熱的核心を絶叫している文字である。私が一番うれしいのは、こういう白熱のみ霊に生き、全身の叫びをもってこの福音に共感し、聖

名のため、この福音のためなら、いかなる境遇にあらうとも、献身的に、「先生、やりますよ」との気魄きぱくを示してくれる人々の存在である。

時もたからもこの身も霊も

みな主のものとみ前に献げん

（讃美歌五三八）

この世の禍幸まがさちいかにもあれ、

栄光さかえのかむりは十字架にあり

（讃美歌三三二）

「愛する者よ、汝らを試みんとて来れる火の如き試練しごくを異なることとして怪しまず、反かえつてキリストの苦難くるしみにあずかれば与あずかるほど喜べ。汝ら彼の栄光のあらわれんときにも喜び樂しまんためなり。もし汝らキリストの名のために誇さしられなば幸なり。栄光の御霊すなわち

神の御霊汝らの上に留まり給えばなり」（ペテロ前書四・一二―一四）

聖霊の人たちが集まれば、必ずそこに幕屋が開かれる。神・キリストの大黒柱を中心にして張られた幕屋の空間には愛のみたまの霊氣がみちている。このような幕屋に入れば、そこは聖霊の愛の場である。

いかなる教派の集会であれ、何はさておき、キリストのみたまの愛によるコイノニヤ的な集会であるように。

第四章 聖意靈法

「これと思うこといよいよしよばにして且^かついよいよ持続的であればあるほど、つねに

新たにして増し來たる感歎と崇敬とをもつて心情を満たす二つのものがある。それは

わが上なる星辰^{せいしん}の天と

わが内なる道德^{のり}の律」

カントはその『実践理性批判』の結論においてこのような不滅の告白をした。すなわち自然界の物理的法則の素晴らしさと、人間胸中の道德的法則の厳^{おごそ}かさに対する感歎崇敬の叫びである。風に散る木の葉の舞いにも偶然はなく、驚くべき必然法則がはたいてひらひらとひるがえるのである。これを自然は美しいと眺める。誰かまた殺人を善と言うか。十誠に「汝殺すなかれ」と命ぜられなくとも、殺人の悪なることは万人が自ら立て得る道念の法である。ただ自然界と異なり、人間界においてはこの道德法が自然界における如く、必然に自然にはたらき得ない深い嘆きがある。戦乱の絶えない世界の歴史がこれを証して余りある。そこに人間界の自由の法則の危機性と尊厳がある。

然らばこの危機的な自由が、善に対して必然的な性格を帯び、善ならざるを得ぬような必然自然の動きをたましいの一角に有^もち得るようになるには、どうすればよいか。そこはすでに道德の世界が解決し得る限界ではない。パウロのロマ書第七章の嘆きある所以^{ゆえん}である。ある根源的な力のはたらきを必要とする。その力は人間の中にはない。その力は何処^{いずこ}から来るか。

哲学的思索も、神学的思想も、聖書学の研究もこれを与える力はない。聖書の身読と祈りがこの力を体受する道である。聖言はその力のこもった言であるから、現にこの時、現にこの場において、祈り心をもつて聖言を喰^くうところに力がやってくる。キリストの十字架をあるがままのすがたで仰ぎ見、ひれ伏し、ぶつたおれて、そのあがないを無条件に受けとるところ、そこにキリストの復活の大生命が聖霊と共にわがうちに来たり給う。

「われキリストの中に」

「キリストわが中に」

というペテロ、ヨハネ、パウロの信仰の現実、福音的神秘がそこに体感される。聖言をよめば、直ちに生命となってくる。我意が吹き飛んで聖意が体で受けとられてくる。み霊^{たま}が化体^{かたい}してくる。

このような事態は万人に開かれてある門であり、この門を透得すれば、福音の奥義^{おうぎ}が次第に開示されてくる。福音は一切の資格を要しない絶対無条件の恩恵の世界である。無比に貴く、ありがたく、よろこびに溢れる、慕わしい世界である。そこには勃々^{はつはつ}たる生命力が湧いてくる。この力は自然の力ではなく聖霊の力である。

「どうぞ汝の聖意みことみがこの身を貫いて成つて下さい」

との祈りが腸はらわたの底から湧いてくる。そこは第三者的な場ではなく、汝—贖主—の現前の場、祈りの場である。

場といえ、一九五八年早春の頃の新聞紙上で、西独、月沈ゲッテンゲン原大学のハイゼンベルク教授を中心とするグループが（その中にはわが国の新進山崎和夫博士も居て、重要な役割を果たして居られた由）、故アインシュタイン博士の考え出した「統一場の理論」を研究、「素粒子統一理論」を展開せしめ、物理の「最終方程式」なるものを発見した由を見た。もしこの方程式の理論が正しいことが証明されれば、「宇宙の全構造を説明できるこの理論は、すべての基礎物理学にとつて最終的な解答となるであらう」由。数物の世界の目ざましい展開に瞠目ぼうもくせざるを得ない快報である。

自然界においては統一場の理法があつて、それが現実にはたらいっている。精神界の人間の現実はどうであらう。これは何とも言い難き複雑なそして惨憺さんたんたるものではないか。非常な危機性を藏していることをつらつらみとめたならば、その統一場の靈法を問わねばならない。そしてその靈法がたとい究められたとしても、これが体得現へと個人も社会も人類も投入してゆかなければならない。しかもその「ならない」ではどうにもならないのであつて、靈法がはたらく現実を現ぜざるを得ない個人と世界になるにはどうすればよいか。否、実はそのような個人にも世界にもなれない現実に気がついて、そのような危機的喪失的な個人と社会と世界をなおも保ち、ゆるし、しのび、つみ、救いつつある根源現実に、現に気がつくこと、そしてまず個人のたましいがその下に碎け、

たましいが核分裂を起こすか否かが、問題中の問題なのである。そのような根源現実とは何か、そのようなたましいの核分裂とは何か。

「天の父はその日を悪しき者の上にも、善き者の上にも昇らせ、雨を正しき者にも正しからぬ者にも降らせ給うなり。……然らば、汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ」

(マタイ五・四五、四八)

およそ聖書の中でこれ以上の聖言みことばがあるうか。私はある意味でこのイエスの一言に全聖書が総括されていると言つて可いよと思う。これこそ統一場の靈法かづばを喝破した一言である。善悪、正邪、真偽というとも、人間現実の善悪、正邪、真偽の如きは、あわれむべき相対性でしかあり得ない。誰か善なる。誰か正なる。誰か真なる。誰か義なる。誰か愛なる。善の人なし。正の人なし。真の人なし。義の人なし。愛の人なし。イエスにはそれが看破かんぱされていた。実に彼自身、おのれを善とも義とも、何とも思っていないかつた。彼のたましいの統一場は父なる神の聖意みこころにあった。それは即ち一切の相対性の彼岸から照破する一視同仁的な完全の光、愛の光で、この全愛の光の脚光を浴びるところいづこにも統一場が現るのである。

もちろんイエスも常識的な相対的な正邪、善悪、真偽の角度をわきまえてものを言った。しかしいつもその奥の世界にたましいを据えて語っていた。

「父の全きが如く全かれ！」

との命令は、カントのあの有名な断言命法だんげんめいほうも及ばない高次こうじな靈的人格の現実への要求である。不可

能を要求するイエスである。何故であるか。性來の人間に可能なことなら、何も福音の名に値しない。福音とは人間に不可能な事態を掲げ、要求し、その現実をつつみ込み、変質変貌せしめつつこれをを行わしむる力を与えるから、福音なのである。

ところでこの全愛の光が焦点するところに何が立っているのだろうか。イエスの十字架である。相対的な善悪はこの十字架に焦点している光に焼かれてしまう。主我的な一切のもの——それが罪だ——がこの十字架で砕かれている。一視同仁の愛は実は十字架に極まる。「父の全きが如く全かれ」はルカ福音書では、

「父の慈悲なるが如く慈悲なれ」(ルカ六・三六)

とある。この「父の慈悲」が極まって十字架の愛となった。この愛にあがなわれて、わが自我が砕かれてあることを信受するとき、われは根源的に無我の者、無者とされる。そこに、正にそこのみ聖霊が突入してくる。おどろくべき愛の力、生命の力である。この無者に無限無量者の質が与えられる。十字架即聖霊降臨のこの場こそ靈的統一の場である。

我々にいくら肺臓があつても水中では溺死するばかりである。大気という現実、大気中に置かれてのみ肺は機能を發揮し得て、自然的生物としての人間は呼吸をいとなんで生きる。そのように、たましいも神の靈氣に包まれ、神の聖霊を受けて初めて本当の生命力を感じる。靈法のはたらきにこそ自由があることを体感する。この自由が天的必然であり自然であることを覚える。そのような受霊の場が十字架の場である。

キリストが、

「父と我とは一つなり」(ヨハネ一〇・三〇)

と告白した場が無の場である如く、

「我キリストと共に十字架されたり、我生く、されど我に非ず、キリストわが内に生き給

うなり」(ガラテヤ二・二〇)

と告白したパウロの現実こそ正に十字架・復活・聖霊の統一の場である(ロマ章第六章参照)。

全キリストのこの恩恵の現実の中に没入してみると、恵信一如(いちにょ)の天的現実を身親しく味わい、呼吸することになる。

まずこのように一切の横(いっさい)の関係を顧みない高さ、深さの縦の場、すなわち神、キリスト、我の垂直関係の現実、パウロの「キリストの僕(しもべ)」の一言であらわされる場である。この垂直関係が立つ場を義という。すなわち聖意体现を義という。それはキリストを信受するところにあたえられる恩恵の力、恩恵の現実である。自らなしあたわぬがゆえに、なさしめられる場である。それがまた直ちに同時にすべての横に向って、八方に放射する原始力をもっている場である。この放射線はすなわち愛であるから、義は同時に愛としてはたらく。

天の父の完全性はこの愛であるから、この愛が相対的正邪、善悪、真偽の相対的現実、我らの普通の日常生活に向って、光の如く流れ、貫いてゆく。「汝は世の光なり」とはこのキリストの光が実存を貫いてかがやくから、あのように宣言されたのである。キリストのみ霊(たま)なきところにどうし

て私たちが光であり得ようか。光とはこの愛の光のことである。

此の如く縦に深くみ霊に貫かれる場にして初めて横に広く「地の極までもキリストの証人」(行伝一・八)となる可能性と実力を与えられてゆく。すべての教会・集会・幕屋の統一場は、「キリスト・イエスに在る生命の御霊の法」(ロマ八・二、即ち靈法が夫々の教会・集会・幕屋において体现されている場である。この靈法がそれぞれの実存共同体(教会・集会・幕屋)において体现されない限り、教派的対立やパリサイ主義が巢をつくる。

教派は事実あり、またあつて可い。しかしカトリック的ヒエラルキア(教権制度)やプロテスタント的インスティット(教職制度)も、エクレシアの本質からは逸脱している。エクレシア(召団)のエクレシアたる本質は聖霊の生命的法則、靈法において在る有機体的な在り方にある。そこに本当の自由があるので、統一の場といっても、靈法による統一であるということは、現象面では千差万別の自由がはたらき、大調和をなすということであるから、誤解のないようにしなければならぬ。

エペソ書第四章に、

「体は一つ、御霊は一つなり。……主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ……父なる神は一つなり。神は凡てのものの上に在まし、凡てのものを貫き、凡てのものの内に在まし給う」(エペソ四・四―六)

とあるこれらの「一つ」が根源的な「一つ」で、そこに統一の場があるのだが、これは組織や制度

などによって限定されるような統一ではない。その証拠には、神は一者でありながら、万物に超在し、かつ遍在し、かつ内在するということは、聖霊の自由な在り方によるからである。

このような霊法自在な聖霊を体験し体現するようになってくると、有限的存在として、それぞれの分野を分担しながら、おのずから大なる有機体的エクレシアの一員としてはたらくことになる。それはパウロがコリント前書第二章で一つの教会内の在り方について申している如く、多くの教会の共存についても然りである。聖愛に基づく霊法は、この罪と暗と憎悪と死の現実をつつみ、つらぬき、にないながら、義と光と生と愛の世界に化せんとのはたらきをなす。そういう力のある霊法である。現代キリスト教界が最も必要とするのは、パリサイ的教派根性、主義、信条をもって他を排するような主我意識が、この生命的霊法によって碎かれ、無限な広さの抱擁力をもつようになることである。それにはエクレシアの各自がみ霊たまによる素粒子的実存と自らが成らねばならない。個体も実存共同体もキリストの霊法たまと化するにつれて、いかなる現実に対してもガンマ線以上の浸透力をもって包み、貫き、担い、贖あがないゆく力あるキリストの愛がはたらくが故に、現に、今、そこに、ここに、何よりもまず自己自身の実存構造において、また社会および世界に対して統一場を体現する「証人あかしびと」となつてゆく。

「汝殺すなかれ」の命令は、

「汝殺すことなし」とひびき、

「汝の敵を愛せよ」は、

「汝敵を愛し得る」

とのキリストからの信愛の断言として信受體現される。そこには、必ず靈法が動いているのである。そこは眞の自由がすなわち必然であり、自然であり、靈然である世界で、あがないの愛の靈法こそ正に統一場を現成せしめる唯一の法である。

キリストの義と愛の十字架が天地乾坤を貫く無限の深さであると同時に、無限の広さである。それゆえにこそパウロが深く祈ってくれた。

「父その栄光の豊かさに従いて、み霊による力をもて汝らの内なる人を強くし、信仰によりてキリストを汝らの心に住まわせ、汝らをして愛に根ざし、愛を基とし、凡ての聖徒と共にキリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さの如何ばかりなるかを悟り、その測り知るべからざる愛を知ることを得しめ、凡て神に満てるものを汝らに満たしめ給わんことを！」

(エペソ三・一六、一九) (文語訳聖書参照)

ハイゼンベルクは今後の物理学の研究が「深さ」よりもむしろ「広さ」を求めることになるであろう、と言った由。私は物理学の世界で、「統一場」が何を意味し、「最終方程式」とはどんなものであるか、また「広さ」が何であるかも知らぬ者であるが、ただこれらの用語から受ける印象とその事態の素晴らしさに瞠目し、感歎する。さればこそいよいよもって、全宇宙の統治者たる靈神の實在を信ずる者として、聖意、靈法こそが物心両界の最終統一の根源靈法であることを念う。その聖意を体受し、靈法を體現したイエスは、物理法則に対して優位な、そして物理法則を善用し得る

靈法を體現したことは福音書に歴然としている。

「二羽の雀も父のゆるしなくしては地に墜ちない」(マタイ一〇・二九)

の一言にもこの事態が道破され、湖上を素足で渡る水渡りにも、この事態が顕現されている。またイエスはサタンの強い悪の意志と悪の法を破砕して、罪と死と陰府とサタンの四位一体的な世界に勝利した。かくてキリストのみ靈の法は不敗の力ある靈法で、キリストの靈法に動く愛の力は一切に勝ち、一切を救いあげてゆく。聖意、靈法を貫く力は実はこの神の愛である。

パウロがロマ書第八章三一節―三九節に互って絶叫している「神の愛」「キリストの愛」の力強さよ！ このあがないの愛の法こそが全宇宙、全世界を貫き、驚くべき深さ、広さをもって時間的歴史的には過去、現在、未来の三時相、世の終末まで、空間的地理的には、地獄界、煉獄界、天界の三界、世界、宇宙の極涯まで、貫流し遍照する靈法である。此の如く聖意靈法は実力をもって、過、現、未と全天地に貫いている。

「語らず、言わず、その声聞こえざるに、

その響きは全地に遍く、

その聖言は地の極にまで及ぶ」(詩篇一九・三―四)

聖意に投身、靈法を体受しつつ、統一場を體現する素粒子的実存となつて、神の偉大な経綸に参ずることが人生の目的である。そこに神の栄光が體現されるからである。

〔註〕 本稿の原型は『曠野の愛』誌第二九号(一九五八年春季号)の主題「聖意靈法」である。

第五章 宗教と文化

宗教（円）は東洋、文化（三角）は西洋

西洋的思惟様式はテーゼ・アンティテーゼ・ジンテーゼ、正・反・合の論理的思惟形式が本質的なものであるといつてよいであろう。それを図式化すると三角形となる。西洋の文化文明の性格は合理性であつて、組織や体系を好む。これに反して東洋的思惟は論理的であるより、直観的、内観的で、合理ではなく非合理、または超合理的にものを把握し、表現する。それは芸術の面にもよくあらわれている。ある中心といったものをめぐつて流転する相、または主客未分、一如、一体の相において無限無量なるものを表わそうとする。組織ではなく、生命的、有機体的に円現してゆく相をもっている。それゆえ円形または球体がその象徴とならう。

偉大なる宗教の発生地を考えると、仏教、ヒンズー教はインドを中心として展開し、イスラエルの宗教（狭義ではユダヤ教）やキリスト教は同じくアジアの西端、すなわちアジア、アフリカ、ヨーロッパの三大陸が相接触する枢要の地点に興り、その後進たるマホメット教（回教）も同じく

アジアの西角アラビアに發した。要するに偉大な宗教はインド、パレスティナ、アラビアの深山、^{こうや}曠野、砂漠を背景として發生したことを見る。

今、私は宗教的現象を宗教学的に分類しようとするのではない。低次元的民間信仰には、多種多様の偶像崇拜があるわけだが、これらの宗教は非文化的なものが多く、今われわれが問題とするに足りない。ここに問題としようとしているのは文化の土台として文化の源泉であるような、または道徳の根源として考えられるような宗教である。

歴史的に見れば、原始文化というのは、その根底に宗教的要因をもっているといつて可いであろう。また人間というものをその実存構造から考えてみると、人格の中心にたましいというものを思わざるを得ない。たましいが存在の中心である限り、人間は元来宗教的存在であるといえる。それゆえ、私は万人は宗教人であると申している。

歴史的には、素朴な宗教性が次第に高次な^{こうじ}ものになり、原始仏教の本尊たる釈尊と、原始キリスト教の根源たるキリストにおいて、世界人類の宗教はその極点に達した。世界の文化はこの二大人物の出現以来、この二大宗教の直接または間接の影響のもとに發展乃至^な展開を東に西につづけてきたといつて過言でないわけである。

Religion (<lat. Religio) 卽ち Wieder-Verbindung (再結) を意味すると普通解釈されている。

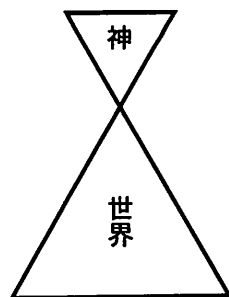
人間が超人間的なもの、ある絶對的な靈的實在といかに関わり、いかに結びつくかを問題とするわけで、その関わりの中心がたましいであるわけである。人間存在が有限的であり、相対的性格の

ものであり、欠陥あり、迷いあり、不安定である限り、必然、本来具有する一番根本的な問題は宗教問題である。宗教問題こそ万人が必然問われている自らの問題で、このような根源的な問題が真剣に問われないで、文化文明を云々して^{うんねん}みたところで、それは実は根を無視して樹木を育てようとするに等しいわけである。

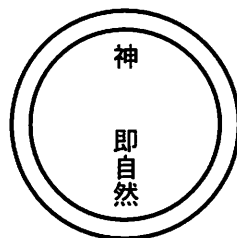
二〇世紀もそろそろ日暮に向っている今日、世界の文化国家に招来されているさまざまな危機的状况は、実は人間実存の根本である宗教の事態が低落しているところに、救いがたき欠陥が来ただけである。宗教は諸文化現象の一つではなく、諸文化現象の根底でなければならぬ。次元的には最高なるものである。このことの自覚を新たにし、そこに各人が立ち還るの^{かえ}でなければ、真の有機体性喪失のゆえに、人類万般の問題は、まことの解決や展開を得ること無く、人類はおそろ^かべき壊滅を自ら招くことにならないと誰が保証し得よう。

宗教の三様相

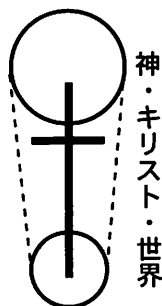
さて高次な宗教には大体三様の相があると思われる。その一は哲学的思惟の性格が強く、理神論的なもので、神を宇宙の第一原理として考え、ピラミッドの頂点の如く絶頂において、一切を合理的に解釈せんとするものである。そこにはたらく法則は必然法則であつて、自由の法則ではない。それゆえに神といつても、実は実存的な関わりではなく、理論的に理性とのみ関わりをもつ超越者の如くである。ギリシアの特にアリストテレスの哲学を源流とする思惟体系に見られるものである。



第一図



第二図



第三図

いわば第一図の如きものである。

その二は、直観的、内観的、瞑想的であつて、神と宇宙、世界、自然といったものが相即する汎神論的なものである。これは主として仏教やヨーロッパの神秘思想にみられる形相である。プロテイノス、エックハルトの如き哲学者、神学者、ゲーテの如き大詩人はこの傾向の強い人物であつた。第二図の如きものである。たとえば、浄土宗の辨栄上人の、

月を見て月に心の澄むときは

月こそおのが姿なるらめ

といった心境がそれである。

その三は、超越の神でありながら、すべてを貫いて遍在し、内在するという極めて自由な在り方をもつもので（エペソ四・六）、これがキリスト教において最も顕著な啓示宗教の神である。それを

第三図のごとくあらわしてみた。

キリスト道

さて普通はキリスト教といっているが、イエスはキリスト教とはいわず、「福音」「よろこびのおとずれ」といった。そして自分のことを

「私は道だ、真理だ、生命だ」

といった。それで私はキリスト道と申している。東洋人は道という言ことばにおいて真理を実存的に把握する角度を好んだ。老子ろうしも大道といった。日本人は古来、茶道、華道、弓道、剣道、柔道といった、術よりも道を本質的なこととした。芸術も実は芸道といふべきである。道とは身につける真理で、観念的に理解する真理ではない。極めて具体的、人格的、しかも根源的に靈的である。イエスはそういう真理の権化ごんけである。それが「よろこびのおとずれ」の主体で、これを体受することを信ずるというのである。ところが一般に「信ずる」という語が観念的なひびきに変っているのが残念である。釈迦しゃかは仏法という法を身に体したから、法身となっていた。キリストは神意の体現者であった。キリストや釈迦は本当に自然であり、自由であった。どちらにしても自我にとらわれない無私の境地に生きていたから、天国体であり、極楽体ごくらくたいであった。

「すべし、すべからず」の道德境をつきぬけた「せざるを得ず」とうち側から湧き出る自由にして必然の境地であるから「よろこびのおとずれ」なのである。うち側といっても、それは自我にとら

われたものではなく、無私であることが宗教道であるわけである。おのずから楽しい道であるから、楽道といってさしかえない。道楽ではないが、人間はよろこびが伴わなければ本ものでないことを実は本能的に知っているはずである。福音はそのようなよろこばしいヴァイタリティー・生命力をもっている事態である。ところが世の一般のキリスト教が、本来の福音的歓喜から大部ずれを来し、パリサイ的な硬さや、観念的な稀薄をまねいている。

受肉のキリストとキリストの受肉

イエスという人物は、ロゴス——これを普通は「言」と訳しているが、私はむしろ「靈言」または「言靈」と訳したい——たるキリストが、すなわち靈的實在が、イエスという人物に受肉したのだとヨハネ福音書に啓示されてある（ヨハネ一・一―一四）。それゆえ、イエスはそれ自体不可知、不可測の神を具現、体现した人物である。であるから、

「私を見た者は父〔なる神〕を見た者である」（ヨハネ一四・九）

といったので、これは彼自ら「父」と呼んでいる靈的實在者たる神と一如一体の結合を体験していなければ発し得ない言である。だからヨハネはさらにキリストのことを、

「父のふところにいますひとり子」（ヨハネ一・一八）

といっている。このような神秘の根源相がイエスの信仰の根源の消息であったことを見のがしてはならない。

それゆえに、我々の信仰もこのキリストをわがうちに宿す態のもの、究極的には「私を見た者は——私の破れ器にもかかわらず——キリストを見た者である」と言い得る質的なものである。それはパウロの、

「われ生く、されどもはやわれに非ず、キリストわがうちにありて生くるなり」（ガラテヤ

二・二〇）

の消息である。これは信仰をもつてするキリストの受肉と申して可い。しかしこれは、キリストと同じ霊、すなわち聖霊が内住しないではいえないことである。聖霊の内住のためには、十字架の贖罪を本當に、^{はらわた}腸の底で受け入れ、自分が本當に贖^{あがな}われ、我執という罪から解放されている者であるという絶対恩寵^{おんちゆう}を無条件に受けとめなければダメである。手放しではどうにもならない我を贖い、とつた十字架のキリストの愛の前に絶対降伏しなければ、本當のたましいの碎けは得られない。碎けそのものはキリストの十字架であるから。神の審判の義であると同時に、キリストの贖罪の愛である十字架において我は碎^{たまわ}けを賜り、罪からの自由を賜^{たまわ}つた。そこに聖霊が宿る。み霊がくると、そこにキリストの義が与えられる。それは愛への力ある自由である。まことに義・愛不離一体の消息で、これが本當の信仰の現実である。

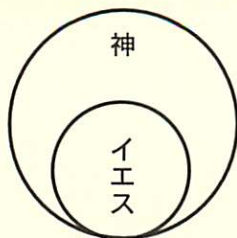
信・生・愛一如

内村鑑三先生が『求安録』の中で、信の消息を次の如く記している。

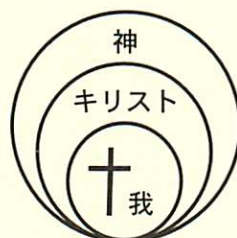
「英語の believe 独逸語の glauben は共にサクソン語の lyban (許す) なる語より来りしものにして leave (捨てる、任せる)、live (生きる)、love (愛する) の三語は believe (信ずる) と根源を共にす (独逸語の glauben, bleiben, leben, lieben と対照せよ)。信ずるは他に許すなり。すなわち己を捨てて他に任すなり。而して我は我の愛する人に我を任すなり。我を許し、我を任す人、すなわち我の愛するものは我の生を繋ぐものなり、すなわち愛は生命の精にして生命は実に愛なり。」

実に妙を得た真相をうがった解説で信仰—生—愛、一如の事態である。

信ずるとは、わが生 (全存在) を、我を愛する者——神、キリスト——に棄身で全托することの他何ものでもない。それが真に生くる道であり、それが真に愛を体現する道となる、というわけである。ところで全托といってもそれはどんなことか。ちようと乳呑児が母の胸に自分をとつぷり抱きこまれるように、祈りをもつておのれを靈的に神のふところに投げ身することである。イエスは正にそのような実存者であった。彼が「父よ!」といって祈りかかるとき、すでに神のふところの中で祈っているのである。それは第四図の如く内接円の関係である。ところが普通は



第四図



第五図

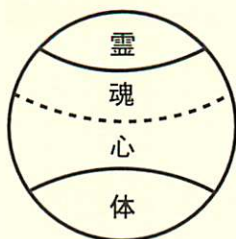
きこまれるように、祈りをもつておのれを靈的に神のふところに投げ身することである。イエスは正にそのような実存者であった。彼が「父よ!」といって祈りかかるとき、すでに神のふところの中で祈っているのである。それは第四図の如く内接円の関係である。ところが普通は

外接もしていない。神をはるかかなたに敬遠して、しかもこの世の雲霧にさえぎられて神を見失っているわけであろう。

ところで十字架の贖罪しよくぐわいにあずかっているならばキリストの中にはばからずして入ることができ。パウロが、「我キリストの中に」とか「キリストわが中に」とかいう表現を百何十回も手紙の中でやっている事態である。これが本当の信の消息で第五図のような現実で、この三重の円に満つるものは聖霊である。

人間の実存体構造

さて次に人間の实存体構造を考えてみる。それによって宗教と文化の関係もおのずからあきらかになろう。人間を球体の如く表現してみると、霊 (Ruach [ヘブライ語]、Pneuma [ギリシア語]、Geist [独]、Spiri [英]) が一番高次な部分で、最も内部にあると考えられる。これが聖霊と交る直接の場である。次の層は魂 (Nephesh, Psyche, Seele, Soul) で、意志 (Wille) のはたらきや理性 (Vernunft) のはたらきも渾然としてふくまれているようなものと考えてよいであろう。哲学的には、人間は意志的存在であるとか、理性的存在であるとかいわれている部分である。その次は中間の心 (Lebh, Cardia, Herz, Heart) で、人間の一番人間らしい心情の部分で良心的判断が充分そこにおいてなされる部分。そして心情の世界であるから、愛の宿るところ。それゆえ心なき人は人でないといってさしつかえないわけのもの。そしてこれらの部分部分にしてしかも渾然たるものを包み荷



第六図

っているものがすなわち肉体 (Basar, Soma, Körper) という具体的なものであつて、この霊、魂、心のどれにも深く接しており、この霊、魂、心と不可離、不可分析のものであることを知る。もちろんこれは生理学的構造ではなく、実存体としての人間の次元的な層を考へての構造である。第六図はそのような実存体構造を示すものである。聖書の中でも、霊 (プネウマ) と魂 (プシキケー) と体 (ソーマ) との三分法的表現をパウロがやっている (第一テサロニケ五・二三)。

人格的存在としての人間——人格体——の三つのはたらきとして、カントの分類の如く、認識界の真に對しては知性が、善の世界に對しては意志が、美的芸術の世界に對しては情性が考えられることは周知の如くである。そしてこれらのはたらきが相関連しつつ心魂の領域で、それぞれの機能を發揮していると考ええてよいであろう。しかもそれが肉体という生命体の場においてであることは言うまでもない。そして人間の文化的諸活動はこの知情意の夫々の特質が發揮されるところに展開している。知的活動が最も広い分野をもつていて、学問的展開として文化の最も基礎的な面に能き、応用面では経済、工業、産業一般、医業等にはたらくものである。意志的活動としては主として政治が重要な役割をはたしていると申し得るであろう。情性の活動は芸術、芸能一般であつて、人間生活をうるおすものである。教育の世界ではこの知情意の三面が最も円滑に渾然とはたらかねばならないが、教育はそれだけではなお一つの重大な面を欠くことになる。その問題については別に

「宗教と教育」の項において論ずることにする。

ところで今見たように、魂、心の次元よりも上の霊の次元のことが一般には漠然と精神といった言にきりかえられている場合が多い。霊は魂や心と実はわかつことができずして、その最も高次な部分をなすもので、これが目醒めないために、心魂の世界が本当の生命力を得ないし、知・情・意のはたらきをなす人格そのものが実は原動力を失っているわけなのである。そこに二〇世紀の現代人が新たに宗教的覚醒を要する重大問題が存するのである。

禁断の樹の果

さて我々は面白い例を創世記第二、三章のアダムとエバの神話物語において見ることができ。一体聖書というものは、教訓の書でもなければ、単なる歴史でも物語でもない。それは神話や物語や歴史を通して絶対次元が相対次元に投じてきた啓示の書である。しかもこの啓示はドラマの如くさまざまな矛盾構造をもつて展開している。天地創造から歴史の終末と新天新地に向ってくりひろげられる神劇であり、啓示である。啓示は同時に象徴であり、暗号である。これに対する者はどこまでも実存的でなければならぬ。このドラマは観劇をゆるさない。傍観をゆるさない。研究ではこと足りない。読者はドラマの中に自らを投入して、ドラマの中の活人物となって、からだで読まねばならない。そうでなければ、キリストのいう、

「聞く耳ある者は聞くべし」

の心がつかめない。釈尊^{しやくそん}が、

「八万四千の法門を説いたが一つも説かなかった」

といったのも、同じ消息で、すべて全存在的に身に受けとめるまでは、本ものとならぬということである。

「弥陀^{みだ}の五劫思惟^{ごこうし}の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞^{しんらん}一人がためなりけり」

という親鸞の体あたりが宗教的実存の真相である。

さて神話によると、神は、エデンに一つの園を設けてそこに美果のなる樹木を沢山生ぜしめ、園の中央に「生命の木」と「善悪を知る木」とを生えさせた。そして神はアダムのこの、

「善悪を知るの木から取って食べてはならない、それを取って食べると、きつと死ぬ」(創

世記二・一七)

と禁断の命を発しなされた。さて女がアダムの「あばら骨の一つ」から創造され、男女二人となった。二人は園の木の果を自由に食べたが、禁断の果には触れないでいた。すると狡猾な蛇^{こうかつ}があらわれて、女に、禁断の木の果を食べるようにそそのかして、こう言った。

「あなた方は決して死ぬことはないですよ。それを食べると、あなた方の目が開いて、神のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです」(同三・四、五)

サタンの使としての蛇は、サタンの意を体して、「神のように善悪を知る者となる」野心を起こさせようとした。神意を身に体して生きようとするところに、神を信じ神に仕える大道があるのに、

神意をおもわず、傍若無神に、自らが神の如くなろうとすること、そこに靈的傲慢のサタンの衝動というものがあって、これが実は罪の根源である。自己主張、自己神化の方向であるからである。

「神の似すがた」に創造された人間（同・二七）が、神意を身に受けて、神の如くされてゆくのは正しいが、神意を無視して、自らを神化せんとするのは、紙一重の差で、実はサタンのな角度である。ここに一言しておきたいことは、自己中心の衝動は、それがさっきの靈・魂・心・体いずれにしても、それ自体がどんなに立派なことであつても、それは肉肉といい、罪の諸衝動がそこに生ずる。神中心の動きはどんなつまらないことでも靈的といい、神の栄光が現われる。このことと、人間の靈肉の構造とを混同しないように注意を要する。

さてところで女はこの蛇の甘言にひっかかつて、

「女がその木を見ると、それは食べるに良く、目には美しく、賢くなるには好ましいと思

われたから、その実を採って食べ、また共にいた夫にも与えたので彼も食べた」（同三・六）

という結果になった。ここで面白いのは、「食べるに良く」は、人間の意欲が刺激された状態で意志に関わり、次の「目には美しく」は美的感覚の刺激で情に関わり、「賢くなるには好ましい」は知的衝動にはたらきかけたわけで、ここに意と情と知の三面の動きが奇しくも表現されているのを見る。

しかしこれは神の靈言に対して女の靈は全くはたらいておらず、心魂の相において、まんまとサタンの靈の支配下にとらえられてしまったわけである。アダムにおいても同じこと、この二人はそ

の靈が眠っていた。ここに自由に動いたと思った知、情、意は神を無視した文化的衝動であつたことを見る。二人の靈が神の靈言に信賴して、サタンの言にいざなわれなかつたならば、神は、やがて「善悪を知る木」の果をも、次には「生命の木」の果をも食べることをゆるして、健全な善悪の分別ある不老不死の境地に入れて下さつたであらう。神に信從するか否かに、義か罪か、生か死かの分水嶺があつた。

靈魂たましいの宗教的信の境地が土台で、根源で、知情意の文化的活動はその根源から發して初めて健全であるという消息を、我々はこの神話において洞察しなければならぬ。実に、神意を体受体現するところに真の宗教的実存があり、神意を無視して、手ばなしで知情意の世界を展開してゆくとこゝろ、即ち人間中心の文化文明の世界は、所詮、主我的、利己的な衝動に毒せられ、破局をもたらすこと必定である。二〇世紀の文化文明がそのことを露呈していること明白で、すでに第一次、第二次の世界大戦がこれを実証し、第三次大戦がよしんば招来されなかつたとしても、世界的公害現象と、イデオロギーの烈しい対立の禍根かこんは要するに人間の主我的罪性にあること火を見るよりあきらかである。この危機的文化文明を如何いかんせん。問題は単に政治でもなく、経済でもなく、実に人間のたましいの根本問題たる宗教に関わっている。

宗教と文化は樹木の如し

私はずっと以前に、あるとき窓外の樹を見て、ふとある真理を見たのであつた。それは今の禁断

の木の真理とある連関をもったものである。すなわち、生きた木には根がある。そして幹と枝と葉と花と果とがある。ところで根だけは地面のなかで見えない。幹枝葉花果は見える世界。それで、ハハアーと思った。根の世界こそ宗教の世界である。根の世界は、観察しようと思つて、掘りだしたら根は枯れてしまう。根の世界は対象化することの出来ない世界である。生きた根をそのまま見ずして信じて、愛して、水をそそぎ、肥料をあたえればよい。根はいよいよ深く根をはる。これが信の世界、宗教の世界なのである。このことは達磨^{だるま}大師がその弟子慧可との問答で「心」の問題をもつていみじくも語っているところである。この場合の「心」はさきほどの分類の「心」ではなく、霊・魂・心渾然たるものを「心」といつているわけ。そういう意味での「心」は榮西禪師も申しており、その他にも少なからずあるから、ここに一言しておく。

幹から上は可視的な文化文明の世界。それは観察も研究も出来る対象化してとらえることの出来る世界である。根の世界とは伸び方の方向が反対である。層がちがう、次元もちがう。しかも根と幹、枝葉花果とは相つらなっている。樹液は一貫して流れている。しかも、ある部分は幹であり、ある部分は枝であり、ある部分は緑の葉となり、ときに紅にも黄にも変色し、ある部分は美しい花となり、それがやがて果となる。何という草木の生命の構造だろう。陽光と大気と大地と清水の四大の恵みの中で生える一本の木に、一茎の草に、宇宙の真理が、人間界のあるべき実相が現象している。こう思つたわけである。

であるから、宗教なき文化文明は、根なき幹、枝葉、花果にひとしい。それは滅びる。健全なる

幹、枝葉、花果を展開できない宗教は低次の宗教で根らしい根とはいえないが、まことの根には健全な文化文明が展開するはずである。宗教と文化文明の方向と次元と層の矛盾的、逆説的、劇的關係、しかも渾然たる生命的有機体的關係を洞察するとき、我々は大きな明るい、また力強い確信をもつて信の世界に突入し、かついかなる文化面にも、人各々自己の天分特質にしたがつて活動も研究も自由に展開し得るのである。そこに本当の健全な、かつ無限の追求というものがなされて極まるところを知らぬわけである。

ところで幹とは何か。これは道念、道德の世界に譬えたい。文化文明が人間のいとなみである限り、そこに道念がバック・ボーンとして貫いていなければならない。道念、道德界も本来見えない世界に属するから宗教界に最も密接な關係をもつ。だから根幹といえ、宗教と道德ということになる。道念は何も前面に出るに及ばない。しかし文化文明の諸現象の奥に、中に溶けてふくまれていなければ、ゆがんだり、腐ったりする。それは丁度海水に塩が溶けて塩分となつて存在するようなものである。生きた力強い宗教が根源となつていない道德は力をもち得ない。このことは福音と律法の關係でもよくわかる通りである。律法を満たし、これを全うするものは福音の力であることはキリストが体現したところ、パウロが明言しているところである。

次に枝は何だろう、教育、政治、経済、各種の事業、産業、医療等である。人間界の最も可視的に多面に展開している諸々の部門である。それらの枝は大枝小枝あつて互に関連し、絡み合っている。

葉は何だろう。それらの枝と密接に関連しているあらゆる学的研究や観察や実験の部門と見たら面白いと思う。

花とは何か。以上の枝葉の成果の中で特に美しいものと見たらよいであろう。そしてまた人間界の多種の芸術的乃至^{ないし}芸術的活動とその成果を花に譬えることは自然である。自然界に花がなかったら、何と殺風景か。人間社会に美術、文芸的な美がなかったら人間は耐えられない。自然界に千紫万紅の花を創造し、人間界に女性を創造なさった神こそは最大の芸術家であり給う。ちなみに言う、グロな怪獣や俗悪殺伐な漫画やテレビなど横行跋扈^{ばうこ}している現代よ、自然本然に還れ。

最後に果とは何か。一粒の果において根幹枝葉花の生命が結晶しているわけであるから、果というものは大変なものである。植物における胚珠、動物の胎児や卵はそのような生命の根源体である。生命不滅の実証体とでも言うか。しかし今ここにいう人間界の果は、もう一つ別な実存的な内実のものである。即ち、文化文明の各分野において、代表的にみのった果の如き人物、乃至成果を果と見たい。それらの人々乃至^{ないし}業績は歴史を真に担いかつ展開させてゆく創造的な存在であり、業績である。そしてまた必ずしも人物の大小を問題としない。問題は質的に本当におのが天職を使命として天職として生きた人々。またどんなに人には目だたなかつと、誤解されようと、迫害されようと、真に歴史を担った棄石の如きたましいは最も貴き果といってよいであろう。いかなる人も本質的には天下一品であるはずだ。しからは万人がそういう創造的、建設的な果であり得るのである。そのためにはどうしても各個人が宗教的な、人間本然の根をもたねばならない。それゆえ、私は、万人

は本来宗教人であるという。もちろん一切の宗派的な差別を越えたものである。愛といい、慈悲という。宗教の根本性格はここにある。この愛は生きとし生けるものに生命を与える。しかり、無生物をすら愛をもつてつとむところのもの、それは霊的な生命である。たましいのあるところ、そこに宗教あり。たましいが宗教的内実を失っているなら、『樂園喪失』、パラダイス・ロストで、これは単に聖書の神話ではなく、たましいのいたましい現実である。ミルトンがこの問題を中心に畢生（ひつせい）の大作“Paradise Lost”をものした意義もそこにある。であるから聖書は、あるがままの地獄的現実や、めぐみの驚くべき天国的現実をつきつけているドラマだと申すわけである。

円と内接三角形

仏道も慈悲と言い、福音道も愛という。愛を形であらわそうとすると、自然、円形や球形になる。聖者のうしろにさす光は光輪を成す。あれは画家が想像したのではなく、霊眼にあのように映るこゝとがあるからである。さきにも申した如く、正、反、合的な思想の世界は三角形的である。世界には多くのイズム（主義）があつて、思想史や政治史を綾成（あやな）して来た。例えば、一つのイズムがある点に位置し、他のイズムがこれに対立し、第三のイズムがまたこの二つに対してどんな別な点に位置しようとも、これらの三点が一直線上にない限り、必ずこれらの三点から等距離である一点がある。この点を中心としてこれらの三点を円周上の点とする円が必ず描ける。そのようにどんな思想も、その中に包摂し、正しく位置づけ、生命的有機体的な因子として生かすことの出来るものが絶

対次元をもった宗教である。そこで諸々の思想を象徴的に三角形（すなわち三点が形成する形）であらわすとすれば、それが鋭角であろうと鈍角であろうと、これを内接させる外接円は絶対次元の宗教を意味する。そのような宗教は大乗仏教かキリストの福音である。

キリストが、

「天の父は、その太陽を悪しき者の上にも、善き者の上にも昇らせ、雨を正しき者にも、

正しからぬ者にも降らせ給う、だから汝らも天の父の全き^{まった}が如く全かれよ」

と言ったが、今申した円がこの全さをあらわし、さまざまの思想や低次元宗教がこの円の中に包摂されると考える。そのとき円の中心から発する驚くべき光がこれらのものをよく照し出して認識させると同時に、その光熱がそれらのものを溶解して変質変貌させる力をもっているというわけである。これはキリストの福音のみがなし得る驚くべき事態なのである。そのような驚くべき義愛一貫のわざをなす実体は聖霊と聖言^{みことば}である。「全かれ」とは質的に全かれということで、現実の我々が量的に全きわけはなく、質的な完全性というものは聖霊を宿すところにある。破れ器の中に完全性の一粒の果、一片の霊核が宿るからありがたいのである。

在りて在らしむる者

超絶的空間にある太陽が、驚くべき引力と光熱をもって地球を回転させ、地球上のものを生かしている。そのような太陽の在り方が、本当の在り方というものである。自分が在ることが他者をし

て在らしめている在り方、これが恩恵であり、愛である。幼少年の子らが親によって在らしめられているのがそれである。モーセに自現したヤハウェーなる神が、モーセの間に對して、「我は在りて在る者なり」と答えたことは出エジプト記第三章に出ている重要な記事である。ところでこの言葉を私は、以上の太陽の在り方から靈感を得て、

「我は在りて在らしむる者なり」

または、

「我は在らしめて在る者なり」

とよみたいのである。まだこのような訳し方、よみ方をおそらく世界のどの学者もしていない。私はこの考えを一九五〇年を少し廻った頃抱いた。モーセに示された神の靈言の根源のひびきはそうであつたと信ずる。この読み方がモーセへの啓示の深層に秘められたる奥義と確信する。

ところで「あらしめ」られている我々各人が、隣人を「あらしめ」るようになるにはどうすればよいか。「あらしめ」られているということの内実が何であるかを体認すれば、真に「あらしめ」られている人は、隣人を必然「あらしめる」人となる。すなわち太陽光熱の如きキリストが、その贖罪の十字架をもって我の存在を無罪とし、無私となし給うたから、そこへ光熱の如き聖靈がそそぎこまれ、それが我れの中で光熱を発して隣人をあたため、隣人をして生命と歓喜の中に「あらしめる」ように作用するのである。この消息をあらわす最も適切な聖句の一つはイザヤ書第五十七章一五節である。

砕けた心魂

「至高いとたかく至上いとうえなる永遠とこしえに住める者、聖者と名づくる者、かく言い給う、我は高き所、聖きよき所に住み、また心砕けて謙へりたる者と共に住み、謙る者の靈を活かし、砕けたる者の心を活かす」(イザヤ五七・一五)

これが福音というものである。神なる聖者がただ高所に超絶していたのでは、我々罪びとはどうしようもない。人間の在り方で大切なのは、自ら立派になろうとすることではなく、この聖者に降参し、平伏ひれふし、心砕けてあることだけである。聖者たる神が自らこのどうしようもない者の中に降りて来て、その靈を活かし、その心を活かし給うというのである。宗教の消息はそういうところにある。これは万人にとって無条件に可能なことである。何の資格も、素質も、才能も要らない。ただつぶれはてた靈、八方破れの心だけである。そこに神仏が宿る。

日本の国旗が象徴するもの

「心に太陽をもて！」

砕けた心、破れた心、悲しむ心、失恋の心、絶望の心、そのままを靈界の太陽に向けよ！ そこに靈界の太陽キリストが、如来にょらいが宿る。それが日本人にとって、全身を国旗としている姿ではないか。あるがままのおのれを靈光の中に投げ出せ！ それは無私無色の白地しろじと化せられてゆく、そこ

に宿る光体キリストや如来によって。

世界の万国旗の中で、正直のところ、日の丸は最高の国旗ではないか。「静かな偉大さ、崇高なる単純性」がギリシア芸術の貴さであるというが、日本の国旗は正にそれである。神は童心に宿る。日の丸はそのような童心の象徴でもある。

詩篇第十九篇にある如く、

「ものとしてそのあたたまりを蒙らざるはなし」

である。わが心に太陽キリストを宿して霊愛不滅の心となり、わが体に十字架の霊血をうけて無罪、無色、白色とされる。かくて自分自身が日の丸の国旗の本質を体现せしめられてこそ、真に日本民族にしてかつ世界的な価値と使命を担う者とされてゆく。太陽をもつて象徴されるところのものは、^{かくかく}赫々たる光であり、白熱的な愛の力であり、驚くべき生命力であり、照々たる明智であり、無限無量の創造力であろう。これがキリストという原始生命（Uriben）、原始力（Ukrat）、原始核（Uken）、原霊（Ureid）の内実であろう。かくて実にこの眇^{びよう}たる存在でありながら、塵^{ちり}の如き罪びとでありながら、限りなく創造的実存になってゆくのである。我々は不完全でありながら信の消息において完全性を賜^{たまわ}っている。

結語―円現

この原稿を書いていたら、ふと、原稿用紙の上に天道虫が飛んで来た。ふしぎなことである。私

とこの天道虫とは同じだ。私も虫けらに過ぎない。ところでこの虫の如き私が、無私の原始核（聖靈）を賜つて、自由無礙の実存にされる。ときあつてか、キリストの霊能もこの私を通してはたらし給う。栄光を聖名に帰するのみである。太陽心となると往くとして可ならざるなしの質が湧いてくる。キリストが、

「わが名によりて願わば、すべてのことなし能う」

と申された消息であらう。

有限でありながら無限をもち、特殊を通して普遍が実証される。そういった消息が真の宗教を内に蔵するところに展開する夫々の民族や国民を通しての健全な文化文明のすがたである。政治、経済、諸科学、諸事業に宗教は直結してあらわれることはしない。しかし、文化文明をいとなむ主体たる人間そのものの内面の世界には深く宗教という根の世界がなければ、文化文明が真に健全ではあり得ないことは以上の所論で述べた如くである。文化現象の中でも、教育や芸術や医療の面には宗教と直結の消息が出てくる場合はある。一般的には文化文明のすべてのいとなみの奥に宗教性が溶けて作用し、現象面にはあらわれないのが、宗教と文化の本当の関係である。宗教と文化は次元が異なり、方向が反対で否定媒介によつて深く連なるというものである。樹木の構造はその意味で興味ある譬となつたが、譬であるから、もちろんすべてをあらわすわけにはいかないし、譬というものはその可いのであらう。

さきの図表で円をいくつも書いたが、輪は和に通じ、円は縁に通ずる。日の丸こそは円現の相で、

ゲテが「エンテレケイア」という語を好んでいたようだが、エンテレケイアというギリシア語はエン・テロス・エケインの三語から成り、「満ち満ちてもつている」「全的にもつ」という意味で、正に円現の相と照応する言葉。大和の象徴がこの円であり、大和民族は正に大和を、全世界にもたらすべき大使命があるのではないか。然らば宗教を根底にしつかりもたなくては、どうしてこの円現、大和を成就し得よう。世界和合の縁結びの民となり、——正直、世界百科辞典の民族のところをひらいて世界の民族の顔をつらつら比較してみるのに、大和民族の顔は最も温和に見受けられるのだが——。

聖霊が語るところの「羔の婚姻」、すなわちキリストを新郎とし、救われたる万国の民を新婦とする祝福された信と愛の天国の招来に、深くあずかるべき民でありたい。かかる信愛の天国を円現せんとの終末的希望体现の悲願靈願に生きんとならば、何はさておき、我々各人が自らのうちに天国を、原始的の信、原始的の愛の生命を、すなわち聖霊をうちに深く宿す人間と成ることが最も根源的な要請である。

極楽は東にあらず西になし

来た（北）道さがせ、みんな身（南）にあり

と仏道も詠い、「天国は汝らの中に在り」と福音体、天国体そのものであったキリストが道破した。

〔註〕本稿「宗教と文化」の原型は、一九六四年二月四日（火）午前十時から行われた東大教養学部における著者の最終講義。

第六章 宗教と教育

二〇世紀はあと四半世紀をもつて終ろうとしている。世界は今世紀において二つの世界大戦を爆發させた。そして現実がいつ第三次世界大戦を起こすかも知れぬ危機性を孕んでいないと誰が言えるようか。世界の自然環境問題、地下資源問題、人口問題、経済問題、政治思想問題、等々の諸問題が相互に因果関係をなし、問題は錯綜して乱麻の如くである。この乱麻を断つ快刀はないものであろうか。そんな快刀は見当らぬであらう。否むしろ、乱れを解く糸口を個々人がさがして、自分の小世界で丹念に解きほぐすよりほかないのではないか。たといノストラダムスの預言の如き世界の終末が来ようとも。

文化文明は要するに人間のいとなみである。人間のいとなみである限り、人間そのものに、人間のいとなみのあらゆる問題の問題性がひそんであるわけである。然らば諸々の問題の問題は、人間そのものを問うところに帰する。人間そのものの中心は、中心という言葉が表わしているように、中なる心である。「こころ」とか「たましい」とか「靈」とかいう言葉であらわされる人間の中心

の問題は宗教的なものである。然らば、乱麻の糸口は人間のところ、たましい、靈にあつたといわねばならない。

この偉大な高度な科学の二〇世紀、原子力時代といわれる今世紀に、宗教をもち出すのは時代錯誤であるといつて一笑に付する人があるならば、その人は人間性を失つていといわざるを得ない。実は宗教の世界にたましいの原始力があることを再発見しなければならぬのである。

個人、社会、国家、国際、世界の諸問題中の問題は、帰するところ個人のたましいの在り方にあるとは、実は自明の理なのである。いかにしてこの個人を形成して、社会人たらしめ、国家人たらしめ、世界人たらしめるかに、家庭教育、学校教育、社会教育という教育の課題があるわけである。しかも、人間そのものの中心問題としてのたましいの問題が宗教に関わるものである以上、宗教と教育は実は不可離の關係にあり、かつ教育の根底に宗教を置かなければ、教育のまことの展開はあり得ないと思うわけである。

題して「宗教と教育」としたのは、如上のような必然性に由るものである。しかし論者はいわゆる「宗教教育」を云々しようとしているのではない。また「宗教と教育」と申しても、ある特定の宗教に限るわけでもない。けれども真の宗教心は、ある宗教、乃至は宗教的なものを深く媒介としなければ、觀念にすぎず、それでは教育の根底として自覚されるには至らないということも事実である。

然らば「宗教と教育」という主題において問われる対象は、教育をいとなむ主体たる家庭の両親

と学園（保育園、幼稚園から大学に至るまで）の教員たるものの内的実存を中心とした問題であらねばならない。

「天よ耳を傾けよ、われ語らん、

地よわが口の言葉を聴け。

わが教は雨の降るがごとし。

わが言は露のおくがごとく、

細雨の若草の上にふるごとく、

霧雨の青草の上にくだるがごとし。

愚かにして智慧なき民よ、

汝らが神に報ゆることかくのごときか。

ヤハウェーは汝の父にして汝を贖い、

汝を創造し、汝を建て給いしに非ずや。

ヤハウェーの配分はその民イスラエルにして

ヤコブはその産業なり。

ヤハウェーはこれを荒野の地に見、

これに獣の吼ゆる曠野に遇い、

めぐり囲みてこれをいたわり、

眼の珠たまのごとくにこれを護り給えり。

鷺わしのその巢すびなを喚よび起よし、

その子の上に舞まい翔かけりゆくごとく、

ヤハウェーその羽を展のべて彼らのを載のせ、

その翼つばさをもてこれを負おいたまえり」

これは旧約聖書申命記第三二章に出ているいわゆる「モーセの歌」と称せられている詩の一部分である。この詩句からも察せられるように、イスラエル宗教の定礎者といわれるモーセは神の言を受けて、民に伝えているという自覚にあつた。思索によつて教を与えたのではなく、啓示に基づいて民に教を示した。それゆえに「わが教は雨の降るがごとし」という表現をおのずからとつてゐるのである。モーセの十誡（本来は「十言」と訳すべき原語）もちろん、啓示の十言を基本としたものである。

さてイエスにおいて教説の事態はどうであつたか。ヨハネ福音書にこう書いてある、

「祭まつり〔過越すさしの祭〕も半ばになつてから、イエスは宮みやに上つて教え始めた。すると、ユダヤ人たちは驚いて言つた、『この人は學問をしたこともないのに、どうして律法の知識をもつてゐるのだらう』。そこでイエスは彼らに答えて言つた、『わたしの教はわたし自身の教ではなく、わたしをつかわしなされたかたの教である。神のみこころを行おうと思ふ者であれば、誰でも、わたしの語つてゐるこの教が神からのものか、それとも、わたし自身から

出たものか、わかるであろう。自分から出たことを語る者は、自分の栄光を求めるが、自分をつかわしたかたの栄光を求める者は真実であつて、その人の内には偽りがない」(ヨハネ七・一四―一八)

これがイエスの自覚であつた。彼は自分を何ものともしなかつた。福音書にしろされてある彼の教説はすべて天からの啓示で、神から聴いてつたえているにすぎなかつた。彼は実に無教者であつた。それゆえにこそ彼の教説に神的な權威があつた。であるから、あの有名な「山上の垂訓」をイエスが語つたあとで、

「群衆はその教にひとく驚いた。それは律法学者たちのようではなく、權威ある者らしく、教えたからである」(マタイ七・二八、二九)

と書いてある。イエスの教説がおよそけたはずれのものであつたという証言は各福音書の諸所に記されてある。それはあたまからひねりだした理窟や理論ではなく、天来の啓示に基づく全存在的な告白であつたからである。イエスにおいては教えるという意識よりも生きた真理を告白するというやむにやまれぬものであつた。

「我は道なり、真理なり、生命なり」

「われは世の光なり」

「われは門なり」

というような告白は、彼が聖意を一切として、自らを神の中に投身して、聖意を体现する実存であ

つたからである。

周知の如くイエスは、神をいつも「父」と呼んでいた。神を「父」と呼んでいた彼の自覚は自分がこの天界の、霊界の父の子であるということである。さきほどの「モーセの歌」においては、イスラエルの民族神ヤハウェが民族の「父」として呼ばれ、イスラエルはその「子」として自覚されている。それゆえイエスにおいて、民族的な自覚から個的な自覚へと焦点してきたわけである。すなわち、神と人との關係を人間界の親子の關係に類比し、質的には絶対とし、自覚されているわけである。それ故に、イエスの実存の性格は、正に神を父として敬愛し、信頼し抜いたところに在る。神はイエスにとつてたましいの親であり、たましいの師であり、たましいの主であつた。であるからイエスは神の子として、神の弟子として、神の僕として自らを自覚していた。これを宗教哲學的な角度から言うならば、人間は存在の質では、絶対者——それを宗教的な表現で、神、如来、ヤハウェ（実存者）、聖者、父、靈、アラ、天、何と名づけられようとも可い——と同質性なるものであり、使命の面では絶対者の聖旨、本願を体现すべき者、また本来体现し得る者なのである。イエスにあつては、神を父とすることは、たましいの本質に即するものであつた。それゆえ、万人のたましいは、キリスト教的に言えば神性を宿しているし、仏教的に表わせば、「衆生悉く仏性あり」といわれる如く、仏性をもっているというわけで、二〇世紀の人類の現実が、一般にいか

に没宗教的であろうとも、人間はもともと宗教的存在であるということは、本質的にも歴史的にも否みがたき事実である。世界の精神史の底流をなすものは、キリスト教と仏教を二大宗教とする諸

宗教の流れであることは否定できないおごりかな事実である。それだけに、没宗教、反宗教に人類一般が流れてゆくとするならば、人類は怖るべき破滅へと向わざるを得ない。

万人は救を要する。自分は救を要しない、と言う人があるならば、それはおそれるべき驕慢であるか、精神異常かである、と言われても仕方があるまい。ところが驕慢にも救を要しないという心の傾きの人間が意外に多いのではないか。ダンテが、天国もこれを迎えず、地獄もこれを拒むたぐいの人間、すなわち、善を慕うのでもなく、悪を自覚するのでもない中間者流が地獄の門外に雲霞の如く蠢いている情景を描いて、

「憐憫も正義も彼らを蔑む」〔神曲〕地獄篇第三歌第五〇行

(Misericordia e girestizia li sdegnà.)

と喝破しているが、「救を要しない」という心根の驕慢者流もまた中間者流におとらず夥しいにちがいない。

ところで人が「神の似すがた」(Selen Elohim, Imago Dei, Ebenbild Gottes) に創造された(創世記一・二七)という神話的表現の啓示は、人間が本来神性を宿しているということである。もし人間に神性がなければ、神を拝し、神を慕うということはありません。

「我らの中に神の本来の力がないならば、
どうして神的なものに恍惚たり得るであらう」

"Läg, nicht in uns des Gotes eigne Kraft,

Wie kommt, uns Göttliches entzücken?

とゲーテが言っている通りである。

「人」を「靈止^{ひとと}」と書いた古代人は真に「人」を自覚していたと思う。「ひと」を神靈の止ま^{とど}まっている者と自覚したわけである。神性、仏性が存在の中心たるたましいの本質である、ということは、アウグスティヌスの『告白』の有名な言^{ことば}も反証している。すなわち、彼は神に向つてこう告白した、

「汝は我らを汝の為に創造し給うた。それ故、我らの心は汝の中に安らうまでは平安でない」

たましいが、神仙と靈的に結ばれるまでは平安でない。「宗教」Religioは religare「再び結ぶ、結びかえす」ことを意味する動詞から来しているとすると、まことに人間の現実に対する警告としても注目すべき言葉である。教育はドイツ語で Erziehung は er-ziehen すなわち「引き出してある状態に到らしめる」意味である。本来人間の中にある本質^{ないし}乃至天賦^{てんぷ}の才能を自覚させて、それを鍛えて円現させる、というのが教育の真義である。人間の内なる本質は、神性であり、仏性である。そういう宗教心に目覚ましめ、それと同時にその人の天賦のあるところに天職があることを自覚させ、その天賦を中心として自ら鍛えるように導くところに本当の人間形成の道^{みち}があろう。

キリストが、

「幼児のごとくならなければ、天国に入れない」

と言ったのは、幼児に見えるあの純真な全的な信頼深さ。何か神秘的な、ほとけのような清純さ、天

国的明朗な笑い。そこには天国の雰囲気が、極楽の靈氣が漂うているからである。

「大人者不^レ失^レ其赤子之心^一者也」(大人は赤子の心を失わず)

と孟子もいった。偉大な人物は童心を失わないのである。

幼児や児童の純な心を教育するにあたり、家庭の両親、学園の教育者が宗教心をもたないで、どうして本質的な育て方が可能であろうか。万人は本来宗教人なのである。しかしその万人の現実本来のすがたから外^{はず}れている。そこに万人は救^{すく}いを要するという事態が生じている。それゆえ、両親も教員もつねに新たに求道^{くどう}しつつ、救にあずかりつつ、教育にたずさわるところに教育の本然^{ほんぜん}のすがたがある。

さて私は、宗教は諸々の文化文明現象のどん底に位置するもの、または超越したいわば絶対次元のもので諸々の文化文明現象の根柢であり、源泉であると見る。人間界を草木に譬^{たと}えるならば、宗教はあたかも「根の世界」、道德は「幹の世界」、諸文化文明は「枝葉花果の世界」である。すなわち教育も学問も政治も経済も農業も工業も商業も医業も諸々の職業も、それを営む主体が人間であるかぎり、宗教は次元がちがった世界であればこそ、かえって最も深く文化文明に関わっているといふべきものである。換言^{かんげん}するならば、宗教は文化文明の価値体系において、最も根源でなければならぬと申すのである。世界的宗教哲学者パウ・ティリツヒも、

「宗教は人間の究極的関心事である」

と言っている。

真善美の世界、すなわち学問、道德、芸術の世界も、その根底的大前提たるものは宗教心である。深い思索と綿密な研究を要する学問も、靈的な直観と洞察が欠けては究極の域に達し難い。道德は実践的な原動力として、また道德の究極の境地として宗教心を要する。芸術は技能の奥に宗教的情動を必要とすべく、靈的心境と共に神技に進みゆくものである。然らば学問、道德、芸術の潜在勢力として、これらを展開しゆくものは宗教心であるといわねばならない。

教育一般は、徳育、智育、体育という広範囲にわたって関わっているのであるが、両親および教育者自身が、今やいかにそのたましいの面で宗教的なものに関わりをもつて宗教心を自ら深め、これらの三面に自在に処し、創造的な展開をなすべきであるかは自明のことではないか。特定の宗教を信じるか信じないかは別問題であるが、人たるものは、たましいのある限り、宗教心を本具ほんぐしているということを、今こそ自覚すべきであると思う。

現代教育の諸問題の奥の唯一の問題性は、両親および教育者自身のたましいが、たましいの本質を宗教心として自覚し、具体的にその原始力を回復するか否かにかかっていると申したい。

そのためには、何か具体的な事象なり対象なりを通して、具体的に宗教体験をすることが肝要であろう。宗教心とか宗教的情操とかいっても、想像された程度では、具体的な力とはならない。信仰といっても観念的であつては、まことの生命力、創造力とはなり難い。今の一般のキリスト教徒、仏教徒の現実が、この程度のものが多いのは遺憾なことである。

孟子は宗教家ではないが、

万物皆備^{ワル}於^ニ我^ニ。(万物皆われに備わる)

反^{カエリミ}身^{テニ}而^{ナレバ}誠^シ樂^{ナレハ}莫^シ大^{ナルハ}焉^{ヨリ}。(身に反みて誠なれば、楽しみ焉より大なるは莫し)

強^{シテ}恕^レ而^レ行^レ求^レ仁^ヲ莫^シ近^{キハ}焉^{ヨリ}。(強恕して行^フ、仁を求むること焉より近きは莫し)

と喝破^{かつぱ}しているあたり、すでに宗教心と道念とが一如^{いちじょ}となつてゐる素晴らしい心境であると思う。

さきにも触れたように、人間本来神性、仏性といわれる宗教性ある限り、学問的^{しやうもん}精進^{しやうじん}を無我の境地において追求する上においても、道德的实践において愛がいかに宗教的な質をもつたものであるかを体験することにおいても、芸術を愛好し、また追求するにあたり、いかに宗教的な深さが必要であるかを体感するにおいても、体育の面で宗教的な心境における呼吸^{こそ}が技能を錬る上に大切であること、剣道、柔道、弓道、合気道、マラソン等々、神技といわれる境地がいかに宗教心に関わるかと思うにつけても、親も教育者もいかに宗教心ぬきには教育というものが、本質的には在り得ぬかを自覚しなければならぬ。

これに反して、現代人の意識は、主我的人間の自由とか要求とかを直接肯定して、そこに自主性とか主体性といったものを肯定しようとする傾向が強いと思われる。そのような角度の民主主義が肯定されているところに現代の危機性^{もろもろ}と諸々の混乱、行きづまりが生じてゐる。そのような現象は要するにエゴイズムのさまざまな様相に他ならない。

カントもこの、

「自己^{エゴ}」との戦は最も困難な戦であり、自己に打ち克つは最美の勝利である」

といっているが、そこに宗教的な力を要し、救を要する問題があるのであるが、その問題に深く立ち入ることは本論稿の主題ではないから、触れないことにするが、我執的な主我意識は、さきほどの驕慢きょうまんに通ずるもので、その反対の心根こころねは何を契機として生ずるかといえば、永遠、無限、無量なる絶対者に何らかの事象現象を通して出会うことである。そしてそこに生ずるのが畏敬いけいの念であり、謙虚な平伏ひれふしの心の態勢であり、たましいの碎けの姿である。

ゲーテが長篇小説『ウィルヘルム・マイスターの遍歴時代』の第二巻第一章において、教育州での教育の基本として宗教的畏敬のことを述べているが、これは極めて注目すべきものである。この小説のこの個所でゲーテは「畏敬」「キルヒンヒト」 (Ehrfurch) がすべての人に欠けている、といっている。

「ただ一つのものだけは生れながらにして持っている者は誰もありません。しかもそれは

人間があらゆる方面にわたって人間であるためには、すべてがかかっている一点なのです」

という極めて著しい言葉を作中の人物をして語らしめている。本来あるべき畏敬の念が欠けているということは、言葉の深い意味で現代こそそうではないか。

畏敬にはまず三種類のものがあるとゲーテはいう。第一は我々の上なるものに対する畏敬、第二は我々と同等なるものへの畏敬、第三は我々の下なるものに対する畏敬の三種類をあげ、この三種類の畏敬が融合して一つの全体をなすとき、初めて最高の力と効能とを発揮する、といっている。それはどういう事態かというと、自己自身に対する畏敬である、と断じた。

それはどういう宗教事象であろうか。第一の上なるものへの畏敬は民族的宗教で、世界の諸々の

民族の民族神がこれにあたる。第二の同等なるものへの畏敬は哲学的宗教で、哲学者はより高いものを自分まで引き下げ、より低いものを自分にまで引きあげ、全人類との関係も自己と同等なものへの関係となし、個において宇宙を見るような洞察をなす汎神論的なものである。例えば、

「仏道の身心は草木瓦礫なり、風雨水火なり」とか、

「二塵の中に大千の経巻あり」

とかいう道元禪師の心境はこの類いであろう。第三の下なるものへの畏敬はキリスト教において著しくあらわれているもので、

「これは人類が到達し得た、また到達せずにはいられなかった窮極のものです」

といっている。ゲートは下なるものにおいて、「神の僕」として、おのれを「卑賤と貧困、嘲笑と侮蔑、恥辱と悲惨、苦悩と死」、然り、十字架の死にまで到らしめたイエスの実存、どん底の姿を意味していると思われる。彼はさらに、「そののみか、罪悪と犯罪をさえ、聖なるものの障害ではなく、その促進として尊敬し、愛するにいたるまで」と、作中の人物をして極言せしめているのは、どういうことかと言うと、例えば「姦淫の女」(ヨハネ八・一二)とか、一方の「十字架上の盗賊」(ルカ二三・四一、四三)とかの碎けた心の消息を意味しているのであろう。

そして最後にこう語らしめている。

「……三つがいっしょになって初めて真の宗教が生み出されるのです。この三つの畏敬から最高の畏敬、すなわち自己自身に対する畏敬が生れます。そしてこの自己自身に対する

畏敬から、また前の三つの畏敬が生育し、こうして人間は彼が到達しうる最高のものに達し、自分を神と自然とが生み出した最もすぐれたものと見なすことが許されるばかりか、うぬぼれと我欲によって再び卑俗なものへ引きおろされることなく、この高みにとどまりうるようになるのです」(ゲーテの言の引用たる「」内の訳文は関泰祐訳による)。

この「自己自身に対する畏敬」も実はキリストの福音がもっている。それは聖霊が宿ることによって、内なる神に対する畏敬となるからである。キリストの使徒たちが、使徒行伝においてこれを実証している。そこでは謙虚と權威とが相即そうそくしている。性来の自我がぶつつぶれている我ならざる我、本然の我に対する畏敬となるのである。パウロが、

「キリストわが内に、我れキリストの内に」

という一如いちにの現実、そこに生ずる内なる我への畏敬が、ゲーテがここで語っている第四の畏敬の真意であると思われる。

ゲーテは神と自然と我という線を相関相入の角度で体感して生きていた人間であった。であるから、神的な、靈的な、生命的な神・自然が彼の中に、彼はまたその中に「生き動きまた在る」という消息を体認しつつ生きていた。その彼がこのように「自己自身に対する畏敬」といったのは、正に彼自身の告白で、さすがにゲーテである。これは相対的自我的な自主とか自由とかいう消息とは凡そおよ次元のちがう消息である。

さて教育の面で一つとりあげたいのは、如上の畏敬説の中で、第一の畏敬において、ゲーテはこ

う語らしめている。

「あの高いところにひとりの神がいて、その神が両親や先生や目上の人たちの姿をとって
顕現している、と信ずることを子供たちに望むものなのです」

と。すなわちこの場合、両親や先生たちは、宗教的な実存を身証していなければならないわけである。神がイエスにおいて自現し、イエスは神を体現したから、イエスは、

「われを見し者は父を見しなり」

と告白し得た。そのような内実として、イエス以外の人間が神を体現することはあり得ない。我々は皆、救を要する人間であるから。けれどもゲーテは、ここでは、とにかく両親や先生たちが、宗教心乃至信仰をもつて生き、神的な權威を何となく備えていなければ、本質的な教育は在り得ないことを暗示しているのである。これは我々の現実問題として確かと自覚しなければならぬ重要なポイントである。両親も教育者もそういった宗教的な權威を具えていないために、自信を失っているのが一般ではなからうか。

家庭の教育者たる両親も、学校の教育者も、絶対者に対する畏敬と信愛からこそ、まことの自主性も自由も權威も生ずるのであり、教育の根本姿勢はそこにあることに思いを致すべきである。そうでないと、子らに、生徒たちに真の謙虚さと真の自律も自主も自由も身につけさせることができない。いたずらに民主主義を翳すべからずである。

モーセの十言(誠)の第五言「汝の父母を敬え」も畏敬の觀念を貴ぶところから発想されている

わけであるが、現代の家庭においてこの姿勢が崩れているのが一般であるのは、民主主義の自由平等をはきちがえているからである。神仏と人間との関係において、人間は神仏を畏敬すべきは靈的な法（ダルマ）として当然なことである。そして神仏と個々人との関係は夫々絶対関係であつて、比較をゆるさぬものである。そのような絶対者を基盤とするところに人格の尊嚴と自由と平等がある。民主主義とはそのような基盤においてはじめて健全なものであつて、このことと人間界の有機体的な秩序とは矛盾するものではない。

親子、兄弟、姉妹、師弟、先輩後輩、社会的諸団体等々には、人格的信愛を血肉とし、構成、組織等々を骨格とした秩序と役割があることは、あたかも人体が、首、胴体、手脚等をもった有機体として秩序と夫々の役割があるのと同様である。このことは使徒パウロがコリント前書第一二章で申している通りである。

神仏に対する絶対的な畏敬と信愛の縦の関係あつて、初めて人間間の相対的な畏敬と信愛の横の関係が健全に成り立ってゆくことは天地の道理である。

「神の親心、人間の子心。

君主の親心、市民の子心。

あらゆる恵福の源泉」

„Vatersinn Gottes; Kindersinn der Menschen,

Vatersinn des Fürsten; Kindersinn der Bürger,

Quellen aller Glückseligkeit."

これはスイスの世界的教育家ペスタロッツ (Johann Heinrich Pestalozzi 1746-1827) の『隠者の黄昏』("Die Abendstunde eines Einsiedlers") の冒頭に掲げられている標語である。

この標語の二番目の「君主の親心、市民の子心」は封建社会、君主政体を背景とした言葉であつて、現代とは趣きを異にする旧体制ではあるが、あのフリードリヒ大王の如きは、正に「君主の親心」を有つていた名君であつた。しかし現代でこの語を活かすとすれば、君主の代りに首相といふべきであらうし、また凡そ社会的団体の長にあてはまる言である。

ともあれ、家庭における親心・子心は、何といつても血のつながりから来る最も自然な親密な関係における心の在り方である。親が子を正しく愛し信じて育てる。子は親を敬し信頼して仕える。そのような相互の心根が親心・子心といわれる内容であらう。その宗教的根拠はキリスト教が最もよく具現している。イエスが神を「父」と呼び、自分を「子」として自覚していたあの在り方が示しているからである。東洋においては孔孟のおしえが孝道としてつたえている通りである。

学校教育においても同じく先生の正しい愛に対して生徒の尊敬と信頼とが応ずるところに美しい師弟関係がある。そして師弟関係の正しさ美しさというものの根拠となるものは、先生たる教育者の内的実存、心の在り方にある。端的に申してそれは宗教心に根ざした愛である。

宗教の世界は理屈ではない、観念ではない、解釈ではない、説教でならない。それは靈感であり、体感であり、体現であり、告白である。高次な教育もまた単なる説明ではない。説諭ではない、教

訓でもない。さきにも触れたように、両親や教育者自身の在り方をもって、言動をもって、生徒におのずから悟らしめ、かつ生徒の中にあるものを「引き出し」、育て、やがて生徒自らが創造的なたましいとなるように導きかつ鍛えることである。

そのためには昔の塾的な教育体制が最適と思われるが、少なくとも学校において塾的精神が生かされることを要する。布が縦糸と横糸で織りなされているように、義と愛とが渾然と自在にふくまれている両親および教育者の教育精神が極めて大切であると思う。イエスは神を父と呼び、また霊として自覚していた（ヨハネ四・一二―二六参照）。父神は人格神として、霊神として不可離の存在である。このように神を拝していたイエスは正に人格的霊的な主体として神を拝していた。それゆえ、イエス自身が特別な霊的人格であった。霊的人格！今の世に最も必要としているものは霊的人格である。これは宗教心を本当にもてば、誰でもが成り得る実存態である。両親も教育者もこの質を必要とする。しかもその霊的人格の本質は何か。一言でいうならば、それは愛である。仁である。恕である。慈悲である。

孔子が曾子に、

「吾道一以貫之」（吾が道は一以て之を貫く）

と言った。孔子が外出したあとで門人が曾子にあればいったいどういう意味かと尋ねたら、曾子が

「夫子之道、忠恕而已矣」（夫子の道は忠恕のみ）

と答えた、とある。すなわち孔子の一貫した道はまごころをもった思い遣りであるのだ、との意で

ある。いわばこれがまた仁に通じているわけである。今の世は何と自分勝手の傾向の強い「自主」だとか「民主」だとか「平和」だとかいうお題目が横行していることか。責任や自律の精神がなく何の自主や自由があるうか。神仏に托身たくしんしてこそ臨み来る平安である。これなくして、何の平和があるうか。孟子の「仁也者人也」(仁は人なり)の一言は千古の名言である。仁は人の本来の性であるといふのである。この仁の喪失に、人間界の不和鬭争のさまざまな思わしからぬ現象が生じているわけである。二〇世紀の危機も要するにここにある。

キリスト教の贖罪愛しよくざい、仏教の大慈大悲だいじだいひ、儒教の仁、恕じょ、要するに愛、人を助け、人をゆるし、人を担う角度の心根こころねとその実践、これが愛である。愛の宗教論をここに展開しようとは思わないが、教育の始めにして終りなるもの、アルパにしてオメガなるものは、愛である。愛が最強の力であり、人間形成の窮極の目的であるからである。

ダンテが『神曲』の最後で

「さりながらわが願望ねがひと意志こころざしとは、

さながら等しく廻る輪の如く、

太陽と諸星を廻らす愛がこれを動かしていた」

と詠って、愛が宇宙の原動力であることを告げている。

〔註〕本稿「宗教と教育」の原型は、一九七三年度、独協中学・高等学校『研究紀要』創刊号巻頭論説。

あとがき

一九四〇年秋から私は武蔵野で寺子屋式の聖書講筵を始めたが、この秋で満三五周年となる。疎密各様ではあったが、聖書全巻を講じ終って第二周に入っている。講筵のうち特に福音書の啓示と現実の劇的構造に着目しているうちに、本書の如き構成がおのづから展開してきたのである。

録音テープも山積しているし、すでに筆にしたものも散在しているので、そろそろまとめたいと思っていた。時あたかもこの東京キリスト召団（武蔵野幕屋）の講筵に長年列なっているガリラヤ会の片井義二、野中武、大槻太助、高森寛の諸氏、および京都キリスト召団の奥田昌道京大教授が發起人となって、これらの講筵内容その他を世に公開したいという念願をもって、この著作刊行会が形成された。これに和して主としてヨルダン会、サフラン会の青年男女諸君が雑務万端を快く担当してくれている。これらすべての信友の友情に心から感謝するものである。

なお出版の技術的なことについては、たまたま河出書房に勤務している長男の信雄、並びに該社関係の方々の手をわずらわせた。ここに感謝の意を表したい。装幀には専門家の前野洋一氏が欣然

としてこれに当られた。同じく心からの謝意を表する。

一九七五年八月十五日

終戦記念日 合掌

小池 辰雄

再版にあたり

東京および京都の刊行会員の各種各様のはたらきと読者各位の御協力により、はやくも再版のはこびとなった。そう読み易い本でもないのに、このようなことになったのを望外のことと思ひ、平伏して聖名を讃える。

本来キリストに捧げたこの書が、なお道を求めている人々に^{わか}頼まれんことを祈る。

この書は頁を追って読んでいただいてももちろん結構であるが、或は第二部「人間の福音的実存七相」に先ず親しんで、それから第一部「キリストの実存十転」のドラマに没入し、おわりに第三部「無的実存」を読まれるのが宜しいと思う。

一九七六年五月

著者

三版にあたり

第一巻『無者キリスト』が耳新しい題目であり、内容であるので、読者に共感と呼んで居ることとは著者としてありがたく、キリストへの親しみと信仰上の飛躍をしておられると信じ感謝してい

るところである。

今年一九八二年に出版となる第三卷『無の神学』は第一卷と連関深き姉妹篇であり、神学的深化であり、拡大であるので是非読んでいただきたい。

一九八二年五月

著者

四版にあたり

第十卷『聖書は大ドラマである』が出版されて、茲に全十巻が完結したので全巻を揃える必要に迫られた次第である。

一九八八年九月

著者

復刊あとがき

奥田昌道

このたび小池辰雄著『無者キリスト』が装いを新たに、出版されるに至ったことは、多年にわたって著者から身親しく教えを受けた者の一人として、心から喜び、感謝するところである。

『無者キリスト』は、もともと「小池辰雄著作集」全十巻のうちの第一巻として、一九七五年秋、小池辰雄著作刊行会によって世に送られたものである。その年、著者は七一歳、それまでに蓄積されてきた思索と研究と祈りの集大成として、この第一巻に全生命を注ぎ込む思いをこめて、執筆に携っていた。

「無者キリスト」というおそらく世界で誰も使ったことがない表現をもって著者が訴えたかった内実は何か。それについては、本書を熟読していただくならばおのずと明らかとなるであろう。また、本書にこめられた著者の祈りと本書の構成及び内容については、本書の冒頭の「総序」において簡潔的確に述べられているので、それをお読みいただきたい。

以下には、本書に流れている著者の聖書の理解、福音の把握、一言で言えば、著者の信仰と思想の特色について、述べてみたい。

著者小池辰雄は、一九〇四年二月七日、東京に生まれた。五歳の時に父を亡くし、母の手一つで五人の子女の末子として育てられた。やがて、父親代わりの長兄政美が、北京の地で客死する。一九二一年九月二二日、二六歳一か月という若さであった。遙かな中国の地から遺骨を抱いて帰る母は、過労と落胆のあまり黄海の船上で失明してしまう。兄の死と母の失明という相重なる悲痛な出来事に直面して、著者は人生のどん底を味わった。

長兄政美は、内村鑑三の高弟であった藤井武を師と仰ぎ、藤井武の厚い信頼と顧みを受けていた。信仰深かった兄に従って著者は、旧制高校時代に東京大手町での内村鑑三の聖書講義に列席し、次いで、兄の師である藤井武の集會に、目の見えない母の手を引いて、氏が召天するまでの五年間を皆勤する。

その十年後、一九四〇年九月二二日、兄の命日を期し、かつは外出ままならぬ失明の母を慰めるべく、武蔵野の自宅にて、独立の聖書集會を開くこととなった。著者の独立伝道の第一歩であった。そして終戦を迎えて五年後の一九五〇年、著者に一大転機が訪れた。同年一月、深い祈りの中で著者は、天界の主キリストから直接に聖霊のバプテスマにあずかった。使徒行伝第二章に記述さ

れている、五旬節の朝の出来事にも比すべき、いまだ味わったことのなかった神秘的な霊的体験であつた。

それ以来、著者の聖書の読み方が一変したという。

新約聖書に記されているキリストの言、行、使徒行伝や使徒書簡に現われているところの「聖霊」の事態が、決して過去の出来事の記述にとどまるものではなく、今や、永遠の現在として、同質の迫力と息吹きをもって著者の全身に浸透するにいたつた。

「聖書は頭の理解でわかるものではない」、「聖書は身読すべき書」、「驚嘆驚倒して読むべき書なり」とは、著者が常に口にしていた言葉である。

「祈り」とは、自分をキリストの中に投げ入れることだ。十字架で、無私、無罪を賜たまっていることを全存在で受けとり、主の御前に平れ伏しの心をもって、絶対恩寵おんちゆうなる十字架の主様の中に祈り入る。そこで主様との一如の根源現実を賜る。十字架で無私、無罪を賜っている恩恵の場に、同時に聖霊が臨み給う、と説く。十字架の贖罪と、永遠の生命の实体である聖霊とは切り離すことのできない根源現実である。恵みとはキリストが恵みそのものだ。キリストは無条件にご自身を我々罪びとに与えようとなさっている。

「私はキリストに圧倒されて生きています。もはや信じてなんか生きていません。」

晩年の著者は、このように告白しつつ、神讚美、キリスト讚美の伝道の生涯を九二歳まで貫いた。

わずかに一週間病床に臥しただけで、一九九六年八月二九日夕刻、著者は主キリストの御許へと旅立って往った。

こうした著者の信仰と思想の特色として、次の三つを挙げたいと思う。

第一は、著者の告白するキリストないしキリスト教は、西欧世界において変容を遂げたキリスト教ではなく、福音書において自在なすがたで顕現している霊的人格としてのキリストを、日本人の心をもって歪みなく受容することによって著者の心魂の中に形成されたキリストである。著者にとってキリストとは、太陽の光のごとく、無色にして無限色の光を放ち、万人を救い上げ、永遠の生命を与えてやまない霊的人格である。著者の信ずるキリストは民族的な制約、限界を突き破り、一切を包摂し、一切を活かす愛そのものなるキリストである。

各民族には、それぞれ固有の宗教的伝統があり、独自の精神世界を形づくっている。それを西欧的キリスト教によって排除ないし否定するのではなく、それぞれの良さを活かしつつ、愛の光の中に包み込み、生命づけていく、そんな広さと深さをもったキリストの福音こそが真に世界に平和をもたらしものである、と著者は語りかけている。

西欧において形づくられたキリスト教になじみがたい日本人にとって、著者の告白するキリストは、そうした西欧的キリスト教の枠から解き放たれた無限定、無量なるキリストである。著者は、キリスト教といわずして、「キリスト道」という。日本人は古来、道の民であり、実生活の中で真

理を身につけることを学んできた民だからである。

長年、ドイツ文学、ドイツ宗教史を専攻し、おのずと西欧の文学、思想、宗教に造詣の深かった著者は、他方で、仏教及び、中国・日本の古典に親しんできた。こうして著者の中で、東西が融合した。

著者の語るキリスト及びキリスト道は、ユニークでかつ、世界に通用する普遍性を帯びるものとなっている。本書第三部の第一章「無者Ⅱ無の実存者」や第二章「天鐘」、第五章「宗教と文化」をお読みいただくならば、そのことに気付かれることであろう。

第二の特色は、知的なものと霊的なもの、知性と霊性の双方が著者において全き調和を保っていることである。

従来、ややもすれば、理性と霊性、知的次元と霊的次元とは、相容れないものとして、相互に排除し合ってきたように思われる。キリスト教界においても、知的・学的探求に傾斜するか、超越的世界を希求して霊的諸現象を追い求めるかのいずれかに偏する傾向にあった。

著者は、深い祈りと宗教体験を通して聖書及び神の絶対次元に深く分け入りつつ、それでいて、決して宗教的「諸現象」にふり回されるようなところがない。思索と信仰とが全き調和を保ち、まさに「健全な福音」という安心感を与えてくれる。

第三の特色は、「聖」と「俗」の共存である。

少数の聖職者だけが救いにあずかるのではない。「聖」なる方が「俗」なる世界に降りて来て、

俗なる人間を、あるがまま、そのままに救い上げる。闇を光に化す、死せる者に生命を与える、日常性の中にこそ聖なるものが宿る。日常生活の中で我々は、神の絶対次元に触れ、救いにあずかり、生命づけられて生きてゆく。神・キリストは、ご自分の無限無量の愛をもって、一切を荷い、一切を包み、一切を生かしめ給う。その愛に貫かれて我々俗人も、同質の愛をもって隣人に接し、隣人を助ける存在とされていく。

このような生き方を著者は体現していた。

●小池辰雄略歴

一九〇四年二月七日、東京に生まれる。旧制水戸高校・東大時代から無教会の内村鑑三・藤井武・塚本虎二の聖書集會に相前後して列席する。一九二九年春、東京大学文学部ドイツ文学科卒業。一九四〇年秋から武蔵野市の自宅で日曜聖書講義を開く。終戦後、一高・東大教養学部教授。一九五〇年秋、十字架・聖霊の本格的体験以来、使徒的次元の原始キリスト道を唱道し、その集會を武蔵野幕屋と称した。一九六二・六三年、西独ハンブルク大学の日本学交換教授。日本キリスト召団を結成。東大定年退職後、獨協大学教授並びに獨協中学・高等学校校長。一九七九年春、五〇年間の教職を退き、以後、福音伝道と著作に献身。一九八〇年、西ドイツ政府から第一級功勞十字章を授かる。獨協大学名誉教授。一九八〇年夏から機関誌「エン・クリスト」を刊行。一九八八年夏、「小池辰雄著作集」(全一〇巻)が完成。一九九六年八月二九日、往生。独立伝道者にして詩人。

著作活動

かつて「旧約知識」誌、「キリスト教常識」誌の同人。「曠野の愛」誌(37号まで)、「曠愛新書」(6号まで)及び「エン・クリスト」誌の主筆。「小池辰雄著作集」(全十巻)。「使徒らの昔を慕ひて」(独和对照詩)。召団讃美歌約百歌。長篇詩「靈界の星々」(神の幕屋人物詩伝。遺稿詩集)。「キリスト告白録」(1山上の大告白、2靈の貧者、3聖意體現、4狭き門)。訳書「眠られぬ夜のために」(ヒルティ著作集第4巻 白水社)、「神と人間の実存的弁証法」(ベルジャーエフ著作集第6巻 白水社)、スピラー等の翻訳、學術論文等多数あり。

●小池辰雄著作集(全一〇巻)

- 第一卷 無者キリスト(一九七五年)
- 第二卷 芸術のたましい(一九七六年)
- 第三卷 無の神学(一九八二年)
- 第四卷 詩篇珠玉集(一九八〇年)
- 第五卷 百世の師ヒルティ(一九七七年)
- 第六卷 随想集(一九八二年)
- 第七卷 聖書の人ルター(一九八四年)
- 第八卷 詩歌集(一九八六年)
- 第九卷 感想と紀行(一九八七年)
- 第十卷 聖書は大ドラマである(一九八八年)

無者キリスト

著者 小池辰雄

初版印刷 2001 年 10 月 18 日
初版発行 2001 年 10 月 31 日

河出書房新社

発行者 若森繁男

東京都渋谷区千駄ヶ谷 2-32-2
電話 (03) 3404-1201 (営業)
電話 (03) 3404-8611 (編集)

<http://www.kawade.co.jp/>

装幀 前野洋一

本文組版 スタジオK
印刷 製本 大日本印刷株式会社

©2001 Printed in Japan

定価はカバー、帯に表示してあります
落丁、乱丁本はおとりかえいたします
ISBN4-309-90465-3